
騎士様の使い魔

村沢侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士様の使い魔

【Nコード】

N5014Q

【作者名】

村沢侑

【あらすじ】

魔女にさらわれ、呪いをかけられて黒猫になってしまったアーシエ。魔女を捕まえにきた騎士・ライトリークと出会い、飼われることになります。

猫を溺愛する騎士と、騎士に振り回されつつ心惹かれていく猫（少女）のほのぼのした日常生活。やや変態のイケメン飼い主と、彼の下心に気づかない鈍感少女の恋の行方はどうなる？【本編完結済み
番外編更新中】レイド×エルサーナ編。コワモテ騎士団長と専属侍女のお話です。

プロローグ1（前書き）

よろしくお願いいたします。楽しんでいただければうれしいです。
プロローグが3話続きます。少々暗いです。

プロローグ1

「ほら、起きな！　いつまで寝てるんだよ！」

丸くなっていた床の上、つま先で小突かれて、アーシェは浅い眠りから引き戻された。

つかの間の平穏が破られる。重いまぶたをようやく持ち上げて、自分の前で仁王立ちしている女を見上げた。

「まったく、猫になったからってのんびりしてるんじゃないよ。王城にもぐりこまなきゃならないってのに、まだ満足に魔法を覚えてないんだから。さっさと起きて練習しな！」

険のあるまなざしであごをしゃくられて、アーシェはのろのろと起き上がった。

体が重い。節々が痛い。おなかも減っている。

ここに来て、もう何日たっただろうか？

体の不調は、床で寝たせいばかりではない。

パンくずとわずかな水を与えられただけで、すぐにイスに座った魔女の前に立たされた。

食事は1日一度、朝だけだ。まともな食べ物ほもらえた記憶がない。空腹で目が回る。

それでもふらつく足をふんばって、ふうつと息を吐き出すようにして、魔力の塊を作り出す。

それから、教えられたとおり、くるんと後ろに一回転しようとして、力が足りずに無様に床に落ちた。作りかけていた魔力の塊が、その瞬間、シャボン玉がはじけるようにぱちんと壊れた。

「なにやっつてんだよ、そこができなきや魔法がかからないって、なんべん言やあわかるのさ！　このへたくそ！！」

「みぎやあっ！！」

瞬間、首輪からバリツと電撃がほとばしり、全身を打って、アーシエの体は床の上で跳ねる。

くたりと横たわる小さな体を、魔女はいらいらしたようにそばにあったほうきで小突く。

「寝てる暇なんかないんだよ！ ほら、もう一度！ ったく、魔力だけはある癖して、もの覚えが悪いつたら！」

体の痛みと苦しさに荒い息をつきながら、アーシエはよろよろと起き上がる。

にじむ視界をこらえながら、ふうつと息を吐いて、魔力を練り上げた。

体の中から、力が奪われていく。

思考力は、もう残っていない。ただ魔女の言うとおり、人形のように言われたことをやるしかない。

目は見えているはずなのに。

視界は、絶望で真っ黒に塗りつぶされている。

ここは、『路地裏の魔女』と呼ばれる女の隠れ家だ。

今まで質素だと思っていた自分の部屋よりも、質素と言うよりみすばらしい部屋。

埃つぱく、壁も床も板張りで隙間だらけ、テーブルも寝台も粗末なつくりだ。

元は貴族の愛人だったのが、その貴族と組んだ悪事がばれそうになり、逃げ回って今はここに落ち着いているのだと言う。

呪詛を吐くように延々と、毎晩毎晩魔女は酒を飲みながら、アーシエに恨み言をこぼす。

いつか復讐してやると。お前はそのための手駒なのだと。

アーシェがここに来たのは、魔女が雇ったならず者にさらわれたからだ。

夕方、頼まれた買い物を済ませて、町の広場にさしかかろうとしたとき、突然悲鳴が上がった。

「野犬だあ！」

夕方、行き交う人々でごった返す広場は大騒ぎになった。もちろん、アーシェも何が起こっているのか見に行こうとする。人々の意識は、完全にそちらに向いていた。そこで、突然後ろから口を塞がれ、羽交い絞めにされて細い路地に引きずり込まれ、腹を殴られて意識を失った。そして気がついたら、この部屋の粗末な寝台で目を覚ましたと言うわけだ。

後から思えば、王都の中心地に、突然人を襲う野犬が現れるはずはない。もしかしたら、アーシェをさらうために魔女が起こした騒ぎだったのかもしれない。

「町で見かけて目を付けていたのさ。なかなかいい魔力を持っている。あたしの使い魔にぴったりだ。…なにより、孤児ってところがいいね。お前がいなくなったところで、誰もお前なんか探しやしない。まったく、都合よく転がってくれたもんだよ」

『物忘れ』の魔法をかけ、魂が抜けたようにうつろな目でふらふらしだした男たちを追い出した後、うねる赤茶けた髪で、濃い化粧の女が振り返った。

暗い笑いを浮かべる魔女に、アーシェはすくんで動けなかった。真っ赤な唇にゆがんだ笑みを浮かべながら手を伸ばす魔女に、ぼろぼろの赤い首輪をはめられた瞬間、アーシェは自分の服に『埋もれた』。

驚き、あわてて這い出そうともがいた手足は、真っ黒な毛皮に覆われていて、視界は床に近く、魔女は見上げるほどに大きくなってい

る。

何がおきたのかわからないアーシェの首の後ろを無造作に掴み、魔女は鏡の前にぶらんとぶら下げて見せた。

「どうお？　かわいいだろう？」

後ろで満面の笑みを浮かべる魔女の顔など、目に入らなかった。

…悪夢だ。

自分が、猫になっているなんて！

真つ黒な毛皮に覆われた、緑の目の猫。それが自分の姿だなんて、どうして信じられるだろう。

「アンタには、あたしの使い魔になって王城にもぐりこんでもらうよ。そのために、これから『姿隠し』と『遠耳』の魔法を覚えるんだ。わかったね」

そんな、できるわけがない！！

叫んだ言葉は、甲高く『にやあにやあ』と響くだけだ。

魔女は高らかに笑う。

「出来ないじゃなくて、やるんだよ！　その首輪はあたしのまじないの首輪だ。それをはずせば人間の姿に戻るけれど、それをはずせるのはあたしだけ。言うことを聞かないと…」

瞬間、バリッっ全身を刺すような痛みに打たれて、どつっとな床に落ちた。

「お仕置きだよ？」

あっはははと笑う魔女を、アーシェはかすむ目で見上げるしかなかった。

プロローグ2

どうして。なぜ、私が。

何度も何度も繰り返した。

悪夢は今日も覚めてくれない。

満足な食事はもらえず、冷たい床の片隅で丸くなって眠るしかなく、毎日毎日魔法の練習で魔力を絞りだし、体力を奪われてふらふらになる。うまく出来なければ、拷問のような魔女のお仕置きが繰り返されて、体の痛みが消えることもない。

ここに来てもう何日たったかもわからなくなった。

いつまで続くんだろう？

どこまで持つだろう？

温かい孤児院の院長のまなざしを思い出す。

優しくかったシスターの面影を思い出す。

物心ついたときにはもう、アーシェは孤児院にいた。

親代わりだった孤児院の院長とシスターは、どの子供も分け隔てなく、愛情深く育ててくれた。

もうすぐ成人の17歳、やっと働けるようになる。そして、院長やシスターに恩返しをする為に、孤児院を少しでも助ける為に、頑張っ

て働こうと思っていた矢先だった。だから、町のどこで目を魔女の容姿には、全く見覚えがなかった。だから、町のどこで目を付けられたのかわかるはずもない。

たまたま町で見かけたから、都合が良かったから、そんな理由ですむ程度の不運なら、どれだけ良かっただろうか。

軽い理由に反して、アーシェの今の境遇は、理不尽以外の何物でも

なかった。

心配してくれているだろうか。

探してくれているだろうか。

魔女が言ったように、孤児だからと放っておくなんて、あの二人ならするはずがない。

本当の子供ではないのに、自分の子のように慈しみ、愛情をくれるあの二人なら。

それだけを小さな希望にして、アーシエは必死に気力を振り絞る。

「さあ、もう一度だ。さっさとするんだよのろま！ もう一度お仕置きされたいのかい！？」

にらみつけながら魔女が手を振り上げる。襲う衝撃を予期して身をすくませた瞬間、床を踏み鳴らすいくつもの足音と共に、ばんつと扉が開かれた。

「…見つけた。今日は逃がさない」

部屋に足を踏み入れながら、低い声が響いた。見上げると、濃紺の詰襟に真っ白いマント。それは町で何度か見たことのある、王城の騎士の服装だ。

それをまとったその人は、魔女を見て蠱惑的に笑った。

「お、お前！ ライトリーク・ウォーロック！」

ひっくり返った声を上げた魔女が、血の気が引いた顔でおびえたように後ずさる。騎士は笑みを深めて、追うように一歩前に出た。

「覚えていてくれたとは光栄だ。なるほど、路地裏のネズミにふさわしく、隠遁の術だけは一級品だな。おかげで探し出すのに手間取った」

笑みを浮かべながらも、その言葉には容赦がない。優しげな風貌だが、身のこなしには隙がなく、威圧感だけで狭い部屋を制圧している。

「くそつ、馬鹿にしゃがって！ こんなところでつかまってたまる

か！」

「後ろ盾の侯爵もとつくに牢の中だ。悪あがきはやめておけ」

鬼のような形相で、魔法を繰り出そうと魔女が手を上げる。間髪いれず、騎士がすつと伸ばした手でぱちんと指を鳴らした途端、魔女が憎々しげな顔のまま硬直した。

「捕縛しろ」

それを何の興味もなさそうに眺めながら部下に命じると、後ろに控えていた男達が部屋になだれ込んだ。そこではつと我に返り、アーシエはいくつもの軍靴に踏み潰されないよう、壁際に飛び退ってうずくまる。

彼らは一体なんだろう。何が起こったんだろう。魔女はどうなったんだろう。…私は、どうなるんだろう。

固まったまま首枷と手枷をはめられた魔女が、騎士たちによって運び出されていく。

背後で行われるそれをちらりとも見もせず、騎士はアーシエをその目に捕らえた。…にこりと笑んだその美しさに、鼓動が早まった。

金茶色の髪に、少しタレ気味の濃いブラウンの瞳、通った鼻筋、薄めの唇。圧倒的な存在感を持つ美貌に、一瞬ここがどこかすら忘れた。

「君は魔女の使い魔か？ 随分と痛めつけられたんだね、かわいそうに。おいで、もう悪い魔女はいないよ」

跪き、優しい声と共に差し伸べられた手によりよると近づく。信じられない思いで見上げる笑顔は穏やかで、救いの神が光臨したような気がした。

魔女が捕まった。この人が捕まえた。私を助けてくれた。ここから出られるなら。…魔女から逃がられるのなら。

大きな手にすり、と体を寄せると、優しく抱き上げられた。

「もう怖くない。俺と一緒にいこう」

胸にしっかりと抱きしめられて、涙があふれた。

体の痛みがよみがえってきて、疲労と空腹も頂点にあったせいで、そのまま気絶するように眠りに落ちた。

『もう、悪夢は見たくない…』

プロローグ3

ゆっくりと意識が浮上する。なんだかいいにおい。それにふかふかでとっても柔らかい。

瞬間、ぴよんと跳ね起きた。

天蓋付きのベッドに、紺のカバーをかけられたベッド。その枕もとに、アーシェは立っていた。

『こ、ここはどこ！？』

昨日のことを思い出す。

いつものように魔女に強要された魔法の練習の最中に、男たちが乱入してきて、魔女が捕まって、綺麗な男の人に抱き上げられて、それからわけがわからなくなっ…。

かちゃ、と音がして、ドアが開く。ざわっと全身の毛が逆立った。

「ああ、良かった、起きたんだね。ずっと目が覚めないから、心配したよ」

耳に響く低い声で言いながら入ってきたのは、昨日アーシェを抱きしめてくれた、ライトリークと呼ばれた男の人だった。

魔女のところから連れ出してくれた人、なのはわかっていて、でも何をされるかわからない恐怖がじわじわと足元から這い上がってきて、震えが走った。

昨日は、魔女から助けにくれたのだと思い込んでその手にすがったけれど、よく考えてみたら、彼らは魔女を捕まえに来たのであって、アーシェを助けにきてくれたわけじゃない。

いくら極限状態で頭が働かなかったとは言え、うかつにも程がある。

魔女だつて言つていたではないか、『都合がいいから』『そこにいたから』と。

この人がそうじゃないという保証はない。本当に助けてくれたのか、それとも魔女のように使い魔にするつもりか、それとも別の理由でアーシエを連れてきたのかもしれない。

優しい笑顔を、どうしても信用しきれない。

騎士の服を着てはいるけれど、本当に騎士なのかどうか、今のアーシエには確かめる方法なんかない。

警戒しながら後ずさり、おびえるアーシエの隣に、ライトリークはゆっくりと腰掛けた。

「怖いんだね。そうだよ、ずっと魔女に痛めつけられていたようだし、いきなりこんなところにつれてこられたんだもんねえ。大丈夫、ついであつたけど、俺は君を助けただけだよ。別に君をどうしようと思つて連れてきたわけじゃない。安心して」

おだやかに言つて笑う顔は、やっぱり綺麗だ。

よく見ると、ライトリークは昨日と同じ紺の詰襟姿、きらめく肩章に金モール付き。昨日は気がつかなかつたけれど、襟元に王家の紋章をかたどった徽章が光っている。間違いなく、城の騎士だ。もしかして偉い人なのかもしれない。なら、きっと下手なことはされないだろう。

少しだけ状況がわかつてきて、パニック寸前だった気持ちが落ち着きを取り戻していく。

そつと差し出された手に、恐る恐る顔を摺り寄せると、あごの下を指先にくすぐられて、あまりの気持ちよさにうっとりする。

「そうそう、あの魔女は昨日死んだよ。追いかけてくることもないから、安心して」

その一言で、凍りついた。

魔女が、死んだ。

…なのに、私は猫のまま？

『…どうして？』

アーシエは愕然とした。

魔女は言っていなかったか、『首輪をはずせるのはあたしだけ』と。その魔女が死んだのに、呪いが解けないのなら、もう誰もこの呪いが解ける人はいないと言うことだ。

つまり、一生、猫の姿のまま。

目の前が真っ暗になって足元が崩れそうになり、ふらりとかしいだ体を、ライトリークが抱きとめる。

痛ましそうにアーシエを見つめて、ぎゅっと抱きしめた。

「魔女は、昨日護送中に逃げ出そうと抵抗してね。追い詰めたんだけれど、隠し持っていた毒を飲んで自殺した。罪状は明白だし、証拠もそろっているから、遅かれ早かれ死罪になるだけだったけれど、後味は良くないね」

そう言つて、ゆっくりとアーシエを撫でる。押さえていた心のたがが弾け飛んだ。

抱かれたまま絶叫する。

か細い猫の鳴き声にしかならなかったそれがさらに絶望を煽って、アーシエはライトリークに抱かれたまま泣いた。つぶらな緑の瞳から、大粒の涙が後から後からあふれて止まらない。

「ごめん…ごめんね…」

苦しそうにアーシエを抱くライトリークにも気づかないまま、小さ

な黒猫は力尽きるまで、男の腕の中で鳴き続けた。

プロローグ3（後書き）

冒頭部分終了。次回からアーシェ視点の本筋に入ります。
のんびり進めていきます。

名前をつけよう(前書き)

本筋に入ります。ここからアーシェ視点でお話が進みます。

名前をつけよう

あの後泣いて泣いて泣き続けて、泣き疲れてまた眠ってしまった。どのくらい眠っていただろう。体力が落ちているせいもあるのかもしれない。随分寝たような気がする。

目が覚めて一番最初に目に入った前足は、艶のないばさばさの汚れた毛皮に覆われていて、猫のままの現実を否応なく突きつけてくる。

悪夢はもう終わったと思っていたのに。

私は深いため息をついた。

鳴きすぎたせいか、それとも空腹のせいか、体が重い。でも、混乱していた気持ちはすっきりしていた。たくさん泣いたのと、ぐっすり眠ったからだろう。

魔女が死んでしまったことはショックだけど、こうなってしまったら私にはどうしようもない。私はこれからどうなるのか、どうやって生きていくのか、それを考えなくちゃ。

私は、3年前から孤児院で一番年が上になった。みんなを守っていかなきゃいけなかったから、うじうじしてる暇なんてなかった。そうして生きてきたおかげか、今も何とか気持ちを落ち着けることが出来ている。

前向きとまでは行かないけど、泣いてばかりいても何も始まらない。首を上げて視界をめぐらせると、そこは一番最初に目覚めたのと同じ、ベッドの枕元だった。

天井から下がっている、魔法光のランプに明かりが灯っている。それに、窓にカーテンがかかっていると言うことは、今は夜なんだろう。

う。何時くらいかな。

新しくはないけれど、落ち着いた雰囲気のお部屋。

魔法光のランプは、凝った意匠の花のようなシェードがとても綺麗。一つだけでも結構高い物なのに、それが5つも下がっている。

カーテンは光沢があり、どっしりとした質感。ベッドやリネンは肌触りが良くて、肉球で触れてもごわごわしない。

床はピカピカした石張りで、その上に立派なカーペットが敷いてある。猫の足でなくとも、音も立てなさそうだ。

ソファセットも窓辺の机も、みんなすごく上等に見える。どこかのお屋敷だろうか。

その、窓辺の机で、眉間にしわを寄せながら書類を読むライトリークの姿に目を留める。

『あの』

にゃーおと呼びかけると、彼は顔を上げ、ちょっと固かった雰囲気とを和らげて、ふわりと微笑んだ。

「おはよう。と言つても、もう夜だけど。おなかは減ってない？」

『減ってる。もうぺこぺこ...』

うにゃあ〜と返す鳴き声にも力がない。お腹と背中がくっつきそう。お腹がすきすぎて気持ち悪いぐらい。

考えてみれば、前の朝魔女の家でパンくずと水を口にしてから、何もおなかに入れていない。しかも、魔女の家に来てからずっとまともな食事をもらっていないのだ。毛皮のせいでよくわからないけれど、大分やせたんじゃないだろうか。

そのうえ、あれだけ鳴いてそのまま寝ちゃえば、空腹を通り越して気持ち悪くなるのも当たり前だ。

身を起こしてベッドの上にちょこんと座ると、ライトリークは目を

細めて笑った。

うう、笑顔がまぶしすぎて心臓に悪いのですが！！

「今ご飯をあげるから、少し待っててね」

そう言って、彼は手に持っていた書類をばさりと無造作に机に投げ
て立ち上がり、部屋を出て行った。

重厚なドアがぱたりと閉まり、私はふーっとため息をつく。少し緊
張しているみたい。疲れているせいもあるのかな。

とにかく、食べなきゃ気力も力もわいてこない。人間（猫だけど）
体が資本！

ご飯は食べれる時に遠慮なく食べておくものよ。落ち込んでもつら
くても悲しくても、ご飯を食べれば何とかなるわ。

それは、孤児院でいつもシスターが言っていた言葉だ。うん、ご飯
は一番大事！ いただけるものは、ありがたく頂きます。

…大事だけど、でも。

猫のご飯って、魚の骨とか残飯とかキャットフードとかじゃないで
しょうね！？

いくら猫の姿でも、元人間の私にはいかにも猫のご飯は食べられ
ない。あの魔女ですら、一応パンに水とか、スープの汁だけかけた
ご飯とかを食べさせてたくらいなんだから。

不安を抱えて待っていると、ドアが開いて、ライトリークが戻って
くる。背後に『入れ』と言告げると、続いて女の人がカートを押
して静かに入ってきた。

「失礼致します」

細くて綺麗な声。優雅に一礼して、銀のカートを押し進める。

黒の襟の高いワンピースに、白いエプロン。白金の髪を編んで一つ
にまとめている、若い女の人。侍女さんなんだろうなあ、ライトリ
ークってお金持ちっぽいし。

侍女さんはすごい美人だった。少し顔を赤らめながら、ライトリークにちらりちらりと視線を流す。

にもかかわらず、ライトリークは侍女さんに目もくれない。視線にも全然動じずに、さっきの机のところまで戻って、投げた書類を片付けている。女の人に興味ないのかなあ？ あんなにかっこいいのに。

ソファセットのテーブルの上に、小さな皿がいくつも並ぶ。鼻に流れ込んだ食欲をそそるいいにおいに、尻尾が反応してピンと立ってしまった。

ベッドから飛び降り、2歩でテーブルに飛び乗ると、侍女さんがびつくりしたように『きゃっ』と声を上げる。

びつくりさせてごめんね！ テーブルに土足で上がるのは行儀が悪いつてわかってるけど、空腹には勝てない。

「ダメよ、降りなさい！」

慌てた侍女さんが私を手で払おうとしたところに、鋭い声が飛んだ。「かまうな。後は俺がやる。下がれ」

初めて見る冷たい表情と硬い声で、ライトリークは堂々と命じた。低くて耳に響く、凜とした声。迫力のあるそれに、思わず息を飲む。侍女さんも同じだったようで、一瞬棒立ちになったあと、恥じ入るようにさつと顔を赤らめて一礼し、カートを押して引き下がる。

最後まで名残惜しそうな侍女さんが部屋を出たのを確認して、ライトリークはソファに腰を下ろした。

ソファセットの楕円形のテーブルに並んだ皿たち。

シンプルな白い器の中身は、猫のご飯じゃなくて、おいしそうなお料理だった。

ミルク粥、白身魚をバターで焼いたもの、薄いソースをかけてある温野菜、フルーツ。どれもこれもいいにおい！ かけてあるソース

や添えてあるクリームも、色とりどりでもって綺麗！

孤児院では特別な時ぐらいしか食べられないようなものばかりだ。しかも、鼻を近づけてふんふんと匂いを嗅いでて気づいた。

全部、熱くないよう適温に冷ましてある。

ソファに座るライトリークを見上げると、にこりと甘い笑みを浮かべた。

「どう？ 気に入った？ 食べられそう？」

『うん！ すごくおいしそう！ ありがとう！』

食べられるだけでも十分満足だけど、こんな立派なご飯、久しぶり！ 待ちきれないけど、ちょこんと座って手を合わせた。

『いただきます』

にやあと一声鳴いて、お魚にそつと口をつける。

…泣きたい位おいしい。

魔女の家では、乾いたパンくずか、薄い汁をかけた冷えたご飯が一日に一度、少しだけしか食べられなかった。

お水ももらえない。果物なんかももちろん食べられない。ぎしぎし言うささくれた板張りの床の上で眠って、朝から晩まで魔法の練習。気まぐれな魔女にはよくほうきでたたかれた。

思い出すと、じわりと涙が浮かぶ。そんな私を優しく見つめて、ライトリークは静かに頭を撫でてくれた。

「ゆっくり食べるといい。時間はいくらでもあるし、誰も邪魔する者もない。喉に詰まらせないように気をつけるんだよ」

そのままあごの下をくすぐられて、感じた震えるような気持ちよさにうっとりしてしまう。

あ、あれ？ やっぱ猫だから、ここって弱いのかな！？ く、癖に

なりそう！

指先に翻弄される私を、彼は楽しそうに眺めている。

「ごめん、俺が食事の邪魔をしてるね。ああ、でもあんまりかわい
いから、いつまでも撫でていたいな」

さすがに撫でられたままじゃご飯が食べれません！ 気持ちいいけ
ど、ご飯が先！

指から与えられる悦楽をするりとかわして、私は再びお皿に口をつ
ける。

ライトリークは、食事の間もずっと私の世話をしてくれた。

別のお皿を見るとすぐに近くに引き寄せられ、お皿が空になるとお
代わりをよそつてくれて、のどが乾けばお水をくれる。

そうして、時折私を撫でながら、ずっと甘い笑顔を浮かべて見てい
る。

ライトリークみたいにかっこいい人に、そんなに穴が開くほど見ら
れていたら、ご飯も喉を通らなさそうだ。

とはいえ、私はとにかくおなかが減りすぎて食べるのに精一杯で、
気にする余裕なんかなかったけどね！

全てを完食し、お水を飲んで一息ついて、『ゴチソウサマ』と手を
合わせると、伸びてきた手にひよいと抱き上げられ、ライトリーク
の膝の上に着地した。

大きな手は、暖かくてやさしい。私をつかんだり、叩いたりなんか
しない。だから、安心して私を預けられる。

「たくさん食べたね。おいしかった？」

そりゃあもう！ 尻尾を振り振りうなずくと、愛おしそうに頬ずり
をされた。

ちよっ、いきなりくっつかないでええ！

ほっぺにじわつと体温を感じる。こんなに男の人に接近されたこと

なんかないんだからっ！ 心臓壊れるっ！

いくら血相変えても、残念ながら毛皮のせいで気づかれないのよねえ。

じたばたもがいたら、やっと離してくれた。ライトリークを恨めしそうに見上げながら、ぜいぜいと息を切らす。

一方の彼は、そんなものどこ吹く風って感じ。あたふたしてるのは私だけだ。くっそう。

「さて、君のことだけれど、誰か引き取り手がいないかと思って、飼い主を探してみた」

そうだよ、成り行きで拾っただけの猫を、いつまでも手元に置くわけにはいかないものね。

ああ、でもまた知らない人のところに行くのはやだなあ。ここにいちやダメかなあ。

ぱたり、と尻尾を落としてしまった私に、ライトリークは苦笑した。

「だけど、あんまり君がかわいいから、俺が飼うことにした。いいかな？」

いいもなにも！ 優しくっておいしいご飯をくれて、目の保養になるほどかつこいいあなたに飼われるなら本望です！！

嬉しくって、ライトリークのお腹あたりに何度も体を摺り寄せると、優しい手つきで頭から尻尾まで何度も撫で下ろされる。

それに、お尻のあたりを優しく撫で回されて…、思わず『やあんっ』と声を上げると、溶けそうな笑顔を向けられた。腰砕けになりそうですっ！

誰にも触られたことなんてなくて恥ずかしかったけど、私猫なんだし、嫌がるのもおかしい…よね？

ライトリークもそんなつもりで触ったんじゃないだろうし、私だつて犬や猫のお尻を撫でたことぐらいあるし。まあいつか。

ひとしきり撫で回された後、改めてライトリークの膝に抱きなおされた。至近距離で顔を覗き込まれる。

だから近いって。

「それじゃ、名前を決めようか。何がいいかな？」

変な名前は嫌だなあ。出来れば元の名前がいいけれど、期待は出来ない。出来るだけかわいい名前にしてほしいな。

「ノワールはどう？」

なんか高貴そうな感じ。しがない下町の女の子につける名前じゃない。

「じゃあ、マリー」

お高くとまってそうな名前だから却下。

「うーん、セレーナ」

そんな優雅な風体じゃないわよねえ。

「そう…。なら、アーシエなんて、どう？」

弾かれたように顔を上げた。輝くように笑うライトリークに、声も出ない。

これは…偶然？

「決まりだね。君の名前はアーシエ。俺はライトリーク・ウォーロツク。王城で騎士団の副団長をしているんだ。これからよろしくね、アーシエ？」

私を腕に抱いたまま言うライトリークに、何度も体を擦り付ける。

嬉しい。すごく嬉しい！

もうアーシエと言う女の子は消えてしまうのだと思ってた。

もう誰にも名前を呼んでもらえないかと思ってた。

甘い声で呼ばれて、心が震えた。

『よろしくね、ライトリーク！』

にやあん、と応えると、すっとライトが顔を寄せた。

濃い茶色の瞳が閉じられる。伏せたまつげが、とても長い。

整った顔を呆然と見ていたら。

ちゅ、と、口元に唇が落ちる。

不意打ちで奪われたキスに固まっていると、抱きしめられて優しい手に撫でられた。

キス、された。男の人に。

体が熱い。心臓がときどきしてる。手馴れたように奪われたそれ。少し乾いた唇の感触が、まだ残ってる。

な、な、なんで？ どうして！？ どうしてキスなんかするの！？

「かわいいねえ、アーシエ」

ライトリークは、爽やかに笑っている。

って、人間の私にされたわけじゃないじゃん！ 向こうはたかが猫にちゅーしただけじゃん！

ときどきして損した！ このキスはノーカンよ、ノーカン！

ああもう、びっくりした！ 紛らわしいことするなって言うのよ！

でも、普通、男の人が、かわいいからって飼い猫にキスなんてするかなあ？

うーん、猫好きなのかな？

動揺してたのと、頭を悩ませていたので気づかなかった。
ライトの笑みが、黒いそれに変わったことに。
「アーシェのファーストキスは、俺のものだね」

…ん？　今なんか言った？

名前をつけよう(後書き)

猫相手にセクハラする男W

熱を出しました

魔女の家で過ごしたのは、約2週間だったそう。そんなに、というべきか、それで済んだ、と思うべきか、どっちだろう。

途中で時間の経過がわからなくなって、何日たったかなんて全然数えられなくなっていた。

その間、満足なご飯を食べられなかったのと、お仕置きのダメージのせいで、自分では気づかなかったけれど案外衰弱していたらしい。

目が覚めて、ぼんやりとした視界に広がる肌色。焦点が合った瞳に映ったのは、すごく近くにあった、ライトリークの端正な顔。

少しひげの伸びた頬、高い鼻、長いまつげ、柔らかそうな金茶色の髪。ため息が出るほど綺麗な顔が、吐息がかかるほど近くにある。

『えええっ！？』

びっくりしてのけぞった途端、ぐわんと世界が揺れた。

慌てて踏ん張ろうとした足に力が入らず、くたりとベッドに崩れる。

あれ？

…あれ？

目を回しながらもがいていると、ふっとライトリークの目が開いた。けだるげな瞳は色気マックスだけど、そこそこじゃない。

私、どうしたの？ どうなっちゃってるの？

『ら、らいと…』

にー、と鳴くと、ふっと目を細めて笑われた。手を伸ばして、優しく撫でる。

1回、2回、3回目で、その手がぴたりと止まった。くわっと目を見開かれた次の瞬間、がばっと跳ね起きたライトリークが私を抱きしめる。

「アーシェ！ どうしたの！　すごく熱いよ！？」

それで、自分の不調の理由を理解する。体がだるい。めまいがして、手足に力が入らない。

なるほど、熱があるわけね。確かに、風邪引いたときこんな感じになったっけ。

理解して、私はもがくのをやめて、力を抜いた。

熱い。のどが渴く。目が回る。

ライトリークが慌ててベッドから飛び出していく。すぐにお皿に水を入れて持ってきてくれて、そっと体を起こして飲ませてくれた。冷たい。おいしい。

飲み終わって、ぱたりと布団に頭を落として目を閉じる。熱を出したのなんて、いつ振りだったっけ。

でも、喉が痛いわけじゃないし、頭も痛くない。吐き気もないし、お腹も痛くないから、静かに寝ていれば治るだろう。

孤児院にいた時には、シスターが大体の症状を判断していた。

頭痛、吐き気、腹痛があるときは、病院に連れて行き、寝ている間も傍についていてくれたけど、熱とどの痛みときは、たまに様子を见に来るぐらいで、静かに寝ていなさいと言われるのが常だった。

なにせ、孤児院には十数人の子供がいる。軽症の風邪では、シスターは看護に手を割けなかった。大きい子供にはなおさらだ。だから、私も自分の症状については大体の見立てが出来る。

：という自己分析とは対照的に、ライトリークのうるたえっぷりと言ったら、笑うしかなかった。

「布団、薬、あとはなんだ！？　ええと、食べ物！　熱さまし！　医者！」

ぶつぶつ言いながら枕もとを右往左往されたらおちおち休めやしない。

いやいや、なにもいらないから。お願いだから静かに寝かせて。というか、仕事に行きやがれ。

「にゃ！」

ぐらぐらする頭を押さえながら、ぴっ！ と手でドアを示すと、ライトリークは情けないほど眉を下げる。

「だって、こんなに熱があるんだよ！？ 仕事なんかしてられないよ！」

ふざけんな、飼い猫が熱出したぐらいで仕事休むバカがどこにいる！

し、ご、と、い、け！

と、もう一度ドアを指しながら言っただけ、しぶしぶながらようやく身支度を整えて出て行った。

「水と果物をここに置いておくから、吐き気がないならちょっと無理しても口に入れて。水はたくさん飲んでね！ 布団からは絶対出ないこと。トイレに行ったりして、もしベッドに戻れなかったら下にクッションと毛布を置いておくから、ここにもぐっててね。時間が空いたら様子を見に来るから、調子がおかしかったら言ってね？ いい子で寝るんだよ！ 絶対だよ！？」

と、うるさいぐらいに言い置いてからだけど。というか、『言っただけ』って言われても無理だから。

すぐごと部屋を出て行く背中を見ながら、ほっとして私は布団に埋もれた。

ライトリークにあんな調子で看病されてたら、治るものも治らなさそうだ。

幸い食欲はそれなりにあって、寝込んでる間にも、ミルク粥やシチューを食べることが出来たからまだよかった。これでもし何も口に

出来なかったら、もつと体が弱って回復に時間がかかるところだったってライトリークに言われたわ。

彼は時間が空くとちよくちよく様子を見に来て、ご飯を食べさせてくれたり、寒がっていれば布団をかけてくれたり、水を飲ませたりしてくれた。仕事の邪魔になってるんじゃないかって申し訳なくて最初は嫌がってたんだけど、ライトリークが譲らないので諦めた。正直、しんとした部屋に一人って言うのが、思った以上に不安だったのもある。状況が状況だから、仕方がないのだろうけど。

そして、夜は私を抱きしめて眠ってくれた。熱でうとうとしながら、静かに私を撫でる大きな手がひどく優しく、安心して眠ったつけ。

ライトリークに抱かれて眠ってる間に、人間に戻った夢を見た。

長く伸びた手足に、『やったあ』とつぶやいたら、後ろからきゅゅと抱きしめられた。

やけに肌色の面積が広い（というか肌色一色だった）のが気になったけど、包み込むような暖かさに負けて、すぐに意識が白くなった。目が覚めたらやっぱり猫のままだったけど。あーあ。

食べて寝て、すっかりおとなしくしていたおかげで、2〜3日で熱は無事下がった。

ライトリークからは、もう少し元気になってからじゃないとお外に出ちゃダメって、自由に歩き回るのは許してもらえなかった。

「治ったからって、はしゃいでまた熱を出したりなんか大変だよ。俺にまた心配させたいの？」

私を軽くにらみながら、ライトは絶対に譲ってくれない。ここに来てからもずっとお部屋の中だったから、そろそろ外に出たかったんだけどなあ。でも、飼い主には逆らえないものね。

仕方がないからお部屋の大きなベッドでごろごろしてたんだけど、

その間、彼は私のためにお部屋を少し変えていた。

まずは、ドアをすべて猫ドアつきに変更。

ライトリークのお部屋は、仕事したりお客さんを入れたりするお部屋と、バストイレ付きの寝室の二間続きになっている。そのすべてのドアが猫ドアつきになった。

これでものすごく助かったのはなんと言ってもトイレ！

年頃の乙女が、衝立も何もない丸見えの猫トイレで、男の人に見られながら用を足すなんてありえない！ という私の気持ちは、ライトリークにはお見通しなんだろうか。

最初のうちは、彼がトイレに連れて行ってしくて、ドアの開け閉めをしてくれていたんだけど、それもやっぱり恥ずかしかったし、彼が仕事でいない時には頼めない。

それから、仕事に行く前にはトイレのドアを少し開けてから行ってくれるようになったけど、当然のことながら開けっ放しじゃ落ち着かない。

だから、トイレに猫ドアがついたときは、飛び上がるくらい嬉しかった。

次に、私のための食卓が運び込まれた。ソファセットのテーブルの横、同じ高さの小さな丸いテーブルに、柔らかい赤いベルベットのクッションが貼られた小さなイスが置かれた。イスの高さは、私がお皿に顔を入れるのにちょうどよく調節されていて、ご飯を食べるのがすごく楽。

その食卓セットを運び込みながら、これでいつでも一緒に食事が出るね、とライトリークが笑った顔は、思わず見とれてしまうほど綺麗だった。

すっごく嬉しい。ご飯を食べるのが楽になったし、直接テーブルに乗らなくて良くなった分、気兼ねなくたくさん食べられるしね！

それから、ライトリークの大きなベッドには、枕元にふかふかの丸い大きなクッションが置かれた。真ん中が少しへこんでいて、そこで丸くなると、ちょうどすっぽりはまり込む。これがすごく落ち着くよねー。お昼寝はいつもその場所だ。

でも、夜寝る時、彼はそのクッションをどけてしまふ。どうしても私を抱いて寝たいらしい。小動物には癒し効果があるらしく、よく眠れるから、なんだって。

ついでに、私はライトリークをライトって呼ぶことにした。ライトリークって長くて面倒だし、どうせ私がどう呼んでも、彼には「いやあ」としか聞こえないんだからいいよね。

さらわれたり助けられたり新しい生活が始まったりと、色々あったのは確かだけど、ここでの生活はなんだか至れり尽くせりで申し訳ないなあ。

ライトは疲れの見える顔でお仕事から戻ってきて、歩き回れるようになった私を見て、『よかったね』と笑ってくれた。

私の夕食の準備はライトがしてくれる。最初の日、侍女さんがしてたように、応接室からカートを押して入ってきて、私の食卓セットにお皿を並べる。体調が悪かったせいで、今日はパンがゆと野菜をくたくたに煮たスープに、すりおろした果物。食欲はだいぶ戻っていて、全部食えることが出来た。

ライトは軽く摘めるチーズやドライフルーツ、カナッペを盛ったお皿を自分の前に置いている。

ソファでワインの入ったグラスを片手にくつろぐライトが、じつと見つめる私に気づいて、笑いながら手招きする。最近私を膝に乗せるのがお気に入りみたいだ。

ひょいとソファに移ってライトを見上げると、当たり前のようにち

よんとキスされた。恥ずかしいけど、うれしい。

「そろそろ元気になったみたいだね。食欲もあるし、安心したよ。良かった」

言いながら、膝の上に乗せられた。そして、長い指であごの下をくすぐられる。猫ってほんとこ弱いんだよね。気持ちよすぎて変な声出ちゃう。

「そろそろ外に出ても大丈夫かな。もう少しよくなったら、仕事の前に、少しだけ部屋の外に出してあげるよ。ああ、その前に体も綺麗に洗わなくちゃね。せつかくの綺麗な毛並みが台無しになってる。全部洗って、早く美人になろうね」

そう言われて、反射的に膝から飛び降りようとしたら、すかさず伸びた手に捕まえられた。

そう、気になつてはいたんだけどね！ 私、つかまってから今日まで一回もお風呂に入っていないのよね！

汚れてるし、きつとにおいもするはず。ライトの手や制服を汚すのは嫌だし、なにより素敵な男の人の前で、乙女が臭いままだなんて堪えられないっ！

じたばたしてると、彼がくすくす笑う。その、私を見る視線にどこか熱がこもっているのは、気のせい？

「大丈夫だよ。君が寝てる間に、毎日綺麗に拭いてあげてるから。そんなに気になるような匂いもないし、俺はにおいがしてても全然かまわないし、むしろそっちの方が…」

そっちの方が、なに？ ライトはちょっと顔を赤くして咳払いなんかしてるけど、私にはさっぱりわからない。匂いなんて、しない方がいいに決まってる！

「熱を出してたから、毛の手入れが出来ないのが残念だったんだよね。今夜は一緒にお風呂に入ろうか。全身綺麗に洗ってあげるよ」
甘い笑顔を浮かべながら、ライトが私の毛皮を撫で下ろす。

「いやいやいやいや、裸のお付き合いとか無理だからっ！　そこまで深いお付き合いにすらなっていないからっ！　目のやり場に困るし、それに、毛皮があっても、全身くまなく触られるなんて恥ずかしくって無理！」

「そんなびくびくしなくても。かわいくて食べちゃいたくなるよ？」

くすりと笑って、鼻先をペロンと舐められてびっくりした。ぴゅっと尻尾の毛が逆立ったのを見て、ライトは『かわいい』と笑う。

もっつ！　すぐからかうんだからっ！

ふてくされて膝の上で丸くなると、大きな手にゆっくりと撫でられる。

「アーシエ、アーシエ。かわいいね。どこにもやらないよ」

顔をそむけていたからわからなかった。ライトが、少しだけ苦しそうな顔をしていたことは。

お風呂…ですか！？（前書き）

え、えと、R15…？

お風呂…ですか！？

疲れたような顔で戻ってきたライトは、応接室からお酒のビンを持って寝室にやってきた。

紺色の制服のままマントだけではずしてソファに放り、疲れたようにどきりとソファーに腰を下ろした。

テーブルに置いたビンから、グラスに液体を注いで、私を手招く。足元に近づくと優しく抱き上げられ、膝の上で丸くなった私をゆっくりと撫でながら、ライトはクリスタルのグラスに満たされた琥珀色を優雅にあおる。

空になったそれを、ことり、とテーブルに置いて、ふう、と一息つき、彼はそれはそれは悩ましい流し目をくれた。

そのまま私を抱いて立ち上がる。そして、なぜか私を逃げられないようにしっかりと拘束する。

なんか嫌な予感がするんですけど…！

「アーシエ、お風呂だよ」

やたら嬉しそうに笑うライトが逆に怖い。じたばたもがいても、すでにしっかりと拘束されてるから逃げ出せない。そのまま脱衣所に連れ込まれる。

いくら素敵な男の人でも、いくら私が猫でも、裸同士で一緒のお風呂なんて恥ずかしくて耐えられない！ いやもう私普段からすでに裸も同然ですけどね！？ だけどそれとこれとは話が別でね！？

とかなんだか支離滅裂でじたばたしていたら、思いつきり噴き出された。

「あははは！ 必死すぎてかわいいつ…！」

くっそー、またからかわれたんだ！

緩んだ腕からぴょんと飛び降り、ふてくされてライトに背を向けて、脱衣所の隅で丸くなる。

くっくつと余韻を残して笑いながら、ライトが私の後ろに跪いた。

「ごめんごめん、警戒して毛が逆立って丸っこくなってるのがあんまりかわいから、ちよつとやりすぎた。アーシエ、機嫌直して」
ふんとそつばを向くと、そつと撫でられる。

…くそう、気持ちよくて簡単に許してしまいそうだ。

「俺は脱がないから安心して。シャンプーもブラッシングもマッサ―ジも何でもしてあげるから、ね？ だからごめん」
素直に謝られてしまえば、いつまでも怒っているのも大人気ない気がして、顔を上げた。

『意地悪しないで、やさしくしてね？』

なーうと念押しすると、わかってくれたのか、にこりと笑って頭を撫でてくれた。

ライトリークは、詰襟の上着とごつい軍靴と靴下を脱ぎ、ズボンの裾とシャツの袖をまくってお風呂場に入っていく。開いたままのドアからひよこりと覗くと、広いお風呂にびっくりした。

石造りの浴槽は、床と高さが同じで、下に掘り下げである。5人くらいは楽に入れそうなくらい大きい。

壁にあいた口から、お湯が絶え間なく注いでいて、洗い場にあふれて流れていく。もったいなくないんだろつかと、つい貧乏性が出て心配になる。

「水と火の魔石で、いつでもお湯が出せるようにしてあるんだよ。もちろん、いつもは止めてるけど、寒くないように、お湯を張っての方がいいかと思って。なにせ今日はアーシエとはじめてのお風呂

だからね」

『違いますっ!』

いかかわしい言い方で艶めいた笑みを浮かべるライトにシャーッと威嚇を返すと、幸せそうに笑った。本当に猫が好きなのねえ。私をかまう時は、いつでも何をしても笑ってばかり。

まあ、素敵だからいいんだけど、毎回ドキドキさせられるこっちの身にもなっただけいいわ。

「さあ、できた。おいで」

大きなたらいにお湯を満たして、なにやらいいにおいのする液体をその中に数滴落とし、ライトリークが手を差し伸べる。

とてとてと近寄ってたらいのそばにちょこんと座ると、手桶でゆっくりにお湯をかけてくれた。

あったかあい…。それにとってもいいにおい。

「リラックス効果のあるバスエッセンスだよ。猫の体に大丈夫かどうかかわからないけど、少しだけ。大丈夫かな、きつくはない?」

ほのかな香りは、鋭くなった嗅覚にも優しい。甘ったるくないグリーンノート。このにおい好き。

目を細めてうつとりしているのを、了承と取ったんだろう。

「じゃあ、体を洗うからね」

何度か手桶でお湯をかけ、体が程よく温まってきたところで、ライトが声をかけてくれた。

猫の絵が描いてある小さい容器から出した、白いとろとろの液体を両手に塗り伸ばして、よく泡立てていく。これもさわやかなグリーンノート。こういう香りが好きなのかな。私も好きだから、ライトもそうなら嬉しいな。

濡れた体に、するりと泡を滑らせる。何度か撫でただけで、泡が立たなくなってしまった。やっぱり汚れてるんだなあ。2週間以上お

風呂入ってないもんなあ。女の子としてありえない。不可抗力とはいえ、ちよつとへこむ。

「風呂もご飯もともにやらないうえに、痛めつけやがってあのババア。毛もばさばさだし、ああ、こんなに骨が浮いて。…自殺なんてダセエ真似しやがって、もう手え出せなくなつたじゃねえか。チツ、捕縛なんてぬるいことせず、雷撃で王城までの道を跳ねまわしてやればよかった。生きていたらこの世の地獄を見せてくれるものを…」

私の体を撫で回しながら、お湯をかけてシャンプーを流し、再度泡立てて体に塗りつける。その作業をしながらライトがなにやらぶつぶつ呟いてたけど、気持ちよくてぽーっとしていた私は全然聞いていなかった。

1回目でざつと表面の汚れを落として、2回目は地肌の汚れを落としていく。3回目はたっぷりと立った泡で、マッサージをするように全身くまなく洗われた。

ゆつくりと揉み解していくような指先に、私はもうなすがままだ。その隙を逃さず、ライトにいきなりひよいと体をひっくり返された。『きやあつ！？』

みぎやあつ、と声を上げた私に、やっぱりライトは甘い笑みを向ける。

「ごめん、びつくりした？ 背中だけじゃなくて、お腹もきれいにしなくちゃね」

裸の体を仰向けに組み敷かれて、ライトの目にじつくりと見られているんですよ！？

二人きりのお風呂場で、男の人に体を開いてるなんて、泣きたいくらいに恥ずかしい。その上隅々まで洗われるなんて、男性経験皆無の私には想像の範囲外です！ 今すぐ逃げ出したい！

でも、泡で滑るライトの手が、胸や脇やお腹をゆつくりと洗っていくのが気持ちよすぎて、抵抗できない！

「無防備だね…。こんな格好でうつとりしてるなんて、誘ってるの？」

んなわけじゃないじゃないっ！ でも、体が動かないの！
笑いを含んだ、とろりと耳から入り込んでくる甘い声が、体中を犯す。

「ほら、ここはどう？ 気持ちいいの？」

唇にキスしそうなほど近くで、ライトは心臓を鷲掴みにするような淫靡な笑みを浮かべる。吐息が触れるたびに、ぴくん、と体が勝手に跳ねる。
きっぱり否定したいけど、胸や後ろ足のあたりに指が触れるたびに、ぞわぞわして力が抜けちゃう…。

「抵抗しないなら、最後までしちゃうよ？ …いいの？」

焦れたような熱い視線で見つめられて、耳元で低くささやかれた。色気のある声に、鳥肌が立った。

散々撫でられた体には、力なんて入らない。ダメ、もう好きにして…。

悲壮な決意を固めて、ぎゅっと目を閉じた時。

「はい、おしまい」

ざばーっとお湯をかけられて、跳ね起きた。くっくつとまた人の悪い笑みを浮かべながら、ライトが私にお湯をかけて、泡を綺麗に流していく。

「そんなに必死な顔されたら何もできないじゃん。…ていうか、何もしないよ、まだ、ね」

くっそー、またからかわれたっ！ ていうか、まだしないって、一体何を！？

悔しくて、伸ばしてくる手に猫パンチをお見舞いしてやるけれど、ライトはそれすらも嬉しそうに笑うだけだ。

「さあ、あつたまらないと、また熱がぶり返すよ」

言われて、納得いかないながらもたらいの中にはいってお湯につかる。

ライトは熱い湯を継ぎ足しながら、優しく私を見て、ずっと撫でていてくれた。

すっかりほかほかになってお湯から引き上げられて、柔らかい厚手のタオルでくるまれる。これも肌触りが抜群だ。今まで触ったことがないような、これもきつと高級品。あつという間に濡れた体から水分を吸い取って、私の毛皮がふかふかになっていく。まるで魔法みたいだ。

よく水気をぬぐわれて、ライトの膝の上でブラッシングされた。すっかりつやつやになって満足していると、ひよいと抱き上げられる。「きれいになったね、アーシェ。かわいい。俺と同じにおいだ。最高」

うん、確かに同じ匂いがする。まさかライトもあの猫用シャンプー使ってるのかな？
変なの。

「いいにおい。好きだよ、アーシェ」

首筋に鼻先を埋められて、怖いような甘いような、変な気分になる。すると、ちゅつと頬にキスが落とされた。びっくりしていたら、…耳を噛まれた。

『やあんっ!』

ざら、と耳の中まで舐められて、上げた声は自分でも耳を塞ぎたくなるくらいに甘ったるい。

腰砕けになってライトの手にへにやりと崩れて、涙目で見上げると、きゅっと思を寄せられる。

「甘い声…。いつか、ベッドで聞かせて?」

切なそうに私を見つめるライトの視線を見返しながら、それなら今夜一緒に寝る時にたくさん鳴いてあげよう、と思った。

お風呂…ですか！？（後書き）

「にゃーん」

「にゃーん」

「…アーシエ…」

「にゃ？」

「…もう夜中だよ。そろそろ寝かせて…」

不憫だなライトw

外に出ました

ゆっくりと意識が浮上する。まぶたにわずかな光を感じて、目をあけた。

重たそうなカーテンの向こうは、もう明るくなっている。天蓋の支柱にかけてある、小さな銀の時計を確認した。文字盤に二本の針だけのシンプルなそれは、使い込まれているのか、輝きは鈍い。その針は、起きる時間のわずかに前を指していた。

まるで私を守るように添えられていた温かいライトの腕の下から抜け出し、うーんっ、と伸びをして、くあ、とあくびを一つ。

そして、傍らで眠る彼の顔をじっくりと観察する。

憎たらしいほどに整った顔。柔らかそうな金茶色の髪、長いまつげ、通った鼻筋。薄い唇は少し開いて、すうすうと規則正しい寝息が聞こえる。

こら、心臓、鎮まれ！

ハナチが出そうなほどに頭に血が上っているのを自覚しつつも、私は肉球でぺたぺたとライトのほっぺをつつく。

まぶたの下から、ゆっくりと茶色の瞳が現れる。寝起きのけだるげな顔が色っぽい。くそう、猫に色気振りまいて何がしたいんだアンタ！

片肘を突いてのそりと身を起こし、目を細めて笑った。頬が熱い。きつと今、顔、真っ赤になってる。毛皮があつてよかったあ！ 真っ赤になってるのを知られずにすむもの。

「おはよう、アーシエ」

なでなでと頭を撫でると、ついでにちょいと引き寄せられて、ぐつと唇を重ねられた。

「まつ、またキスしたあぁっ！」

恥ずかしくて、逃げるように布団にもぐりこむと、くすくすと笑いながら、布団の上からぼんぽんと叩かれた。

ライトはこのところ疲れが溜まっているのか、朝なかなか目を覚まさない。ここに来てすぐの頃はそうでもなかったけれど、ここ2、3日は、私が起こしてあげないと起きられないみたい。

そして、起きたら起きたで毎度私におはようのキスをするのだ！しかも、いつものちょんつと落とされるそれじゃなくて、ほんとに強めに重ねられる感じ。しかも少し長い。

もうっ、私が人間の姿だったら、ただのセクハラだよ！

ぎしっとベッドが揺れた。紺のカバーの下からこそつと顔を出してみると、ライトが夜着を脱ぎ捨てていた。がっしりした体を、まとも視神経に浴びる。

均整の取れた体、幅のある肩、しっかりついた筋肉、いくつか走る傷跡。広い背中がかっこよくて、心臓が暴れる。

ふと気づいたライトが肩越しに振り返り、目が合つとふつと甘く笑った。

ぼんっ！と顔が熱くなって、私はまた布団に潜る羽目になるのだった。

今日の朝ごはんは、甘さ控えめのパンケーキ、鳥ささみと野菜のスープにミルク。うん、薄味だけどおいしい！

ライトのほうは、トーストに私と同じスープとコーヒー。器はライトのも私のもシンプルな白。部屋の装飾品もほとんどないから、多分ライトはシンプルな物が好みなんだろうなあ。

「今日はなんだか朝食がおいしい気がするな。アーシェと一緒にできなかったかな？」

と私を見ながら言うライトに、首を傾げる。私にはいつもどおりに
おいしいけど、ライトは何が違うんだろう。この間言ってた『小動
物の癒し効果』のせいなのかな。

先に食べ終わったライトは、壁にかけてある濃紺の制服を身にまとい、マントを羽織る。これは全て、前の日に部下の騎士様が替えを持ってきてくれるのだ。その日に着ていた物を入れ替わりに渡して洗濯してまた次の日には別の一組、という具合に、数着をローテーションしているらしい。

その制服を着る手つきは、慣れていながらもメリハリがあつて、動作がいちいち美しい。

首元を止める指も、カフスを止める手も、優雅に裾を捌きながらマントをまとう仕草も、爪まで神経が行き届いているみたいにさまになつてて、ついつい見とれてしまう。

『うわぁ、かつこいい〜!!』

時々部屋に来る侍女さんたちが、ライトにあこがれるのもうなずける。

壁に掛けられている姿見を見ながら、伏し目がちに袖口や襟元を整えている顔が、愁いを帯びて見えてため息が出そう。

すると、鏡越し、ちらりとこつちを見た視線とぶつかって、くすりと笑われた。

「随分じっくり見てたね。みとれちゃった？」

『うんっ!』

ぶんぶんと大きくうなずくと、今度は困ったように笑われた。

「そういつかわいすぎる事するなよ。連れて行きたくなっちゃうだろ。仕事場までは連れて行けないのに…」

そうして、ライトは私に歩み寄り、専用の食卓にちょこんと座つて

いた私を腕に抱き上げた。

「まだ時間がある。約束どおり、少しだけ外に出してあげるよ」

『ほんと！？ ありがとう！』

嬉しくて、伸び上がってライトの頬に小さくキスをした。

そうしたら、一瞬絶句したライトが、かあつと真っ赤になった。：

な、何かまずかったかな？

「くっそー、アーシエめちゃめちゃかわいい！ 煽るようなことするなって、本気で仕事行けなくなるから！」

ぎゅうつと抱きしめて頬ずりされて、もみくちゃにされて目が回った。ちよつと喜びすぎだよ！ 落ち着いて、お腹に顔埋めないでー！

ひとしきり私をもふもふしてから、ようやくライトは部屋を出た。

石造りの廊下は幅が広くて天井が高い。はめ込みのガラス窓がずらりと並んでいて、日の光がいつぱい入ってとても明るい。外が良く見える。空が青い。今日は晴れた。

ライトと似たような、紺や濃い緑の詰襟の服を着た人や、侍女さんたちが行きかっている。緑の服や紺の服の人たちは、ライトの姿を見ると、ちよつとびくつとして足を止めて道を明け、胸に手を当てて礼をとる。…微妙に視線を合わせないようにして見えるのは気のせいかな。

侍女さんたちはライトの姿を見ると、みんな一様にぱつと表情を明るくして、顔を赤らめながら道を空ける。みんな、黒い襟の高いワンピースに白いエプロン。こちらは浅く膝を落として、ライトが通り過ぎるのを待っていた。

…通り過ぎた後は、なぜかキャーッと歓声が上がるのが不思議だ。

「そういえば、あの部屋から初めて外に出たね、アーシエ。ここは俺のうちじゃない。サンクエディア王国の王城だよ」

おおお、お城でしたか！ ライトのお部屋のカーテン、寝具や調度品が上等そうに見えたのも、これで納得がいった。

なるほど、侍女さんたちが美人ぞろいなのもうなずける。王城の侍女さんは、貴族のお嬢様が行儀見習いでお勤めするらしいって聞いたことがある。

みんな綺麗に髪を結び、お化粧をして、香水の匂いをさせていた。ちらりと見た手は白く、細く、滑らかで、傷も荒れてもいない。爪も綺麗に磨かれて、一分の隙もなく手入れされているのがわかる。うーん、私には縁のない世界だなあ。

「あの部屋は城に賜っている俺の部屋。普段はあそこで寝起きしてる。城勤めだから、毎朝登城するよりは、王城で生活するほうが楽だしね。家は城の外に持っているけれど、めったに帰らないな」

家持ちか！ お金持ちなんですねえ。ってことはライトは貴族なのかな？ すごいなあ、雲の上の人だ。私が猫じゃなかつたら、きつと知り合うことも、こうして傍にすることもない立場の人。それがラッキーなんだかそうでないのか、私にはよくわかんないけど。

ライトは話しながら、廊下を進み、幅の広い階段を下りる。

下りてすぐのつきあたり、天井まである大きなテラス窓を開けて、外に出た。

『うわあ〜！』

「ここが王城の中庭だよ。どう？」

ものすごく広い。私が暮らしていた孤児院が敷地ごと10個くらい入ってしまいそうなくらい広い。

向こう側の建物まで、どのくらいあるんだろう？

綺麗に刈り込まれた芝と植木、中央には大きな噴水、東屋がここか

ら見えるだけで4つ、東屋を日差しから守るように大きな木も植え
てある。

ライトが下に下ろしてくれて、恐る恐る歩き出す。

朝露で足が濡れる。ちくちくした芝の感触が肉球に刺さる。通路の
ように仕立てられた両脇の植木の根元には、咲き誇るカクタス。さ
わさわと葉ずれが聞こえる木々。

私は何歩も歩かないうちに、すとお尻を下ろして座り込んだ。

空を見上げる。

水のおい。土のおい。緑のおい。花のおい。

吹き抜ける風。高く青い空。

人間の時より遥かに鋭敏になった鼻に、大地の息吹を強く感じる。

ああ、生きてるってすごいことなんだ。
命って強いものなんだ。

…生きて、ここにいられて、よかった。

どのくらい、空を見ていただろう。

「アーシエ、そろそろ戻ろう」

静かに呼ばれて、振り返った。

それを見たライトの顔が、痛みをこらえるようにゆがんだ。なんで
だろう。

ととつとライトの足元に駆け寄ると、抱き上げられて、目元をそ
っとぬぐわれた。

… ああ、泣いてたんだ、私。

ライトは私の額にキスを落として、ぎゅっと抱きしめる。

それから、彼は何も言わずに、部屋まで戻った。私も、おとなしく抱かれたまま。

お仕事の時間が迫っていたけれど、彼はソファに座って、しばらく私を抱きしめていた。私の首元に顔を伏せていたから、ライトの表情は見えなかった。

そして、諦めたのかため息をついて、そっと顔を上げる。

見上げると、まだ痛みを飲み込んだような表情で無理に笑い、また額にそっとキスを落とす。

「…ごめんね」

それだけを言っ、何度か頭を撫でてから、ライトは私を置いて出て行った。

どうしたんだろう。何か嫌なことでもあったのかな。

…それに、あの顔はすごく痛そうだったけど。

…なぜだか、泣きそうにも見えた。

お散歩・前

その日の朝。

程よく冷めているチーズとトマトの入ったリゾットを頬張ると、ちよんちよんと頬をつつかれて、私はすでに制服に着替えている、隣のライトを見上げた。

彼はすでに朝食を終えていて、さっきからずっと私を見つめていた。にこりと甘く笑われて、どっきん！と心臓が跳ねる。

「ずっと部屋の中で退屈だっただろ？ 今日から一人で外に出てもいいよ」

「ほんと！？」

「ただし、あまり遠くには行かないこと。ここは広い。迷子になったら探すのも一苦労だし、迷ってなくても遠くて戻ってこられなくなるかもしれないからね」

「うん、わかった！ ありがとう！」

なーうと返事する私を目を細めて見ながら、ライトは優しく頭を撫でてくれる。

その指が不意に下りてきて、口元を擦った。

「ついてるよ」

にこりと笑いながら、ふき取った指についたリゾットをぺろりと舐める。

「おいしいね」

「…なつ、なにしてるのよおおおっ！！！」

こっ、恋人同士でもないのに恥ずかしげもなくよくできるよね！？と憤慨しながら、ライトの腕に猫パンチを連発でお見舞いしてる。それすらも嬉しそうに眺めているのがまた癪に障るけれど。

いやいやいや、私は猫なんだから。こんなことで動揺しちゃいけないのよ！

「そうやって恥ずかしがられると、アーシエを食べちゃいたくなるね」
すつと顔を寄せられる。唇に吐息がかかるほど近くで、淫靡な笑みを浮かべられて、ぞくりと背筋がざわめいた。そむけようとした顔を、つい、とあごに当たった指先に掬われて阻まれる。そのままあごの下をくすぐられて、言いようのないぞくぞくした感覚にめまいがしそうだ。

だから…っ！　なんで猫相手に色気全開にしてんのぉ！？

唇がすうつと移動して、耳にちゅ、と落とされて、ぴくりと肩が跳ねる。

『や、や…』

「リゾット、気に入ったみたいで良かった。…口の周り、まだいっぱいついてるよ？」

ライトは腰に響く色っぽい声で、…色気のかけらもないことをささやいて下さった。

付いてるんなら余計なことしないで素直にそういいなさいよーっ！！

真っ赤になつて（ライトには解らないだろうけど）あたふたする私を見て、彼は声を上げて笑っている。

くっそー、いつもいつもからかいやがつて！　私がそれでどれだけドキドキしてるか、ちよつとは考えなさいよっ！

まあ、ライトだってわざとじゃないんだろうし、飼い猫かわいさでしてることなんだし、私が元人間だなんて知るはずもないんだし、仕方がないってわかつてはいるんだけど。

でも、いくらかわいいとは言え、飼い猫の口の周りについてる物、

平気で口に入れられるものかしら？　どれだけ猫好きなのよ。
くすくすとまだ笑いを引きずったまま、ライトが立ち上がる。

「じゃあ、俺はもう行くけど。外に出るときは気をつけるんだよ？」
ちゅ。

ぎゃあああつ！　まだ口の回り舐め取ってないのにキスしたあつ！
バカーっ！

あーもう、ほんと心臓に悪いわ。毎日撫でられたりキスされたりして、どきどきしっぱなしなんだもの。はじめて見たときはそんなに猫が好きなようには見えなかったんだけどなあ。

猫の私に出来ることは少ない。何より今までは外に出ることを止められていたから、なおさら。寝るくらいしかやることがなくて、ものすごく退屈だった。

今日も、姿身で身支度を整えて（猫でも身なりを整えることは大切よ！）、窓辺で日向ぼっこするのも飽きた頃、私は部屋を出てみることにした。

ううう、一人で部屋から出るのはさすがに緊張するなあ。

準備運動代わりに何度かうんつと伸びをして、ライトが付けてくれた猫ドアから、応接室に出る。

そういえば、ここのお部屋もよく見たことないなあ。

寝室のものより立派なソファセットに、同じく立派な仕事机。磨き上げられた濃い茶色の木目が、落ち着いた雰囲気。高そう。

窓辺の大きな棚には本がいっぱい。片開きのガラス戸がついた棚の中には、何本ものお酒のビンとグラスが入ってる。寝る前に飲んでるお酒は、ここにおいてあるやつなのかな。ここ数日は飲んでないみたいけど。

他に飾り気はなくて、寝室のくつろいだ雰囲気とは違って、ちょっと硬い感じ。仕事モードのお部屋だからかな。

そして、いよいよ廊下に出てみる。

深呼吸をして、いざ！ と猫ドアをくぐったとき、何か薄布の中を潜り抜けたような感覚がして、すると廊下に出た後、振り返ってドアを見た。

なんだろう。魔法でもかかっているのかな？ 寝室に鍵をかけているのは見たことはないけど、一応私室だし、こっちのドアにはいつも鍵をかけているのかもしれない。そんなところに猫ドアついたりなんかしたら、誰かが入ってくるかもしれないものね。うん、きっと簡単に開けられないようにでもなっているんだろう。魔法のことなんか良くわからないし、そんなもんだろうと軽く考えて、私は気にしないことにした。

その猫ドアに、私とライト以外の人に対するえげつない魔法のトラップが仕掛けられているなんて、私は知らない。

世の中、知らないほうがいい事っていくらでもある。

私は部屋を出てきよろきよろして、まずは左に歩き出した。この間ライトが歩き出したのと同じほうへと。中庭に出て、思いっきり走り回ったからだ。

窓からは日の光が入ってくる。今日も外は雲ひとつない晴れ。気持ちよさそうだなあ。

とことこと歩いていくと、すれ違う騎士様や侍女さんがみんなびっくりにしたように道を開けてくれた。

…どうもおかしいな？ 進んでいくうちに、首を捻る。

みんなびっくりにした顔をするのに、誰も私が歩いているのをとがめない。追い出そうともしない。よくよく考えたら、猫がお城をうる

うろしてたらまずいんじゃないのかなあ？

だって、孤児院に迷い猫がきた時だって、大騒ぎだったもの。お城なら、なおさらなんじゃないの？

ライトはいいよって言うてくれたけれど、怒られたり追い出されたりしないかなあ。ライトの猫だって知られたら、彼も怒られるかもしれない。

…まあいつか、猫ドアがついていない普通のお部屋にはどうせ入れないんだし、みんなのお仕事の邪魔するつもりもないし、目立たないようにお散歩してるだけなら大丈夫だよな。

階段を下りて、昨日と同じテラス窓発見！　よかった、ここまでは道はあってたわ。

で、私はここで間抜けなことに気づいた。

…テラス窓には猫ドアがない…。

しっかりと閉め切られた、天井まである大きな窓を見上げてため息をついた。ここに来るまで気がつかないなんて、うかつと言えばうかつだったけど。　がっかりして、私はもと来た道を引き返した。そして、ちよつと迷ってからライトの部屋の前を通り過ぎる。

このままお部屋に戻ってもつまらない。この廊下の反対側は、何があるかな？

歩く廊下は、さっきと同じ、天井が高く石造りの廊下で、はめ込みガラスの窓が続く。

階段を下りると、そこには向こうと同じテラス窓があった。こっちも中庭に通じてるんだ。ラッキーなことに、こっちの窓は開いている。

すると外に出た。もう昼近いはず。朝露はすでに消えているけれど、湿った土や草花のにおいが鼻をくすぐる。

私は魔女の家ではずっと狭い部屋の中にいた。ライトに拾われてか

らも、広くなつたけど部屋の中。
やっぱり外は気持ちいい！

芝生を駆け回り、お花のおいをかいで、出てきた蜂にびっくり。
ちようちょを追いかけて噴水に落ちそうになり、噴水のほとりに座
つて、水面にゆらゆらと映る黒い猫の顔にぱしゃぱしゃと猫パンチ
をくりだす。

うん、猫、なんだなあ。

またへこみそうになつて、ふるふると頭を振つてネガティブな思考
を散らす。

そうだ、生きてて良かったつて、昨日思つたばかりじゃない。ラ
イトは優しいし、ご飯はおいしいし、こうして自由に走り回れる。
あそこにいた時のことを思えば天国だ。孤児院の皆のところに戻れ
ないのは寂しいけれど、今はどうしようもない。

それに、もしかしたらそのうち呪いが消えるかもしれないし、呪い
を解いてくれる人が出てくるかもしれない。

そうだよ、そう悪いことでもない。ライトみたいになかつこいい人と
知り合えたんだしね。やたらとスキンシップが多いのは勘弁して欲
しいけど。

気を取り直して、顔を上げる。さて、次はどうしようかな。

その途端、きゅるるるる、とお腹が鳴った。

『お、お腹へった...』

しばらく運動してなかったからなあ。久しぶりに走り回つたせいか、
余計に空腹を感じる。お部屋に戻ろうとして、入ってきたテラス窓
の前まで歩いて行つて。

たらーりと冷や汗が流れる。

…どうしよう、閉まってる。

確かに、開けっ放しは良くないんだけどさ！ もうちょっと開けといてくれてもいいじゃない！

反転し、反対側の、昨日ライトと一緒に来た出入り口まで、芝生の上を一直線に走り出した。さっきは閉まっていたけれど、もしかしたら誰かが開けているかもしれない。

それにしても、と、遠い…！！

体が小さくなったせいもあるのか、目測の2倍くらい走っているみたい。

ぜえはあと息を切らして、ようやく見えてきたテラス窓は、やっぱり閉まってる。

し、閉め出された…！

『どとど、どうしよう！ だれか、誰かいませんかあ…！』

にやごにやごと必死に声を張り上げるけれど、運悪く昼時のせいかなかなか人が通らない。

爪で窓を引つかいたら誰か気づくかと思ったけれど、高そうな窓枠やぴっかぴかのガラスを見たら、爪を立てるなんてとてもじゃないけど出来ません！

ならばと必死に肉球で窓を叩いてみるけれど、無駄に高性能な猫の肉球は、 たしたし窓を叩いても音一つ立てない…。うわああん！

『開けてー。開けてー。誰かー。開けてくださーい！』

お願いだから、誰か気づいてー！

お散歩・前（後書き）

おやあ？

一話一セクハラ目標のはずが、三セクハラぐらいになってますなw
続きになっているので、次話は早めに投下します。

お散歩・後

音を立てない足で窓を叩きながら、必死で鳴き声を上げる。昼食の時間のせいか、ただでさえ人が少ないのに、たまに通りかかって、みんなせかせかと通り過ぎていつてしまう。

こんなところで猫が閉め出されてるなんて誰も思わないから、こっちに注意を払ってくれなくても仕方ないけれど。

どうしよう、遠くに来たわけじゃないけど、このままお部屋に戻らなかったらライトが心配する。迷惑をかけてしまう。

しばらくにやあにやあ声を上げ続けたけれど、助けてくれる人はいない。泣きそうになったとき、階段から下りてきた侍女さんがちらりとこちらを見た。そして、びっくりした顔をして駆け寄ってきて、テラス窓を開けてくれた。

「ライトリーク様のところの猫ちゃんね？ どうぞ、入って」

『ありがとう！』

開けてくれた窓からするりと入り込み、ちょこんと座ってにやあ、と一言。ぺこりと頭を下げると、侍女さんはまたびっくりした後、ころころと笑った。

「まあ、聞いてたとおり、とっても賢い猫ちゃんなのねえ」

…聞いてたって、誰から？

侍女さんは30歳くらいで、落ち着いた優しそうな美人さんだった。少し下がった目尻が、誰かに似てるような気がするけど…誰だったかなあ。包み込むような柔らかい雰囲気、シスターにちよつと似てる。

綺麗な金茶色の髪も、誰かを思い出させる。その髪を三つ編みにして、頭の後ろできっちり留めていた。服装はいつもの侍女さんたちと一緒にけれど、その人は頭にヘッドドレスをつけていて、両袖

の袖口に金のラインが2本入っていた。いつもの侍女さん達は、ヘッドドレスはつけていない。なにかの目印かな？

ライトの部屋に来る侍女さんたちは、まだ若い綺麗で華やかなお嬢様たちばかりだったから、このくらいの年齢の人がいるなんて知らなかった。

「かわいいわねえ。抱かせてもらってもいいかしら？」
そつと伸ばされた手を、反射的によけてしまった。
わざとじゃない。でも、体が勝手に逃げる。

迫る白い指に、ざわりと立った鳥肌。

どきんどきんと嫌な軋みを上げる心臓。

ここは、あそこじゃない。

この人は、あの魔女じゃない。

わかってる。でも。

ライト以外は、まだ怖い。…女の人の手は、怖い。

「あら、嫌われちゃったわね。残念だわ」

侍女さんが気にした風もなく笑ってそう言ったとき、階段からこつこつと靴音が聞こえてきた。ぴんっと私の耳が立つ。

鋭くなったのは嗅覚だけじゃない。よく聞こえるようになった耳は、はつきり覚えている。規則正しい、ライトの歩調を。

『ライト！』

にやぁんと鳴きながら駆け出して、階段から下りきっていないライトに飛びついた。予想していたのか、ライトは驚きもせず、私を抱きしめてくれた。

毛を逆立てながら、ぴりぴりと落ち着かない様子の私を見て、ライ

トはわずかに眉をひそめる。

それから、大きな手で、ゆっくりと何度も撫でてくれた。

さざなみが立っていた気持ちが静まっていく。ほっと息をつき、やっと力を抜いたのを確認して、ライトはちよっと困ったような顔で笑って侍女さんに頭を下げた。

「これは、エルサーナ殿。ご無沙汰しております」

「こちらこそ、ライトリーク様。同じ王城勤めなのに、なかなかお会いできないわねえ」

柔らかなく微笑み、優雅に膝を折る侍女さんに、ライトは笑いを引っ込めて、ため息をつく。

「あれ？　今まで、侍女さんたちには冷たい態度しか取らなかったのに、なんだか気安い感じ。」

この人は、…他の侍女さん達とは違うの？

ライトの腕の中、侍女さんを見上げる。ちくん、と胸の奥が痛んだ気がした。

「それは、王妃陛下付きの侍女長補佐と騎士団員では畑違いですから。建物も違いますし、そうそうお会いすることもないでしょう」

「そのあなたが、仕事中にこんなところにわざわざいらっしゃるなんて、随分この子をかわいがってらっしゃるのね。昼の交代時間は、まだのはずよね？」

ほっそりした指を口元に当ててくすぐすと笑う侍女さんに、ライトは苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ほっといてください。…貸しませんよ」

抱きしめる腕に、ぎゅっと力がこもる。その強さに安心して、私はライトの胸にすり、と頭を擦り付けた。

「承知してますわ。ご心配なく。嫌われちゃったみたいだし、ね？」
そう言って私をのぞきこむ侍女さんに、なんだか悪い気がする。だって、この人には何もされてないんだし、私が勝手におびえて逃げ

てしまったただけだもの。でも、侍女さんが私を見る目は優しく、ほっとした。

またため息をついて、ライトはその視線から私を遠ざけるように、くるりと背を向ける。

階段を上るその背に、柔らかな声が投げかけられた。

「その宝物、大事になさいな。決して手放してはだめよ」

かつん、と階段の途中で足を止め、振り返ってライトは鮮やかに笑う。

「もとよりそのつもりですよ、姉上。では、失礼」

決然とした声を放ち、ライトは今度こそ背を向けて歩き去った。

…びっくり。ライトのお姉さんだったのか！なるほど、ちょっと下がった目元が誰かに似てると思ったら、そうか、ライトの目に似てる。金茶色の髪も、同じ色だったし。

「アーシエ、あの人は俺の姉だ。うん、まあ、優しい人だから大丈夫だよ。ほかの人はまだ怖いかもしれないけれど、他人の手に慣れたかったら、あの人の手から慣れていくといい。急がなくていいから」

廊下を歩きながら、ライトは私の頭を撫でる。彼は何でもお見通しだ。私の気持ちを知ってくれている。

それを、少し怖いと思う気持ちもあるけど。

私の中までのぞかれてしまいそうで。

「そうそう、君の事は、お城に伝えてあるよ。王城内を歩く、赤い首輪で緑の目の黒猫は、騎士団副団長ライトリーク・ウォーロック預かりである。一切詮議無用、手荒な真似はしてはいけない、ってね。王命で」

おうめい？　おうめいつて、…王命！？　王様の命令ってこと！？
間抜けにも口をあけたまま固まっている私に、ライトはさわやかに笑って見せる。

「陛下に、うちの猫がうるうるするかもしれないけど、間違って追
い出されたり、連れて行かれたりしないか心配でって言ったら、じ
ゃあ猫保護命令を出しといてやるってさ」

たかが猫一匹に何考えてるの！？　バカじゃないのおおおっ！？

怒り狂って繰り出す猫パンチをひよいひよいとかわしながら、ライ
トは楽しそうに笑う。

「アーシェより大事なものはないよ。陛下も面白がってくれたし、
問題ないない」

なくない！　ていうか、面白いがるな！　人事だと思って！

「まあまあ、そんな怒らないで。アーシェ、好きだよ」

キスでごまかすなっ！　ライトのバカーっ！！

怒り狂っていたから、忘れていた。

ライトが、エルサーナさんと話していたとき、胸の奥が痛んだこと
それが良かったのか悪かったのかは…後から考えてもわからなかつ
た。

お散歩・後（後書き）

飼い主バカもここまでくるといつそ清々しいかもw

魔法の練習！・前

まさかライトが王様とお話できるようなえらい人だとは思ってなかった。

私には、猫が好きすぎるちよつと変わった優しい人、としか思えないんだけどなあ。

ともかく、ふざけた王命により、私のお城での行動は保障された。保障されたはいいけれど、今度はいらん弊害が出てきて、また別のストレスがたまってきてる。

「あらっ、ライトリーク様の猫よ！」

「きゃあっ、かわいいっ！」

「こちらにいらっしやい。おいしいお菓子があるわよ」

「ほら、お魚はいかが？」

「おもちゃもありますわよ」

「」「さあ、いらっしやい」「」

侍女軍団が、私を撫でたり抱っこしたりしようと、遠慮なく手を伸ばしてくる。

ざわつと背中に鳥肌が立ち、ぶわつと毛が逆立った。差し出された手をかいくぐり、一目散に逃げ出した。

そう、弊害とはこれだ。

私^猫を懐柔して、ライトに気に入られようって魂胆の侍女さん達だ！

あのばかげた王命が出されてから2、3日は、みんな私に当たらず触らず見てるだけだったのが、なにやら余計な勇気を出した一人の侍女さんが、私に猫エサを与えようとしたのが引き金になった。

それ以来、ライトにあこがれる侍女さん達が、私を見かけると血相変えて、食べ物やおもちやで気を引こうと躍起になる。

廊下を歩いていればどこからともなくわらわらと湧いてついてくるし、日向ぼっこをしていれば人だかりが出来るし、知らん振りしてベンチで寝ていれば貢物の山ができる。

私の中庭で遊んでいると、『危険がないよう、ライトリーク様の猫を見守る』なんておかしい理由で私を追い掛け回すし、みんなやたらと私に触れたがる。

だから！ 女の手はまだ怖いんだってば！

猫なんかにかまってないで、仕事しろよアンタら！

このままでは、ライトにも迷惑がかかるかもしれない。

私もいらしたくないし、何か方法を考えないと。

ということで、魔法の特訓！

魔女の家で教えられた、「遠耳」と「姿隠し」。

遠耳は、遠くの音や、壁に隔てられた部屋の中の音も聞き取ることの出来る魔法。これは、あそこにいる間に何とかできるようになっていた。

これに関しては、今のところ必要性は感じてない。部屋の中の内緒話なんてろくなものじゃないだろうし、そこまでして聞きたい話なんて、私にはないしね。前よりずっとよく聞こえるようになった猫の耳があれば充分。

姿隠しは、自分の存在を気づかれないようにする魔法、らしい。透

明になるとかではないけれど、その魔法を使うと、例え堂々と誰かの目の前にいても、全く気づかれないんだって。見えていないように見せてしまう魔法、とか言ってたけど、一回も成功したことがないから、ほんととはどんな魔法なのかちつともわからない。

多分、お城の中で気にいらない人の話を聞いて、魔女に報告するのがお仕事になる予定だったんだろうなあ。

それを考えると、ライト目当ての侍女さん達の手から逃れる為に、姿隠しを練習する羽目になるなんて、動機としては情けないような気がしなくもない。

魔法を使うことには、不思議と恐怖感はなかった。危害を加えそうな人がいなかったからかもしれない。自分ひとりでやる分には、とりあえずは大丈夫みたい。

魔女の家で練習した時は体調も万全じゃなかったし、集中も出来なかった。なんだか今なら出来そうな気がする。

魔女に教えられたとおり、ふうつと息を吐くように魔力を練る。私の鼻先に、ふわんと魔力の塊が出来るのがわかる。魔力は目には見えないけれど、立ち上る熱気のように、空気の濃さが違って見えるから、なんとなくわかる。

これを壊さないように、くると後ろに一回転すれば、できるはず。深呼吸をして、ジャンプ！

瞬間、魔力の塊はぱちんとはじけてしまった。

すたっと音も立てずに見事に着地した私は、あれれと首を傾げる。

やっぱり、魔女の家にいた時は、体力が足りなかった。ご飯も足りなかった。だって、今の一回転は、自分でびっくりするほど完璧だった。着地もぴたりと決まった上、音も立てない。さすが猫、身軽だ！

いやいや、今大事なのはそこじゃない。ちゃんと魔女が言ってたとおり一回転できたのに、どうして魔法がかからないの？ それとも、たまたま失敗しただけ？

じゃあ、もう一回。魔力を練って、ジャンプ！
くるん、ぱちん。

くっそう、もう一回！
くるん、ぱちん。

やっぱり無理か。高さが足りないのかな？
くるん、ぱちん。

違うか。じゃあ斜めに踏み切ってみたらどう？
くるん、ぱちん。

もおおっ！ 何で出来ないのー！？

躍起になってくるん、ぱちん。をくりかえすこと、ちょうど10回目。

踏み切った瞬間、かちやりとドアが開いた。見事な捻りを入れて着地を決めた私と、ライトの視線がばっちりと合う。

だらだらだら、と冷や汗が流れていく。

ななな、何でここにいるの？ お仕事じゃなかったの？
これ、どう思われた？

魔女の命令に未だに従ってるとか思われてない！？

悪いことをするために魔法の練習してるんじゃないかとか思われてない！？

だって私、魔女の家であれだけひどい目に会っておきながら、まだこうして魔法を使おうとしているわけだから、状況からして誤解されてもおかしくないよね!?

「…完璧な一回捻りだね、アーシェ。着地も100点満点だよ」
ふわりと笑われて、がくつと床に倒れ伏す。

い、今言つところってそこじゃないんじゃないの…?

魔法の練習！・前（後書き）

あ、セクハラがなかった。

次回がつつりやつてもらいますんで。

魔法の練習！・後

脱力した私にくすくすと笑いながら、ライトはいつもの規則正しい歩調で部屋を横切り、ソファに腰を下ろした。何とか立ち直った私もソファに飛び乗り、今日も変わらず綺麗な顔を見上げた。

「どうも最近侍女が姦しいらしいね。アーシェにもやな思いさせた。ごめん」

頭を撫でてすまなさそうに謝られる。

いやいや、ライトのせいじゃないと思うよ！ 恋する女の子達が手段を選ばないだけの話だから。

それにしても、あの情熱はどこから来るのだろうか。私にかまう10分の1でもいいから、それをお仕事に向ければ、ライトにも気に入られると思うんだけどなあ。

気にしないでと、あごの下をくすぐっていた手の甲をぺろんと舐めてあげたら、抱き上げられて頬にキスされた。

「慰めてくれてありがとう、アーシェ」

甘い笑みを向けられて、どくどくと心臓が暴れる。人間に戻る前に、この小さな心臓が破裂しないことを祈る。

「もう一回、さっきのやってみて。一回転捻りじゃなくていいから言いながら、そつと床に下ろされる。猫なんだから、多少落つことされても平気なのに、ライトはいつも私に優しい。

声も言葉も、私に触れる手も、私にくれる気持ちも。

それは、いつも私の心に落ちて、じりじりと熾き火のように熱を持

ち続けている。

どこか落ち着かない気持ちをこらえ、ライトに向き直って、最初の手順を繰り返す。

『シャボン玉のように魔力を出せばいいんだよ、そいつを壊さないように、ジャンプで一回転すりゃ成功だ』

何度も言われた魔女の言葉は、今の私にはアドバイスにもならない。だって、言われたとおりにやってもちつとも出来ない。それに、今思い出してみても、大雑把過ぎてどこをどうすればよくなるかわからない。

それでも、今は教えられたとおりにやるしかない。

息を吐くように魔力を練って、ふわりと浮かんだそれを壊さないように、少し待って落ち着かせる。

それから、どうか壊れませんかようにと祈りながら、床を蹴ってジャンプ！

踏み切った瞬間、ぱちん、と魔力の塊ははじけて消えた。

やっぱりだめか。踏み切りの瞬間に壊れちゃうなら、ジャンプの仕方が悪いのかな。

でも、どんなジャンプがいいの？　それが私にはわからない。

首を傾げる私に、綺麗な指先をあごに当てて見ていたライトが、軽くうなづく。

「なるほど、そのジャンプが邪魔なんだな。アーシエ、今度は練った魔力の中に潜り込むようにしてみて。その魔力の塊に、頭を入れるように」

魔力の中に潜り込む…ですか？ ジャンプじゃなくて？

ライトに指示されて、半信半疑のまま魔力を練る。
息を吐くようなイメージで作る、シャボン玉みたいな、透明な魔力の塊。

潜るように、潜るように…。心の中で言いながら、恐る恐る魔力の塊の中に頭を入れた瞬間、ふわんと崩れたそれが、まわりつくように体を覆ったのがわかった。

『あ、あれ？ 何これ？』

びつくりした私に、ライトはにこりと笑う。

「ん、上手に出来た。完璧だね」

『ほんと！？ これがそうなの！？ やったあ！』

ほめてくれたライトに、思わず歓声を上げた。

…でも。

あれ。

ライトは私をまっすぐ見ている。姿隠しの魔法のはずなのに、私が見えてるの？ なんて？ ほんとは何か失敗した？

わけがわからない私に手を伸ばして、ライトは私を膝の上に抱き上げた。

耳の後ろやあごの下を愛おしそうに撫でる指がくすぐったくてときどきする。

「大丈夫、上手に出来てるよ。下手な魔術師なら欺けそうなくらい。素質あるのかな」

そんな素質はいらないんだけど。おかげで魔女に目を付けられる羽目にもなったんだし。

ジト目でにらむ私にはっとしたように、ライトに抱きしめられる。息が止まりそうだ。

「ごめん、そういう意味で言ったんじゃないんだ。嫌な事言った。忘れて」

わかってる、ライトの言葉に含みが無いことは。ちよつと過敏になりすぎた。

また、痛みをこらえているような顔で失言をわびるライトの頬に、えいっと一つ猫パンチを入れてやった。もうっ、つい反応した私が悪いんだから、そんなに気にするなつてのよ。

それでようやくこわばった顔を緩めて、ライトはほつと息をついた。「ごめん」

こつんと額をあわせて、優しく言ってくれた。

お詫びのキスだよ、と寄せられた唇に、今日は素直に目を閉じて受け入れた。私こそごめんね、の気持ちを含めて。

「姿隠しは、見えないと思わせる魔法だからね。魔力を持っている人や、ちよつと勘のいい人が気をつけていれば気づかれるし、魔力が弱い人が使えば、気づかれやすくなる」

私を見つめながら説明するライトの口調はよどみない。その間も、優しい手が飽きることなく私を撫でている。

「俺はアーシェが魔法を使うのを見ていた。そこにアーシェがいるって、最初から認識してる。だから、見えないと思わせることが出来ない。それに、一応俺も魔術師の端くれだからね。ちよつと気をつければ、魔法を使ってるって感じ取れることはできるよ。効いてないわけじゃないけれど、そういうわけで俺にはアーシェが見えてる」ほほう、そうなんだ。ま、姿を見えなくする魔法じゃないし、万能ってわけにはいかないわよね。それなら、あらかじめ姿隠しの魔法

をかけてからお散歩に出たほうがよさそうだ。侍女さん達には充分効くだろっから、問題はない。

あれ、でも、ジャンプしてくるんがなくても魔法がかかったのはなんで？

首を傾げる仕草でわかってくれたのか、ライトが優しく頭を撫でる。「魔法を使うには、コツがいるんだよ。基本は魔力を練って、呪文を言ったり手や体の動きで発動させる。想像するだけで発動できる人もいるし、長ったらしい呪文や身振り手振りじゃないと発動しない人もいる。使う人によってそれぞれやり方が違うんだよね。魔女は魔女のやり方があって、それがアーシェには合わなかったってだけの話」

そうなんだ。魔法を使うのなんて、みんな一緒だと思ってた。確かに、料理でも掃除でも、基本は同じでも自分なりのコツであるものよね。それと同じようなものね、きつと。

こしょこしょ、とあごの下をくすぐられて、思わず顔を上げたら、にこりとしてまたライトが顔を寄せてきた。

反射的に目を閉じてしまい、ちゅ、とキスされる。

う、やばい。だんだん慣れてきてない！？ 私。

ていうかこれは何のキスだ！

「アーシェの魔力が、練ったときが一番安定して見えたから、余計なことしなくても発動できるんじゃないかなと思っただけ。でも、やり方を口で教えてすぐにできるってものでもないから、アーシェは飲み込みが早いんだね。すごいな」

そ、そうかな？ なんでもほめられれば悪い気はしない。えへへと笑ってライトのお腹の辺りに体を擦り付けると、いきなりぐるんと視界が回った。

『きゃあっ』

一瞬天井が見えて、すぐに視界がライトでいっぱいになる。
にやあっ、と声を上げた私を、動けないように両足を広げて、ソファに押さえつけた。

ライトは、目を細めて私を見ている。浮かべる笑みはとろりと甘い。
ぞくつと背骨を逆撫でた感覚は、何なんだろう。

「俺のせいで、余計な気を使わせた。ごめんね」

『いやいや、気にしなくていいから手を離してっ！』

もうそれごめんって顔じゃないから！ むしろ嬉しそうで、しかも
なにやらえっちくさい！ 私がもがくのを楽しげに眺めている。

「やばい、抵抗されると燃える」

形のいい唇の両端が、にいつと楽しそうにつり上がる。

だめだめ燃えるなお願い鎮火してええ！ と抗議出来たら状況は変わ
ったんだろうか？

一瞬切なげに眉を寄せると、ライトは私のお腹の柔らかい毛に顔を
うずめた。鼻先でくすぐられる。じわ、と腰の奥がわずかに熱くな
った。何これ…！

「いいにおい。ふかふかだね。気持ちいい…」

うつとりと言われて、腰の奥だけじゃなく、全身が熱くなる。

やだ。はずかしい。近すぎる。

ライトの髪がふわりと顔にかかる。いいにおい。私と同じグリーン
ノート。

ふに、と胸の真ん中を鼻で押されて、ぞくん、と甘い痺れが走った。

「やあんっ」

思わず上げた鳴き声は、私の内心と同じ声。甘ったるいそれが、泣きたくなるぐらい恥ずかしい。ライトが胸元から顔を上げて、私を見下ろした。

もう、笑ってない。その瞳の奥に、焦れる炎が燃えていて、思わずすくむ。

「そんな甘えた声出して、俺がその気になったらどうするの？」
言うなり、キスされた。

いつもはちゃんと触れて離れて行くそれが、今は何度も重ねられて息ができない。気が遠くなりそう。数えるのも忘れるくらい唇を重ねて、やっとライトは離れて行った。

今度は私と目を合わせない。また、お腹に顔を埋められる。感触を確かめるように頬ずりされて、思わず『んあ』と声を上げると、はあっと熱い吐息をお腹に食らって、そこが焼けそうな気がする。

ライトの唇に慣れてきている自分がいる。

ライトの手に安心する自分がいる。

ライトに抱かれてときどきする自分がいる。

それがどうしてなのか、私にはまだわからない。

これは、いいこと？ わるいこと？

「くそ、めっちゃくちやに舌入れてやりたい…」

…今、なんて言った？

何か怖いこと言わなかった？

き、気のせいだね。

ていうかライト。
そもそも何しに来やった？

私に会いたくて仕事を抜け出してくるなんて、アンタも侍女さん達と同じじゃないかーっ！！
と、我に返った私の怒りの猫パンチを顔に何発も食らって、ライトはしまりのない顔のままお仕事に戻って行った。

ああ、もう。猫好きもここまで来ると病気じゃない？
私は深いため息をつき、居心地のいいソファにだらりと伸びた。

魔法の練習！・後（後書き）

ライト君、抑えて抑えて！

前回セクハラがなかった分、挽回できてるでしょうか？

魔法を使ってみよう！・前

『ライト、ねえ、起きて。朝だよ』

柔らかな敷布に座り、たくましい腕を投げ出して穏やかな寝息を立てるライトの頬を、いつものようにしてしと肉球で叩く。

ふわりと開いた目が少しの間を置いて私に焦点を結び、甘く細められて、伸ばされた指先があごの下を愛撫する。

「おはよう、アーシエ。今日もかわいいね」

頭を優しく引き寄せられて目を閉じる。重なった唇からじわりとライトの体温が沁みて、きゅうつと心臓が鳴った。

今はこれが、私とライトの毎朝の日課になった。この頃気づいたけれど、朝起きられないのは疲れているからじゃなくて、本当は朝が弱いみたい。今ではこうして私が起こしてあげないと起きてこない。

私は逆に朝はすぐ目が覚める。孤児院で朝からシスターと朝食の準備をしなきゃいけなかったから、早く起きていた習慣が今でも抜けない。

朝は目覚ましが無くても、孤児院にいたときと同じ時間に勝手に目が覚めてしまう。

でも、夜はいつも勉強で遅くまで起きていたせいか、朝までの短時間で疲れを取る為に深く眠る癖がついているみたいで、一旦寝入るといつもの時間になるまでは何をしても起きない……らしい。

実際、孤児院にいたとき、ちびちゃんたちが夜中に私の部屋に忍び込み、顔中落書きして、朝になって鏡を見て、びっくりして絶叫したことがあったけれど、されている最中はぜんぜん気づかなかったもの。

シスターにも、『もし夜中に孤児院が火事になったら、あなた逃げ遅れて死んじゃうわよ』なんて妙な心配をされたっけ。

そしてそれは、ライトに飼われるようになった今でも変わっていないみたいだ。時々ライトが私に、『アーシエは眠りが深いんだね。何しても全然起きないよね』と言われることがある。

：妖しい笑みを浮かべられると、寝てる間に一体何をされているのかものすつごく不安なんですけど！

ライトとのおはようのキスも、慣れた。：というより、もう諦めた。どうあっても逃がしてくれる気はないようだし、しないで済ます気もないみたいだし、何より抵抗するとライトが燃えてしまう：から。色っぽい声と視線で、ソファやベッドに組み敷かれたまま、吐息が触れるほど近くでキスするまで延々と言葉攻めにされるんだもの！

「どうしてしてくれないの。俺が嫌い？」

「ほんとはずっとキスしてたいんだけどな」

「アーシエの唇が小さくて甘いから、食べちゃいたくなるんだよ」

「重ねるだけで満足してあげてるのに」

「嫌がるなら、舌入れるよ？ いいの？」

「舌入れたら俺多分止まんないよ？」

「それはそれで俺はいいんだけどね」

「顔背けちゃだめ。俺を見て。でないと息できなくなるまでするよ？」

「アーシエの舌まで食べちゃいたい」

「アーシエの唇も、舌も、息も、全部食べたい…」

食べないでエエ！

わかった、わかったからキスぐらいいくらでもするから、だからお願いその舌なめずりしてる肉食獣みたいな顔やめてエエ！

と、追い詰められて折れた私は、仕方なくライトのキスを受け入れた。

だけれど、それを三日連続でやられたら、そりゃあ諦めるしかないでしょ!?

毎朝羞恥プレイと貞操の危機に陥るくらいなら、重なるだけのキスくらい黙ってさせてあげたほうが、精神衛生上よっぽどいいわ…。

でも、…嫌じゃない、のも理由の一つではあるんだけど。

だ、だって、あんな綺麗な私好みの顔の人に、甘やかすような笑みを浮かべて、あんなふうに甘い声で『好きだよ』『かわいい』なんてキスをねだられたら、逆らえないよ!

…逆らいたくない自分がいることは、そろそろ認めないといけないかもしれないけど…。

朝食を食べて、ライトがいつものように一部の隙も無く身支度を整え、その背中をじっと見ていた私を抱き上げた。切なそうな笑顔で私にすり、と頬を寄せる。

「離れたくないな…。一緒に行かない?」

『嫌です!』

ぶんぶんと首を振って拒否する私を、人の悪い笑みを浮かべたライトは有無を言わずソファに組み敷く。ずるいよ、私体も小さいし抵抗できないのにつ!

「そんなつれない事言わないでよ。俺はいつもアーシェと一緒にいたいと思ってるのに」

吐息がかかるほど近くから見下ろされるその目は、笑っているけどどこか扇情的で、いたたまれない。その視線から逃れようとふいつ

と顔を背けたけれど、すぐにその綺麗な指先で引き戻される。

「だめめ、逃がさない。俺はアーシェしか見てないよ。だからアーシェも俺だけ見てて」

…うん。あのね。言ってることはとっても甘くて、ときどきするんだけどね。

「もしも俺以外の男に夢中になったら、俺以外の誰にも会わないように、どこかに閉じ込めるからね？」

熱を帯びた瞳で怖い事言うなあっ！

本気に聞こえるから！ 本気に見えるから！

というか猫相手にそんな顔でそんなこと言ったら、かわいそうな人に見えないから外では絶対言わないでよ！？

毛を逆立てた私にくすぐすと笑いながら、ライトはキスを一つ落として私を抱き起こす。

「でもなあ。マジで離れたくないな。姿隠し使えるようになっただろ？ やっぱり一緒に行かない？」

困ったように笑って、未練がましくお伺いを立てるライトを、鋭くにらみつける。

『ふざけてないで、仕事に行きなさい！』

うにやっ、と叱り付けて、びしっとドアを指差してやると、がつかりしたようにため息をつきながら、ようやくライトは私をソファに下ろしてくれた。

「残念。じゃあまた今度ね。…行ってくる」

跪いて淡い笑みを浮かべ、ずっと顔を寄せてくるのに目を閉じた。触れたぬくもりが離れていき、寂しさがよぎる。

どうしてだろう、私にはその理由がわからない。

昨日は何回も練習して、なんとか姿隠しの魔法が出来るようになった。…と思う。

なにせずつと部屋の中で練習していた上、その成果を見届けたのはライトだけだ。その彼にはあっさり見破られているし、いまいち出来てゐるって実感が無い。

それに、ライトは出来てゐるって言うてくれたけれど、それは文字通り『出来ている』だけで、『使える』ってことではないとわかったのは、ライトがいなくなつて、また一人で練習を始めてからだ。

最初は魔力が体を覆っていることにただ満足していた。なんだ私、やれば出来るじゃん！　なんて得意になつていたけれど、よくよく見れば、体にまとわりついた魔力は、ふわんふわんと波打つてて頼りないことこの上ない。

一步でも動くと剥がれてしまいそうで、身動きもままならず、途方にくれて数分立ち尽くす羽目になった。

そして、実際動き回つてみると、やっぱりうまく術を維持できなくて、足を動かす端からばちゃんと魔力がはじけて、術が解けてしまう。でも、さっきだってやれば出来た。きっとそのうちできるはず！　と奮起して、めげずに何度も何度も術をかける。

そうして、何回も失敗を繰り返しているうちに、波打っていた魔力が体にぴたりと張り付くようになってきたのに気づいた。それで何とかコツを掴み、気をつけていれば動いても術が解けてしまうようなことがなくなった。

術をかけたまま、寢室を何周もしたり、猫ドアをくぐつてあちこち

行ったり来たりしているうちに、最後の方は術を意識しなくても続けられるようになっていた。

ようやくそこで緊張が解けて、気づけばもうお昼。お腹はペコペコだし、休まず魔法を使い続けたおかげでへとへとだった。

昼食を持ってきたくれたライトがあきれて、『アーシエ、ご飯は逃げたりしないよ』って言うくらい、むさばるように食べて、2回もおかわりしちゃったくらい。

「無理しちゃだめだよ」

と心配そうなライトを、平気平気と追い出したけれど、さすがに疲れきってしまっていた。

ライトのベッドの上に置かれているクッションの上で、ちょっと一休みのつもりでお昼寝したら、目が覚めたらもう夕方。ライトが帰ってくる時間になっていて、がっかりした。起きたら外で試してみるつもりだったのに。だから結局、ライト以外の人に術が効いているかどうかは、確かめることが出来なかった。

でも、今日は目覚めもすっきり、お腹いっぱい元気いっぱい！昨日の疲れも残っていないみたいだし、魔法を使うコンディションは多分万全だ。

ということ、いよいよ魔法の実践に参りましょうか！

魔法を使ってみよう！・前（後書き）

なにやらライト君の変態っぷりを見せ付ける回になったような……？
？

魔法を使ってみよう！・後

応接室の猫ドアの前で、姿隠しを使う。魔力を練ってふわりと身にまとい、昨日のようにぴたりと体を覆っているのを確認して、いざ出陣！

するりと猫ドアから廊下に出る。きよろきよると見回してみると、ちょうど隣の部屋、ライトの部屋と同じ重厚なドアをゆっくりと開けて、深い緑の制服を着た騎士様が出てきた。よし、まずは一人目。どうかな、成功してるかな？

その人はさつとマントを払って、ライトと似てる、規則正しい歩調でこちらに歩き始める。そして、どきどきしながら待つ私の前を、ごつい軍靴が何事も無かったように通り過ぎて行った。ドアの前に立つ私に、目もくれずに。

おお、これはほんとに見えてないのかも！？

でも、万が一もしかして、気づかなかただけかもしれない。何せまだ一人目だ。たくさんの人が見てもわからないくらいじゃないと、簡単に安心は出来ない。

私は廊下をとてとて歩き出した。

次に会ったのは、廊下の向こうから歩いてきた、二人組みの侍女さん。手には茶器とお盆を持っているから、どこかでお茶出しでもしてきたんだろうか。

つい緊張して足を止める。

なにせ、おとといまでは、彼女達のような侍女さん達が、私を一目見るなり、血相変えて突進してきたんだから。

その二人は、ライトの部屋の近くだからか、歩く足を緩めて注意深く周りを見回している。

「猫ちゃん、いないですわね」

「どこかに行ってるのかしら」

きよろきよろと見回す視線が何度も私の上を通り過ぎ、そのたびに見つかりはしないかとびくびくしながら身を縮める。

そのうちあきらめたのか、おしゃべりをしながら通り過ぎていく二人を、壁際に身を寄せて、息を殺して見送った。

詰めていた息を吐き出す。さすがに緊張したけれど、うん、なんとかうまくいったみたい。侍女さん達の視界には、何度も私が映ったはずだけれど、全然見えていないみたいだった。これならきつと、誰が来ても大丈夫！

私は意気揚々と歩き出した。

廊下を行きかう侍女さん達も騎士さんたちも、私に気づかずに通り過ぎていく。いやあ、快適快適！

がつかつと床を叩く軍靴や、こつこつとかかとを響かせる革靴の間を、私は泳ぐようにするりするりと歩いていく。誰にも私の姿は捉えられていないみたいだ。

時々、怪訝な顔をして振り返る人も中にはいたけれど、その時はさつと走り去ったり、柱の陰に隠れたりすれば、それ以上追われる事もなかった。

多分そういう人たちが、ライトが言ってた『勘のいい人』か、『魔力持ちの人』なのかな。気づかれても面倒だし、いくら術が効いてるとは言え、あまり堂々と歩かないほうがよさそうだ。

ライトのお部屋から一階に下りて、開けっ放しのテラス窓から中庭に出る。今日は温かいし、お茶会をやっているみたいだから、人の出入りがある。この間みたいに関閉められて、中に入れなくなることはなさそうだ。

東屋の一つが、明るい笑い声に彩られている。

いつもの味気ない石造りのテーブルとベンチには、レースをあしらったカバーがかけられ、柔らかそうなクッションがいくつも置かれている。

テーブルも、持ち込まれたらしいサイドテーブルも、たくさんのかごで華やかに飾り立てられている。

さらさらと衣擦れの音を立てながら、幾人もの少女達が、贅を尽くしたコーディネイトを施して集まっていた。

クリーム色、オレンジ色、緑色、ピンク色、青、薄紫。

色とりどりのスカートをふわりと揺らして、私と同じ歳くらいの、けれど私なんかとは比べ物にならないくらい綺麗なお嬢様たちが笑いさざめいている。

私は用心しながらゆっくり近づいていった。勘がいい人がいたら、気づかれないとも限らない。植木に身を寄せながら進んでいって、誰もこちらに気づく様子がないことに安堵した。

一步一步歩くごとに、香水の香りが強くなってきて、私は少女達の輪の3メートルくらい手前で足を止め、芝生の上に音も立てずに腰を下ろした。

柔らかい日の光を反射して、少女達の服も、髪も、宝石も、みんなきらきら光っている。

金の刺繍、銀の刺繍、ビーズ、レース、スパンコール。

赤く光る大粒の石をあしらった指輪。

青く光る四角いカットの石をあしらったネックレス。

緑の涙の形をした石が揺れるピアス。

髪留めも、ブレスレットも、どれもこれもまぶしい。お姫様は、女の子の一生の憧れだ。

綺麗に化粧をして、美しい宝石で身を飾り、髪的一本から爪の先まで隙無く手入れされた女の子達は、まるで絵本の世界を見ているみたいだ。

美しい花模様をあしらった小さなカップを口に運び、羽飾りのついた扇子を優雅に揺らす。

複雑な意匠の飴細工を眺めて、クリームでかわいらしく飾られたケーキを、銀のフォークですくう。

自分の身を飾る宝石や装飾品の品定めをしながら、小さく繊細なお菓子を上品に摘む。

素敵……。昔読んだ絵本に出てきた、王女様のお茶会みたい。

ほつつとため息をつきながら、私はしばしそんなおとぎの世界を堪能した。

なんだかすごい世界だったなあ。余りにも私と違いすぎて、うらやましいと思うよりも、なんだかお芝居を見ているみたいだった。ちよつと得した気分だ。

お茶会はまだまだ続くみたいだったけれど、私はその前に中庭を出た。せっかく気兼ねせずに歩けるんだから、もう少し歩き回りたいし、いろんなものを見てみたい。

部屋には帰らずに、今度は別の階段から二階に上がると、石造りの廊下がまっすぐ続いている場所に出た。両壁にははめ込み窓が並び、ドアは無い。ライトの部屋の前よりも少し狭い廊下。

どうも棟と棟を結ぶ渡り回廊に出たみたい。人影はなくて、今まで知らずにまわっていた緊張が和らぐのを、そこで初めて自覚した。さすがに、誰が気づくかわからないから、つい必要以上に用心していたんだろう。

一定の間隔で続くはめ込み窓を数えながらのんびり歩いていると、前方のテラス窓が開いて、誰かが入ってきた。

背の高い、がっしりした体格の男の人。夜の空のように濃い紺色の髪、ライトと同じ、紺の詰襟に白いマントをまとっていた。見える背中だけでもすごい威圧感を感じる。誰だろう。

なんとなく、近づいたら気づかれそうな気がして、一度足を止めてその後ろ姿を見送ってから、またとことこと歩き出す。

空いたままのテラス窓から、何気なくひよいと外を覗くと、そこは白い石造りで、流れるような優雅なデザインの手すりに、同じく石造りのベンチが作りつけられた、広いバルコニーだった。

そこにひっそりと腰掛ける侍女服の女の人は、見覚えがある。

この間中庭に閉じ込められた時に助けてくれた、ライトのお姉さんのエルサーナさんだ。

こんなところで何してるんだろう。さっき男の人が出て行ったけれど、彼女の様子を見ると、楽しくお話ししていたようには見えない。だって、この間と違い、なんだか元気が無いように見えるもの。

ふっとため息をつき、憂いを帯びた表情で、手首に嵌まっている銀の輪に視線を落とし、指先でゆっくり撫でている。どうしたんだろう。

思い切って姿隠しの術を解除して足元に近づくと、一瞬目を見張ったエルサーナさんがにこりと笑った。

「こんにちわ。アーシエ、でよかったわよね？　こんなところまでお散歩？」

『はい！　こんにちわ！』
にやーんと応える。

少し下がり気味の目は、笑うとますますライトに似ていた。そのまま足元に座り、エルサーナさんを見上げる。

彼女はどこを見るでもなく、視線をバルコニーの外に泳がせている。階下には中庭が見えた。美しい花の園が一望できる。色とりどりに咲く女の子達も良く見えているけれど、エルサーナさんの視界には、そんなものは全然映っていないような気がした。

「人の心って、ままならないものよね…」

ぽつりと呟く。首を傾げると、エルサーナさんは私に視線を戻して、さびしそうに笑った。

「恋って、何かしらね」

それは、さっきここから出て行つた騎士様のことかな。

エルサーナさんは、あの人と恋人なのかな。違うのかな。

私は、恋なんてしたことがないから、わからない。

でも、エルサーナさんは、私とは違う気がする。恋を、ちゃんと知ってる気がする。それでも、わからないのかな。どうしてだろう。

「ごめんなさいね。こんなこと話しても、困っちゃうよね」

自嘲するように笑い、エルサーナさんは私の前にしゃがみこんだ。

「なんだか、ライトがあなたを傍に置く気持ちがあるような気がするわ。どうしてか、あなたには何でも話してしまいたくなる。あなたが、こうして黙ってそばにいてくれるからかしらね」

そう言つて私を撫でようと伸ばした手をエルサーナさんは空中で止めた。

私が無意識に体を引いたのを見たからだろう。逃げたいわけじゃないのに、どうしても体が逃げてしまう。

罪悪感でうつむく私に、今度はその手を、手のひらを上に返して、遠慮がちにそつと差し出した。

「怖がらせてごめんなさい。私からは手を出さないわ。大丈夫」

その手とエルサーナさんの顔を交互に見る。目の前の手は、動かな

い。柔らかな微笑みも、揺らがない。私を待っていてくれる。

ライトも言っていたじゃない、人の手に慣れたのなら、エルサーナさんから慣れていけばいいって。

私も、このままじゃだめだってわかってる。

何の含みも無く差し伸べられる手まで、怖いからと拒絶するのは嫌だ。

思い切って、私はエルサーナさんの手に頭を寄せた。

緊張していた気持ちは、柔らかな手のひらにすり、と頭を擦り付けると同時に霧散して行った。

エルサーナさんのたおやかな白い指が、そっと私を撫でている。怖がらせないように気をつけてくれているのがわかって、私はおとなしくなすがままにされていた。

「だめだってわかっていても、どうしてもときどきしてしまうの。

無意識に、あの人の姿を探してしまうの。会えば切なくなるし、目が合えば恥ずかしくて、話しかけられると嬉しいの。こんな歳なのに、…恋してる気持ちが消えないの。おかしいわよね」

私を撫でながら、ひっそりと笑うエルサーナさんは、とても綺麗だった。恋する女の人って、こんなにきれいなのかとびっくりするくらい。

私はきゅ、と唇をかみ締めた。

エルサーナさんの言葉には、…思い当たることが多すぎる。

まだだめだ、深く考えちゃだめ。

「あんまり仲良くしていると、ライトに怒られてしまうわね。聞いてくれてありがとう。またお話ししましょうね」

そう言って立ち上がり、エルサーナさんはテラス窓から私を中に入れてくれて、にこりと笑って去って行った。

彼女を見送りながら、私は胸の中に広がっていくもやもやに途方にくれていた。

私を撫でてくれた繊細な指の動きは、ライトリークのそれよりも優しく丁寧で、優雅だった。

けれど、どうしても物足りない。ライトの手じゃないと満足できない自分がいる。

慣れてきたのとは違う。

エルサーナさんの手つきが悪かったわけでもない。

…じゃあどうして？

本当は、知ってる。あの人の手と、比べていること。

でも、それがどうしてなのかを考えるのはやめた。

答えを見つけるのは、まだ早い気がした。

『だめだってわかっていても、どうしてもときどきしてしまうの。』

無意識に、あの人の姿を探してしまうの。会えば切なくなるし、目が合えば恥ずかしくて、話しかけられると嬉しいの。こんな歳なのに、…恋してる気持ちが消えないの。おかしいわよね』

エルサーナさんが、伏目がちに呟いた言葉を反芻する。

この言葉を認めてしまったら、そうなってしまふ理由を見つけてしまったら、私はもう戻れなくなってしまう。何からなんてわからない。でも、そんな気がする。

それが怖いから…だから、私はもやもやを心の奥に閉じ込めて、ふたをした。

魔法を使ってみよう！・後（後書き）

ライトへの気持ちが大きくなってきているようです。

行き詰まる

姿隠しの術が上手に出来るようになり、お散歩が今までと比べ物にならないほど快適になった。

誰も私に注目しない。

誰も私を追いかけてたりしない。

最初は午前中くらいまでしか保てなかった術も、毎日使っているうちにそれほど意識せずに長時間かけていられるようになった。侍女さん達も騎士様も、みんな私に気づかず通り過ぎていって、邪魔者のいないお散歩が楽しくて楽しくてしょうがない。

でも、どうしてもライトには通用しないのがすごく悔しい。悔しいから、術も念入りにかけて、ベッドの下や脱衣所のかごの中とか、普通なら見つけれないようなところに隠れているつもりなのに。それなのに、ライトはいつも迷いもせずに私を見つける。

そして私を抱き上げて、

「見つけた。俺のアーシェ」

と、嬉しそうに笑ってキスをする。

今日なんか、キスした後私の喉元を煽るように愛撫しながら、

「いつもかくれんぼしてるのは、俺にキスされたいから？」

なんて、低い声でささやかれて耳を舐められて、腰が砕けそうになった。

ちっ、違うから！ キスが欲しくてかくれんぼしてるわけじゃないんだからね！？

少しずつ行動範囲も広がって、いろんな建物にも行くようになった。そうしてみると、ライトが言っていたとおり、王城はとても広い。危うく迷子になりかけたこともある。

上等な服を着て気難しい顔をしたえらそうな人がいっぱいいる所に迷い込んで、なんとかライトにはれる前にお部屋に帰ることが出来てほっとしたのは、つい昨日のことだ。

最近王城の厨房付近につながる裏口から出た裏庭が、私のお気に入り。

そこは、中庭ほど綺麗に整えられてはいない。刈り込まれた芝生と一定の間隔を置いて木が植えられているくらいだ。

木でできた頑丈そうなベンチがあつて、休憩時間になると、厨房にお勤めしている皆さんが、お弁当を広げたりお茶したりのんびり過ごす場所になつていくみたいだ。

日当たりはそれほどよくはないけれど、さわさわと渡る風が気持ちいい。中庭にはない、小さな野草がたくさん生えていて、なんだか私には居心地がいい。

お昼寝したり、探検したり、あちこち見て回ったり、遊んだり。

ライトと一緒にご飯を食べて、お風呂に入れてもらつて、一緒に寝る。

こうして、猫として一日が過ぎていくのには、まだなかなか慣れることが出来ない。すべてを人の手にゆだねて、自分は遊んでいるだけっていうのが、とても申し訳なく思うのだ。

何も出来ない自分が齒がゆい。どうせ今はペットなのだし、それで問題ないのだとしても、今までこうしてすべてに甘えて生きる環境になかったから、どうしても気後れしてしまう。

孤児院のみんなはどうしてるかな。

私が食べているおいしいご飯、みんなにも分けてあげたいな。

お洗濯やお掃除は、ちゃんと出来ているかしら。

お勉強、私の次に年かさだったウィリアムが見てくれるといいんだけれど。

みんなでシスターのお手伝いをしてくれてるといいな。

院長先生の言いつけをきちんと守ってくれてればいいな。

泣いてないかな。

寂しくないかな。

笑ってくれてるかな。

思えば思うほど、心配は尽きない。

考えれば考えるほど、無力な自分が情けない。

今までみんなの世話をしてくれて、それが当たり前だったから、逆にされることに慣れていないのもあると思う。それも、気後れの原因になっているのは確かだ。

ライトは、私がいつも何をしてても笑って許してくれるけど、許されるだけじゃなく、私もライトの助けになりたかった。

猫の身で出来ることなんて、今の私には何も思いつかない。けれど、それでもライトの為に何かをしたい。

もしかしたら、人に戻れる日も来るかもしれない。もし、そうになったら。そうなれたら。

きつといつか、恩返しをしよう。

いろんなことをつらつらと考えながら裏庭を散策していると、どこからか、か細い鳴き声が聞こえた気がして足を止めた。
きよるきよると見回しても、それらしい姿は見えない。

気のせいかもしれないと思って行きかけた耳に、また『にー』という小さな鳴き声が、確かに聞こえた。

どこだろう？ そう遠くではないと思う。注意深く辺りを見回しながら歩いていく。

「にー」

さっきより響きが少し大きくなった。すぐ近くにいる。どこ？ ……
上？

見上げると、子猫が木の枝の先にうずくまっているのを見つけた。もしかして、登ったのはいいけれど、下りられなくなったのかも！周りに助けてくれそうな人はいない。あの子を助けられるのは、私しかない！

孤児院にいた時には、庭に大きな木があつて、小さい頃は木登りだつてしたことがある。

もうずっと前の話だし、この体で木登りなんてしたことなんかないけれど、今の私は猫だ。きつと上手に登れるはず！

ちょっと不安だつたけれど、子猫を助けなくちゃという一心で、私は太い幹に飛びついた。

慎重に硬い樹皮に爪を立てていく。下は見ない。見られない。見たらきつと上れなくなる。

必死に、一步一步ゆつくりと登っていき、ようやく子猫のいる枝の付け根にたどり着いた。

枝分かれしたそこに腰掛けてほうつと安堵のため息をつく。よかった、ここまでではなんとかなった。

枝の先に視線を走らせると、子猫が感情の見えない瞳でじつとこちらを見ていた。

『大丈夫、怖くないよ。一緒に降りよう？』

話しかけた途端、ふーっと威嚇された。きつと、怖くて気が立っているに違いない。

枝の先は、随分細くなっている。猫2匹程度乗ったぐらいで折れるとは思えないけど…私の方が怖い。でも、何とか気力を振り絞る。あの子を助けなきゃ。

『ね、そこにいたらあぶないよ。こっちにおいで』

「みぎやーっ！」

…。

猫の姿なのに、猫語が通じないー！？

ななな、なんでえ！？ 普通こういう時って、猫同士で意思疎通できて当たり前なんじゃないの！？

なんって中途半端な変身させてくれてんだ、あのオバサン！

どーせなら猫語も話せるようにしといてくれりゃあいいのに！！
後から思えば見当違いな八つ当たりをしつつ、必死に呼びかける。

『一緒に降りようよ、落ちないから、大丈夫だから、こっちにおいで！』

威嚇にもめげず、なんとか子猫をこちらに呼び寄せようと何度か呼びかけると、いきなり子猫がふんとそっぽを向いた。そして、ぴよんと、いともあっさり枝の先から飛び降りて音も無くどこかに走り去ってしまった。

…。

えええーっ！ 下りられなかったんじゃないのー！？

ただ高いところに上ってご機嫌で鳴いてただけだったんだな…。それを闖入者の私が邪魔をしたってわけだ。

私は枝の上でがっくりと肩を落とす。

そのままつい、下を見て身震いした。…高い。

高さは2メートルくらいなものだろう。でも、体が小さくなったせいで、実際よりも高く見える。体感的には、孤児院の2階から下を見てる感じた。

身体能力から言えば、さっきの猫を見てたとおり、飛び降りるのは全然大丈夫だろう。でも、感覚が人間のままの私には、とても飛び降りる勇気が出ない。

揺り返し

途方にくれたまま、私は枝の上でうずくまった。

さつきは必死で、下も見ないで登ってきたけれど、それとは逆に幹を降りることができなくなっちゃった。だって、感覚的には2階の窓から外壁伝って下まで降りるようなもの。おまけに下を見てしまったから、その高さにすっかりすくんでしまった。頭ではやればできるとわかってはいるけど、とても無理。

今はもう午後の仕込みの時間で、厨房の人たちも誰もいない。

侍女さん達は、さすがにこんなところまでは来ないし。

高い枝の上から周りを見渡してみても、人影一つない。

八方塞がりか…。

私は小さくため息をついた。

これから、私は自分で生きていくことは出来ないのかもしれない。

ライトのお世話になって、食べるものも、住む所も、生活のすべてを与えてもらって生きていくしかないのかな。

子猫が困っている、助けなくちゃって必死になったのも、きっと今の状況に反発したかっただけなんだ。私にも出来ることがあるはず、誰かを、何かを助けたいってむきになっただけ。

でも実際の私は、こんなに小さくて、何の力もない。

自分より小さな猫も助けられない。どころか、自分の身すらままならない。

もう人じゃない。

でも、猫としても生きられない。

どこまでも半端な私。

どうしてこうなったんだろうなんて、もう考えつくしたと思ってた。

でも、まだ足りないって、気づいてしまった。
きつとずっと、猫の姿でいる限り、考え続けていくんだろう。

後ろ向きにはなりたくない。

いつでも前を向いて、顔を上げて笑っていたい。

今の境遇に負けたくなんかない。

でも、私の心は、本当はこんなにも弱い。

誰かを助けている、誰かの役に立っている、守ってあげなきゃ、私がやらなきゃ。

今まで、そう思っていたし、そうしてきたつもりだった。孤児院の子達の中心なんだ、みんなのお姉さんなんだ、そのことに矜持を持っているつもりだった。

でも、本当は違う。そうやって、自分を守っていただけ。そうしないと、私の手には何も残らないから。

しなくていいんだよ、もういいんだよ、いらないんだよって言われたら、私は何をすればいいの？

…今こうしているみたいに、途方にくれて立ち尽くすしかない。

今まで目をそらしてきたことに、気づいてしまった。

私には何もないんだってことに気づいてしまった。

薄っぺらな自己満足が、こんなにもろいものだったなんて。

猫になったことで、すべてが壊れてしまうなんて。

空っぽな私。

一体私には、何の価値があるって言うんだろう。

さくさくと、草を踏む音が聞こえる。

ほとほと涙をこぼしていた私が視線を向けると、そこには毅然とした姿で、こちらにやってくるライトの姿。

まっすぐ伸びた背筋、落ち着いた足取り、凜いのような穏やかな顔。ああ、きつと、この人は何があってもぶれたりしない。何が起きても、自分の足場を作り出していく、そんな強さを持った人。

…私とは、違う。

枝の上の私を見つけて、ライトの表情がほっと緩んだ。けれどすぐに目を見開いて駆け寄ってきて、泣いてる私に向かって手を伸ばした。

「アーシエ、どうしたの！？ 怖かったの？」

ふるふる、と首を横に振る。

怖かったけど、今の怖さとは違う。

自分の足元が崩れてなくなってしまったことが、こんなに怖いなんて知らなかった。

「何かされた？ どこか痛いのか？」

ふるふる、と首を横に振る。

痛いけど、痛いのは体じゃない。不安で不安で、押しつぶされそうに心が痛む。

「…おいで、アーシエ」

優しく呼ばれた声も、ふるふると首を振って拒絶する。

そんなに大事にしないで。そんなに心配しないで。私には何も無い。返せるものが何もない。あなたに気にかけてもらえる価値なんかない。

けれど、ライトの声が震えた。

「アーシエ、戻ってきて。君がいないと、夜も眠れない。頼む、傍にいて。愛してるんだ」

絞り出すような声。

ゆがんだ顔。

どうして、どうしてそんなに泣きそうなの？

「部屋の戸棚の中にある酒、見ただろう？ あれで酔わなきゃ、夜も眠れなかった。朝までぐっすり眠れるようになったのは、アーシエが来てくれてからだ」

確かに、見た。高そうなお酒のビンがいっぱい。

ここに来てすぐの頃、毎晩ソファに座ってお酒を飲んでいたのも覚えてる。

「夜になると、いろんなことを思い出す。どうしてもかはわからない。でも怖くて怖くて叫びだしそうになるんだ。目を閉じたら、もう二度と目覚めないような気がして、眠るのが怖かった」

朝が早いって思っていたのは、眠れてなかったただだったんだ。

ライトは強いと思ってた。何も怖いものなんか無いって思ってた。

「アーシエは、温かい。腕の中に抱いてると、夢も見ないで眠れる。安心できる。朝が来て、目覚めることが出来る。自分が生きてるっ

て思える」

私を見る瞳が、たよりなく揺れている。

私に伸ばしている手が、すぐるように震えている。

「アーシエ、俺の気持ちまで否定しないで。君が大事だ。俺が君を縛り付けてるだけなんだ。頼む、下りてきて、俺のところに」

そんな顔させてごめんね。心配させてごめんね。何の役にも立たなくてごめんね。何も持つてなくてごめんね。

でも…、でも、私もライトが大事だよ。

私は泣きじゃくりながら、ライトが伸ばした手に飛びつく。そのまま強く引き寄せられて、しっかりと首にしがみついた。ライトが両手でぎゅっと抱きしめてくれる。

「俺だつて弱い。いつもは平気でも、何もかもから逃げてしまいたくなる時だつてある。俺だつてそうなんだから、アーシエが不安になつてもいいんだよ。泣いたつていいんだ。でも、そういう気持ちになつたとき、俺の傍で泣いて。一人で泣かないで。抱きしめさせて」

大きな手のひらで、ゆっくりと背中を撫でられる。

温かい。優しい。

いいのかな。誰かに頼つてもいいのかな。

…ライトに甘えてもいいのかな。

「一緒に寝て欲しい。朝になったら俺のことを起こして欲しい。ベッドでだらだらしてたら、猫パンチで催促して欲しい。仕事に行く

のを渋ってたら、『行け』ってドアを指差して欲しい。一緒にご飯を食べて欲しい。一緒に散歩して欲しい。にやあって言っただけいい。俺に甘えて欲しい。抱かれて欲しい。アーシエは…俺の世界の中心だ」

静かにつむがれる言葉と、額や頬に何度も落ちる唇。

私がそう思うように、ライトも、さびしかったり苦しかったりつかかったり怖かったりする時もあるんだ。

うん、もしかして、人ってみんなそうなのかもしれない。一方的に与えるんじゃない、私だって、人からたくさんもらってる。

シスターからは親愛を。孤児院のみんなからは信頼を。

ライトからは…愛情を。

支えあわなきゃ生きられない、それが人間なんだ。

何のことはない、私一人がみんなを支えてたんじゃなくて、みんなが私に守られてくれてただけ。お互い様ってだけの話だったんだ。

それがわかったら、うじうじしているのがばかしくなった。

そうだ、一番最初に思ったじゃない、私は私に出来ることをして行くって。それがどういふことか、今ちゃんとわかった気がする。

…でも今は、ライトの腕の中にいさせて。明日からまた、頑張るから。

ライトは、最後まで、私に『価値なんかなくていい』とは言わなかった。

ライトは私にそばにいて欲しいと願うけど、ライトがそう思うほどには、私は自分にそこまでの価値があるとは思っていない。

ライトは私に見返りなんか求めていないだろうけど、私は少しでも

ライトの気持ちに伝えたい。

なら、私はライトに何をすればいい？ どうしたい？

答えは、簡単だ。

まずは、ライトを信じる気持ちから。

揺り返し（後書き）

なんのトラウマも無く生きてても、時折思い出す自分の黒歴史に悶絶することってあるよねw

いやもう、ほんといきなりぽんっと思い出して『うおおあああああ』ってなる。

多かれ少なかれ、誰にでもあるんだからキンスンナってこと。

ライトのこと（前書き）

説明っぽいのでさっさと流してお読みください。設定はざっくりなのでご容赦。

ライトのこと

まあね。珍しく後ろ向きになっちゃって、恥ずかしくもライトの腕の中で号泣しちゃったわけだけど。おかげで、ライトの言葉をナチュラルにスルーしちゃったわけだけど。

後から思えば、世界が猫中心でどんだけよ!?

猫が好きなのはわかるけど、大丈夫かなこの人…。

私が来る前はどいう生活していたんだろう。ちよつと余計な心配をしてしまつ。

しかし、いつも都合よく現れてくれるわよね。どこかで私のこと監視でもしてたりとか?

…怖!!

ありえなくもなさそうなところがすごくイヤ…。

さて、泣いて泣いて泣いたらまたすつきりして、おまけに今までライトとの間を隔てていた薄絹が取り払われたような感じ。

昨日の出来事のせいか、どうにも人恋しくて、恥ずかしかったけれど私はずっとライトの膝の上に抱かれていた。

だって、ライトにくつついていたかったんだもん。ライトは『甘えんぼだね』って笑うけれど、私を離さないでいてくれた。

私の遠慮がなくなったせいかな、ライトが私を愛撫する指先も、いつもより煽り方が半端ない。

あごの下からお腹からお尻から尻尾、肉球にいたるまで、いとおしげな、それでいて甘い熱をはらんだ目で見下ろされながら、絶妙な指使いで撫でられて、白旗を揚げてソファに転がるしかなかった。

無防備に明け渡したお腹に顔を埋めながら、何度も、

「アーシエ、好きだよ、愛してる…」

って、かすれた声で狂おしく呼ぶ。

何度もキスされて、強く抱きしめられる。

どうしてこんな風にするの。私、猫なのに。

本気になっちゃいけないってわかってる。

本気じゃないってわかってる。

でも、そんなにされたら、心が震えるの。

心臓が爆発しそうな。

頭の中がライトでいっぱいになるの。

私が私でなくなりそうで、怖いよ…。

今朝も、いつものように猫パンチで起こしたら、そのまま布団に引きずり込まれた上、仰向けに押さえつけられてキスの雨を食らった。

「アーシエ、かわいい、大好き…」

ささやくライトの声は、朝だからか、それとも別の理由か、ちよつとかすれている。その低い色気だだ漏れな声が耳元で炸裂するんだから、お腹だか腰だかその辺りがうずうずしてしまつて恥ずかしくつて仕方がない。

少しだけ目を細めた顔が、いつもの優しい笑みに艶を添えていて、飲み込まれてしまいそうで直視できない。

ベッドの中でライトの匂いに包まれて、酸素も足りなくてくらくらする。

目を閉じて、何度も柔らかな熱が唇に重なるのを受け入れる。

うつとりするほど甘い声で『好きだよ』ってささやかれて、何度もキスされて、大きな手がお腹をまさぐって…。

『やああっ！ えっちいい！』

きらりと光る鋭い爪は、それはそれは見事な3本線を、ライトの頬に残してくれた。

『寝ぼけんのも大概にしなさいよっ！ 抵抗しないからって調子に乗るんじゃないわよ！ さっさと目え覚まして仕事に行きなさいっ！』

ふーっふーっとな毛を逆立てながら威嚇する私に、さすがのライトもやりすぎた自覚があるのか、しょんぼりと眉を落として、

「ごめんなさい」

とベッドの上で土下座したわ。

でも、今日は簡単に許してなんかやらないんだから。いつもいつもキスとかえっちなことばかりして！ 毎回うやむやに出来ると思ったら大間違いよ！

朝ごはんを食べて、身支度を整えて、それでもずっとそっぽを向く私に苦笑しながら頭を撫でて、そして、大きな手にくいっとなごをとられてキスされた。

「行つて来ます」

…全然反省してないんじゃない…。

私の認識の方が甘かった。

いててと頬を撫でて呟きながら、やに下がった顔で出て行く背中に、私は深いため息をついた。

さて、私は今日もお散歩。せっかく王城にいるのだから、いろんなことを見聞きしなくちゃね。

もしかして人間に戻った時に、何か役に立つことがあるかもしれないし。そうでなくても、孤児院の子達への土産話にもなるし。

それに、やっぱり入ったことのない場所だし、お城っていうだけで

中を見てみたくなるものだし！

はい。正直、自分の好奇心がほぼ100%です。

姿隠しの魔法をかけて、するりと猫ドアから廊下に出た。

いろんなところを歩き回るようになって、行動範囲も大分広がったし、小耳に挟む話で、お城や国に関する話もたくさん聞けるようになった。

お城は、大きく五つの棟に分かれている。

居住区のある棟は北宮って言うんだそうだ。

1階と2階は武官の居住区、3階は文官の居住区なんだって。昔、戦争が激しかった頃、侵入者から国の中枢人物を守る為にそうなたらしい。1、2階で曲者を迎え撃ち、3階に行かせないようにするわけね。その慣習の名残なんだそうだ。

王宮には、文官も武官も、お部屋をもらえるのは偉い人たちだけで、普通の人たちはお城の外にある寮と一緒に生活をしているんだって。お城に部屋をもらえるのは一種のステータスらしく、みんな昇進してお部屋を賜えることにあこがれているらしい。

政治を行うのが中央宮。ここは大臣の部屋、王様の執務室、会議室や議場がある。前に危つく迷子になりかけた時に迷い込んだのがここだった。さすがにここはめったに行かない。面白いものもないし。

次は東宮と言って、王宮での生活全般にかかわる棟。食堂、図書館なんかがある。王様との謁見室や、舞踏会を開く大ホールもここにある。

次が、西宮。ここは騎士団と王軍、魔術師団などの軍関係の機能が集約されている。

最後が、王族の方々が生活する華月宮。王様、王妃様、二人の王子様に、王太子様のお妃様、一人の王女様、それに王太子ご夫妻のお子様3人が現在ここに住んでいるそう。王妃様付きの侍女長補佐であるエルサーナさんも、華月宮で働いている。王城にいる侍女さん達や女性達の居住区も、この一角にあるそう。ほぼ女の園ってわけね。

ここには王妃様が愛してやまない薔薇園がある。

中庭よりは狭いけれど、色とりどりの薔薇が咲き乱れている。

薔薇のアーチ、薔薇をモチーフにした噴水、蔦の絡まった東屋があって、とてもきらびやかだ。

たまに行くと、侍女さん達や貴婦人がたくさん集まってお茶会をしていたりする。

香水がきつくて近寄れないので、そんな時は遠くから見るだけだけど、猫耳には笑いさざめく声が良く聞こえる。

今日も、ひよいと覗いた薔薇園は、お茶会の真っ最中だった。女性が集まると、ドレスや装飾品、化粧の話題が多いけれど、なんと言っても恋の話が圧倒的に多い。

ライトの噂話もよく話題に上る。

ライトは公爵家の次男で、28歳。私と結構離れてたんだな。もっと若いと思ってたよ。

公爵家なんて言ったら、貴族の中でも一番偉い人たちだよ。確かに育ちはよさそうだけど、そこまですごいおうちの人だとは知らなかった。でもいつも騎士姿か、私にでれだったりえっちなことをしたりする姿しか知らないから、なんだか現実味がない。

ライトの上にはエルサーナさんと、跡取りになるお兄さんがいるら

しい。下に妹さんも二人。お兄さんとすぐ下の妹さんが結婚して、子供もいるそうだ。

騎士団の中でたった一人、魔法も使える騎士ということで、魔術師がらみの事件なんかでは重宝されているらしい。そのせいか、悪事を働く魔術師達の間では有名な人で、『魔術師殺し』との二つ名まであるそうだ。物騒な。

だから、魔女を捕まえにきてたんだな。おかげでこうしていられるんだから、偶然に感謝しなくちゃね。

高位の貴族で、跡を継ぐ必要のない気楽な次男、顔良し、金持ち、その上騎士団副団長と言う地位についている彼は、貴族のお嬢さん方にとっては超優良物件らしい。

でも、彼は今まで特定の恋人を作らず、女の人達と浮名を流していて、結婚する様子がない。だから余計に、あわよくば私が！　って思うらしく、誘いをかける女の人々が後を立たないそうだけど、今はどうしてか随分ガードが固くなってしまっ、なかなか接触できないって皆がぼやいている。

物腰が柔らかいながら、眼中にない女の人にはとっても冷たい。付き合っている、興味がなくなればあっさり振るし、振った後はその他大勢の女の人と同じで接触もしてくれなくなる。

ヘタに馴れ馴れしくしようものなら、未練も打ち碎かれるほど冷酷に拒絶されて、それが元でお城を去った侍女さんもいるとか…。

ほんとか嘘かは知らないけど、もし本当だったら最低男だな、ライト。

きやいきやいと噂話に花を咲かせるお姉さん達は、そのギャップがまたいいんだって言うけど…私には理解できないわ。顔が良けりゃいいのかい。

しかし、出るわ出るわ、女の人との噂が。

先々月までは、中央宮担当の子爵家のご令嬢とお付き合いしていたらしい。

その前は東棟担当の伯爵令嬢。

その前は城下に住む伯爵家の未亡人とお付き合いしていたとか。

…くっそー、あれだけアーシェアーシェ言ってる癖して！面白くないっ！

なによ、やっぱり人間の方がいいんじゃない。

でも、遊び人って言う噂の割に、今ライトは私にかかりきりで、誰かとお付き合いしてる様子はないのよね。

お姉さん達が言うように、冷たい態度を取ったりひどい言葉をぶつけられたこともない。むしろべったべたに甘やかされてる記憶しかないんですけど…。

香水の匂いもほとんどさせてないし、お仕事が終わったらまっすぐ帰ってきてるみたいで、毎日夕ご飯と一緒に食べているし、そのあとはお部屋で持ち帰ってきたお仕事をするか、私と遊び倒すか、のんびりするかのどれかし。

夜遅くに誰かに会いに行ってるってわけでもなさそうだ。

どういうことだろう？

あ、もしかして、その人たちに振られたから猫に走ったとか！

…なんかありえそうでヤダ。

ライトのこと（後書き）

ライト君、かわいそうな子認定受けましたw
アーシェちゃん、察してあげて…。

ライト君の年齢判明。思ってたより老けてましたか？

怖い人に会いました・前

王妃様の庭を後にして、私はまたあてもなく歩き出す。
どうしようかな、今度は西棟にでも行ってみようか。

西棟には魔術師団がある。魔術師さんたちがたくさんいるから、姿隠しの魔法をかけても気づかれるかもしれない。ライトは、下手な魔術師くらいなら大丈夫って言うてたけど、王城の魔術師団がそんなへたつぴなわけがない。西棟に行く時には、いつもより慎重に行かなくちゃ。

すれ違う人たちは、皆足早に去っていく。

王軍と騎士団は、王都の警備もやっている。だから、ほかの建物に比べて、少し空気がピリツとしている気がする。
嫌な意味ではなく、心地よい緊張感というか。

さすがに軍関係の建物だけあって、行き交う人の男性比率が圧倒的に高い。

でも、女性兵士も全体の2割くらいはいるらしく、時々詰襟の制服に白のマント、膝までのロングブーツと言いついでたちで颯爽と歩く姿を見かける。かっこいいなあ。

侍女さん達の姿もあまり見ない。雑用などはすべて下っ端の騎士の皆さんがやってしまうらしいし、侍女さんたちの一番のお仕事であるお茶出しもそんなに必要ないから、西棟ではあまり出番がないらしい。

それはちょっとかわいそうかなあ、とは思っただけけど、お仕事は探せばたくさんありそうな気がするんだけどな。西棟はほかの棟に比べてかなり忙しそうだから、きつとのんびり構えている侍女さんたちを待ってられないだけだと思うんだよね。

それに、軍は庶民出の人も多いから、貴族の侍女さん達にはあまり魅力のない場所でもあるらしい。西棟担当の侍女さんたちが『ロクな家の人間がいない』って顔を見合わせてため息をついているのを見たことがある。うーん、家とか関係なしに、いい人はどこにもいると思うんだけどなあ。

私とは生きてきた世界が違うって言うのは知ってるつもりなんだけど、なんとなく納得がいかないような、もやっとした気分になる。

それはさておき。

前不思議に思った、騎士様たちの制服の色は、所属している組織で違うってことを、西棟に来るようになって知った。

ライトが着ている紺色は、騎士団の色。

前に廊下で見た緑色は、王軍の色。

そして、ここで初めて見たグレーの詰襟は、魔術師団なんだって。魔術師団って言うくらいだから、ローブに杖っていうイメージを持っていた私にはちょっとがっかりだったけれど。

踏まれないように壁伝いに歩きながら、ふんふんと鼻歌交じりに歩く。騎士様たちは、なにやら書類をめくりながらぶつぶつ呟いたり、2〜3人で歩きながら難しい顔をして話していたり、物陰で女性騎士に平手を食らっていたりと色々だ。『この浮気者！』とか…。自業自得だ。

国境の峠に盗賊団が出たとか、城下で組織的な人攫いが横行しているとか、女性が連続で乱暴されるなんて物騒な話題も出るけれど、魔法談義とか、隊長自慢とか、腕自慢とか、彼女自慢とか、他の建物に比べて話のネタが気安くて、聞いているほうも面白い。ざっくばらんな雰囲気、ちよっと下町に似ていて居心地がいいんだ。

そして、長く続く廊下の中ほどのテラス窓からバルコニーに出る。造りは、2階の渡り回廊のバルコニーと一緒に、石造りの手すりに

作り付けの石のベンチがある。

ここはお気に入りの場所だ。大抵開け放してあって、中庭が良く見える。噴水が近い。石のベンチの上で、のんびりと花が咲き乱れる中庭を眺めるのが大好き。

風が気持ちいい。花の香りに乗って、楽しい笑い声が流れてくる。中庭でも、どこかのご令嬢がお茶会をしてる最中らしい。

東屋の一つに、着飾った女性が数人と侍女さん達の姿が見える。

華月宮の薔薇園で開かれるものよりは砕けた雰囲気だけれど、中庭でもちよくちよくお茶会がひらかれている。

こちらは割と若いお嬢さんたちが集まるみたいだけれど、やっぱり気軽には近寄れないなあ。

華やかな世界を、こうして遠くから『きれいだなあ』って眺めているのが一番楽しいな。

手すりに前足を掛け、ふわふわと動く女の子達をうつとりと眺めていたら、廊下の向こうからこつこつと響いてきた靴音が、テラス窓の前で足を止めた。

そのまま立ち去る様子のないそれに不思議に思っ て振り返ると、じつと男の人に見つめられている。：『見つめられてる？』

「魔法を使っているな。なんだ、お前は」

低くドスの利いた、警戒感ありありな声がお腹に響く。

やつ、ヤバイ！ ばれてる！？

驚いてぶわつと毛が逆立った瞬間、ぱちんと魔力がはじけて術が解けてしまった。

まっ、まずいますまずいます！

男の人は、野生的な相貌で、ちょっと強面だけれど精悍で整った顔立ちだ。金の短髪を逆立てていて、背はライトよりも高い。厚みのある体と、がっしりした広い肩幅が威圧感たっぷりだ。

着ている服は黒い詰襟に金の縁取り、立てた襟と袖口に複雑な意匠の金の刺繍が施され、金モール5本に立派な肩章、襟元に大きな徽章、左胸にはメダルやら何やらがたくさん。それらが余計に迫力を出していて、うかつに動けない雰囲気だ。

その人の深い青の瞳が、射るように鋭く私を見つめている。

だ、だ、誰ー！？

とっ、とにかく逃げよう！ この人なんか怖いー！

決断し、床を蹴った瞬間。

「ああ、ライトリークのところの猫か」

言いながら、足元をすり抜けざまにその人のでかい手にひょいと掬い上げられてしまった。

なんて早業！ 逃げる間もない。

やだ、はーなーしーてー！

「何もしない。そう暴れるな」

腕の中から逃れようと必死にもがいていると、さっきまで私をにらみ据えていた目元を和らげて、しっかりと私を腕に抱えながら、吐息混じりにささやかれた。耳に吐息が触れて、首の後ろにざわりと鳥肌が立つ。

耳元に落とされる声は、これまた低くていい声だ。声の響きは案外優しげで、とりあえず何かされるといふことはなさそうだ。

捕まえられててどうしようもないのもあるけど、体の緊張は解かないまま、とりあえずもかくのはやめてみた。

「随分かわいがられているようだな。毛並みがとてもいい。上等なベルベットのようだ」

ゆつくりと頭を撫でられる。そりゃあ、2日にいっぺんはシャンプーされてるし、毎日ライトが丁寧にブラッシングしてくれますからね！

どこの誰かもわからない人に、頭を撫でる手を許したくはない。せめてもの抵抗に、首を捻って撫でる手をかわそうとしてみたけれど、手が大きすぎて逃げ切れなかった。くっそー！

大きなごつい手は、撫で方は優しいけれど、しつくりこない。落ちて着かない。あごの下をくすぐられても、ライトにされているように気持ちよくなれない。

「あのライトリークが、女じゃなく猫に走るとはなあ。確かになかなか見目のいい猫だが、あのタラシが夢中になるほどとは思えんな」

撫でる手を止めずに、笑い混じりに言われて無然とする。

うるさいな、庶民で悪かったわね！ 文句があるならライトに言いなさいよ！

シャーッと威嚇の声を出すと、くつくつと笑われる。

「気が強い猫だな。そういうのを手懐けるのは、嫌いじゃない」

どこか艶めいた声でそう言って、体を撫でる手が一段と優しくなる。手のひら全体をぴたりと体に沿わせて、頭から尻尾まで、ゆっくりと撫で下ろされる。

やだやだやだ、そんな風に触らないで！

ライト以外が触らないで…！

怖い人に会いました・前（後書き）

アーシェちゃんぴーんち！？

怖い人に会いました・後

私を拘束する手に必死に抵抗してるつもりなのに、やんわりと、でもしつかりと抱かれている腕から逃げ出せない。

「嫌がることはないだろう？　少し撫でるだけだ、そう簡単に逃がしはしない」

魅力的な笑みを浮かべながら脅すようにささやいて、まるで愛撫するように私を撫でる手は止まらない。

だから嫌だつてば、離してよっ！

知らない男に体撫でまわされて喜ぶ女の子なんかいるわけないでしょー！？

涙目で暴れていたら、突然ひょいと横合いからさらわれた。

「うちの子に何してるんです、殿下。返してくださいよ」

涼やかな声。大きいけれどどこか繊細な手。抱きこまれた腕の温かさが、こんなにも嬉しい。

『っ、ライトおっ！』

慣れた声と匂いに、顔を見もせずにはふみやあんと情けない声を上げてすがりつくと、たくましい手がしつかりと抱きしめてくれた。安心して、思わず胸元に顔を埋める。

うつつ、よかったあ！　怖かったよう！

「ああ、振られたな。残念だ」

ライトの腕の中、小さくなってぶるぶると震える私に、男の人はぜんっぜん残念じゃなさそうな顔で飄々と言い放つ。

ライトは薄い笑みを浮かべた顔で、すっと目を細めた。な、なんか冷気出てません！？

「当たり前でしょうが。男慣れしてないんです、不用意に抱かないでください。しかも、初対面の女の子をあんないやらしい手つきで撫で回すなんて、非常識です。俺の大事な子をこんなに怯えさせていくら殿下でも許しませんよ」

「いやいやいや、ちょっと待て！ いやらしいのはアンタの発言の方だ！

その言い回しはなんだかものすごく不健全に聞こえるのよ！

「まあそう怒るな。噂の猫を見つけたら、かまいたくもなるだろう。フェリシアも見たいといってたんでな、人懐こい猫ならちよつと華月宮に連れてつてもいいかと思っただが、その様子じゃ無理そうだな」

ライトの制服にしがみつくと、私をいとおしそうに抱きしめているライトを見て、その人はさも面白いものを見たというような目で見てくる。

そのうえ、撫でるつもりか、ちよいちよいと手が伸びてくるのを、ライトが冷たい笑みを浮かべながら肩で跳ね返す。

危害を加えないと解っているその指先は、でも、私には傍若無人としか思えない。その指から私を守ってくれてる、それだけで、心の奥にじんわりと熱が生まれる。

なんだか良くわからないけど、知らないところに連れて行かれるなんてやだ！ ライトと離されるなんて絶対嫌！

いつそう爪を立ててしがみつくと私に、ライトは冷気を和らげて、耳元に『大丈夫だよ』ってささやく。

耳に触れた息と、低い声に、さつき男の人にされたのとは別の意味で、ぶわつと毛が逆立った。顔、熱いよう…。

「…妃殿下がどうしてもとおっしゃるなら仕方はないですが、この通り嫌がってますから、この子単独では絶対だめです。俺がついていてもいいならいいですよ」

にこやかに言い返すライトの顔をまじまじと見て、男の人は軽く額を抑えてため息を付いた。

「やめておこう。お前が奥に入ったら、侍女たちが全員孕みかねん」

嫌に本気交じりの一言は、ライトのお城での評価そのもので、私もため息をつきたくなる。

ライト、なによその『心外です』『そんなことしたこともありません』『女性には恥ずかしくて近づけません』って風の胡散臭い顔は！

「人を何だと思ってるんですか…。俺はもうアーシェ一筋ですよ。他には目が行きませんのでご安心を」

「どうだか。その顔で何人の女食ってきたかなんてとづくに知ってるってのに、今更だろうが。もしもその猫まで孕ませられたら褒めてやる」

「今まで誰も孕ませたことなんかありませんよ、人間きの悪い。まあ、でも…この子に限っては、充分お褒めいただけますよ？」

「おまえ、本気に聞こえるぞ。さすがの俺もそれは引く」

「もちろん、本気ですから。…ね、アーシェ？」

「…お前も変わったな。けど、まあ、そういうお前も嫌いじゃない」

ちよっと待てお前ら、人をダシにしてなんてこと話してやがる！

食うとか孕むとか、年頃の女の子の前で平然と口にするなっ！

つか、らららライトッ！

その今にもとって食いそうな顔やめてええ！

濃いブラウンの瞳の奥に揺れる焰が、私の心をじりりと焼く。

嘘でも見せ掛けでもない、本気のそれに一瞬息を飲むと、ライトがぱちりと一つ瞬きをしてずっと視線を上げた。

「もういいでしょう。ほら、呼んでますよ、殿下」

色気駄々漏らしの顔を瞬時に消し去り、ライトがさわやかに笑う。廊下の向こうからは、『殿下ー！ ラズウェル殿下ーっ！』という声が近づいてきていた。

私もいきなり訪れた貞操の危機からあっさりと開放されて、ぐったりと脱力する。

「ふん、仕方がない。ではまたな」

にっと笑ってそういうと、男の人は廊下の向こうの声が追いついてくる前に、マントのすそを優雅に捌いて、足音高く消えて行った。

なんだったんだ、あの人。

ずいぶんとライトと気安く話していたし、常に誰かに命令をしているイメージのライトが、終始敬語を崩さなかった。

それに、黒い詰襟なんて、ここではほかに見たこともないし、ライトに比べてみても制服の装飾がずいぶん派手だった。一体誰なんだろう。

あれ、そういえば、ライトはずっと敬称で、『殿下』って…？

ふう、とライトがため息をつき、はっと我に返ると、濃いブラウンの瞳が珍しく私をにらむ。え、わ、私何かしましたか！？

「何簡単に他の男に抱かれてんの」

…え、えーと。

その言葉のニュアンスが微妙に怪しい気がするのは気のせいデスヨネ？

「しかも撫でまわされて悶えてたでしょ？　アーシエは随分浮気性なんだね？」

ちよつと待てーっ！

言いがかりもいい加減にしろっ！　誰が悶えてたって！？　あんなに嫌がってたのが目に入らなかったの！？　浮気なんてっ、断じてしていませんっ！

っ！　か浮気だなんだが成立するような間柄になった覚えがありません！

「君の男が誰なのか、ちゃんと教え込む必要があるみたいだね？」

てっ、貞操の危機絶賛続行中でしたー！

なんか笑顔が黒いよ！？　つか誰が誰の男なの！？　いつの間にそんなことになったの！？

だいたい、いつもいつもタイミングよすぎなのよっ！　なんでたまに抱っこされてるところに来ちゃうかな！？　ちよつと捕まえられたぐらいでなんなのー！？

ライトは私を逃げ出せないように抱いたまま、かつかつと早足で歩いていく。通りかかる屈強な男達が、あわてて道を開けていくその迫力が恐ろしくて、固まっただままとでも顔を見られない。

ある一つのドアの前で足を止めて、ノックもせずにバンツとドアを開ける。

「ああ、団長、うちの猫にしつけが必要になりましたので、30分ほど抜けます。あとよろしく」

につこりとドアの中に向かって言い放ち、返事も聞かずにバンツ！

と音を立ててドアを叩きつけて、ライトはまた歩き出した。

あ、あの、今の部屋、ドアに『団長室』ってプレートがありましたけどそんなことしていいんですか…？

ライトの指が、煽るようにあごの下をくすぐる。思わず反らした喉元にいとおしそうにキスされて、それから耳に唇を押し付けられた。「さあ、じっくり教えてあげるからね…?」

唇の熱さと、耳に流し込まれた声に、腰骨が砕けたような気がした。につこりと微笑まれて、思わず気が遠くなる。私、どうなるの…?

「も、もう、やめて…」

くたりとベッドに四肢を投げ出して、私は息を弾ませていた。涙で潤む視界に、のしかかるライトがいつぱいになる。

「ダメだよ。まだやめてあげない。アーシエ、これからは、俺の許可なくほかの男に抱かれちゃダメ。触られてもダメ。わかった?」

「わかった、わかったから、許して…」

必死にうなずく私に、ライトは目を細めて笑う。仰向けに押さえつけられて、いつも朝起きた時にされる、ぐつと重ねられるキス。重なったまま唇をぺろりと舐められて、「んあ」と声を上げると、あごの下をくすぐられて。

「ほんとにわかってるのかなあ? 無防備なのは俺の前だけにしろって事だよ? こんな風に、悶えちゃダメ」

言うなり、10本の指がまた襲い掛かってきた。

「いや、お願い、嫌あつ…!」

逃れようと必死に身を振る。

「くすぐりたい、やめてええっ! あはははははっ…くっ、苦し…」

ダメー！ 笑いすぎて息ができないっ！

ところかまわずお腹をくすぐりまわされて、私は涙をにじませ、息も絶え絶えで暴れる。

これは、悶えてるんじゃないかって、『もがいてる』って言うんです
ー！！

「わかった？ もし今度言いつけを破ったら、それこそ孕ませるぐらいお仕置きするからね。忘れちゃダメだよ？」

呼吸困難で失神寸前の私に、ライトはさわやかに笑って宣告した。

…わかりました。まあ、男の人に、近づいたり、しま、せ、ん…。

怖い人に会いました・後（後書き）

嫉妬に燃えるライト君の巻。
お仕置きされちゃったw

お茶会初体験！・前（前書き）

今回も設定ざっくりですのでご容赦。

お茶会初体験！・前

先日私がお仕置きされる原因になった男の人は、ラズウェル様とい
って、ここサンクエディア王国の王太子殿下なのだそうだ。

今年で30歳、フェリシア様という奥様と、お子様がもう3人もい
らっしゃる。

なるほど、言われてみれば、気品がありつつもどこか恐れ入ってし
まいそうになる雰囲気は、確かに王太子殿下という肩書きにふさわ
しい。

けれど、個人的には王子様って、もったときららしいのを想像して
ただけだなあ。

金髪碧眼で、にこつと笑うと白い歯がきらりと光る。花がよく似合
って、『姫、お手をどうぞ』なんて女性にもすごく優しく顔も
綺麗なの！

…お話の読みすぎなのはわかってるわよっ！

ラズウェル様は、金髪碧眼は合っているけれど、強面で、優しくな
くて、笑えばにやりと不敵に唇をゆがめるのがものすごく怖い！
貫禄や迫力がありすぎて、私の王子様像とは真逆だった。うーん、
残念。

王子顔というのなら、ラズウェル様よりもライトの方がよっぽどし
つくり来るくらいだ。行動が王子かどうかはともかく、顔だけなら、
ね！

でも、貫禄や迫力があるのも当然だった。

ラズウェル殿下は、王軍統括総司令官なのだそうだ。

普段は王軍軍団長という地位にいて、王城の守備や国境警備を担当
しているのだけれど、有事の際には、騎士団や魔術師団すらも傘下

に収めて全軍の指揮を執る、とっても偉い人なんだって。

確かに、西棟にいるようなごくくって大きくて怖い男の人たちを束ねるには、あのぐらい迫力がないとダメそうだな。優しくて色白で剣を握ったこともなさそうな花しよった王子様じゃ、戦争になったら真っ先に逃げ出しちゃいそうだ。

そんな人とあんなに気安く話して大丈夫なんだろうかと思っていたけど、実はライトは王家と親戚に当たると言うんだからびっくりだ。

ライトのお父さんは公爵様で、陛下とはご学友なんだそう。で、先の王妹殿下、つまり陛下の妹さんが、ライトのお父さんと結婚したと言うわけ。

公爵様はこの国の宰相様でもあり、ライトのお母さんは昔から王城に遊びに来ていたので、王子様たちとも仲がいいんだって。

つまり、両陛下はおじさんおばさん。王子様王女様はいとこ。

…なんだか雲の上過ぎて気が遠くなりそうな話だわ…。

私の保護命令が出た時も、何で王様とそんな気軽な話が出るのか不思議だったけれど、そういうわけがあったんだ。まあ、姿隠しの魔法を使えるようになった今となつては、保護命令自体あんまり意味がなくなっちゃってるけどね。

王家と姻戚関係にある、つまり王家の血を引くライトは、当然ながら王位継承権を持っていた。もちろん、直系ではないので結構な下位だそうだけれど、事情があつてすでに放棄しているんだって。

実家である公爵家の方も、お兄さんが跡継ぎで決まっているし、お兄さんに子供もいるし、安泰だらうってことで、こちらも相続権を放棄している。

王妃様の薔薇園で、王妃様手ずから入れてくださったお茶を前に私を撫でながら、ライトは取りとめもなくそんな話をしてくれた。だから、自分は何の身分もない、ただの騎士団副団長のライトリーク・ウォーロックなんだよって、ライトは笑うけれど。そうなるまでに、何があっただろうって、ちよつと気になる。

王位継承権も、相続権も、放棄するほどの何があったの？
捨ててしまうことに、迷いはなかったの？
でも…それでも抜け出せないくらい、苦しいの？

見上げるライトは、そんな影など微塵も感じさせない笑顔で、そつと私の耳元を指先でくすぐる。
本当は、一体どれほどの眠れない夜を過ごしていたんだろう。少し前まで、痛みをこらえるようにお酒を飲んでいた彼を知っているから。

今またその笑顔の裏で、また何か痛みを堪えているんじゃないかって、心配になる。

「ごめんね、アーシエ。こんな話、面白くなかった？」

『そんなことないよ』

にゃあ、と鳴いて、すり、とライトのお腹に頭を寄せると、彼が幸せそうに笑った。

…これで、苦しいことを少しでも、忘れてくれるなら。

さて、そんな私の眼前にそろっているのは、王妃様であるシェルミラ様、第一王女のリリアナ様、ラズウェル様の奥様で王太子妃のフエリシア様、それにライトのお姉さんのエルサーナさんだ。
いやいやいや、この顔ぶれ、庶民にはハードル高すぎます…！！

先日ラズウェル様に捕まったときに、フエリシア様に会わせたくて

華月宮に連れて行きたいと言われていたのだけれど、私は知らないばかりのところに魔法も使わず放り込まれるのは怖い。だからライトは許可しない。

もしもライトと一緒にいてくるとなると、今度は華月宮の侍女さん達が浮き足立って仕事にならない。

どちらにしても都合が悪いのだから、この話は立ち消えになったものとはかり思っていたのに、なぜか昨日ぐったりして帰ってきたライトに、『明日王妃様の薔薇園でのお茶会に招待されたから、俺と一緒に行くよ、アーシェ』って言われた時には、何かの冗談かと思っただけだ。

フェリシア様だけでなく、シエルミラ様、リリアナ様もそろって私に会いたいとご希望された上に、エルサーナさんの口添えがあつては、さすがのライトも断れなかつたんだって。

ライトが出した、自分が仕事を休んで出席するのは特別休暇扱いで、その日は薔薇園は王族以外の立ち入り禁止、侍女さんはエルサーナさんだけで、参加者は女性のみ、王様と王子様は出席不可という条件も、あっさり通ってしまったらしい。

最後の条件は何なんだろう？ と首を傾げたら、『他の男には絶対見せたり触らせたりしたくない！』って力説された。アホか！

でも、逆にそこまで条件吞まれちゃ断れないわよね…。気が進まないけれど、仕方がない。

そうしてやってきた初めてのお茶会が、今まさに目の前で開かれてるってわけだ。

おしゃれな大きくて丸い白いテーブル、大きくて柔らかなクッションが置かれた幅広のベンチは、白い猫足に金の縁取りで、背もたれにも大輪の薔薇が描かれたクッションが張られている。ふわりとスカートの広がったご婦人が3人くらいゆったりと座れそうなくらい大きい。

テーブルの上はレースのクロス、ピンクを主体にした薔薇メインの花かご、薔薇の描かれた白いティーポットに、金の縁取りの華奢なカップが配置されていて、まさに絵本の中のお茶会のテーブルを再現したみたいだった。

いろんな形の小さな焼き菓子に一口大のケーキ、飾り切りにされたフルーツ、焼き菓자에添える色とりどりのジャムやソースが大きな白い器に形良く盛られて、テーブルいっぱいになべられている。

ふわりと湯気が立つお茶は、ほんのり花の香りがして、私の鼻にも優しい芳香が届く。

王妃様はモスグリーンのドレスに大粒の真珠のネックレス、髪はゆるく編んでまとめている。優しそうな顔はややふつくらしていて、なんだか全部包み込まれてしまいそうな包容力に満ちた笑みを浮かべている。

孫がいるといわれればそう見えるし、黙っていればそうは見えないし、どうも年齢不祥な不思議な美しさがある方だ。

鷹揚に座っている姿は、まさにこの国の女性の頂点に立つにふさわしい気高さがあった。

フェリシア様はクリーム色のドレスに、大粒のサファイアのピアスが耳元で揺れている。ふわふわの白に近い金髪を高い位置でまとめて、後れ毛が少し艶っぽい。細いうなじが綺麗で、女の私でもドキツとする。

それなのに、おっとりとした笑顔はかわいらしくて、なんだか癒されそう。うー、このギャップは男の人には凶器なんじゃないの！？すぐく若く見えるのに、これで3人もお子様がいらっしやるようにはとても見えない。

うーん、この方も私と同じように、ラズウェル様にだまされた口だったらしい。

リリアナ様はオレンジのドレスに、華やかなルビーのネックレスを合わせている。

髪はきれいに巻いて半分だけ結い上げ、滝のように流れ落ちる金の髪が風に揺れてとっても綺麗だ。

顔立ちもとても華やかで、楽しそうに良く笑うのが印象的。ラズウエル様にはちつとも似ていないけれど、凛とした立ち姿は良く似ていると思う。

今回、エルサーナさんは建前上侍女としてこの場にいるわけで、服装もいつもの侍女服に白いエプロン姿だ。そつと傍に控えて、皆さんのお茶やお菓子の世話をしている。

それだけでなく、誰かが席を立てばそつとクッションのほこりを払って整えたり、冷めたお茶はすぐに下げて新しいのを入れなおしたり、お皿が空になれば新しいのを取り分けたりと、その動きと気配りには一部の隙も無駄もない。このお茶会を見事なまでにコントロールしている。

すごおおい、行儀見習いの侍女さんとは全然違う！

流れるように優雅な動作を一切止めることなく、お茶会全体に神経を行き届かせる姿は、圧巻の一言だ。

私もあんなふうに仕事が出来るとなりたいなあ。

孤児院出身の子供は、王城では働けないっていう国の規則があるけれど、もしも人間に戻れたらここに就職できないかなあ。

ライトの口利きでなんとかなったりしないかな？ もし本当に人間に戻る日がきたら、頼んでみよう。

お茶会初体験！・前（後書き）

あー、なんかうまくまとまらなくて変なところで切っちゃった。
ライトの身の上話、の回でした。

お茶会初体験！・後

今回は身内だけの碎けた場ながら、そこに漂う気品と貴禄は隠しようもない。

ここにいる方々には、私はもちろん直接の面識はない。

国王様や王妃様の生誕祭やら、国を挙げての公式行事で王宮のバルコニーから手を振る姿を、すごく遠くから拝見したことがあるくらいだ。遠すぎて、皆さん豆粒ほどにしか見えなかった。

その方々が目の前にいらっしやるんですよ！ 恐れ多すぎる！

「本当にかわいい猫ちゃんね」

フェリシア様が目を細めて私を見つめる。ご実家では3匹の猫を飼っていたそうで、猫が大好きなんだそうだ。だから、私の存在を知って、どうしても見てみたくなったらしい。

普段そういうおねだりをしない人だから、ラズウェル様もどうにかして私をフェリシア様に会わせたかったんだろうって、ライトも言っていた。

でも、まだ一度も私に手を出してこない。

一番最初にライトが、私が魔女のところで虐待されていたせいで、女性の手を怖がると言う話をしてくれたから、皆さん不用意に手を出したりしない。

ここでいつも開かれていますお茶会に来ているお姉さん達と違い、香水もとても控えめな香りで、近くにいっても大丈夫。もしかして私に気を使ってくれたのかな。優しい人たちばかりだなあ。

それでも、ライトの腕に抱かれながら、みんなの手から恐る恐るお菓子を食べているうちに、少しずつ恐怖は薄れていく。

上からにゅつと伸ばされる手がだめみたいだけど、私の目線よりも低い位置から遠慮がちにそつと差し出される手は、平気になった。みんな見たこともないほど白くて、すべすべで、柔らかそうな手をしている。その手に鋭い牙で傷をつけないように、お菓子をいただくときは緊張してしまう。

「噂には聞いていたけれど、随分なかわいがりようねえ、ライトリーク」

「そりゃあもう。今はこの子に夢中なんです。他の女性が目に入らないくらいにね。片時も離したくないんですけど、余りべたべたしすぎると怒るんですよ。つれないでしょ？」

にこやかな王妃様に、憎たらしいほど長い足を優雅に組んで私を抱きながら、涼しい顔をしてしれつと言つてのけるセリフは飼い主バカ全開とは思えない。

「それにしても、逃げる様子もないし、落ち着いているし、頭のいい子なのね。まるで人の言葉がわかるみたい。毛並みはつやつやだし、目もすごく大きくて素敵な色！ 確かにこんな子に懷かれたら私もメロメロになっちゃうかもしれないわ」

清楚でおっとりした印象の王妃様やフェリシア様とは対照的に、リリアナ様はまさに大輪の薔薇のように鮮やかな存在感を誇る。夜会においても、男性の視線を一身に集める、社交界の華と名高いその美貌は、きらびやか過ぎて目がつぶれそうですっ！

「それも、俺限定つてところがまたそそるだろう？」

リリアナ様にそう言うなり、ふつと笑ったライトにちゅつと頬にキスされた。

だから人前はやめてっば！

恥ずかしくてぎゅーつと肉球でライトの顔を押し返すと、シエルミラ様とリリアナ様がごろごろと笑う。

「まあ、恥ずかしがりやさんねえ」

「かわいいわね〜！」

手を伸ばす親子お二人に優しく撫でられて喉を鳴らすと、不満顔のライトにひよいと抱き上げられて、優しい手から引き離されてしまった。

「なによ、撫でるくらいいいじゃない！」

「そうよねえ。いくらかわいいからと言って、私達まで遠ざけることはないでしょう？」

お二人の抗議にも、ライトは憮然とした顔を返す。

「喉鳴らしながらうつとりしてる顔なんて、俺以外に見せたいわけないでしょう。アーシェも、無防備に見せるなって言ったでしょ？」

『なんで女の人までだめなのよっ！』

「ライトのけちっ！」

「嫉妬深い男性は嫌われるわよ？」

「なんとでも」

3人（？）がかりの抗議も、ふんつとそっぽを向いて受け付けない。

もおおつ、普段はしつかりした大人の男なのに、どうしてこういうときは子供っぽくなるかなあ！？

せつかく女の人に優しく撫でてもらえたのに。ちよつとくらい触られてもいいじゃない、男の人にされてるわけじゃないんだし。

…正直ここまでされるとウザイですよマジで。

じつとりと恨めしげにライトを見上げるも、そっぽを向いたまま知らん振りだ。

まったくもっ…。

「それにしても、男って自分限定とか好きよね。シア姉さまも、あんなに結婚嫌がってたのに、ラス兄さまにすっかり手懐けられちゃって」

リリアナ様に矛先を向けられたフェリシア様は、おっとりと首を傾

げて笑う。うああ、年上だけどかわいい！

「どちらかと言えば、誑かされた、でしょうか。気がついたらもう逃げ道が無くて…。でも、ラズ様のそれも、私限定ですから、お互い様ですわよね」

「確かに、ラズ兄様のしまりのない顔は、姉様限定よね。ちょっと気持ち悪いくらい」

「あら、そう？　かわいくって素敵よ」

「シア姉さま、大物ね…」

若干引き気味のリリアナ様に同意したい…。

あの顔がだらしく緩むところなんて想像つかないなあ。確かにちよつと気持ち悪いかもしれないけど、それをかわいいと言い切るフエリシア様も、外見とは違って一筋縄では行かない人なのかも。

年若いお二人のお話は、なんだか身につまされる気がしてなんとも言えない気分になる。私もこのまま逃げ道なくなりそうだわ…。

見上げたライトに、『どうしたの？』って甘い笑みを向けられて、思わずぶるりと背中が冷えた。

さすがに皆さんのお膝に手招かれるのは、どうしても綺麗なドレスが気になってしまい、後ずさって辞退した。こんな綺麗な色の薄絹に肉球の跡がついたり、爪を引つ掛けたりしても弁償できない！　っていうか、払うのはライトなんだろうけど。どっちにしても無理！

皆さん残念がっていたけれど、代わりにたくさん撫でてもらうことで勘弁してもらった。

今は王妃様に『いい加減お茶会の世話なんていいからお座りなさい？』と笑顔での恫喝をいただき、仕方なさそうにベンチに落ち着いたエルサーナさんの侍女服の膝の上だ。

隣に座ったライトが、私を優しく撫でている。

「やっと慣れてくれたみたいね。よかった」

微笑みながら、エルサーナさんが私を見ている。

今まで何度も撫でようとした手を拒否してしまつて、嫌な思いさせ
たからなあ。ほんとごめんなさい。

でも、エルサーナさんのおかげで、今日は皆さんの手がそんなに怖
くなかつたです！

うにゃあんとお礼を言う私にいつそう微笑んで、エルサーナさんの
たおやかな手が優しく頭を撫でてくれた。

「ああ、安心したよ。これで俺がいない間の世話を頼める」

「そういう理由なのね」

苦笑したエルサーナ様に、またライトはふんとそっぽを向く。やつ
ぱりエルサーナさんの前では『弟』なんだね、ライト。さっきより
ももつと子供っぽくなつてるのがなんだかわかしい。

「悪いかよ。この子は下手な人間には任せられないんだ。ましてや
男の目になんて晒せない。姉さん、ラズやアークには絶対触らせる
なよ」

「もう、今からそんな心配してどうするの？　そういう状況になつ
てから心配したら？」

「もつなつてるから言つてんの！　こんなにかわいいんだ、いつど
この男の目に留まるかわからないんだよ！？　ラズなんか早速手え
出してきやがつて、油断も隙もないよ。いくら心配してもし足りな
い！」

あきれたように言うエルサーナさんに言い返し、ライトはエルサー
ナさんの膝から私を抱き上げる。

いくらなんでも心配しすぎじゃないのかなあ。一応保護命令も出て
るんだし、私に手を出そうなんて、ラズウェル様以外にいるとは思
えないんだけど。

胸に抱きこまれて頬ずりをされてあごの下をくすぐられて、じわん
と体が熱くなつた。耳をいじる指先に、私はうつとりと目を細める。

「だめだ、絶対離せない。俺はアーシェがいなきゃだめなんだ」
震える、小さな声。ライト、急にどうしたの？

ライトの顔を見たくても、ぎゅっと抱きしめられていて顔を上げられない。

少しだけそうした後、ライトは小さなため息と共に腕の力を緩めた。
「驚かせてごめん。アーシェ、愛してる。絶対どこにもやらないからね」

見上げた微笑は、いつもの甘くて優しいそれだった。

ささやく低い声と共に下りてきた唇に、反射的に目を閉じた。
向こうからきゅーっという黄色い声が上がる。

ねえ、ライト。あなたの独占欲が、甘くて痛いよ。
でも、時々垣間見せる苦しさで、私も胸が詰まる。

今はまだわからないけど…、いつか、その言葉を受け入れられたらいいな。

いつか、ライトの苦しみがなくなればいいな。

熱い唇を重ねられて、与えられる切なさ震えながら目を閉じていたから気づかなかった。

エルサーナさんが、密かに憂いを浮かべた瞳で、私達を見ていたことには。

変な人に会いました（前書き）

うまく切れないので今回少々長くなりました。
ちよいとR15な描写あり。

変な人に会いました

この間初めて見た王子様とよく似た男の人が、私の首根っこを捕まえて、にこにこしながらぷらんと顔の前にぶら下げている。

な、な、何がどうしてこうなった！？

私は、ただ中庭にお花を見にきただけなのにー！

姿隠しの魔法をかけて、中庭に入り込んでお花を眺めていた。今日は曇り空で、風が少し強い。

そのせいか、お茶会もなく、誰もいない中庭はしんとしている。

いつのまにか、中庭のテラス窓の横に小さな猫ドアが取り付けられていたおかげで、今では一人で中庭にいても、締め出される心配はなくなった。ありがたいんだけど、そこまでするかライト…。

風にゆらゆら揺れる花たちが、時折強く煽られて、私の顔を叩こうとする。それをひよいとよけてぺしつと猫パンチを食らわして、また花を眺める。

まあ、たいしたことない一人遊びみたいなもの。お花を眺めるのは好きだもの。

そうしてのんびりしていたら、後ろからさくさくと芝生を踏む足音が聞こえてきた。けれど、術を使っているし、ここに来るのは貴族のお嬢様が侍女さんくらいだ。どうせ見つかるわけがないといつい油断していたら、突然ひよいと摘み上げられて、今に至る。

その人は背が高く、がっちりした体格。ラズウェル様と、体つきも顔もよく似てるけど、髪は銀髪。精悍でワイルドな顔立ちなのに、ラズウェル様と違ってその目はとっても優しい。

見てくれて王子様の血縁と言うのはわかるけれど、ええと、あなたは誰デスカネ？

どこからどう見ても戦士や兵士にしか見えないのだけれど、着ている詰襟はグレー、金モールもメダルもたくさん。

グレーってことは、魔術師団の制服だ！ ず、ずいぶんごつい魔術師さんだなあ。剣とか戦斧とか持ってたほうがよっぽど似合いそうですけど…。

それはともかく、私に何の用があるって言うのよ。術は使ってるけど、別に悪いことしてないのに！

宙に浮いてぶらぶらしている四つ足は、逃げるのに何の役にも立たない。

せめて精いっぱい恨めしさを込めて、私はにこにこしている男の人をじつとりとにらみつけるしかなかった。

「ライトの猫つてのは君かあ。なるほど、かわいいねえ。しかも魔力持ち。姿隠しの術も完璧だ。すばらしいなあ。ライトの使い魔にはもったいない。俺のところに来ない？」

笑顔のまま放たれた言葉は、よりによってこんな一言。

ひっ、人（猫？）攫いだー！

反射的にじたばた暴れた途端、男の人が軽く目を見張った。

「あれ、君、俺が言ってることわかるの？」

不思議そうに首を傾げられて、思わずかちりと固まる。

全身をだらだらと冷や汗が流れていく。うん、ここであればたら色々
とまずい気がする。

いや、私の純潔を守る為にもね！

いきなり首根っこ捕まえてぶら下げるなんて失礼だし、この人はな
んだか胡散臭い。魔術師さんだったら、私を人間に戻すことが出来
るかもしれないけど…でも、この人に頼るのは何か違う気がする
んだ。

何より、ライトには前回『男に近寄っちゃダメ』って約束させられ
てる。これがばれて、ただで済むとは思えないもん！
ここは、なんとしてでも逃げるしかないっ！

逆上がりの要領で振り上げた後ろ足で、ずいぶん近くにあったその
人のおごを蹴飛ばした。

「うわ！」

反射的に顔を引いていたので浅く入っただけだったけれど、瞬間緩
んだ大きな手を振りほどいた。

体を捻って着地し、間髪いれずに駆け出そうとした瞬間、風が渦巻
く。

『わっ、何っ！？』

眼前でぶわっと吹き荒れたそれに怯んだ隙に、風が体にまとわりつ
いた。と思ったら、もう見えない糸でがんじがらめにされたように
動けなくなってしまった。

『何これ！？ どうなってるのお！？』

体が自由にならない。まるで氷みたいに、かちりと固まっている。

それなのに口が自由なのはなんで！？

にやあにやあと騒ぐ私をうつとりと眺めながらしゃがみこみ、その
人は優しく私を抱き上げた。

「ずいぶん気が強いんだなあ。魔術に対する抵抗力は弱いみたいだ
ね。でも、癖のない素直な魔力。量も申し分ない。ライトもこんな
子どこから拾ってきたんだか」

穏やかな声と笑顔には、害意は感じられない。でも。

鼻先、額、耳、頭、背中、尻尾。

順番にたどって確かめるような手つきには、やらしさはないけど何かを探るような気配があって怖い。

「手触りがいいね。ライトのやつ、昔は動物飼うほどマメじゃなかったくせに。爪もこまめに切られてる。肉球も傷一つないし、良く手入れされてるんだね。こっちはどうかな？」

『ぎゃああー！』

体をひっくり返された！　こんな格好、ライトにしか見せたことないのにー！

背中にひやりと冷たい草の感触。ちくちく刺さる芝生が不快だ。ライト以外の人に仰向け組み敷かれて、息がかかるほど近くから見下ろされてる。あまりの恥ずかしさで泣きそうだ。でも、その人はそんなのちつともわかってくれない。

食い入るように私を見つめる目が怖い。

無骨な指でさりとお腹を撫でられて、全身にぞぞっと鳥肌が立った

「おなかの毛も良く洗ってある。汚れてるとこはどこにもない。相対大事にしてるんだなあ、あいつ。ふむ、魔力の源は丹田にあるのか。人間と同じだ。猫にしては珍しい。猫は大抵額に魔力の源を持つものだけど、こういう子もいるのか。これは興味深いな」

ふむふむと私を弄繰り回す手つきは、淀みなく私を暴いていく。動けないのがこんなに怖いと思わなかった。
やめて、助けてええ！

ふいに、男の人の目がずっと細くなった。

「首輪に追跡の術がかかっているな。それに、これは……」

追跡の術……？ どうして？ 首輪にかかっているのは変化の術じゃないの？

「俺の女に何やってんだよアーク！ 返せっ！！」

駈け寄る足音と共に怒声が響いて、組み敷かれていた私を走ってきたライトがひったくった。同時に、拘束が解けて、自由になった手足でライトにむしゃぶりつく。

『うわああん、ライトおっ！』

「アーシエ、もう大丈夫だよ」

なだめるように背中を撫でられても、なかなか震えが収まらない。ライトが底冷えがするほどの怒気を孕んで見据える視線の先、その人は悪びれもせずに穏やかな笑みを浮かべたままゆつくりと立ち上がった。

「いやあ、久々に理想の黒猫を見つけたものだから、つい」

「つい、じゃねえよっ！ さんざ縛っていじって泣かせやがって、ただで済むと思ってねえだろうな！？」

ライトのバカあつ！

何をいかがわしいこと言ってるんだー！！

いや、言ってることはあながち間違っちゃいないけど、あんたの口から出ると途端にえろくなるのはなんでなのよー！？

「それにしてもこの子、いい魔力を持ってるねえ。それも、丹田から魔力を出す猫なんて初めて見た」

「ちよっと待てお前、どこまで見たんだよ！」

「ああ、女の子なんだな。かわいかったよ」

につこりと笑われて死にたくなる。

イヤアアア！

やめて、忘れて、記憶を消してー！

お嫁に行けなくなったらどうしてくれるのよう！
っ！か私を抱いてるライトの顔が怖くて見れませんー！

「てつめえ、俺のアーシェの大事なとこ見てただで済むと思ってないよな！？」

「そんなものはどうでもいい。それより、この子は使い魔として鍛えたい。俺に譲る気はないかい？」

「断る！ そんなものとか言っくな！ こんなにセクシーな子捕まえてどうでもいいとかどういう見だ！ 大体にして、この子は俺の彼女で物じゃないんだ、そんなほいほいやれるか！」

ちよつとまで。アンタ今猫相手に随分聞き捨てならないことを言いませんでしたか？

つか、なんか話がかみ合っていないのは気のせいですか？

この男の人にしても、人の裸見たくせにそんなものはどうでもいいとか、ものすごい侮辱なんですけどー？

なによなによ、ラズウェル様といいこの人といい、王家の方々ってばどんだけデリカシーないの！？

「この子はここで埋もれさせておくには惜しい材料…いや存在だよ。俺のところにいるほうが世の役に立つと思うけどねえ？」

「今材料って言っただろう！？ お前術の研究とか言っというて、やってることが怪しいんだよ！ アーシェを弄繰り回すつもりなんだろう！」

『あんたが言うな！ いつも私を弄繰り回してくせにーっ！』
いつもと違ってぞんざいな口調で言い合いをするライトには、当然私の抗議なんか聴いちゃいない。

もおおっ、なんでもかんでもえろい方に結びつけるあんたの脳みそは一体どういいうつくりになってるの！？

けれど、一瞬、荒れ狂っていたライトの雰囲気が収んだ。
…その代わり、すうつ、と、冷気に似た静かな怒りの感情が、背筋を撫でる。

びくつと肩が跳ねる。恐る恐る見上げると、無表情：なのに、唇に浮かぶカーブはまるで文字通り『貼りつけた』ような笑み。こ、怖っ！

「アクセル。誰がなんと言おうと、この子を手放すつもりはない。世の役に立つとかなんとか、そんなもん知ったことか。この子に手を出すなら、いくらお前といえど、許すつもりはない」

その、お城の騎士様たちがひるむほどのそれを、一瞬驚いたような顔で受け止めて、その人はふつと表情を緩めた。

「そうか。それは残念。お前がそうまで言うのなら仕方がない、今回はあきらめるよ」

「今回は、じゃねえよ。二度とちよっかいかけるな」
冷たいそれをひよいと肩をすくめただけでいなしで、その人は歩き出す。

すれ違いざま、すつと私に顔を近づけて、にこりと笑った。

「こいつに飽きたらいつでもおいで。俺と一緒に魔術を極めよう？」

「誰がやるかつ！ とつとと消える！！」

ライトの怒声に、笑いながらひらひらと手を振って、魔術師さんは去って行った。

な、何だったのあの人…。あのライトの氷のような怒気をなんでもない風に受け止めたり、笑って流したり、ちつともひるまない。それに、なんだかずいぶん親しげだったわよねえ？

今までにないくらい、砕けた態度だった。でも、怒鳴りまくってたけれど、険悪な雰囲気でもないし。友達なのかなあ。

そこで、背中に感じる尋常じゃない冷気に固まった。

そ、そうだった。もう男の人に近づかないって約束したのに…！
し、しかも、押し倒されてるところ見られた…！

うううう、ライトを見るのが怖いっ！

固まった首を、ぎぎぎぎ、ときしんだ音がしそうなほどにぎこちなく回して、ライトの顔を見上げると。

「…アーシェ…。約束、破ったね？」

にっこり。

め、目が！ 目が笑ってませーん！

ひえええっ！ ライトが、ライトが鬼に…！

次の瞬間、ライトは私を抱えたまま、全速力で庭を飛び出した。そして、ありえないスピードで廊下を駆け抜け、階段を駆け上がり、この間と同じドアをばぁんっ！ と開ける。（もちろん、ノックなどしない！）

「団長、これからうちの子をしつけないおさなきやなくなっただんで、1時間ほど抜けます。あとよろしく」

恐ろしいほどの笑顔で言い放ち、返事も聞かずにドバァンツ！とドアを閉めた。

うわぁぁんっ！ 前回よりしつげが30分も増えてるしー！

ちよ、ちよっとお！ 『団長室』のプレート、鉾が一個飛んだわよ！？ ああつ、ぶらんつて垂れ下がっちゃってるー！

ライトは焦る私にはお構いなしで、にっこりと美しい笑みで私を見下ろした。当然、ドアのことなんて毛ほども気にしていないに違いない。

「この間約束したよね。今度約束破ったら、孕ませるぐらいお仕置きするって」

甘い笑みが、一層濃い色気をまとい、私を見下ろす。

しかも、その瞳の奥底に渦巻く絶対零度の怒りと混ざり合い、さつき術を掛けられた時とは比べ物にならない強度で、呼吸すらもままならないくらいがっちりと私を硬直させてくださった。

「アーシエ…覚悟してよね？」

低い声に、震えることも出来なかった。

わ、私、今日は色々と捨てることになるかもしれません…。

私の手首（足首？）は、ライトの魔法で拘束されている。

ベッドに仰向けに張り付けられて、はあはあと乱れる息が熱い。

「まったく、あれだけ男に近づくなつて言ったのに、簡単につかまって、縛られていじられたなんて許せないよね？俺もしたことないのに…」

やってるじゃん、今！　ていうか、いつもやってるのはいじってるのとは違うのかい！

つて突っ込みたくてもできないー！

とろりとした笑みを浮かべ、指先が優しく頬を撫でる。それだけで、ぞくぞくと背中が疼いて泣きたくなる。

「しかも、足開いて見せたんでしょ？　どんだけ淫乱なの」

ちがうつ！　ちがうつよう！　つかまって無理やり…っ！

術で動けなかったの見てたくせに、どうしてそんな意地悪言つものっ！

私を攻める言葉には容赦がない。耳を噛まれて、びくんっ、と体が跳ねた。

「見せるのも触らせるのも俺だけって言ったじゃない。約束を破るなんて、悪い子だな」

いっそ優しいほどの声だけど、私を許すつもりはないみたい。

さら、とおなかを撫でられただけで、ざわりつと寒気に似た何かが背骨を走る。

手足はぐにやぐにやで、全然力が入らない。ともすれば、甘い声を上げそうになるのを、必死でこらえる。

ライトの手の中の『それ』。そのせいで、体がおかしくなってるのは解ってる。

でも、こんな風に体が熱くなるなんて知らなかった。こんなを使うなんてひどい…っ！

『言うこと聞くから、もう許して…っ！ あ…んっ！』

「かわいくお願いしてもだめだよ。思い知らせてあげる」

にやりとライトが意地悪な笑みを浮かべた。手に持ったものをゆっくりと押し付ける。

だめ、お願い、やめて…！

「うにゃああん〜」

あああ、だめ、この香り、頭までしびれちゃう…！

ま、マタタビはだめえ〜！！

「ほらほら、気持ちいいんでしょう？ どうなの？」

「ふなあああん〜…」

葉っぱのついた細い枝を鼻先に押し付けられながら、さわさわとおなかを撫でられて身悶える私を、ライトは目を細めて見つめる。

そのうち、ただ表面を撫でるだけだった指が毛皮の中にまで入ってきて、地肌を探って。

「うにゃあんっ！」

びりっ、と電流が走った気がした。

ライトがくすつと笑う。

「猫なのに、アーシェのおなかには乳首が二つしかないんだね。どうしてかな？」

『やああっ、やめてえ！ 触っちゃだあっ』

身を擦つても逃げられない。それは本当にダメ！　いくらなんでもやりすぎだよー！

艶めいた笑みを浮かべていやらしい手つきでお腹を探られながら、自分の自由にならない体じゃ、私は鳴きながら喘ぎ続けるしかない。

頭が真っ白になる寸前、眇めた瞳に濃い情欲の火をちらつかせたまま、ライトが呟いた。

「猫だからって、手え出さないなんて思うなよ？」

それは、もう、嫌と言うほどよーっく解りました。

私、もうお嫁にいきません…。

変な人に会いました（後書き）

お仕置き第2弾でしたw つーかライト君マジでやりすぎですよ…。
さて、少々マッドな魔術師さん登場。
誰でしょうかね？

閑話・ライト

夜半、もぞりと動いた毛の固まりに、意識が浮上する。目を開けて、そっと布団を上げて確認する、漆黒の塊。そっと手を這わせて、毛の流れに沿って撫でると、ベルベットのような手触りが優しく手のひらの皮膚を蹴る。

知らず、笑みが浮かぶ。愛しい愛しい黒猫。いつまでも、この手の中であって欲しい。

祈りにも似た気持ちで、ライトはアーシェを見つめる。

アーシェは、おそらく魔女の使い魔として、王城にもぐりこむために捕らえられていたんだろう。

先に捕縛された侯爵の手先として、政敵である王国の要人を密かに害していた路地裏の魔女という女。

自分は侯爵という存在を隠れ蓑に、人や獣を操って襲わせる。使った人間は密かに始末し、痕跡は侯爵がもみ消す。けして自分が表に出て手を下したりはしない。

姿隠しや、惑わしの術など、人を幻惑する魔術を得意とし、何度も捕縛の手を逃れてきた。

そうして闇に潜みながら暗躍するがゆえに、『路地裏の魔女』と呼ばれるようになった女の手が、ついに父である宰相にまで伸びたことで、『魔術師殺し』の名を持つライトリークが捕縛のために駆り出されることになった。

そして、魔女を追って突き止めた隠れ家に踏み込んだ時、薄汚れて弱った様子の黒猫が、途方にくれたようにうずくまっているのに、

ふと興味を引かれた。その深い緑色の瞳が、理知的に自分達を見ていたからだろうか。

その猫が『とらわれびと』だというのは、すぐにわかった。

首輪から発して、猫の全身を揺らめくように覆っている魔女の魔力は、よくよく見れば、時折ゆらりとその輪郭をぼやかせる。魔力付与した首輪でその姿を変えられていることは、容易に想像がついた。

気を失って目を開けない猫を連れ帰った後、魔女の呪いが解けて知った少女の容姿には、心当たりがあった。

王都では最近行方不明者の数が増えている。組織的な人身売買組織によると思われるその為、ライトリークは今でも、毎日行方不明者の届けに必ず目を通してている。

だから、2週間ほど前、王家にもゆかりのあるパシフィスト教会から出されたそれも、ライトリークは良く覚えていた。

『アーシェ・グレイ 16歳 細身で長い黒髪に緑の目 夕方買い物に出たまま戻らず』

この少女と同じような容姿に該当する届出は、ほかには出ていないから、間違いようがない。

ライトリークは、知っていた。

最初から、すべて。

ベッドの中でアーシェを見つめる少し前。ライトリークは人影もなくしんと静まり返った渡り回廊をゆっくりと歩いていた。

魔法光のランプではの明るい廊下を、こつこつと軍靴の音を響かせるその顔には、自嘲的な笑みを浮かべている。いつもはめったに見せることのない表情だが、今は見られて困るような人間は誰もいな

い。

目指すは、渡り回廊の真ん中のバルコニー。

「女からの呼び出しだったら、まだ良かったのになあ」

ため息混じりに呟いたが、早めに話をつけなければならぬ相手でもある。

呼び出された相手は、アクセル・サンクエディール。

今日中庭でアーシェを捕獲した、サンクエディア王国第二王子にして、王太子であるラズウエルの子。王国の魔術師団団長を務める、この国屈指の魔術師だ。

ライトリークは、魔術が使えるとはいえ、その腕はアクセルに遠く及ばない。

アーシェにかけている魔術を見破ることなど、アクセルにとってはたやすいことだ。

昨日アーシェがアクセルと出会った時から、こうなる覚悟はしていた。アクセルの目はごまかせない。

渡り回廊のテラス窓を開けると、ベンチに座っていた人影がゆつくりとこちらを振り向いた。

日中空を覆っていた雲はすっかり晴れて、今は冴え冴えとした月明かりが空から舞い降りている。

その月光と同じ色の髪は、まるで銀糸のようにきらめいていた。

いつも穏やかに笑みを刻んでいる双眸は、しかし、今は険を孕んでまっすぐにライトリークを見つめている。

ひょいと肩をすくめると、ライトリークはアクセルから少し離れた場所に腰を下ろして、月を見上げた。

「あーあ、だからアーシェをお前に会わせるのは嫌だったんだ」

心の底からの本音で、ライトリークはそうこぼす。眉間にしわを寄せたアクセルの瞳が鋭くなった。

「だからあの子に姿隠しの術を教えたのかい？」

「違うよ。あれは路地裏の魔女が教えたの」

手すりに肘を乗せて、ライトリークは人を食った笑みで返した。嘘は言っていない。自分は術のこつを教えただけで、術そのものは教えていないのだから。

けれど、それでごまかされてくれる相手ではない。アクセルの視線は、揺らがずにライトリークを射抜いている。

「城内の侍女たちが多少うるさくとも、お前ならどうとでも手をまわすことが出来たはずだよねえ。それをせずに、わざとあの子が自分で術を使って、侍女たちから逃れるように仕向けたってわけか。俺に会わせない為に」

頬杖をついて薄い笑みを浮かべるライトリークは何も答えない。その表情からは、なんの感情も窺い知れない。ライトリークの意図はわからない。アクセルはぐっと奥歯を噛み締める。

「あの子の術は完璧だね。魔術師団の誰も、あの子の姿を捕捉出来てない有様だ。さすがの俺も、あの子を探し出すのに手間取ったよ。たいしたもんだねえ、ライト」

「だろ？ このままお前に気づかれずにすめば、それに越したことはなかったんだけどなあ。ま、そんなにうまく行くわけないよな」

飄々とした口調は、相対した誰をも煙に巻く。けれど、長い付き合いのアクセルに通用しないのは、ライトリークもわかっていているはずだ。アクセルは構わず問い詰める。

「あの子の首輪にかかっている追跡の術は、お前がかけたんだね」

ライトリークは、仕方なさそうに笑うだけで、アクセルの問いには答えない。もとより、この男が素直に答えるとも思っていない。

「あの子には、変化の術がかかっている。それもお前だよね？」

なおも答えないライトリークに、アクセルは深い青の瞳を険しくする。

「あの子を覆っている魔力には、お前の『匂い』しかしなかった。言い訳があるなら言ってみろ」

それまでの穏やかに問い掛けるものとはがらりと口調を変えたアクセルに、笑みを浮かべたままライトはうなずく。

「その通りだ。やっぱりお前の目はごまかせないな、アーク。魔力の『匂い』を嗅ぎ取るなんて芸当ができるのはお前くらいだよ」

「はぐらかすな！ お前、何を考えてるんだ。あの子は人間だろう！」

ライトリークは、アクセルの抑えた怒声にも苦笑して肩をすくめるだけで、何も答えない。

「『とらわれびと』にするのは犯罪行為だ。しかも、王家に連なる者が、騎士団副団長ともあるう者がやって許されることではない！ わかってるんだろう？ 冗談では済まされないぞ！」

『とらわれびと』とは、アーシェのように、魔術師に捕まって変化

させられる人間のことを言う。

アーシェのように使い魔として使役させる場合もあるし、悪意によってその姿のまま放り出され、惨めな余生を送らされる羽目になったり、売られたり、買われたり、鬻り物にされて、死よりもつらい目に合わされることもある。

同意がある場合はともかく、本人の意思に反して変化の術をかけた場合には、当然重罪だ。

アクセルの胸の内、渦巻く感情はなんだろうか。

騎士団長でありながら禁忌を犯すライトリークへの怒りはもちろんある。

けれど、何も打ち明けてくれないとこへのやるせなさも、こうなるまで事態に気づかなかった自分へのふがいなさも、そうまでしてアーシェにこだわるライトリークへの疑問も。

揺らぐ気持ち、アクセルの判断力を鈍らせる。

ライトリークもまた、自分の気持ちをまだ理解できずにいた。

犯罪なのはわかってる。けど。

「遊びじゃない。俺はアーシェを手に入れたいだけだ。愛してる。絶対手放さない。人間の姿にも、いずれ戻す。近いうちに、必ず」

笑みを崩さないライトリークに、アクセルはため息をつく。

これほどまでに彼を駆り立てるものは、一体なんだろうか？

今まで、人も物も、自分以外の全てに対してライトリークは執着を見せることなどなかったはずだ

強いて言えば、『戦うこと』、この一点に対してだけは、毎度息を飲むほどの苛烈さを見せ付けてはいたけれど、それがあの猫に結びつくとはどうしても思えなかった。

「なぜだ…。何が前をそうさせた？　路地裏の魔女の狂気に当てられたか？」

「そうかもしれない…。自分が狂っている自覚は十分あるよ」

「そういう仮面みたいな笑顔見せられてもな。前がそんな顔する時は、絶対折れないのはよく知ってる」

その笑顔の裏、ライトリークは一度こうと決めたらそれを絶対に曲げない。物腰も柔らかく、いつもはぐらかすような笑みで一見与し易いと侮られるが、それを逆手にとって相手を叩きのめすのは、嫌と言っほど見てきた。

「前があの子を苦しめているのは確かだし、俺は魔術師団団長として、この国の王族として、何の罪もない人間を『とらわれびと』にしていることを許すつもりはない。だが…」

一度苦しそうに唇を引き結び、アクセルはライトリークをにらみつけた。

「前を黙認はしたくないが、今あの子を元に戻してお前達を引き剥がしたところで、何もいい方には転ばない気がする。だから、もう少しだけ目をつぶっておいてやる」

驚いたように目を見張るライトリークの視線から逃れるように、アクセルは立ち上がった。

自分はまだ、この二人のことを何も知らない。

見極めたい、と思うのは、身内びいきの感情だろうか。

「温情措置じゃない、勘違いするな。真実を知ったあの子に切り捨てられる覚悟はしておけよ。前のしていることに、弁解の余地はない」

その断罪の言葉に、ライトリークの笑みが消えた。ただその絶対の意思を示すような、強い光を宿した瞳で、まっすぐにアクセルを見返す。

「もとより承知の上。そうなくても、俺はもうアーシェを手放せないんだ。自分でもおかしいと思うよ。でも、無理だ。お前に、いや、誰になんと言われても、これだけは譲れない」

アーシェと過ごした時間は、2カ月半。長いようで、短い時間だ。それだけの間に、アーシェはライトリークにとって、何にも替えられない宝石になった。それを手放すことを想像するだけで、暗い絶望に飲み込まれていくような気がする。

どうしてそこまでアーシェに依存するのか、なぜそれほど執着するのか、狂おしいほどにアーシェを求めてやまないこの感情がなんなのか。その理由はライトリーク自身にもわからない。その視線を受け止めたアクセルの、ぐっと握った拳が震えた。

「あの子を人間に戻した後、王家としてお前を処罰する。…それだけは覚えておけ」
「…わかった」

苦さを飲み込んだような顔で立ち去る、アクセルの背を見つめる。それから頭上に輝く月を見上げた。聖者も咎人にも、等しく降り注ぐ月の光。ただ全てを見届けているとでも言うかのように。
鋭い痛みが心臓を突き刺して、ライトリークはわずかに眉をひそめた。

薄闇の中、アーシェを撫でていた手を止めて片肘をついて体を起こし、ずっと手を上げた。

指先に集めた魔力で、横に空を切る。

ふわりと舞った魔力がアーシェの小さな体を包んで、その姿を変えていく。

一系まとわぬ、愛しい少女の体に。

真珠のような肌、漆黒の髪、すらりと伸びた手足、今はまぶたに隠れて見えないけれど、翡翠のような深い色の瞳。

初めて見たときには、衝撃で呼吸を忘れた。

魔女が死んだと同時に、魔女の呪いは解けた。

あわてて戻った部屋で、人間に戻っていたアーシェは、やせ細り、薄汚れ、青ざめた顔で、まるで死んでいるようにも見えた。

特別美しかったわけではない。みすばらしい、何の力もない、ただの女の子。

それなのに。心の奥底についた火は、一瞬で体を焼き尽くした。

かわいい。

愛しい。

守りたい。

そばに置きたい。

人間の姿に戻れば、いずれ元いた場所に戻ってしまうだろう。

…いやだ。

まるで子供のような執着心で、ライトリークはアーシェをここに
つなぎとめた。

自分を好きにさせてみせる。

その目に自分だけを映したい。

自分から離れられないように。

離れていかないように。

そのために、毎日愛撫やキスに慣れさせているのだから。

もしアーシェの気持ちに向いたら、絶対に離さない。

自分がどれほど残酷なことをしているのか、自覚はある。

いつも明るく振舞っていても、時折、揺り返しで涙を見せるアーシ

エに、つぶれそうな罪悪感を覚える。

それは、自分への罰なのだ。

…この身は、魔女よりも罪深い。

「だめだ。ごめん。手放せない。誰にもやれない。離れるなんて許
さない。愛してる。愛してる、アーシェ…」

かすれた声で狂おしく求める。かき抱いた体が、しなやかにライト
リークに寄り添って、いつそう自分を苦しめる。

裏切ってごめん。

だましてごめん。

嘘ついてごめん。

ああ、でも。

君がここにいてくれて、俺は、初めて生きているような気がする。

夜着を脱ぎ捨て、再びベッドに横たわる。せめてと履いたままの下衣は、ささやかな予防線だ。細い体を引き寄せて、腕に閉じ込めた。暖かなぬくもりにほっと息をついて、ライトリークは目を閉じた。

小さな黒猫が、もぞもぞと腕の中から抜け出した。うーんっ、と伸びをして、くあ、とあくびを一つ。てしてしと肉球で頬を叩かれて、ライトリークはゆっくりと目を覚ました。

結局、昨日は眠れなかった。柔らかい肢体が血を滾らせて、無意識に擦り寄ってくるその無防備さに、色々と暴発しそうになった。せめて下半身だけでも履いていてよかった。でなければ、危うく犯していたところだ。

自分の理性がもちそうになくて、朝方アーシェを猫の姿に戻した。おかげで今日は久々に寝不足だ。

「おはよう、アーシェ」

どこことなく疲れたような顔のライトリークに、黒猫が首を傾げる。そんな無邪気な仕草ですら、男を煽ると知らないのだろうか。

小さな後頭部を引き寄せて、押し付けるようにキスをする。毛の感触がくすぐったい。

最近目は閉じて、キスを受け入れてくれるようになった。それが、おかしくなりそうなほどに嬉しくて仕方がない。

… 例え、今だけの幸せなのとしても。

今までも夜中に時々術を解いて、抱きしめて眠ったり、体に唇を這わせたり、熱を出した時には全身を拭いてあげていたと、彼女が知ったらどういふ反応をするだろうか。

あたふたしながら逃げるように布団にもぐりこんだアーシエを、布団のふくらみの上からぽんぽんと叩きながら、ライトリークは幸せそうな笑みを浮かべた。

閑話・ライト（後書き）

というわけで、アクセルがちよいとキーマンちつくな感じでした。
ライトは最初から全部知っていました。つーか暗い。暗いよライト君…。

正直うざいです。

追跡の術をかけているので、アーシェに何かあると駆けつけていたわけですね。

イケメンですが変態でえろくてストーカーです。その上身勝手なサ
イテー男。

いくら顔が良くても、こんな彼氏いらねえ…orz
ごめんねアーシェ…；；

お出かけです・1（前書き）

21話「変な人に会いました」の続きからです。

お出かけです・1

『うわぁあんっ！ ライトなんてだいつ嫌いー！！』

「ごごごめんっ、アーシェ！ やりすぎた、俺が悪かった！ ごめん、許して！」

あまりのライトの意地悪に耐えかねて、ついに私はお仕置きの最中に泣き出してしまった。

慌てたライトが拘束の術を解いてくれたけど、うずくまって号泣する私に、ライトは情けなく眉を下げてぺこぺこと土下座を繰り返す。「調子に乗りすぎた。ほんとにごめん。お詫びに今度の休みに街に連れて行ってあげるから、頼むから許して」

『ほんと？』

涙に濡れた顔を上げると、ライトが困ったように笑った。

「約束するから。だからごめん。もう泣き止んでよ」

指の背ですり、と頬を撫でられる。その優しい仕草に、ようやく涙が止まる。

『約束ね？』

ライトの瞳をまっすぐ見上げながら、にやぁ、と鳴くと、ライトはほっとしたように笑った。

そっと抱き上げられて、頬にキスされる。けれど、すぐにその表情が渋くなる。

「でも、アーシェももっと警戒しなきゃダメだよ。今回は相手がアークだから良かったけど、もしかして誰かに誘拐されたらと思うと心配で目が離せない。姿隠しをかけていても、わかるやつにはわかるんだよ。術の使い方も上手だし、もしかして自分の使い魔にしようと企むやつもいるかもしれない。あの魔女のようにね。だから、アーシェも気をつけること。約束、ね？」

すごく心配そうな顔。

確かに最近は何にも見られないから調子に乗って、油断してたことは確かだ。さっきだって、人が近づいてきていたのに、相手が誰か、どうして私にまっすぐ向かってきていたのかをちゃんと見てれば捕まったりしなかったかもしれない。

でも、ねえ。うぬばれかも知れないけど、私がさらわれて、ライトが黙っているとは思えない。さっさと相手を探し出して叩きのめすに決まってる。

そして私は『どうしてそんなに簡単にさらわれたりするかなあ？』って、絶対零度の笑みに氷付けにされてお仕置きされるんだ…。思わず想像して、ぶるっと震えた。うん、この予想、100%当たる予感がするわ…。

ライトは私を守ってくれる。それがわかってるから、安心しすぎるのもあるのかもしれない。

…いつのまに、こんなにライトに依存していたんだろう？

「特に、さっきアーシェを捕まえたやつ！ アクセルって言って、ラズの弟で魔術師団の団長なんだ。だからアーシェの魔術が見破られたんだよ。あいつ、魔術研究とかいって毎日毎日怪しげな実験ばっかやってるから、絶対近づいちゃだめ！ もし今度つかまったら何されるかわからない。あいつに会ったらとにかく逃げて！ 絶対だよ！ いい！？」

『うええ！？』

がしつと両肩を掴まれて、ものすごい剣幕で詰め寄られた。

いやもう正直今ライトから逃げたいです！

それにしても、王子様って人種には変な人しかいないのかなあ？

確かに、さっきの人が私を眺めて触ってひっくり返す手つきや目つきは、ちよつと引きそうなほどの熱心さがあつた。何か変な実験とかにつき合わされたくはないし、私ももうこれ以上恥ずかしい目に合わされるのはごめんだし。ここは言うことを聞いておいたほうがよさそうだ。

『うん、わかつた。気をつける』

にやあん、と鳴くと、満面の笑みでぎゅうつと抱きしめられた。

「ありがとう、アーシエ」

ちゅ、と唇にキスを落とされて、触れた唇の柔らかさにときどきが激しくなつて困る。

『ところでライト、お仕事は？』

首を傾げて見せると、一瞬押し黙つたライトは、ごまかすようににへらつと笑つた。

「まあいいじゃない。せつかく仲直りできたんだし、もう少し抱っこさせてよ」

『部屋に戻ってから、もう1時間くらい経ちますけど？』

あわよくばサボろうつて魂胆か！ そんなの私が許すと思う！？
ライトの眼前に、きらりと光る爪をしゃきんっ！ と出して見せると、綺麗なカーブを描く唇の端がひくりと引きつった。

「わ、わかつた！ もう行くから怒らないで！ その爪しまつて！」
渋々私をベッドの上に戻して、ライトはわざとらしくため息をつく。

「まったくもう、ほんとつれないんだから……。そこもかわいいんだけどね？」

そう言つて、人差し指でちよいとあごを上げさせられて、唇を重ねられる。

「じゃあ行つて来る。頼むから、今日は部屋でおとなしくしててね

？」

あれだけお仕置きさせられたら、気力も体力も尽きてて外に出る気なんか起きないわよ…。

出て行くライトの背中を見送って、私はベッドにぐったりと伸びた。

さて、それから三日。

あれからライトはすぐに休暇を申請したらしく、今日はお休みをとって、約束どおり街に連れて行ってもらえることになった。

昨夜、『休みが取れたから、明日出かけよう』といわれた時の嬉しさったら！ 興奮しすぎてなかなか寝付けなかった。ベッドの中でいつまでももぞもぞ落ち着かなかったおかげで、
「寝て起きたらもう明日になってるんだから。そろそろ寝なさい」
って、ライトに苦笑しながらたしなめられてしまったくらい。

いつもどおりと一緒に朝ごはんを食べた後、ライトはいつもどおり壁にかかっていた制服をクローゼットにしまった。代わりに、選んでもと思えないほど無造作に服を出しては次々と身につけていく。

今日のライトの格好は、白いシャツに黒のズボン、ブーツにざっくりと編んだ長いベストを引っ掛け、腰に長剣を佩いたスタイル。いつものかつちりした制服姿もいいけど、こういうルーズな格好も似合うなあ。

…服装が砕けてる分、いつもよりもさらに女の人たちが寄ってきてそうな雰囲気だ。面白くないっ！

ライトの隣で、私も姿見に向かって、ひげや毛並みを整える。
いいのよ、気分だけでも！　せつかく久々に街に出られるんだもの。
おしゃれは出来ないけど、女の子にとって身だしなみは大事なんだ
からっ！

「行こうか、アーシェ」

にこりと笑ったライトが、腰を折って私に手を差し伸べる。その手
につかまると、ひよいと肩に寄せられた。視界がすごく高い！　部
屋の中もよく見える。寝起きのまま乱れたベッドも、書類が何枚か
放置されている机も、高価そうなソファも見渡せる。そっか、私が
人間に戻ったら、部屋の中はこんな感じに見えるんだね。

すり、とライトが頬を寄せる。くすぐったくてどきどきする。私も
応えて、ライトの頬に頭を摺り寄せると、彼は嬉しそうに笑って私
の耳に唇を寄せた。

「すごくかわいい。キスしてもいい？」

その言葉に真っ赤になって（ライトには見えないけど）、私は目を
閉じる。ライトの唇がそっと触れた。

恥ずかしくて、私はライトの首筋に顔を埋めて隠すしかない。
顔も体も熱い。ライトは気づいてるかな。私がライトの傍にいて、
触れる肌や指先や唇をこんなにも意識してることに。

部屋を出ると、廊下を歩く私達に、騎士様や侍女さん達がいつもど
おり礼をとって道を開ける。

ただし、侍女さん達の熱い視線と黄色い声は、いつもの5割増しだ。
ライトはそれをどこ吹く風とばかりに受け流しているけれど、私は
面白くない。そりゃあ、いつものかっちりと整った制服と違って、

どことなくこなれた雰囲気を出してれば当たり前か。
ううう、侍女さん達みんな、頬を染めてライトに注目してるよー！
方々に無駄に色気振りまくな！ バカッ！

お出かけです・1（後書き）

さて、お城の外に出ましよう！
何話が続きます。

お出かけです・2

城下は、城の正門を出て正面の大通りが商店街だ。

まっすぐ進むと、王都名物大噴水のある中央広場があり、さらにまっすぐ進むと王都への入り口となる外門へと繋がる。

王城前の通りは高級店が並び、私は当然ほとんど来たことがない。

外門側にはお土産屋さんや庶民向けのお店が建ち並ぶ。

中央広場を挟んで東側には住宅地があり、西側には市や職人街がある。

私が住んでいたパシフィスト教会は、外門側の、商店街と職人街の境界あたりにある。

城門から右に曲がれば、高等学校や研究所などの高度な学問に関する施設が集まり、左に曲がれば王立病院や王立図書館などの公共施設がある。

つまり、庶民は外門側、お金持ちや貴族は王城周辺と、住み分けがなされているってわけ。

ライトはまず、正門を出てすぐの雑貨屋さんに足を向けた。大きくて綺麗な、白い塗り壁の建物は、もちろん私は一步も入ったことすらない。

白壁に茶色い屋根、壁はさざなみのような刻印が打たれて、銀の窓枠のショーウィンドウは、ぴかぴかに磨かれている。そこに並んでいる商品は、スリッパやリネン、お風呂のスポンジやペンとメモ帳のセット。それらがこれでもかというほど飾り立てられ、ディスプレイされている。

ええと、なぜに日用品がここまで飾られなければいけないんでしょ

うね？

私が知っている下町の雑貨屋さんとは、大分趣が違う。

内装はクリーム色で統一され、高い天井には薄布が、雲をイメージしたように吊るされている。内装と同じ色の陳列棚には深い青のベルベットのマットが敷かれていて、そこに、商品が一つ、二つとゆつたり間を置いて並べられていた。

ライトは陳列棚の間をゆつくりと歩いていく。

バスローブや部屋着、室内履きなどの身につけるものには、レースや透かし編みが施されている。

木製品には複雑な意匠が彫りこまれ、銀器には繊細な文様が刻まれているし、茶器や食器はまるで芸術品のような絵付けが施されていて、私の目を次々に奪う。

石鹸はすごくいいにおいがして、色もピンクやオレンジや水色など色とりどりだ。薔薇の形や星型や、透明で赤いハート型なんかもある。思わず食べちゃいたいくらい、すごく綺麗でかわいい！

ペンもいろいろな色でぴかぴか光っていて、金のラインで飾られていたり、花のような刻印が打たれていたり、ペン先も金色。メモ帳も、立派な布張りの表紙がついていて、金の箔押しで『メモ』と書かれている。これはちよつと欲しいかも！

孤児院ではメモ帳なんかない。お絵かきや説法会のチラシに使った紙を裏紙として使っていたから、メモ帳なんて手にとったこともない。

どれもこれも素敵なデザインで、色も形も様々だ。こんなに色味があふれているお店には、入ったこともない。なにせ、私が今まで一番目に鮮やかだったお店は、近所の青果屋さんとお花屋さんくらいなもの。

孤児院の近所の雑貨屋さんは、がたがた言う木のドアを開けると、

塗装の剥げた木の棚に石鹸やタオルやスリッパがこれでもかというほど詰め込まれていた。長く置きっぱなしのものには埃がかぶり、すべてのものは白無地で丈夫で実用性第一。

反対にここは、陳列も商品も内装も、デザインから何からきらびやかだ。その分、どれもこれも高そうに見えて怖い。

「アーシェのシャンプーがなくなってきたから、新しいのを買うよ。いつものでいいよね？」

そう言つて、ライトは棚に並んでいる容器を見ている。

それも、青やピンクなど、色々な色と形の容器が並ぶ中、見慣れた淡い緑色に、猫の絵が描いてるヤツ。見本らしきかごには、いつもの容器のほかに、花と木の絵が描いてある大きい容器2本が入っていた。見本の後ろの、売り物と思われるかごにも、3本の容器が入つて、透かしの入った薄い紙で綺麗に包まれている。なんで3本なんだろう？

疑問を顔に乗せて見ていた私に気がついたのか、ライトが容器を手にとって見せてくれた。

「これね、ペット用と人用がセットになつてるんだよ。猫好きの貴族のために、人と猫がおそろいの香りのシャンプー」

そうか、いつもライトが私と同じ香りなのは、猫用を使つてたからじゃなかったのか。

「ふふ。いつも同じ香りだなんて、恋人同士みたいだね？」

いやいやいや、淫靡な笑み浮かべて流し目くれながら何言っちゃつてんのこの人！

今昼ですよ、昼！　そーいう雰囲気をお外でダダ漏れにしないで下さいー！

ほら、お店のお姉さんの目がハートになつてるから！　お願いだから落ち着いて！

「照れちゃつて。かわいい」

言うなり、よける間もなく頬にちよんつと唇が触れる。

だからあ！　そういうのは二人のときだけでお願いしますっ！

…って、違う！　うわあん、ライトに毒されてきてるよう！

ひとしきりあわあする私に、ついにライトはお腹を抱えて笑い出す。

くっそう、またからかわれたー！　私もいい加減ライトの手口を学習しろってのよ！　毎度毎度同じ手に引っかけたて、情けない…。

ふと、見本についていた値札を見て、一瞬意識が飛んだ。

孤児院の一日分の食費と同じくらいの値段だ…。

な、なんでシャンプーごときがこんなに高いのよおおっ！

見本じゃない、紙にくるまれた方のかごを手にとって会計に向かいながら、ライトはにこりと笑う。

「ここ、王室御用達のお店なんだよ。城内で使う日用品や、貴族向けの高級雑貨を扱ってる。何でこんなもんが、って思うようなものあって、なかなか楽しいよ。このシャンプーは3本セットで、普通の人間用の2本セットと同じ値段なんだ。お買い得でしょ？」

ど、どこがお買い得よー！　元値が高すぎて全然お得に思えないんですけど！？

物がいいのはわかるけど、ここにある物はどれもこれもない口が塞がらないくらいに高い。

ライトがいつも使ってるのと同じタオルも、孤児院で買うやつのは10倍くらい高かったし、石鹸も半分の大きさで5倍くらい高かった。貴族は金銭感覚が違うんだなあ…。

ライトは顔を真っ赤にしている、会計のお姉さんの前にかごを置く。

「騎士団のライトリーク・ウォーロックだ。いつもどおりで」

「あ、い、いつもありがとうございます。では、騎士団庁舎にお届けいたします。お支払いは月末一括でよろしいでしょうか？」

「ああ、頼むよ」

「かしこまりました。ありがとうございました」

あ、そう。お支払いもしないの。いわゆる『ツケ』ってのと
おんなじ仕組みなのかしら？

サインもなしで名前だけのお買い物がまかり通る世界ですか…。

ついていけない…。

雑貨屋さんを出たライトは、中央広場に向かった。

「職人街に、お気に入りのペン職人がいるんだ。頼んでおいたペン
が出来上がったっていうから、これから取りに行くんだよ。ついで
に、色々見て歩こうと思って」

そう言っただけで掛かった広場は、私が捕まえられる前と同じ、活気
と喧騒にあふれていた。

大噴水の水の音、小さな犬を連れている老婦人、はしゃぎながら鬼
ごっこをする子供たち、忙しく行き交う商人、広場を囲むようにず
らりと屋台が並び、呼び込みの声がひっきりなしに聞こえてくる。

ライトの肩の上で屋台を冷やかして、買ってくれたクレープを頬張る。
うーん、久々の甘いジャムの味！「結構おいしいね。どう？　アー
シェ」

『うん、おいしい！』

屋台のクレープは、お城のものと違って分厚くて、高価なクリーム
は使われていない。でも、私にとってはこれが一番の味。

お祭りの日には、小さい子供達を連れて広場に繰り出して、いつもこ
のクレープを買って分け合って食べたっけ。上品ではないけど、と
っても懐かしい味。噛み締めると、胸がいっぱいになる。

ほかに、屋台は串焼きのお肉や、飴細工、一口ケーキやお肉入りのパイなど、あちこちからすごくいい匂いが漂ってくる。

大道芸人や、花売りの女の子。飴細工の屋台は、お店の人が実際に細工をしていて、屋台の前は人だかりが出来ている。広場は、たくさんの人であふれてる。

懐かしいな。

そんな感慨にふける私の耳に、遠くからがしゃんつ、と何かが割れる音が響いた。耳が拾った音には、子供の悲鳴が混じっている。なんだろっ、何が起こっているの？ どこから聞こえるの！？

視界の高いライトの肩の上から身を乗り出して、きよろきよろと見回してみるけれど、見渡せる範囲には何の異変もない。耳を澄ましてみても、雑踏の雑音が邪魔で、うまく聞き取れない。あ、また、何かを倒したような音。どうなってるの！？

様子のおかしい私に気づいて、ライトが足を止める。

「アーシェ？」

訝しげな声にも、構っている余裕はない。どっちの方向かもわからない。ああ、もう、もどかしい！

魔力を練って、それを横に切るように顔を振る。魔女の家から外に出て、初めて使う遠耳の術。ふわりと舞った魔力が耳を覆った途端、広場の音がどつと耳に押し寄せる。耳が痛くなりそうなのを堪えて、必死に音を探ると、明瞭な声が流れ込んできた。

「なんだよ、離せよっ！ 誰か助けて、ねえちゃ…っ！」

ドッ、という鈍い音と共に、男の子の声が途切れる。

ざわっと鳥肌が立った。今の声は…っ！

私はライトの肩から飛び降りた。

この先の細い路地、そこから声が聞こえてた。何であの子がここに

！ 何かに巻き込まれたの！？ 何かされたの！？

「アーシエ？ どうしたの！？」

ライトの声に構ってなんていられなかった。

私は石畳に着地すると同時に走り出す。

私の小さな体は、すぐに細い路地に消えた。

お出かけです・2（後書き）

らぶらぶお出かけと思いきや。

さて、何があったんでしょうね？

お出かけです・3（前書き）

今回ぬるいですが、戦闘・残酷・流血描写が少々あります。

お出かけです・3

「アーシェ！」

私を追うライトの声は耳に届いていたけど、それどころじゃない。遠耳の術をかけた私の耳は、狙いをつけた声と音を、雑音の洪水から絶え間なく拾う。

「ったく、てこずらせやがって」

「このガキ、派手な音立ててやがったぜ。気づかれたりしねえだろうな？」

「広場はうるさい。気づきやしねえよ。オラ、さっさと行こうぜ」
広場から離れてしまえば、雑音は少なくなる。遠耳の術を解除して、私は必死に走る。

角を曲がった路地の奥、崩れた服装の、人相の悪い男が3人、気を失った小さな子供を抱き上げていた。

周りには、店の裏口に積んであったと思われる籠や廃材、雨水をためる甕が倒されて割れ、洗濯物が散乱している。でも、運悪く、こは夜のお店が並ぶ通りの裏路地だ。こんな真昼間、人はほとんどいない。これだけ暴れた跡があるのに、誰も顔を出さないのがいい証拠だ。

きつと、襲われて必死に抵抗したんだろう。その子の顔を確認して、私の中に怒りが膨れ上がる。

『その子をどこに連れてくつもりよっ！ 離しなさい！』

叫んで地を蹴り、子供を抱えていた男に飛び掛かる。

「うわっ、なんだ！？」

顔をめがけた爪での一撃は、すんでのところで回避された。勢い余った体が、着地に失敗して石畳に転がる。打ち付けた肩が痛い。でも、この子を助けるのが先だ！

すぐに跳ね起きてふーっと威嚇の声を漏らすと、男達の顔がゆがんだ。

「猫か。しかし、いきなり飛び掛ってくるなんざ、どういうことだ？」

さすがに不意打ちで肝を冷やしたらしい男が、それでもしっかりと子供を抱えなおす。

「このチビを助けようとしてもしてんのか？」

「知るかよ、こいつの飼ひ猫かなんかじゃねえの？」

相手は男3人、私の武器はこの手の爪だけ。勝ち目はない。でも、連れて行かせるわけには行かない！

「まあいい、たかが猫一匹。邪魔なら殺しちゃえよ」

にやにやと嫌な笑みを浮かべながら近づく男たちに、じりじりと後ずさる。一人が腰から短剣を抜いた。ぎらりと鈍く光る刃に、足が震える。何も考えずに飛び出してしまったけれど、恐怖は否応なしに私を襲う。

でも、ここまできて引いたりなんて出来ない！

と、路地の角に殺気が沸いた。

かつん、かつん、と響く規則正しい靴音。気づいた男達が振り返る。

「なあ、そのバカ共。聞き間違いなら悪いけど、うちの子を殺すとか言わなかった？」

優しげで、ため息が出るほどの美貌、浮かべる笑みに、遊びなれた服装。長剣を佩いてはいても、その姿は男達を侮らせるに充分だ。ただ、私にはわかる。その姿に、尋常ではないほどの怒気がこもっているのを。

だって、私にお仕置きした時の顔と同じだったんだもん！

「なんだあ、兄ちゃん。そこのバカ猫のことか？ 殺すといったがそれがどうした？」

「邪魔するならテメエも猫と一緒にぶつ殺すぞ」

「いやいや、こいつの見た目なら高く売れるぜ。ついでだからこいつもやつちまうか」

「そりゃあい。おい、テメエ、おとなしく俺らと一緒に来な。お前のバカなペットがこんなところに迷い込んだのを恨むんだな」

へへへと、いやらしい笑いを浮かべて、男たちがライトに向き直った。

その途端、私の体にもざわりとするほどの寒気が伝わった。

怜悯な笑みは、底冷えがするほどの怒りをはらんで、細く眇められた瞳は暗く男達を威圧する。

息が止まるほどの圧力に、男達が狼狽し、一步、また一步と足が下がる。

「貴様ら、俺の大事な女を2回もバカと呼んだな」

いつそ優雅なほどの手つきで、ライトは舞うようにすらりと剣を抜いた。無造作に構えた体は一見隙だらけだけれど、不用意に切りかかれれば一瞬で切り捨てられてしまいそうなほどの威圧感をもって、無限の壁のようにそこに立ちはだかっている。

薄い笑みを浮かべていた唇が、にいつとつりあがって、酷薄さを増した。

「…生きて日の目を見られると思うな」

とん、と軽く地を蹴った次の瞬間。

「ぎゃああつ！」

短剣を持った男の手が切り飛ばされた。

「うつ、腕！ 腕エエエ！！」

銀の光がきらめいたようにしか見えなかった。目の前の光景が信じ

られない。いつも優しいライトが、笑みを浮かべたまま人の腕を切り落としている。石畳に崩れてのた打ち回る男を一瞥もしない。

私は転がった腕を直視できずに、目をそらしてうずくまる。ライトのブーツがまた、とんと地を蹴る。

「ぐわっ！」

ひゅん、と風を切る音と同時に、足を切り裂かれたもう一人の男が崩れ落ちる。

「くそ、なんだお前、なんなんだよ！」

「…その子供を置いていけ」

血染めの剣を手にしたまま、ライトはまるで、ぐずる子供をあやすような調子で男に言う。そいつはきつと武器を持っていないんだろう。子供を抱えたまませわしく左右に視線を走らせるだけで、人質にしたり盾にとる様子は見えない。ライトの一言は、温情措置なのかもしれない。

「うつ、うるせえ！ そんなことしてみろ、こっちの身があぶねえんだよ！ そこをどけ！」

脂汗をたらしながら、男が叫ぶ。

「そうか。それは残念だ」

氷のように美しい笑みに、私は一瞬目を奪われた。それはきつと、男も同じだっただろう。その瞬間。

「うおお！」

銀の軌跡が走った、としか見えなかった。

両目のすぐ下を浅く真一文字に切り裂かれて、男が白目を剥いて石畳にへたり込んだ。力を無くした両腕から、子供の体がごろりと石畳に転がった。

剣についた血を優雅に払って鞘に収めると、ライトは斬られてうずくまる男達を、まるで道端の石でも見るような目で見下ろす。

ずっと伸ばした指をぱちんと鳴らすと、うめき、もがいていた男達がぴたりと静かになり、動かなくなった。

あれは、魔女の家で見た捕縛の術だ。男達が動き出す心配は無い。

私は、石畳に転がった男の子の元に走り、近くでしっかりと確認する。間違いない、この子は。

『大丈夫！？ ジョシュ、しっかりして！』

私のいた、パシフィスト教会の孤児院の、8歳になる男の子だ。

悪ガキで、いつも孤児院を抜け出しては街に遊びに行ってしまう、困った子。けれど、両親を病気で無くしたばかりで、人恋しさは人一倍の甘えん坊。憎まれ口を叩きながらも、私を『ねえちゃん、ねえちゃん』といつも追いかけてきてた。

こんなところにいるなんて、きつとまた孤児院を抜け出して来たに違いない。そして、きつと私みたいに人攫いに襲われたんだ。

にやあにやあと声をかけながら、必死でジョシュの顔をつつくけれど、血の気がなくなぐったりしたまま目を覚ます気配が無い。

どうしよう、もしかしてこのまま目を覚まさなかったら……！ 悪い予感が、私の喉を締め上げる。

「アーシエ、どうしたの？ この子を知ってるの？」

さつきまで身にまとっていた殺気を綺麗に払拭して、ライトが私を見下ろす。

必死にうなずくと、彼ははしゃがみこみ、ジョシュを抱き起こした。関節を触ったり、呼吸や脈を簡単に確かめる。

「大丈夫、気を失っているだけみたい。安心して。警備を呼んだから、すぐここに来るよ」

にこりと安心させるように笑顔を向けられて、胸に詰めていた息をほつと吐き出す。確かに、よく見ると胸が上下していて、正常に呼吸をしているのが解った。よ、よかったあ……。

あれ、でも、警備を呼んだなんていつの間に。そんな暇あった？

けれど、数分も立たずに複数の靴音が響いて、すぐに路地の角から

紺色の詰襟の騎士様が数人やってきた。その騎士様達の前を、光の玉がまるで先導するようにふわふわと飛んでいる。

「お疲れ様です、副団長！ これですか？」

「ご苦労。この子供を連れ去ろうとしていたらしい。捕縛の術をかけてあるから、連れて行け。手当して尋問しとけよ」

ぴしりと敬礼する先頭の騎士様に、ライトはいつもの緩い調子じゃなく、堂々と命令している。

その眼前でふわふわしていた光の玉を、ライトは指先でつついて消し去る。そうか、魔術で騎士様を呼んできたんだ。便利な術もあるものねえ。

「全く、魔具で緊急招集されて、何事かと思いましたよ」

「案外大事かもしれないぞ」

ライトは意味深に笑って、近くにいた別の騎士様に、ジョシュを渡す。転がっていた男達は、傷口に布を巻かれて、手早く縄を掛けられて、あの魔女のように固まったまま運ばれていった。

ジョシュも、毛布に包まれて運ばれていく。

「副団長がそう言うなら、当たり前なんでしょうけどねえ。ところで、何でわざわざこんなところに？」

「うちの子つれて遊びにきてたんだが、目を離れた隙に姿が見えなくなってるね。迷い込んだ先がここだったんだ。追いかけてきたらなにやら物騒なことになってたから、とりあえず助けた。それだけだ」

「ああ、この子ですか、噂の猫！」

騎士様は目を輝かせながら、ライトの足元に寄り添う私を見下ろした。

「見るな。減る」

「んなわけないでしょう！ ああ、あの噂マジだったんだ。副団長が人間に飽き足らず、ついに猫にまで手を出したって……」

「どついう噂だよ。ていうか、それ流したのお前達だろう？ 出所は見当ついてるよ」

「そ、それはともかく！ ……当たりの理由は？」

怜悯な笑みを浮かべられて、雲行きが怪しくなってきたと見て取るや、騎士様は慌てて話の矛先を変える。ずいぶん砕けた感じだけけど、騎士団の人たちは皆こんなに仲がいいのかな？

「手ぶらで帰ると自分の身が危ないとか口走っていたな。…もしかして、今噂の人身売買組織がらみだったりとかな？」

くすりと笑い混じりのライトに対して、相手の騎士様の顔には緊張が走った。

「解りました。団長に報告を上げておきます」

「ああ。出張ってもらえ。それと」

ずっとライトが騎士様の耳元に顔を寄せる。

「多分、…の子供だろう…連絡してみてください」

騎士様の耳元でささやかれた言葉はあまりにも小さくて、私の耳には切れ切れにしか届かない。騎士様もうなずくだけで、何を話していたのかは解らない。誰かに聞かれたらまずい話なのかな。

…その『誰か』が、私だということなど、知る由もなく。

「で、副団長はこれから？」

「俺は非番。デート中だから口出しはしない。お前らも邪魔するなよ？」

有無を言わず言い渡し、にやりと笑ってライトは私を抱き上げた。『ま、まって、待ってよ！ ジョシュが！ 離してっ』

知らない怖い大人に襲われて、気がついたら今度は騎士様に囲まれているなんて、あんな小さな子供にとってはどれほどの恐怖だろう。せめて傍にいたい。それが出来なくとも、様子だけは知りたい。でも。

「だめだよ。心配なのはわかるけど、猫の君が傍にいて、できることは何もない」

やんわりと、でも正論を突きつけられて、私は無力感にうなだれるしかない。

私は今、何の力もない猫の身に過ぎない。ジョシュを助けることも出来ないし、付いていって付き添ってあげることかなわない。

「でも、アーシェのおかげで、あの子は連れて行かれずに済んだ。遠耳の術のおかげだね」

見上げると、ライトが優しい目で私を見下ろしている。

私も、誰かを助けることが出来た。ライトは、そう言ってくれてるのかな。

「大丈夫。傍にいないことは出来ないけど…見届けることは、できるから」

そう言って、ライトは歩き出した。

どこか、寂しげな笑みを、唇に浮かべたまま。

浮かない気持ちのまま、ライトの肩に乗って広場に戻っていく。人々の喧騒も、たくさんの屋台も、もう私の気持ちを慰めてはくれない。

「そろそろお昼だね。何が食べたい？」

『何でも…』

うなだれた私を気にせず、明るい笑顔を浮かべたまま、ライトはお店を次々に覗き込んでいく。

…ていうか、私が落ち込んでるのはともかく、刃傷沙汰をやらした直後に、よく物が食べられるわよね!?

こっちは目の前に転がった腕の残像がまだ焼きついてるって言うのに。

それよりも何よりも、ジョシユのことが心配で、とても何か食べる気分になんかなれない。

「俺は慣れっこだからさ。食べられるときに食べとかなないと、何かあるかわからないから」

そう言うライトの瞳に、一瞬影がよぎったような気がしたのは、…気のせいかな。

「あ、ここいいんじゃない? ここにしよう!」

ペットOKの魚料理中心の食堂を選んで、店のドアをくぐる。
気乗りしない私に構わず、ライトは次々に料理を注文していく。
彼はただ私に優しい笑みを浮かべてみせるだけで、私が知りたいこととは何も言ってくれない。

エビや貝のサラダ、魚介のスープ、白身魚のフライ、甘いシャーベツト。

ライトと同じメニューが、ペット用のプレートに綺麗に盛り付けられている、

だけど、ライトに言われるまま一緒に食べた食事の味は、全然わからなかった。

お出かけです・3（後書き）

もう一話続きます。ジヨシュ君はどうなったのかな？

お出かけです・4（前書き）

少々長いです。

お出かけです・4

やっぱり、どうにかしてジョシユの無事を確認したい。そばについてあげることが出来なくとも、せめてちゃんと孤児院に帰ったかだけでも、知ることは出来ないだろうか。

でも、どう言えばいいんだろう？ どうしたらライトに伝わる？

食事を終えて店を出た後も、私の頭の中はそのことでいっぱいだった。

多分、ジョシユは警備の詰め所に連れて行かれているんだろうけれど、私にはその場所がわからない。

だから、できるなら、孤児院でジョシユの帰りを待っていたいのだけれど、それをライトに伝える方法がわからない。

さっきみたいに黙っていなくなれば、ライトを心配させるだけだ。大体、伝えることが出来ても、ライトがOKをくれるかどうか怪しいし…。

『こんなところにアーシェを一人にして、誰かにさらわれたらどうするの！』

とか言っただけ許してくれないかもしれない。

あああ、一体どうしたらいいんだろう…。

悩みすぎて、周りを見る余裕もなかった。今ライトがどこを歩いているのかなんて、全然考えていなかった。

ふと気づけば、すでに広場を離れて、少し広い通りを歩いている。見慣れたお店が並ぶそこは、職人通り。この方向は、もしかして…孤児院の方向に向かっているの？ どうして？

「ペンを頼んでいた職人さんの工房が、この先にあるんだよ。たままほかの人が持っていたのを借りて使ってみたら、すごく使いやすくてね。工房を探し出して、ペンを作ってもらったんだ」

信じられなくて、目をぱちぱちしながら今いる場所を確認している私に、説明しながら歩くライトの顔は、いつもと同じ、穏やかな笑みを浮かべている。

変わらないその表情からは、何も読み取れない。

ゆっくりと通りを進んでいくことに、私の胸は否応なく高まる。程なく、古びた紺色の高い三角屋根が見えてきた。

私が育った孤児院、パシフィスト教会だ。

ここに置き去りにしてきたものはたくさんある。物も、思い出も、大事な人たちも。

にぎやかな声が聞こえる。みんな外で遊んでいるのかな。聞こえる楽しそうな声には、陰りが無い。そのことに、ほっとすると同時に、一抹の寂しさも覚える。

教会の間口が見えてきた。孤児院側の門の中で、幾人もの子供達が遊んでいる。

ボール遊びをする子、砂遊びをする子、鬼ごっこをする子、ままごとをする子。

目を凝らしてみても、そこには、ジョシユの姿はない。

どうなったんだろう。まだ帰ってきていないのかな。詰め所から連絡は行っているのかな。誰か迎えに行ったのかな。考えれば考えるほど、心配で心配で仕方がない。

肩の上から伸び上がって、孤児院の方をずっと見ている私に気づいているのかいないのか。ライトは、教会の前を少し通り過ぎたところ

ろで足を止めた。

「ここが工房だよ」

ライトに言われなくても知ってる。その店構えは、お世辞にも立派とは言いがたい。古びた木作りの小さな建物。塗装のはげたドアの上に、くすんだ真鍮の看板が下がり、シンプルに交差したペンが象られている。

ここは、気難しいベンじいさんのペン工房。頑固で怖いけれど、孤児院で使うペンは、ベンじいさんが全て寄付してくれている。ベンじいさんのペンはインクのかすれがなくてとっても使いやすい。腕もいいし、本当はとてもいい人だ。

「この職人さんは、工房に動物を入れるのを嫌がるんだ。だから、ここで少し待ってて。アーシエ、ごめんね」

すまなさそうにそう言って、ライトは肩から私を下ろし、工房の前の石畳にそつと下ろして、店のドアを開けて中に消えた。

私は、呆然と閉まったドアを見つめた。

これは、…偶然？

ライトは、さつき『見届けることは出来る』って言った。

そして、ここまできて、私を自由にした。

ねえ、ライト、どうして？ あなたは、何を知ってるの？ 私をどうしたいの？

私は…どうしたいの？

わあっという歓声で、私は弾かれたように現実を引き戻される。

そうだ、悩むのは後にしよう。今私は自由で、目の前には懐かしい孤児院がある。

高鳴る胸を抑えて、向かいの建物を見やった。

少しだけ、…少しだけなら、いいよね？

私は通りを横切って駆け出した。

そつと門に身を寄せて、首を伸ばして中をひょいと覗く。

庭には子供達だけで、シスターも院長先生も姿は見えない。

けれど、年長の子供達が、小さい子をよく見てあげているみたいだ。

「ほら、ボールを良く見て、真ん中を蹴るんだ」

「ケンカしないの！ もう、泣かないのよ。鼻かんだげるから、おいで」

「転んだのかよ。こんなんツバつけときや治るって。よしよし」

私がいなくなつてから、もう3ヶ月くらいになるだろう。私がいた頃は、こんな風に面倒を見てあげるのは全部私の役目だった。

…私がいなくなつてから、年かさの子達が成長したってことなんだろうか。

うつん、本当はこの子達に任せても良かったのに、私が全部先回りしてやってあげてたから。だから、あの子たちは私に甘えて、何もなかった。私はそれを、『しょうがないわね』なんて言いながら、ますますあの子たちに何もさせなかったんだ。

『バカだ…私』

こうして離れてみるとよくわかる。どれだけ私がこの場所に固執していたか。どれだけ『もういらない』と言われることを恐れていたか。自分に精いっぱい、どれだけあの子たちをないがしろにしたきたのか。

あの子たちは、私がいなくても大丈夫。それが嬉しくもあり、…寂しくもある。

そうして見ていると、玄関のドアが開いて、シスターが姿を現す。

優しく肩を抱いて連れてきた子は、間違いない、ジョシュだ！

「ジョシュ、だいじょうぶかよ！？」

「どこか痛いところないの？」

「心配したんだよ！」

口々に言いながら、子供達がジョシュに駆け寄っていく。

「へへっ。ご飯食ったし、全然平気だよ、このくらい！」

「また黙っていなくなった上に、騎士団に運ばれて連絡が来るなんて、とんでもないことだわ！ どれだけ心配したか！ 怪我がなかったから良かったようなものの、もう黙っていなくなったりしてはだめよ？」

照れたように笑うジョシュを、シスターが困り顔でたしなめる。

あんなに怖い目にあっただはずなのに、すっかり元気に笑っている。

ご飯も食べたのなら、きつと心配ないだろう。

よかった、本当に良かった！

この猫の耳じゃなかったら、聞き逃していただろう。

魔術を習っていなかったら、見つけれなかっただろう。

この体でなかったら、あんなに早くたどり着けなかっただろう。

この爪がなかったら、男達を足止めすることは出来なかっただろう。

もしかして初めて、私はこの猫の体に感謝したかもしれない。

もう大丈夫、本当の姿じゃなくても、私はちゃんと私を好きだから。

人間に戻るという目標を諦めたわけじゃないけれど、今のこの体を、必要以上に卑下するのは止めようと思う。私にだってできることはある。これからはもう少しだけ、この体を受け入れられそうな気がする。

それにしても、戻ってくるのがずいぶん早くない？ 私たちがご飯

を食べている間に、どこの子か調べて、連絡して帰ってきて、そのうえご飯を食べる時間もあるなんて、手際が良すぎるんじゃないかなあ？

と、ぐるぐると考えていると。

ぱちり、とジョシュと目が合った。

「あ、猫だ！」

ぐりん、と全員がこちらを振り向いて、おもわずびくりと腰が引けた。うわ、目が爛々としてるっ！

『猫だー！！』

歓声を上げて殺到した子達にあつという間に取り囲まれて、何人もの手に持ち上げられた。

「かわいいー！」

「あ、ずるい！ 私にも抱かせて！」

「次は俺ねー！」

『ぎゃああつ！ ちよつ、痛っ！ ひげも尻尾も引っ張っちゃだめっ！ もつとやさしくー！』

私の悲鳴なんか聞こえるわけもない。子供達の手には翻弄される私を、白いふくよかな手が抱き上げる。

「だめよみんな。猫ちゃんが痛がつているでしょう？ 小さい子には優しく。それと同じで、自分より小さい生き物は、丁寧に触らないといけないわ。怪我をしてしまうわよ」

す、救いの手だー！ ふっくらした体を修道服に包んだシスターが、私を優しく抱いてくれる。

しわが目立ち始めた丸い顔に、慈愛の笑みを浮かべて、私を見下ろしている。

清潔な石鹸と、どこか甘い匂い。懐かしい、私にとってはお母さんの香り。胸いっぱい吸い込むと、涙が出そうになる。

「あれ、この猫、アーシェねえちゃんと同じ色だ」

誰かが言つと、また子供達の視線が私に集まる。

「あ、ホントだ。黒い毛に緑の目」

「ほんとだー。アーシエねえちゃんの目と同じ色!」

「ねえちゃん、まだ帰ってこない…」

ジヨシュがぼつりと漏らすと、子供達がいっせいに下を向く。

「どうして戻ってこないのかなあ」

「どこに行っちゃったんだろう」

「痛くないかなあ」

「泣いてないかなあ」

「ねえちゃん…」

代わりに私を慈しむように、小さな手がさつきと打って変わって、私を優しく撫でる。

優しい子達。みんな思いやりのあるいい子ばかりだ。

みんな、私がアーシエだなんて気づかない。私はここにいるのに。

私はここだよ、元気だよって、みんなに伝えられたらどんなにいいだろう。

けれど、この子達は人間のアーシエが戻ってくるのを待っている。

猫のアーシエだよって言っても、きつと信じてもらえないだろうし、みんな困るに決まっている。私だって、ここに来る時には人間の姿がいいし、猫にされてたなんて、みんなを心配させるようなことは知られたくない。

「みんなそんな落ち込んだ顔すんな! アーシエに笑われるぞ!」

その時、大きな声を上げたのは、ウィリアムだった。孤児院では、私の次に大きい子。私がいるときには、手伝いも、小さい子達の世話もサボってばかりだったのに…。こんなに頼もしくなっているなんて思わなかった。

「アーシエに甘えてばかりいないで、自分たちで出来ることはやって決めただろ! あいつが帰ってきたときに笑って出迎えようって決めたの忘れたのか!？」

『忘れてないよー!』

ウィリアムの一喝に、たちまちみんなが顔を上げる。

「よし。じゃあみんな元気出せ。アーシェが帰ってくるまでに、いっぱい手伝い出来るようになって、びっくりさせてやるうぜ!」

「そうよ、みんな。アーシェは必ず元気で帰ってくるわ。だから心配しないで。ね?」

ウィリアムったら。すっかり立派なお兄さんになったのね。シスターの一言もあつて、みんなはすっかり笑顔になった。

私がいなくても、もう大丈夫なんだね。

寂しいけど…、私もいつまでも孤児院にはいられない。成人したら、孤児院から出て行く決まりがあるから。

だから、これはいい機会だったのかもしれない。

「ねえ、抱いてもいい?」

「わあ、おとなしくてかわいいね!」

「やさしく、優しくだよ」

「俺、撫でたい!」

今度はみんな慎重に私に触れる。

小さな手に撫で回される私の視界に、長身の影が落ちた。

子供達にもみくちやにされたまま、門前に立ちすくむライトと私の目が合う。

感情のこもらない目。まるで、試してるような。

じっとまっすぐに見つめられて、どうしてか後ろめたい気持ちになる。ここにいてって言われたのに、また黙っていなくなったのは悪かったけど、ライトから逃げようとか、孤児院に戻ろうとか思ったわけじゃない。

ただちよつとだけ、ジョシュを、シスターを、みんなを見たかっただけ。そうして、安心が欲しかっただけ。

言い知れない不安で、私はその視線から目をそらせない。
でも、不意にそれがさびしそうな顔に変わって、ライトがくると
背を向けた。

愕然として、私はその背中を見ていた。

いつも、仕事に行く時の見せる堂々とした背中とは違う。
全身が水を浴びたようにざっと冷たくなる。

胸が痛い。息が苦しい。

どうして。なんで。そんなあきらめたような顔するの？
そんな顔で、平気で私に背中を向けるの！？

離さないって言ったじゃない。
愛してるって言ったじゃない。

どこにもやらないって言ったじゃないっ！

『ライトッ！』

叫んで、弾かれたように飛び出した。

遠ざかる背中に飛びつき、夢中で爪を立ててよじ登る。

「いてっ！　ちょ、爪！　爪立ってる！」

なんて悲鳴を上げてるけど、かまうもんか！

上りきって、私はライトの首にしがみついた。

『やだやだやだ、置いてかないでっ！　ライトと帰るもん！　お城
に帰る！　一人にしないで！！』

後ろからライトの首にぶら下がったまま、ぶみゃー、ぎにゃー、と
ぶっさいくな声で騒ぎ立てる私を、大きな手がひょいと持ち上げた。
そして、そのまま硬い胸にぎゅっと抱きしめられる。

あったかい。ライトの匂い。私と同じ、でも、ときどきして、切な
くて、安心する、ライトの匂い。押し付けられた胸から、私の全身

を打つような強い鼓動を感じる。

「落ち着いて、アーシェ。君が店の前からいなくなったから、探しに来ただけ。まだ用事は済んでないから、置いて行ったりしないよ」
なだめるように、ライトの手が私を撫でる。

でも、いつもと違ったライトの背中、私を置いていきそうだったものの！

嫌だ。ライトと離れたくない！ 必死にすがりつく私の耳に、かすれた小さな声が落ちてきた。

「…いいの？ アーシェ。ここの方が、君にとっては幸せかもしれないよ？」

耳に落とされた、声ににじむ震えに気づいてしまう。

ぎゅうつと抱きしめる手の震えに、気づいてしまう。

それに。

私の気持ちにも、気づいてしまう。

ここに『帰ってきた』って思わなかった。『懐かしい』って思った。それが変だとは思わなかった。でも。

『懐かしい』って思うのは、ここがもう過去になったからなんじゃないか、って。

私の帰る場所は、ここじゃない。

私が帰りたいのは…ライトの所だって。

『ライトと…帰る』

にやう、と小さく鳴くと、ライトは切なさそうに笑って、私の頭にキスを落とした。

「あら、猫ちゃんの飼い主さん？」

子供達と一緒に、シスターがゆつくりと歩み寄ってくる。

柔和な笑顔、包み込むような雰囲気、暖かい声、優しい手。まるで
お母さんみたいだった、大好きな人。

「すみません、うちの子が迷い込んでお騒がせしました。連れて帰
ります」

「そうですか。迷子かと思って心配しましたわ。よかったわね」

ええーなんでーやーだーと騒ぐみんなをなだめながら、シスターが
私を覗き込む。

今までありがとう、シスター、みんな。

私は、ここじゃない場所で生きていく。ライトの、傍で。

心配かけてごめんなさい。でもきつと、人間に戻って、顔を見せに
来るから。

今まで、ありがとう。

ライトが店でペンを受け取り、みんなが手を振って見送ってくれる
のを、通りの向こうに見えなくなるまで、私はライトの肩の上でず
っと見ていた。

さらわれてから、私はいつも孤児院に帰りたいって思ってた。

魔女の家は寒くて暗くて、いつでも温かった孤児院を思い出して
は毎晩泣いていた。

ライトの部屋は広すぎて静かで、狭くてもうるさくても落ち着く自
分の部屋が恋しかった。

でも、いつの間にか、ライトの部屋が帰る場所になっていた。

泣きたいときには抱きしめて暖めてくれた。

元気がないときもいつでも笑顔でいてくれた。

一緒にご飯を食べて、一緒にお散歩して、一緒に眠って。

朝起こして、お見送りをして、キスをして。

寂しい時には優しく撫でてくれたし、いつでも私を気にしてくれていた。

それが、当たり前になってた。これが、私の日常になってた。

いつからかなんて、わからない。だって、さっき初めて気づいたんだもの。

私を抱いたまま歩くライトを見上げると、やっぱり切なそうに笑って頬にキスを落とされる。

「アーシエ、俺はもう絶対離さないよ。君がもういやだって言っても、俺の傍に縛り付ける。覚悟しておいて」

そう言ったライトの頬に、私は頭をすり寄せる。何度も、何度も。

いいよ、もう。猫でも人間でも、なんだっていい。だって。

背中を向けられると、痛い。

目を反らされると、悲しい。

その手が触れてくれないと、物足りない。

キスだって、待ってる自分がある。

好きだって言ってほしい。

そばにいたい。

もうだめ。あきらめる。こんなにあふれたら、ふたなんか出来ない。

私、あなたが好き…。

お出かけです・4（後書き）

決別と、気づいた気持ち。

閑話・ライト 団長室（前書き）

というわけで、団長登場。

閑話・ライト 団長室

さて、明後日はアーシェとデートだ。休暇は、実はもう取ってある。孤児院の前のペン工房にペンを発注して、引取りが明後日の予定になっていた。

最初から、アーシェには久々に孤児院を見せてあげようと思っていた。だから、孤児院に近く、自分が尋ねて行っても違和感がない店を探して、どう口実をつけて連れ出そうかと思っていたけれど、仲直りのデートという大義名分は実に都合が良かった。

そこに至る手段は我ながら褒められたものではないと思うが、ま、結果オーライということだ。

それはどうあれ、アーシェとの初デート。何を着て行こうか？ どんなお店を見ようか？ どこでご飯を食べようか？ それを考えるだけで、勝手に頬が緩む。

片方鉾が取れて、プレートがぶらんと情けなく下がってしまったドアを、しまりのない顔で開けた瞬間、弾丸のように弾き出された物を、反射的に手のひらで受け止めた。鋭い痛みを目を剥く。

「いってえ！」

手のひらにころんと転がった、にぶい金色に光るそれは、間違いない。

「直しとけよ」

低く、腹に響くような渋い声の持ち主こそ、この部屋の主、騎士団団長、レイド・グランツ。

夜空のように深い黒に近い紺色の髪を、ざつと無造作に後ろに撫でつけている。背が高く、筋肉が盛り上がったがっちりとした体格。野性味あふれる彫りの深い顔立ちは、どこか異国の血が入っている

のだろうか。つり上がった三白眼のせいでかなりの悪人面に見えるが、顔の造りは渋めに整っている。

平民出だが、剣の才に優れ、王軍でめきめきと才能を発揮し、20代で一個師団の団長を任されるまでになった。今から5年前、31歳の時に騎士団長に抜擢され、以来、ライトリークの上に絶対的に君臨する鬼上司だ。

ライトリークの軽口にも動じないし、挑発にも乗ってこない。かと思えば眼光一つで黙らされてしまう。どうにも頭が上がらない存在ではあるのだが、ライトリークはこのレイドという人物が嫌いではなかった。

おそらく正面の席から指弾で撃ち出したろうのだが、そんな雰囲気や微塵も見せることなく、レイドは淡々と机の上の書類にペンを走らせている。受け止めた手のひらの鋏にため息をつき、ライトリークは下がったプレートを直し、鋏をねじ込んでしっかりと止める。

それからきつちりとドアを閉め、レイドの席の右に直角の位置に配置された自分の執務机を見て、また目を剥いた。

「なんだよこれ！」

「1時間の間に溜まった書類だ。驚くこともあるまい」

「驚くに決まってるじゃない！ てかアンタ、俺の代理承認で済む書類全部まわしてるだろ！？」

ライトの机の上の未決済書類の箱は、箱のふちより上まで積みあがった書類の束がその存在を主張している。30分サボった前回は何もされなかっただけに、余計にちくちくと責められている気分だ。

「…一時間の職務放棄を黙って見逃してやったんだ。ありがたく思え」

迫力のある三白眼にじろりとねめつけられて、さすがに後ろめたいライトリークは渋々引き下がる。

「大体、俺がお前の分まで仕事を肩代わりしてやるような親切な男

に見えるか？」

「いいえ、全然ちつとも全くさっぱりこれっぽっちも！ 思いませんね」

「よくわかってるようで何よりだ」

嫌味をたつぷりと込めた返事にも、ふんと鼻を鳴らして動じる様子もない。ちつと行儀悪く舌打ちをして、ライトリークはすぐすこすこ席に戻った。

団長室は男所帯らしく、全体的に物や書類が散乱していて、乱雑だ。一応しつらえられている来客用のソファの上は、使用済みの手ぬぐい、訓練用の胴着、仮眠用の枕と毛布に占領されていて、テーブルの上にはいつ使ったのかもわからないカップが置き去りになっている。行き場のない書類も無造作に積み重なり、埃をかぶっていて、触れれば部屋中に埃が舞うのは確実だ。

壁一面の棚は、過去の資料が紙紐で綴じられたものが詰まっているが、途中でその作業もなくなったのだろう、綴じていない書類がどんどん詰め込まれるに任せていて、目も当てられない状態だ。

過去の資料を探すのも苦労する有様なのだが、ライトリークもレイドもそこまで手が回らない。

部屋付きの従卒はいるのだが、一人でレイドとライトリークの使いっ走りさせられている為、やはりそこまで手が回らない状態だ。そもそも、整理整頓はやはり女性でないと、男手ではどうも大雑把になって具合が悪い。とはいえ、女性騎士は貴重な人手であり、ここに缶詰にさせるわけには行かないのが現実。

本当は西棟付きの侍女にやってもらえばいいのだが、行儀見習という名目の男漁りにいらしている貴族の娘は全く使えなかった。3人ほどに試させてみたが、やる気がないせいか、いずれも書類を分類することすら何度教えても出来ず、拳句の果てに『こんな仕事

をするために行儀見習に上がったのではない』と親から抗議と苦情を受け、いつの間にか配置転換で別棟勤務となり、姿を消していた。なにしろ、貴族の娘というのは、お茶やお菓子のお味にはうるさくても、物の整理整頓や片付け、掃除などは、下働きのやることと思っている。西棟はほかの勤務場所と違い、実務優先だ。いくら狙い目であるライトリークの存在があっても、侍女に不人気な職場なのだった。

というわけで、今は荒れるに任せている執務室で、しばし二人は書類を裁くことに専念する。

紙を擦る音、さらさらと走るペンの音、ぽんと小気味よく押される印の音。しばらくはそれらがシーンとした団長室を支配していた。

それにしても、思い出すのはアーシェのことばかりだ。

笑った顔、恥ずかしそうな顔、落ち込んだ顔、真っ赤な顔。

本人は、人であることは誰も知らないのだと思いこんでいるからか、まったく表情を隠さない。だから、アーシェのくるくる変わる表情が愛らしくて仕方がない。恥ずかしくて真っ赤になっているのは、毛皮に隠れて見えないけれど、鼻が熱くなっているからすぐわかる。アーシェは根が素直だからか、考えていることも大体わかる。意思の疎通は難しくはない。

アーシェがにやあにやあ言っているのに、自分と普通に会話が成立していることは、そろそろ気づくだろう。この状況を引っ張るのも限界だ。

「おい、手が止まってるぞ」

かけられた言葉にびくつと肩が上がった。けれど、ため息混じりにペンを投げ出すと、じろりとにらまれる。

…そうだ、心配事はここにもあった。

「ねえ、団長。あんたも犬でも飼って見たらどう？」

「いきなりなんだ」

振った話に訝しげに眉をひそめる視線を無視して、ライトリークはぎしりと背もたれに寄りかかり、頭の後ろで手を組んで嫣然と微笑んだ。

「あんたも俺と同じで、身を削って生きてる気がするからさ」

「今更言うことか。この職で、そんなもの氣にしてなんになる」

こともなげに言われて、ライトリークは苦笑する。

今したいのは、そんな話ではない。

「まあそういわず。部屋で待っててくれていると、帰ったときにぎゅーっとしたくなるよ。心の底が熱くなる。涸れた心が潤うんだ。かわいくて、愛しくて、離れたくない。あんたならわかると思うけど」
「お前にしてはずいぶんとかわいい物言いだな。熱でもあるのか？」
本気で嫌そうに顔をしかめられて、ライトリークは肩をすくめた。
そして、ふっと挑戦的に笑って見せる。

「いい子がいるんだけど、どう？」

「だからな、」

「俺と同じ髪の色、金茶色の小型犬だよ。気性は優しくて穏やかで、頭が良くて絶対あんたの邪魔にはならない。一人の飼い主を思い続ける一途さがあって、今でもその思いは変わってない。今は華月宮にいて、一人ぼっちで飼い主が来てくれるのを待ってるんだけど。」

「まだ、戻る氣にならないの？」

言いかけた機先を制し、剣呑な氣配をはらんで言い放たれた最後の一言に、ようやくその意図を悟ったレイドが一瞬顔をゆがめた。

5年前、惹かれたのは、目の前の部下と同じ名家の名を持つ彼の人。

交わした思いは、淡い雪のように柔らかく、美しく、儚く消えた。
ただ一夜、熱帯夜のように濃密な記憶は、今でも鮮明に覚えている。
…伝えそこなった言葉は、まだ、喉の奥に張り付いたままだ。

「…俺には過ぎた名犬だ。飼えるわけが無い」

「血統書なんて、あんたがさらってしまえば消えてなくなる。本当はあいつも、それを望んでる。だから、ずっとここで待ってる。あんたならわかつてるはずだよね？」

視線を戻して再びペンを走らせながらの言い訳じみた言葉を、ライトリークはざつくりと斬って捨て、追い詰める。

眉間のしわが、さらに深くなったような気がした。

「わかつていてどうなるものでもない。大体、名を、家を捨ててどう生きる。俺のように平民出の血なまぐさい男に飼われて、幸せになるとは限らんだろう」

「捨てても捨てなくても生きられない。だから、あいつは華月宮に逃げたんだ。自分が傷つきたくないから。自分を守る為に」

レイドの眉間に深く刻まれているしわは、ここ数年晴れたところを見たことがない。

5年前の一時期、姉と共に過ごすこの男が、どれほど穏やかな気配をまとっていたか。

この男と過ごす姉が、どれほど幸せそうだったか。

今なら、それがよくわかる。

その時はそれを羨ましいと思うことなどなかったが、アーシェという宝石を手に入れた今ならば。

この二人もまた、お互いがお互いが必要としているはずなのに、そのすれ違いが、もどかしくて仕方がない。

「あいつは誰かと共に生きる選択肢を自分からは放棄してしまった。

だから、あんたを待つしかないんだ。あんたが来ない限り、あいつはあそこに閉じこもったままだ。知ってるだろ、あいつの一途さはひっくり返せば頑固ってことだ。おとなしく待ってて出てきてくれるような性格なら、5年も立ち止まってないよ。あんたが無理矢理引きずり出さなきゃ、絶対出てこない。断言できるね」

「…お前の言いたい事は良くわかった。が、そろそろ無駄口は終わりにしておけ」

奇襲は成功したようだが、もう立て直したか。静かで揺るぎない声に、ライトリークは追求を諦めた。

逃げただろう、という言葉は言わずにおいた。多分、それは一番、レイド自身がよくわかってるはずだから。

未だ、姉の存在だけが、レイドを揺らがせる。そんなことぐらい、本人もわかってるだろうけれど。

この男は、普段は何事にも動じないような顔をしておいて、その実決して物分りのいい方ではない。じりじりと5年くすぶった想いは、何かのきっかけがあれば決壊するだろう。

むしろ、5年もよく我慢したものだ。適度に煽ってやって、さつさと行き遅れの姉を引き取ってもらうとしよう。

それにしても、今までレイドにこの話題を振ったことなど一度もなかった。他人に説教だなんて、自分もらしくないことをしたものだ。アーシェの世話焼きが移ったのだろうか。

めったに表情筋の動かない男に、たった数分で半年分くらいの表情変化をさせたことに溜飲を下げ、くすりと笑ってライトは再びペンを取って、書類の決裁に没頭した。

閑話・ライト 団長室（後書き）

ドアのプレートはライトが直しましたw
エルサーナのお相手は、団長さんでした！。
レイドはライトを手のひらで転がす人です。

不安

その日、お仕事を終えて帰ってきたライトは、それはそれは沈痛な面持ちだった。どうしたのかと首を傾げる私にも、悲しそうに笑って頭を撫でるだけで何も言わない。

何かあったのかな。

心配でそばを離れない。

夕食が運ばれてくるまで、応接室で難しい顔をしながら書類をめくるライトの膝の上に座っていたけれど、視線は紙の束に落としたまま、黙ってゆつくりと私を撫でるだけだ。

夕食の最中も時々様子をうかがってみるけど、どうも進みがよくないし、上の空に見える。

夕食の後、最近にしては珍しくお酒を持ち出し、行儀悪くソファに伸びたお腹の上に私を乗せたまま、ちびちびとグラスの中身を舐めている。

ライトの体温を感じながら、ライトの鼓動を聞きながら、つかず離れずリズムを刻む自分の心臓の音を聞きながら、その安心感と心地よさにまどろみかけるたびに、時々吐き出される盛大なため息に引き戻される。

確かに心配だけど、さすがにここまでされるとうつつうしくて仕方がない。

「はあ……」

ゆつくりとした手つきで私を撫でながら何度目かのため息をつかれて、さすがに我慢の限界だ。むくりと起き上がって胸の上に乗り上げて、上からライトをひたりと見つめる。

『なんかあったんだったら早く言えばいいじゃない。ため息ついて

たつて何も解決しないわよ？」

うにやうにやと話しかけると、ライトは瞳をぱちぱちさせてから苦笑した。

手に持ったグラスをテーブルに戻してから、いとおしそくに頭から尻尾まで指先で撫で下ろす。

ぞくりとした感覚は、ごくりとつばを飲み込んでやり過ごした。

「ごめんね。面倒なことになったから、憂鬱で」

それからまた、渋い顔になってはああ、と大きくため息をつく。だからあ！ さつさと言って楽になっちゃえばいいじゃない！ いい大人が歯切れが悪いわね！

イラついたのが伝わったのか、ライトは困ったような顔で口を開いた。

「あさつてから、陛下が国境の砦に視察に行くことになってさ」

『ふむふむ』

「護衛団担当で同行する予定だった部隊長がやはり風邪でダウンしちゃってさあ。代わりに俺が行かなきゃなくなっちゃって」

『ほうほう、それで？』

相槌を打った瞬間、くわつと目を見開いたライトががばりと起き上がった。

「5日間！ 5日間だよ！？ アーシエなしで、男臭い野郎どもと5日も過ごすとか何の罰ゲームだって話だよ！ あああ、嘘だろ、アーシエと引き離されるなんてー！ 俺耐えられない！ アーシエがいなきゃ死ぬー！」

私を抱いてソファの上で悶えるこのバカ、どうしてくれようか…！ とりあえず、鋭い爪をひらめかせて、鼻の頭に引っかき傷を作った。

「いつてえ！」

と叫びながら床の上に転げ落ちるライトを尻目に、私はくあ、とあくびをしてソファの上で丸くなる。たいしたことないわよ、後で治療師に治してもらえばいいだけだもん。

「ちよつと、アーシェひどい！ 冷たい！ 俺がこんなに別れを惜しんでるのに、なんとも思わないの！？」

思わなくはないけど、ライトがあんまりバカすぎていまいちそんな気になれないっていうか。

お仕事してる時はかつこいいのにねえ？ なんで普段はこうなんだろう。いつもキヤーキヤー言ってる侍女さんたちに見せてやりたいわ。『惜しめばいいじゃない。好きなだけどうぞ』

ちら、と目だけ向けると、ライトはそれはそれは情けない顔で床に三角座りをしている。

「俺がこんなにアーシェのこと好きだって言ってるのに、どうして信用しないかなあ」

『はいはい。私も好きですよー』

「…今ものつすぐく適当に返事しなかった！？ てゆーかあくび交じりってどうなの！？」

あーもーめんどくさ。なんなのこの人。仕事なんだし、子供じゃないんだからいい加減諦めなさいよ！

「わかった。もういい。行ってくればいいんだろ」

ふてくされたように立ち上がり、テーブルの上のグラスをとりあげ、残った液体を煽って空にする。

それから、どさりと私の隣に座って、首を傾けて斜めに私を見た。受け止めた視線に熱がこもっているのを感じて、弾かれたように起き上がる。

気だるげな流し目は私を容赦なく絡め取る。まずい、スイッチ入っ

たっばい!?

「その代わり、アーシェのこと補充させて?」

言うなり、逃げ出そうとしたところを捕まえられて組み敷かれた。

ちよつとちよつとちよつとーっ! 補充ったって、出発はあさってなんでしょう!? 今補充してどーするっ!

…って言つて聞かないのがライトなわけで。

『ん…ぐ…』

唇を重ねられて、愛撫するように指で耳元をくすぐられる。優しく擦り付けるように唇を探られて、思わず小さく開いたら、舌を舐められた。

『やうっ!』

…お酒の味。かあつと体が燃える。

「アーシェの口、小さいからこれ以上入れられないか。残念」

とろりとした艶をまとった笑みを口元に浮かべながら怖いこと言わないでー!

「離れたくないのはほんと。俺が、アーシェを離したくない…」

指先が、鼻、唇、あご、首…、そして胸の真ん中をつつとたどって、めまいがする。

「まるで病気だ。自分でもわかつてる」

じわりと手のひら全体で揉むようにお腹をさすられる。二度、三度と、角度を変えて唇が重ねられる。

「『今の』アーシエは猫なのに。ごめんね、追いつめるみたいなこととして。こんな俺、怖いよね」

鼻に、耳に、額に、目元に、頬に、唇に、いくつもいくつもキスが落ちる。

触れたところがじんじんして、まるでやけどしたみたい。

でも、嫌じゃない。もっとして欲しい。

私の気持ちが変わったから、だから、ライトにされるすべてを受け入れたい。

「でも、だめなんだ。アーシエがいないと、俺は俺でいられない…」

苦しそうな声。私を押さえつけている手は震えていて、まるでがつているみたい。

首に噛み付かれる。お腹に顔を埋められる。大きな手が、お腹を、下肢をまさぐる。

「や…だあ」

鳴き声を上げると、ぎゅうつと抱きしめられた。

「アーシエ、アーシエ…愛してる。離れないで…」

かすれた声が、まるで泣いてるように聞こえた。

出発の朝。

あれから、ライトの様子はいつもと変わりなく、他愛もない話をしたり、じやれたりキスしたり、昨日の夜はまた『補充』と称して散々いやらしいことをされまくった。

三日前の揺らぎっぷりは微塵も見えなかったけど、きつと、隠して

いただけだと思う。

だって、今また私の前に制服姿で立つライトの瞳は、どこか翳っていて、焦点がなかなか定まらない。

どうしてこんなに、私に執着するの？

私がいないと、本当にだめなの？

どこに、あなたの弱さがあるの？

それが、私にはわからない。でも。

「アーシェ……」

ライトが、ソファに座る私の前に跪く。

震える声で呼ぶ。祈るように、私の鼻先に額を押し付けて。

私には、そこまで根深いライトの不安を取り除く術はわからない。でも、せめて。

『ライト』

にやあ、と呼びかければ、不安げなライトの顔が上がる。

伸び上がって、その額と、両方の頬と、唇に。

そっと、キスを。

「アーシェ……」

『大丈夫よ。ちゃんと待ってるから。だから、早く行って来て！』
うにやっ！ と前足で扉を指差すと、ライトは情けなさそうに笑った。

「ごめんね。後ろ向きになりすぎた」

そう言って、今度はライトから唇にキス。

一瞬目を伏せ、すっと立った彼には、もう不安の残滓はかけらもない。
いつもの、強くて不敵で頼もしいライトだ。

「じゃあ、アーシエ。行ってくる」

『行つてらっしゃい』

にゃあ、と答える声に、いつものようににこりと笑って、ライトは身を翻す。

ふわりと舞ったマントに目を奪われているうちに、ライトの体は扉の向こうに消えた。

ぱたん、と扉が閉まる。しーんとした静けさが、耳に痛い。
いたたまれなくて、私はそつとうつむいた。

迷路

ライトの不在は5日間。

国境の砦までは、往復に二日かかる。視察は3日間だそうだ。

ライトがいなくて耐えられたのは、最初の1日だけだった。

しーんとした部屋に耐えられない。

広いベッドに耐えられない。

一人ぼっちの食事に耐えられない。

「ただいま」って開かれることのないドアに耐えられない。

ライトの存在がないことが、さびしくてさびしくて仕方がない。いつの間に、こんなにライトを好きになってたんだろう。

『猫なんだから』って、ずっと自分に言い聞かせてきた。

ライトが触れるのは、私が猫だから。

猫相手だから、本気にしちゃダメ。

猫相手だから、気にしちゃダメ。

猫相手だから、勘違いしちゃだめ。

猫にしてるんだから、ときどきしちゃだめ。

私は猫なんだから、好きになっちゃだめ。

ライトを、好きになっちゃだめ…。

そうだ、ずっとそんな風に思ってた。でも、こうして考えたらそれって、ライトのことを意識してるからだ。

だったら私、最初からライトのことが好きだったってことじゃない。どうしてなんて、考えるまでもない。

あんなふうに助けられて、優しくされて、大きな手で触れて、温かい胸で抱きしめて、柔らかくキスなんてされたら。

好きになっても仕方ないよね。

たくさん時間があつたから、いろんなことを考えた。

どうしてライトは私にキスしたり触ったりするんだろう。

最初のうちはペットとのスキンシップかと思っていたけれど、それにしては触れる唇も指にも、こもる熱が高すぎる。

私だって、町でペット好きの人たちを見ていたから、多少のキスやふれあいがあってもおかしくないのは知ってるけど、ライトのそれはどうにもそのレベルを超えていると思う。

ライトがたたび口にするやらしい言葉や、愛してるの言葉。背筋を震わせる熱情を込めたそれは、戯れたとは思えない。

でも、まさか猫に本気で？

そこに行き着いてしまうと、それもまた違うような気がするし…。

初めてここに来た時から、私の食事は人間と同じものだった。食材も、味付けも。

普通猫に食べさせるとは思えないデザートやお菓子も、人間のものばかりだった。

アクセル様に捕まったとき、あの人は首輪に追跡の魔法がかかっているって言った。

魔女にかけられているのは、変化の術のはず。

…私が困っている時、ライトが必ず来てくれた。じゃあ、追跡の術をかけたのはライトなの？

でもそうだとすると、変化の術はどうなってるの？ 首輪にかかっているんじゃないの？

それに、この間街に出た時に、ジョシュを気にする私に、『見届けることは出来る』って言ったこと、あれがずっと引っかかっている。だってそのあと、孤児院のすぐ傍のベンじいさんのペン工房に連れて行かれて、一緒にいるときには私を片時も離さないライトが、見ておいでといわんばかりに私を店の前に置いていった。

おまけに、ジョシュは私達があそこにつく前に、もう孤児院に戻ってきていた。…手際がよすぎる。

『補充』されたときも、ライトは言ってたじゃない、『今の君は猫なのに』って。

それは、前は違ってたことだよね？ それを知ってるから、あんな言いかたしたんだよね？

それに、どうして私ライトと会話できてるの？

最初は話が通じないと思い込んでた。だって、私は「にゃあ」としか言えないもの。通じるはずがないって思い込んでたから、ずっと気づかなかった。

よくよく考えれば、ライトとちゃんと会話が成立してる。

ライトは私の声だけじゃなくて、仕草や表情を見てる気がする。姿形は猫でも、考えることまで猫にはなれない。だったら、人間の思考を読み取ると思えば、ライトには難しいことじゃないのかもしれない。

私の名前だって、偶然じゃなかったんだとしたら。

…ライトは、もしかして私が人間だったって知っているの？

私が誰かも。

どこに住んでいるかも。

元の姿も。

本当は、ライトは知っているんだとしたら？

もしそうなら、全部つじつまが合う気がする。

ライトが私を飼ってる本当の理由はなに？

どうしてライトは、私に全部知ってるんだよって言わないの？

ライトは、私のどこが好きなの？

私のこと、どこで知ったの？

もしかして、本当に猫の私が好きなの？

ライトは、私が好きなの？ 猫が好きなの？

もし私が、人間に戻れたら。
戻ってしまったら。

ライトは、…私を好きでいてくれるの？

それを考えたら、暗い穴の中に落ちていく気がした。
ライト、私は何を信じればいいの…？

人間に戻るのが怖い。

ライトに嫌われるのが怖い。

ライトがどう思っているのか、知るのが怖い。

どうしたら、ライトのそばにいられるの？

そばにいるには、人間に戻っちゃいけないの？

人間の私でも、ここにいさせてくれるの？

戻りたいのに、戻りたくない。

私はどうすればいいの？

お願い、誰か教えて…。

迷路（後書き）

アーシェちゃん、悶々と考えるの巻。

憂いと告白

1日目、いつもどおりにお散歩して、ご飯を食べて、お部屋でごろごろしてた。多分、普通に過ごせたと思う。ただ、隣にライトがないだけ。

でも、その夜はなかなか眠れなかった。

ベッドが広い。隣が冷たい。ベッドに満ちるライトの匂いだけを頼りに、朝方やっと眠りについた。

2日目、お散歩しても全然楽しくない。いつものお気に入りの場所でも、気づけばぼんやりとライトのことを考えてしまっている。今頃何をしてるんだろう。視察して何をするのかな。笑っているかな。私のこと、忘れていないかな。

それに、なんとなく、今は危ない目にあってもライトは助けに来てくれないだろうなってわかるから。そしたら、外に出るのが怖くなった。お部屋に戻って、あとはもう一步もそこから出なかった。

ライトがいない。そのことが、じわじわと身に染みてくる。

3日目、夜も良く眠れない。ライトの匂いだけじゃ足りない。夜中に目が覚めて、ベッドの広さに泣きなくなった。いつも擦り寄っていたぬくもりがない。抱き寄せてくれる腕がない。さびしい。さびしい。

動かないでお部屋でごろごろしてるせいか、お腹が減らない。いつも食べていた量が食べられなくなった。

どうしちゃったんだろう。

前まではどんなにづらいことがあっても、ご飯だけはちゃんと食べることが出来ていたのに。

いつどんな時でも、ご飯を食べれば大丈夫って知ってるはずなのに。

4日目の今日、なかなか食事が進まない私を、エルサーナさんが心配そうに見ていた。

私の3食の食事は、いつもライトが用意してくれていた。

ライトが仕事で来られないときには、年配の下女さんが応接室に食事を運んでくれた。

けれど、今回長期間城を空けるためか、ライトは私の世話をすべてエルサーナさんに任せていた。エルサーナさんは、お仕事の合間にこまめに来てくれるし、侍女長補佐だけあって気遣いもこまやかだ。前に王妃様のお茶会で、『俺がいない間の世話を頼める』って言うてたのは本気だったんだなあ。

きれいで、優しくて、いいにおいがするエルサーナさんは、ライトとは違った意味で、ほっとする空気をもっている。だから私も安心して、ご飯もお風呂もブラッシングも全部、エルサーナさんに甘えることができた。

けれど、食欲だけはどうにもならない。

応接室に移された私の昼の食卓に並ぶのは、鶏肉のフライ、豆を裏ごししたスープ、野菜のマリネ、ふわふわの白パンにフルーツ。

私の好きなものばかりが並んでいる。すごくおいしい、それなのに、半分ほど食べたところでお腹がいっぱいになってしまった。

たくさん残っているお皿の中身。残しちゃいけない、もったいない。作ってくれた人に失礼だ。

それはわかつているのにどうしても喉を通らない。

うなだれてため息をつく、ソファにゆったりと腰掛けたエルサーナさんが、心配そうに私の頭を撫でる。

「どうしちゃったのかしら。ライトがいなくて寂しいの？ 明日には帰ってくるのよ。元気を出して、もう少し食べられない？」
気遣わしげな言葉に、申し訳なくしてしまうが。そうは言っても、もうお腹いっぱいだしなあ。

仕方なく、フルーツだけは全部平らげて、後は下げてもらう。

自分でもこんなにおかしくなるなんて思わなかったんだもん。食べていないつもりはないんだけど、お皿に残った量は、我ながら目に余る。だって、勝手にお腹いっぱいになっちゃう。自分でもどうしてこうなるのか、全然わけがわからない。

食卓からソファに移動して丸くなると、銀のカートに食器を片付けたエルサーナさんが、私の隣に座った。

「こんなに元気がなくなってしまうて…。ライトに怒られてしまうわね」

いたわるようにやさしく撫でくれる柔らかな手。元気がないわけじゃない。たださびしいだけ。でも、ごろごろしてばかりいるから余計にそう見えるのかな。ごめんなさい、後でライトには怒らないようにちゃんと言っとくから！ 多分、通じると思うし。

「それにしても、本当に綺麗な緑の目。ライトがかわいがるのもわかる気がするわ。あの子みたいな綺麗な目だもの…」
悲しそうに呟くエルサーナさんを見上げる。

あの子って誰？ 緑色の目がどうしたの？ エルサーナさんはどうしてそんなに悲しそうなの？

ライトが私を拾ったことと、何か関係があるの？

むくりと起き上がり、私はエルサーナさんの侍女服の膝に上がって、ちょこんと腰を下ろした。

『聞かせてください。どうして私をかわいがるのか、私はその理由

が知りたいです』

エルサーナさんの揺れる瞳をまっすぐ見上げて、にやあ、と話しかけると、彼女は儚く微笑んだ。

「あら、こんな話に興味があるなんて、変わった子ねえ。…でも、ずっと誰にも話せずにいたから、吐き出してしまいたい。聞いてくれる？」

その言葉にうなずくと、エルサーナさんは私を撫でる手を止めて、窓から遠くを見た。憂いを秘めた瞳で、思い出するように。

「ライトはね、3歳の時に誘拐されているの」

桜色の唇からつむがれる言葉に、私は目を見張る。

私だつて襲われたときは怖くてたまらなかったのに。3歳でなんて…どんなに怖かっただろう。

「私も5歳の時の話だったから、どうしてさらわれたのかは覚えていないわ。おおかた身代金目的か政治的目的なんでしょうけど…。その時、ライトのほかに、たまたま一緒に遊んでいた女の子も、巻き込まれて連れ去られてしまったの」

静かに話すエルサーナさんの表情が、悲しげに沈む。

「その子は、ウォーロック家の庭師の娘だった。ライトは無傷で助かったのだけど、その子は、…殺されてしまったの。私はもう、その子の顔も思い出せないけれど…、あなたと同じ、緑の目だった事は覚えているわ」

その一言に、私は思わず息を飲む。

緑の目…私と、同じ？

エルサーナさんが、私の目元を指先でそっと撫でる。

無くした何かを、惜しむように。

「私も後から聞いた話なのだけれど、ライトは、その子が殺されるのを目の前で見ていたらしいの」

愕然として、私はエルサーナさんを見つめた。

ころ、され…た？ それも、…目の前、で。

3歳の、まだ小さな子供、の。

「でもね、ライトはそのことを覚えていないの。ショックのせいか、それとも自己防衛のために無意識に封印したのか、どちらかはわからないわ。屋敷に帰ってきたとき、あの子はもうぐったりして意識がなくて、それから3日間ずっとなされ続けて目を覚まさなかった。このままライトが死んでしまうのではないかって、すごく怖かったのを覚えてる。そして、目を覚ましたライトは、…誘拐されてる間の出来事を、すっかり忘れていたの」

それは、どれほどの衝撃だったんだろう。

私には想像もつかない。

友達が、目の前で殺されたなんて。

記憶をなくしたことは、ライトにとっては自分を守る為にそうするしかなかったってことなのかもしれない。

「何年かは何事もなく過ぎて行っただわ。けれど、私が8歳の時、一家で別荘に遊びに行つて、ライトと二人、野犬に襲われたことがあるの。ライトは私の前に立ちふさがった。何度も何度も噛み付かれて、もがいて苦しんで泣き叫んで、でも『僕が守るから、絶対守るから、だから逃げて』って」

うつむいたエルサーナさんの唇が震える。

「その日から、ライトは『守る』ということに執着するようになった。記憶が戻ったわけじゃない。でも、きつと潜在意識にそのことが刻み込まれていて、野犬に襲われたことで顕在化したのかもしれないわ。ライトが騎士団に入ったのも、誰かを、何かを守る為。あの子はずっと戦っている。自分のことも省みずに、自分が傷つくこともいとわずに。あの子を死なせてしまった罪滅ぼしのように、自分自身を傷つけているようにしか見えないの。私にはそれが、見てもらえない」

弟を思う、お姉さんの気持ちが痛いほど伝わってくる。

ライトと同じ、痛みを堪えるような顔で微笑みながら、エルサーナさんは私を優しく撫でる。

「魔女に虐待されたあなたを拾ったのは、緑色の目をしてたあなたに、女の子を重ねたのかもしれない。でも、きっかけはどうでもいいの。ライトは、…あなたを救うことで、救われているのよ」

そう言つて、エルサーナさんは深くため息をつき、気を取り直したように笑つて、私の両脇に手を入れて持ち上げた。

視線が同じ高さになる。鼻と鼻をちゃんとあわせて、また笑った。

「ごめんなさいね。こんな話、面白くないわよねえ。でも、あなたがちゃんと聞いてくれるような気がして、ついいたくさん話してしまつたわ」

エルサーナさんは、ソファにそつと私を下ろす。

一つ深いため息をついて、憂いの気配を払拭し、いつもの柔和な笑顔を浮かべて立ち上がった。

「出来るなら、いつまでもライトの傍にいてあげてね、アーシエ。さあ、暗いお話はもうおしまい。食器を片付けてくるから、その後私とお散歩に行きましょう？　そうしたら、少しは元気になるかもしれないわ」

そう言つて、エルサーナさんはカートを押して出て行つた。ソファの上、私はぼつんと取り残される。

さっきのエルサーナさんの話が、ぐるぐると頭を回る。初めて知つた、ライトの過去。

私には想像もつかない傷を、ライトは抱えてる。

時々すがりつくように私を抱きしめるのも。

夜中に叫びだしそうになるって言つてたのも。

お酒を飲まないと眠れないって言っていたのも。

全部、そのせいなのかな。

だけど。

私を助けたのも。

私に触れるのも。

私を好きだつて言うのも。

私をそばに置きたがるのも。

いろいろ気になっているライトのこと全部。

過去の傷だけで、説明がつくものなの？

私は、どうしたらいいんだろう。

その答えはやっぱり、見つからないまま。

憂いと告白（後書き）

また少しネタばらしでした。
うつ、多分次話も難産……

ライト 皆の一夜・前（前書き）

ライトの過去。暗いです。2話続きます。

ライト 砦の一夜・前

三夜ぶりに訪れた睡魔に、漠然と思う。
また、あれにのみこまれるのか、と。

士官用の部屋で、他に比べればましとはいえ、質素な石造りのそこは狭く、寒々しい。

装飾品もなく、唯一床に敷かれたくたびれたラグだけが、不似合いな暖色をまとうている。

砦の夜は長い。

アーシェのいない夜は長い。

任務中では酒に紛らすことも出来ない。

寝不足のせい、目の奥が鈍く痛む。

最初の三夜は、固い寝台で朝まで時折まどろむ程度で、眠りはやってこなかった。

いつも傍らにあったぬくもりがない。それだけで、一人寝の寝台がどこか寒く感じられて、朝まで何度も寝返りを打ちながら、時間ばかりが過ぎていった。

何度も何度も、うとうとしながら無意識に手が黒くて暖かい毛の塊を探し、洗いざらしのシーツの上をさまよう。

そして、はっと目が覚める。

ああ、そうだった。ここはあの、優しい空気に満ちた、安らぎの箱ではなかったのだと。

胸の真ん中を抉り取られるような喪失感に、ライトリークは一人、薄い毛布の下で固く体を丸める。

そうしてただひたすらに、腕の中、アーシェの面影を抱きながら、夜が明けるまで息を殺してじっとするだけだ。

そうして過ぎた三夜は、頑強とはいえ、ライトリークの心身を疲弊させるには充分で。

「来るなら来いよ。…俺をそこに引きずり込めるものなら…やってみるがいいさ」

暗い天井を睨で遮断し、ねっとり絡みつくような眠りに、ライトリークは抗いもせずに落ちてゆく。

そこは、一面の生臭い赤。

膝まで漬かったそれは、生温い粘液。

見れば、手にも、服にも、飛び散ったそれが視界を染める。

今まで自分が流してきたそれではない。

今まで自分が切ってきたそれではない。

やけに鮮やかなそれは、深く深い、自分の奥底に沈めた色。

「ああああああああ」

ただ、叫ぶ。喉がかれるほど。

恐怖か、混乱か、悔恨か、怒りか、悲哀か。

心の底から膨れ上がって、爆発するその感情のままに。

ぱちり、と。ライトリークの正面で、瞬きするようにばかりと二つの穴が開く。
その空洞に、きょろりと現れたそれは。

空ろににごった、緑。

『タ…スケ…て』

『とウサ…ん』

『カ…あ、サン…』

甲高く、しゃがれた声。耳をふさいでも、どこまでも頭に響くそれ。わんわんと頭蓋に反響する、潰れた絶叫、断末魔の悲鳴。

ぱちり、ぱちり。

瞬きするたびに、二対の瞳は数を増し、ライトリークを取り囲み、押し潰そうと迫ってくる。

「知らない。俺は何も…知らない」

耳を塞ぎ、子供のように目を閉じる、その頭の中に。

『タス…け、て』

小さな声が、響いた。

自分は、誘拐されたことがあるのだと言う。

確かに、その記憶はある。おぼろげだけれど、自分と同じくらいの女の子と遊んでいた裏庭に、誰かが入り込んできた。見上げたひげ面の唇が、にいつと笑った。女の子の顔も、その誰かの顔も、覚えてなんかいない。ただ、そのヤニで黄色く汚れた剥き出しの歯は、目に焼きついている。

そして、次に気がついたときには、もう自分の部屋だったと思う。エルサーナが、自分を覗き込んで、わんわん泣いていた。

何があっただらう。どうしてみんな泣いているんだらう。あの男は誰だったんだらう。一緒にいたあの子はどうしたんだらう。

『xxxちゃん…は？』

もう、顔も名前も覚えていない。甘そうな蜜色の髪に、きらめくエメラルドのような、緑の目をした女の子だった。

姉と同じく泣きながら自分を撫でてくれた母に問うと、一瞬凍りついた表情は、また、涙に崩れた。

『遠いところへ行ったのよ』

母は、それだけしか答えなかった。なんとなく、もう会えないのだと悟った。

その時のことは、周囲の大人も子供も、誰もが口を閉ざした。ライトリークも、何も覚えていない。どこに捕われていたのか、相手が誰だったのか、何人だったのか、顔も、名前も、どうしてさらわれたのかも、何一つ覚えていない。だから、別段困ることもなければ、気にしたこともなかった。

けれど。

あるとき、一家で別荘に遊びに行った時のことだ。姉のエルサーナと、別荘の近くを散策していた時に、一匹の野犬に襲われた。牙を剥き出しにし、激しくうなる野良犬は大きく、恐ろしかった。

足が動かない。

逃げたい、怖い、助けて、誰か。

その時。

「おとおさん、にいさん、たすけてえ」

姉のエルサーナが、堪えきれずに泣き出した瞬間。

ライトは弾かれたように野犬の前に立ちはだかっていた。

怖くて怖くて、足が震える。涙が止まらない。歯の根が合わず、がちがちと鳴りっぱなしだ。それなのに、体は絶対に引かなかった。

寧猛なうなり声と共に、鋭い歯が腕に食い込んで、絶叫する。そのままあごを振り回された。

ちぎれる！　いたい、痛い、痛い痛いイタイタイ！！

「エル、逃げて！　僕が守るから、絶対守るからっ！　だから逃げて！　逃げて！　にげてえええ！！」

よだれの飛び散る口。大きく開けたそこに覗く鋭い歯。何度も何度も噛み付かれて、恐怖に絶叫しながらめちゃくちゃに腕を振り回した。痛いのに。怖いのに。逃げたいのに。

だって、そうしたら、死ぬ。死んでしまう。

（ダレガ）

助けたかった。助けられなかった。だから、『今度こそは』。

（ダレヲ）

たまたま近くを通りかかった人が野犬を追い払ってくれなければ、死んでいただろう。

どうして逃げなかったんだ。どうして人を呼ばなかったんだ。どうして野犬に立ち向かう真似をしたんだ。

父にも兄にも、問いただされたけれど、答えなかった。答えられなかった。

自分でもどうしてそんなことをしたのかわからなかったからだ。

ただ、後からどうしてそうしたのかを推測する材料は、他人の口から耳に入ることになる。

それは、口さがない大人たちの噂話だ。

ウォーロック家は古くからの大貴族だ。分家や外戚をあわせれば、血のつながりは相当な広範囲に及ぶ。

中には、隆盛を極める本家をねたみ、その子供を標的にして溜飲を下げるような卑劣な輩も、少なからずいるものだ。

そんな彼らが標的にしたライトリークには、攻撃材料となる大きな傷があった。

それが、先の誘拐事件になる。

身代金目的で、護衛がついている嫡男に比べて監視の目の緩い次男であるライトリークを狙った。

たまたま一緒に遊んでいた女の子は、口封じのために一緒に連れ去られた。

それこそ何の理にもならない使用人の子供など、邪魔なだけ。女の子は、切り刻まれて、殺された。ライトリークの眼前で、じわじわといったぶられ、無残に惨殺されたのだ。犯人達は、最終的にはライトリークも殺すつもりだったらしいが、すんでのところで警備隊に発見され、救出された。

警備隊が踏み込んだ時、ライトリークは一面の血の海の中、首だけになった少女と、呆然と見つめ合っていたという。

実際、誘拐されていた間の記憶も、少女が殺された場面も、助け出された時のことも、何一つ覚えてなんかないなかった。だから、いくら大人たちに悪意を向けられても、物語を読み聞かせられているような気分にならなかった。

そんな話をまことしやかに吹き込まれたライトリークは、だが、妙に納得した気分になったものだ。

あの野犬に襲われた日から、時々、夢を見るようになった。
今と同じ、赤い池で、緑の両目に追われる夢を。

その、光を失い、にこった緑色の両目だけは、どこか覚えがある気がした。

その瞳を向けられると、自分の全てを消してしまいたくなる。

怖くて怖くて逃げたくて、逃げられなくて、気持ち悪くて、悲しくて、悔しくて、怖い。

その夢を見る理由はそのせいなのかと。

あの目は、きっと。自分に助けを求めた、少女の目。

首だけになってしまった、少女の光を失った目。

汚い大人達の言うことが、どこまで本当かはわからない。

でも、真実も、そこには確かにあるんだろう。

『たすけて』

だから、誰かが、何かが失われるのを黙って見ていたくはないと、

思うのかもしれない。
もう二度と、目の前で失いたくないと、思うのかもしれない。

きよろり、と。

また一つ、目が増える。

アーシェの翡翠のような深い色の緑とは違う、透明度を失ったガラ
ス玉のような瞳。

すがられているよううで。

求められているよううで。

恨んでいるよううで。

憎んでいるよううで。

悲しんでいるよううで。

責められているよううで。

ありとあらゆる負の感情が、嵐のように押し寄せる。

その瞳の前に、ライトリークは何を請えばいいのかもわからない。

自分の罪深さを。

守れずに失ったたくさんの命を。

その手で奪ってきた命を。

一つ一つ、思い出しては、叫びだしそうになる。

無数の瞳は、ライトリーク自身の無力さを糾弾しているよううで。

べったりと粘つく赤い池は、流した血でライトリークを埋め尽くす
うとしていくよううで。

目を閉じてても、瞼に焼きついた赤は禍々しく。
耳をふさいでも、耳に呪詛の声がこだまする。

これは、罰なのか。
全てを忘れた自分への。
忘れたことすら、罪なのか。

その時。

なあう、と。

呪詛の嵐を、柔らかな鳴き声が切り裂いた。

固く閉じていた目を開ける。

強く塞いでいた手を離す。

顔を上げた先。

ぱちりと瞬きしたのは。

翡翠のような、深い緑。

にゃあん、と鳴き声が響くたび、ライトにいつぱいに迫っていた空
ろなガラス玉のような瞳が、きらめくエメラルド色を取り戻してゆ
く。

穏やかに閉じては消えていく瞳たち。

もう、嵐のような声は聞こえない。

ライト 砦の一夜・前（後書き）

姉視点とはまた違った、ライトの間が説明できれば。

ライト 砦の一夜・後（前書き）

またもぐだぐだ暗ーいお話 W

ライト 砦の一夜・後

翡翠の色をした愛らしい瞳が、自分をじっと見つめている。

「アーシェ」

呟くと、嬉しそうに細められる瞳は、いつも自分の心に火をつける。

ぴり、と、赤黒い空間に亀裂が走る。

さかさまにしたパズルのようにざらりと崩れたその後には広がるのは、いつも二人で散歩をする中庭。

ふわりと風が渡る花園、芝生にちょこんと腰を下ろす黒猫を抱き上げると、鼻先にキスをくれた。

いつもの、遠慮がちな小さなキス。

生氣と慈愛に満ちた緑色の瞳は、すべての負の感情を昇華した。なあう、と一声鳴き声を残して、美しく艶めく黒が宙に消える。

同時に、ふっと意識が覚醒した。闇に落ちる天井。夜明けはまだ遠い。

全身にじつとりと汗をかいている。倦怠感がひどい。けれど。

「アーシェ……」

片手で目を覆い、小さく名を呟くと、胸の奥が燃え上がる。

額と、両頬、そして唇。

出発前、アーシェに送られたキスを思い出す。

また、救われた。

深い闇から。

「アーシェ」

名を呼ぶだけで、神経が焼ききれそうだ。

愛してる。

愛してる。

傍にいて欲しい。

離したくない。

守りたい。

悪夢を見るようになってから、ライトリークは誰かを守らなくてはと思うようになった。

せめて、目の前にいる人だけでも。手が届く人たちだけでも。

ただ、自分の心のままに。時折、自分を責めるように見る悪夢に、駆り立てられるように。

だから、悪意を持って誰かを傷つける人間に、ライトリークは容赦がない。

自分は強い、強くなったはず。そのことを確認したい。

あの頃の弱い自分ではない。それを確信したい。

もう無力な自分ではない。救える力がある、それを信じたい。

ただそれだけの為に、ひたすらに悪人を沈める日々。

『戦闘狂』と呼ばれたこともある。

『悪鬼』とののしられたこともある。

戦うことに執着していると思われることも多いけれど、そうではない。

誰かを救うためには、剣を振るうのが一番確実だっただけ。

そして、悪人に対する慈悲を持つ必要がないと思っただけだ。

被害者が、どれほど恐ろしかったか、どれほどつらかったか、どれほど痛かったか。

それを、身をもつて教えてやっているだけだ。

それでも、どうしても手が届かないこともある。
守りきれないこともある。

命の火が消えた遺体を前に、何度無力さを噛み締めただろうか。

そんなときは決まって、あの夢を見る。

押し潰される。

引きずり込まれる。

息が出来ない。

夢だとわかっていても、抜け出すことが出来ない。

もがき苦しみながら、涙をにじませて飛び起きたことも、1度や2度ではない。

女に紛らわせるか、酒に紛らわせるか。

そうしなければ、夢から逃げることは出来なかった。

それが、アーシェを拾って一変した。

緑の目の小さな猫。魔女にさらわれ、猫の姿にされ、虐待を受け、弱りきったそれを拾ったのは、いつもの『守りたい』という気持ちからでもあった。

猫の姿であったゆえか、ライトリークが誰であるかを知らなかったからか、アーシェはライトリークに壁を作らなかった。怖気づいたりもしなかった。

その姿に、自分の警戒心も薄れたのか、ライトリークも自身のありのままを見せることが出来た。

柔らかで小さな体。全幅の信頼をもって見上げる瞳。暖かなぬくもり。

抱いているだけで、ライトリークの心が凪いで行く。

寝酒を飲まなかった日、アーシェを抱いてそのまま眠ってしまった。

気がついたら、朝だった。

夢も見なかった。

心も体も軽かった。

ある日、いつもの悪夢を見た。無意識にもがく手が触れた、柔らかな毛の感触と、小さなぬくもり。

そこで、はっと目が覚めた。いつもは、覚めない悪夢に朝まで苦しめられるはずなのに。

すぐるようにそのぬくもりを引き寄せて、目を閉じた。
やっぱり、夢は見なかった。

アーシエは、ライトリークを悪夢から引き戻した、ただ一人の存在。ただそこにいるだけで、何度救われたただだろう。

初めて、自分の弱さを吐き出した。

初めて、ただの『ライトリーク』を見てくれた。

初めて、執着した。

守りたいのに、守られている。

彼女を守ること、生きていると思える。

彼女に救われることで、生きていていいんだと思える。

手放したら、自分にはもう何も残らない。

そう思うまでに、ライトリークはアーシエに溺れていた。

けれど、自分の周囲には、悪意が渦巻いている。

もしかしたら、アーシエを巻き込むことになるかもしれない。
それが怖かった。

成長するにつれて、わかったことがある。

ライトリーク・ウォーロックは、ただそこにいるだけで、周りを傷つける存在だということに。

初等学院も、中等学院も、軍人学校に入っても、騎士団に入っても、常に自分の周りでは、権力争いが起こる。

それほど、ウォーロックの家名はこの国では強大だ。

それほど、王位継承権と言う名の甘い蜜は、悪意ある人を引き寄せる。

それを知ってから、ライトリークは周囲の悪意に敏感になった。親しい人間を作ることをやめた。

親しくなろうと近づいてくる人間は、大抵が打算と下心に満ちていた。

打算なく、悪意を跳ね除けてまで共にいてくれる友人など、誰もいなかった。

少しでも親しくなれば、誰かが妬み、羨み、引き摺り下ろそうとする。

だから、誰とでも平等に、うわべだけの付き合いに徹した。

誰にも心を許せなかった。孤独だった。

親の命で姦計をめぐらし、取り入ろうとする輩も後をたたない。

自分を蚊帳の外にして行われる、自称取り巻きによる『選定』という名のいじめを潰して回るようになった。もちろん、取り巻きを自称する奴らも、もれなく叩き潰してやった。

女たちは、自らを武器にライトリークを取り込もうと群がってくる。だから、ライトリークは女性に愛を抱かなかった。

それなりに自分の欲求を解消できる相手であれば、誰とでも付き合い

った。

相手が少しでも取り入る様子を見せれば、その時点で付き合いをやめた。

そうすることで、ライトリークは自分を守るしかなかった。

それでも手が届かずに、消えてしまった命だつてある。

裏切られたこともある。

憎む人もいる。

恨む人もいる。

自分が持っている王位継承権も家名も、自分じゃない誰かを傷つける。守りたい人たちを傷つける。弱い人たちを傷つける。自分自身をも傷つける。

あの緑の目の少女も。

いなくなってしまった友達も。

常に猜疑心でいっぱいな自分も。

家族以外を愛せない自分も。

自分が、『ライトリーク・ウォーロック』でさえなかったら。

王位継承権など持っていなかったら。

ただの人だったなら、誰も傷つかずにすんだのに。

どうしたらいい。

どうすればいい。

自分を否定し続けて、絶望の中、何度も何度も考えた。

ただの『ライトリーク』になる方法を。

誰も傷つけない方法を。

そうして、ある日、気づいた。

だったら、そんなもの、捨ててしまえばいい。

その選択に、ライトリークは一切迷わなかった。

だから、ライトリークは王位継承権もウォーロック家の相続権も、全てを放棄した。

それで少しはましになった。自分に重く絡み付いていたものが、少しだけほどけて軽くなった気がした。取り巻きも減った。甘い蜜に群がっていた毒虫は、別の花に移っていった。

けれど、ウォーロックの名前は捨てられない。

自身の権利はすべて放棄したけれど、もし結婚したとして、生まれてくる子供はこの限りではない。

だから、今でもライトリークの周りから、権力を欲する人間の悪意がなくなることはない。

それなのに、アーシエを愛してしまった。

家族以外に抱いた、初めての深い愛情。

最初はそこまでアーシエに惹かれる理由がわからなかった。

強烈な引力に、戸惑った。

『愛してる』

うわべだけの、軽い言葉なら、いくらでも言えた。

なのに、アーシエに向かって言うたびに、言葉が重みを増していく。今までの誰にも感じたことがないほど、深く愛しているのだと気づいた途端に、怖くなった。

身にまとう刃が、アーシエを傷つけるのではないかと。

今は猫の姿でも、人間に戻ったら、貴族の肩書きに恐れをなして遠ざかってしまうのではないか。

ライトリークを取りまく悪意に耐え切れず、去っていつてしまうのではないか。

ライトリークに近い者を排除しようと、アーシエを狙う者が出てくるのではないか。

自分という存在が、アーシエを消してしまうのではないか。

そう思うと、猫のままでも、そばにいてくれるだけでいいとさえ思った。

でもそれは、守りたいはずのアーシエを苦しめているということ。何の罪もない少女を、とらわれびとにしているくせに、守りたいなんてきれいごとを吐く矛盾。

自分の身勝手さに、吐き気がした。

考える時間が欲しかった。

どうするべきか、決めなくてはならなかった。

アーシエと離れてみれば、答えが見つかるかもしれないと思った。けれど、結局何も答えが出ないまま。

真実を知ったアーシエは、自分をどう思うだろうか。

憎むだろうか。

恨むだろうか。

軽蔑するだろうか。

嫌うだろうか。

それだけの事をしている自覚があるのに、離れていくかもしれないことがこんなにも怖い。

悪夢より、誰かを守れないことより、アーシエを失うことの方が。

「アーシエ、頼む、離れないで」

視界を塞いだまま、震える声で祈るように呟く。
この苦しみが、痛みが、アーシエを縛っている代価なのだとすれば、
これ以上の罰はない。

でも、離したくない、アーシエが欲しい。

相反する思いに心を真つ二つに切り裂かれながら、ライトリークは
ただ、アーシエを想う。

城に戻って、アーシエに会えたら。

自分は、どうなってしまっただろう。

答えが出ないまま、ライトリークは硬い寝台で小さく体を丸めた。

夜明けは、もうすぐ。

城への帰還まで、あと数時間。

ライト 皆の一夜・後（後書き）

多分これでライトの背景は書ききった？と思います。
取りこぼしあったら教えてください。
ここ数話書くのは気力が要りました…。

帰還

ああ、良く寝た。久々にすっきりした目覚め。

くあ、とあくびをして、紺色のカバーの上でじつくりと伸びをする。広いベッドは確かにさびしいけど、今日はやっとライトが帰ってくる。さて、そうとなれば腹ごしらえよね。

もうお腹ぺこぺこ！ 昨日お腹いっぱい食べたはずなのに、もうすっかり消化しちゃって、きゅうきゅう鳴って仕方がない。

じゃあ、今日も元氣に行きますか！

昨日、あのあとエルサーナさんと一緒にお散歩に行った。

いつもライトと行く中庭、裏庭、華月宮を歩くけれど、ライトと一緒にの時のことばかり思い出してしまって、どうしても気持ちが浮上しない。

そんな様子を見たエルサーナさんが、王妃様の庭に連れて行ってくれた。綺麗な花園で、少しは元氣になればいいと思ってくれたみたい。

ところが、そこには先客がいて。王太子妃のフェリシア様と、小さな二人の王子様。

一番上の王女様は、習い事があつていなかったみたいだけど、二人のお子様が、エルサーナさんと一緒に私を見て、きらーん！！と目を輝かせた。

や、やばい…！

孤児院の子供達にもみくちやにされた記憶がよみがえる。

固まった私と、見つめる王子様二人。

ぴいんと張り詰めた緊張の糸が、ぷつんとはじけた。

「わあっ、猫だー！」

「ねこだー！」

『うぎゃあああ！ こないでええ！』

やんちゃ盛りの王子様二人に散々追い掛け回されて、ここんとこ満足にご飯も食べてない、運動もしてない私はあつという間に疲労困憊で捕まってしまった。

それにしても、フェリシア様。もみくちやにされる私を見かねて、子供達の襟首をそれぞれ片手でつかんでぶら下げて。

「いい加減になさいな。かわいそうでしょう？」

「「はあい……」」

につこり笑顔がものつすごく怖いですっ！

さすがのやんちゃ坊主二人もちっくなつて返事してたっけ。
なるほど、ラズウェル様もこれじゃ勝てないかもね。

ともかく、走り回ったせいか、やたらお腹が減って、夕ご飯は並んだお皿を綺麗に空っぽにした上、おかわりまでしてしまった。エルサーナさんにも、

「まあ、元気になったのね！ よかったわ！」

なんて、いたく喜ばれてしまいました。

久々に走り回ったせいで疲れきっていたのか、程なく眠気が襲ってきて、ベッドに潜ってすぐに眠ってしまった、気づけば朝だった。

あー良く寝た。お腹減ったなあ。あ、今日ライトが帰ってくる日じやーん！

なんて浮かれていた私は、はたと固まり、次いでがっくりとベッドに倒れ伏す。

昨日まで悶々としていたのは一体なんだったんだ！？

今になって考えてみれば、悲劇のヒロインぶってご飯も食べられないなんて、どんだけ浸ってたのよ私！ あああ恥ずかしくて昨日ま

での自分を消したいわ！

良く食べて良く寝たら解消するなんて、我ながらこの現金さに情けなくなる。だけど、もともとシリウスが長続きしないキャラだって自覚はあるし、仕方がないよね。

いずれ、今日はライトが帰ってくる。

戻りは夕方だって、エルサーナさんが言ってた。
早く時間が来ないかな。

ライトに会えるのが、待ち遠しくて仕方がない。

ベッドの上でごろごろ転がる。

窓の外、流れていく雲の数を数えたり、壁紙のお花の数を数えてみたり。そのたびに時計を見ても、ちつとも針が進んでいるように見えない。

昨日とは全然逆の意味で、今日は時間が経つのが遅い。

お昼を持ってきてくれたエルサーナさんにも、

「随分元気になってよかったわ。でも…今日はずいぶんとそわそわしてるのね」

なんて、笑われてしまった。

でも、本当に。

きのうまであれこれ考えていたのなんか、吹っ飛んでしまった。
会いたい。会いたい。ライトに会いたい。

頭の中は、ただそれだけ。

おかしくなったのかと思うくらいに。

部屋で待ちきれず、私は姿隠しの魔法を使って外に出た。

中庭やいろんな建物をぐるぐるしながら、時間を潰す。でも、もしふらふらしてる間にライトが帰ってきちゃったら？

そう思うといてもたつてもいられなくなつて、結局は西棟のバルコニーでライトの帰りを待つことにした。

中庭の噴水を見ては、ひょいと廊下に顔を出す。侍女さんたちが散歩しているのを眺めては、またひょいと廊下を見る。貴婦人とかこの貴族の逢引（きやー！）を見ては、またひょいと廊下を覗く。それを何回繰り返しただろうか。

何度目か、噴水が吹き上がるのを見ていたとき。なんとなく中の雰囲気が変わった気がした。

うまく言えないけれど、なんだかいつもの西棟になったような。なんだろう。何かあった？

そう思つて、ひょいと顔を出した私の足が、石造りの床に下りたまま固まる。

廊下の向こう、騎士様の一団が、マントを翻しながら廊下を進んでくる。

その先頭で、肩を並べる騎士様と話している人は。

すらりと背の高い、姿勢のいい立ち姿。柔らかそうな金茶色の髪をかき上げて、少し下がり気味の目元をずっと細めて切り込むように鋭い眼光を放つその人は。

見間違ふはずもない。

ライトが、帰ってきた…。

その姿を見ただけで、きゅうつつ、と、胸が音を立てた気がした。数日の不在の間にぽっかりと心にあいた穴を、ライトの強烈な存在感が満たしてゆく。

かつかつと規則正しい靴音を響かせて、ライトがまっすぐ向かつて

くる。

ふと、ライトの瞳が流れた。2、3度さまよった視線が、術で見えないはずの私に止まる。

途端、熱をましたそれが、私に絡みつく。

瞬間、かつと体が燃えた。

なっ、なにになになに！？

どうしちゃったの！？

心臓が、胸を突き破りそうなくらい跳ねている。

ライトは笑わない。歩みも止めない。ただただ、熱を込めた双眸で、私をじっと見ているだけ。

それなのに、毛皮の下に隠れた私の体、それどころか、魔術で変えられた私の本当の体までも見透かしそうな視線が、全身をくまなく舐めているようで。

まるで裸でライトの前に投げ出されたみたいに恥ずかしい。

それも、ぞくぞくするような、甘い疼きを伴って。

もし今ライトに触れられたら、体中の骨が溶けちゃうかもしれないっ！

そんなのダメ！ 何がダメって、よ、よくわかんないけど、とにかく今ライトに近づいたら危険だ！

少し頭を冷やさなきゃ！

私は身を翻し、砕けそうな腰を叱咤して走り出した。

人のいない方へいない方へと走っていつて、誰もいない裏庭にたどり着く。

前に下りられなくなった木には、今は子猫の姿もない。

ライトと初めて痛みを分け合った場所。

ライトが初めて私に弱さを見せた場所。

私は幹に爪を立ててよじ登る。この姿に慣れた今では、木登りなんてお手の物だ。飛び降りるのだって苦にならない。

あの時と同じように枝分かれしたところにちゃんと座って、裏庭を見渡す。

誰もいない。静かだ。風がさわさわと渡っていく音だけが聞こえる。

自分の姿を見た。

つやつやの毛並み。きちんとやすりをかけられた爪。ピンクの肉球。すらりとした手足。

やっぱり、猫なんだなあ。

うん、猫だけど。

でも、どうでもよくなっちゃった。

猫だろうと人だろうと、私がライトを好きなのは変わらないもの。

猫のままでもいい。傍にいられるなら。

でも、人に戻って、もしライトから離れてしまっても。

私は、ずっとライトを好きでいるだけ。

そうだ、どうしたらいいかなんて、誰も教えてくれるはずなんかないんだから。その答えは、私しか知らないもの。

どんな結末になっても、私の想いは変わらない。

…ライトが好き。

さくさくと、あの時のように草を踏む音が聞こえる。
やっぱりきてくれた。

私を見つけて、ふっと甘い笑みを浮かべて。

じりじりと火がつきそうな瞳は、私からはずさないまま。

「アーシエ、どうして逃げるの？」

『…恥ずかしかったんだもん』

なあう、と返事をすれば、ライトの笑みがいつそう深くなった。

私がない間、どうしていただろう。

眠れていたかな。さびしくなかったかな。

私のこと、忘れたりしてないかな。

離れていた間に考えたことはたくさんある。

ライトに聞きたいこともたくさんある。でも。

「アーシエ、下りておいで」

甘い笑み。なのに、どこか切なさの混じったそれが、私を強く求めている。

言葉と共に手を伸ばされれば、その誘惑に抗うことなんてできない。枝を蹴って、ライトの腕に飛び込んだ。

『ライトッ！』

「会いたかった、アーシエ…」

我慢できないというようにきつく抱きしめられて、耳元にかすれた声が落ちる。私の匂いを確かめるように首筋に顔を埋められる。

大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出されるその熱で、首筋から燃えてしまいそうだ。

ときどきする。恥ずかしい。でも、嬉しくて、離れられない。

見上げると、艶をまとった濃い茶色の瞳と目が合って、その瞬間に
もう私は目を閉じていた。

重なる唇が熱い。

歓喜で震えるなんて、初めて。

ライトの体温、匂い。

抱きしめる腕、広い胸。

私の全部を預けられる、安心できる。

やっぱりここが、私の居場所。

あなたの腕の中

ライトの指が、いとおしげに耳元を撫でている。

時々、皮膚の薄い耳をいじられると、ぞくつと肩の辺りに鳥肌が立つみたい。

重ねた唇は、何度も角度を変えて、私を追い詰める。

「なあう…ん」

小さく上げた声は、まるで喘いでいるみたいで恥ずかしい。

ようやく離れたと思ったら、ぺろりと鼻先を舐められた。

息を呑むと、耳を食まれて、びりびりつと走った戦慄に背筋が震える。

「アーシエ、かわいい…。抱きしめたかった。ずっとキスしたくてたまらなかった…」

かすれた声と共に、ざらりと耳のふちを舐められた。

「な…あん…！」

今まで出したこともない、甘えた鳴き声。やだ…お腹の奥が熱い。

ライトの指は、毛の中にもぐりこんで、直接地肌を撫でている。

ゆっくりと撫で下ろされて、尻尾の上をじっくりと愛撫されると、

身をよじって逃げ出したくなるような感覚があつて、勝手に変な声が出る。

息が乱れる。ライトも、耳元で熱い息を吐いている。体を寄せているライトの胸も、どくどくと大きく揺れている。

…私だけじゃないんだ。

ライトはそうして、腕の中で身悶える私を逃げられないように抱きしめたまま、満足そうに笑った。

「いい声。このままベッドに直行したいけど、まだ仕事が残ってるんだ。夜までお預けだね」

ライトの腕の中、力の入らない体をくたりと預けたままはあはあと息を切らす私は、いつものように突っ込むことも出来なかった。それどころか、このままライトに全部委ねてしまいたくなる。

ライトの愛撫は、自分が猫だつてことを忘れさせる。人間の私にされていると錯覚させる。

ライトのくれる言葉も熱も、心と体私猫の境界線を曖昧にする。

それほどに濃くて甘い接触は久しぶりで、自分の気持ちの変化もあって、ライトの言葉に勝手に夜を期待する自分がいる。

得体の知れない疼きと期待は、怖いのにひどく恥ずかしくて、私はぎゅっと目をつぶって、ライトの胸に顔を隠した。

しばらくそこで抱き合つて、二人してやっと気持ちを落ち着かせてから顔を上げて視線をあわせる。

ふつと微笑まれると、ドキドキが止まらなくて困るんだってば！

『あ、と、そろそろ戻らないと、お仕事残ってるんでしょ？』

また溶けそうになった気持ちをごまかすようにそう言うと、ライトはちよつと不機嫌そうに眉を寄せる。

「そうなんだけど。ごめん、今は離せる気分じゃない。一緒に来て」

『ええ！？ 一緒につて、ちよつと、どこにー！？』

抱っこされてたから抵抗もしようがなく、そのまま連れ去られてしまう。

ライトは、あの時団長室に顔を出しただけで、報告もしないで私を追いかけてきたらしい。

「だって、アーシェを見たらもういてもたってもいられなくて。わざわざあそこで待っててくれたんでしょ？ うれしくて、ちよつと我慢きかなかった」

困ったように笑いながら、ライトは私を腕に抱いたまま、西棟へ戻る廊下を、長靴の音を軽快に鳴らしながら歩いている。

「ていうか、仕事残ってて良かったかも。このまま部屋行ったら、ひどくしそう…」

『ややや、な、なにをデスカ！？』

艶のある、どこか暗い甘さを帯びた笑みを向けられて、ぶわっと毛が逆立った。

な、なんかこの明るい廊下でその顔は、そこだけ夜になったみたいでやたらえつちくさくてもものすごく不似合いですけど！？ 見なさいよ、すれ違う侍女さんたちがみんな目をハートマークにしてへたり込んでるから！

なんて、私もライトに抱かれてなかったら、腰が砕けてたかもしれない。

かといって、夜暗い部屋でやられても、それはそれで身の危険を感じるから困るんだけどね！

そして、たどり着いたのは、ラズウェル様やアクセル様に捕まったとき、ライトが八つ当たりのドアを叩きつけたあの部屋。

団長室って、団長室って、騎士団の団長さんのお部屋でしょ！？

あたしなんか連れてっていいのおおー！？

「いーのいーの、どうせもう勤務終了だから。今日は報告書出すだけだし、書類自体はもうまとめてあるから全然平気」

なんて、鼻歌でも歌いだしそんな顔で軽く言われたけど、それでも気が引けてしまうのは仕方ないよね！？

だけど。そんな気持ちは、ライトがドアを開けた瞬間に吹っ飛んだ。

部屋に連れ込まれた第一印象は、一言で言って『汚い』。

二言目には『男臭い』。

三言目には『乱雑』。

とにかく、男所帯をこれでもか！ってほどに体现した場所でした…。

いつから掃除してないのか、あちこちほこりだらけだし、脱いだ服やタオルがそこらへんに引つ掛けてある。いつ使ったかわからないカップがテーブルに放置されてるし、ソファなんか結構高そうな立派なセットなのに、ダニがいそうで近寄りたくない！

書類や紙もそこらじゅうに積み上げられ、突っ込まれ、これじゃあ何がどこにあるかわからないんじゃないの？

こんなんでお仕事になるのかしら。

なんてきよるきよるしているうちに、執務机についたライトの膝の上に乗せられた。

えええ、膝の上とか邪魔じゃないの！？ 怒られたりしない！？

と、ライトの斜め向かい、部屋のだ真ん中の机に座る男の人を恐る恐るのぞき見る。

騎士団長さんは、ガタイが良くて、夜みたいな紺色の髪を後ろに無造作に撫で付けて、目つきが半端なくコワイ！ なんだか妙に迫力がある人だ。ライトがこんなんだから、いつも苦労してるんじゃないのかなあ。

かちりと視線が合って、びくつと縮み上がると、その目元を若干緩ませてから、ずっと視線をはずして書類を書き始めた。

あ、あれ、お咎めなし？ いいの？

うん、目つきは怖いけど、よく見ると渋くて落ち着いた雰囲気の人だ。顔立ちも整ってるし、悪い人じゃなさそう…かな？ でも、なんかどこかで見たことがあるんだけれど…気のせいかなあ？

それにしてもきつたない部屋！

孤児院の男部屋も散らかってたけど、私やシスターが隙を見ては片付けて掃除もしてたから、ここよりはマシだった。

女手が全然ないわけじゃないんだろうけど、どうして誰も片付けないんだろう？ 西棟担当の侍女さん達だっているはずなのに……って、そうか、侍女さん達はお掃除とかしないものね。掃除やかたづけはそれこそ召使のお仕事で、貴族のお嬢様がすることじゃない。

それに、ここにはなんだか大事そうな書類もありそうだし、そうすると下女さんたちには触らせることが出来ないのかもしれない。女の騎士様たちの仕事でもなさそうだし。

うーん、必要なものとそうでないものの指示をしてくれたら、私が片付けてもいいんだけどな。

って、猫じゃ無理か。

乾いた笑いを浮かべながら、お部屋の観察を続ける。

ああ、お掃除したい、お片づけしたいっ！

夢中で部屋を見回している私を見つめるライトの瞳が、わずかに色を変える。

少し思案して、軽いため息をついた。

「ねえ、団長」

「なんだ」

「専属侍女一人入れたいんだけど」

ライトの顔を見上げると、曖昧な笑みを浮かべているだけだ。いつもは見せない顔。というか、『私に』見せない顔、なのかな。

団長さんは無言で書類から目を離さない。気にした様子もなく、ライトは後を続ける。

「いい加減、この部屋も何とかしたいし。ある程度学があつて、気遣いも出来て、掃除片づけを厭わない子なら問題ないでしょ？」

「心当たりがあるのか？ 貴族でないのなら、相応の身分証明が必要になる。ある程度手心を加えるのは可能だが、使えない人間を入れる余裕はないぞ」

「ああ、大丈夫、身元がはっきりしてて、高等学院出のちゃんとした子だから。確かに、貴族じゃないから、俺とあんたが後押ししな

いと通らないと思うけど、損はさせないよ。どうかな」

そう言っと、団長さんがようやく顔を上げる。見据える眼光の恐ろしさが半端ない。目線だけで殺されそうですが！ 悪い人ではなさそうだけど、怖いもんは怖い！

「お前がそうまで押すとなると、興味が湧くな。とはいえ、今までのように途中で逃げ出されちゃかなわん。期待していいんだろぅな？」

「大丈夫、任せてよ。じゃ、すぐ手続きするから。そうだな、来週には来てくれると思うよ。書類は後で出しとくからよろしく」

そう言って、ライトはにこりと笑って私を見下ろした。

「よかったね、アーシェ」

って、なんで私に言うの？

その夜は、恐れつつも期待していたことは、何も起こらなかった。

「ちよつとね。顔向けできないことはしたくないなって思ってたさ。

今日は、仕方ないから我慢する」

ベッドの中、私を引き寄せながら、ライトは苦笑する。

顔向けって誰に？ 自己完結しちゃって、何言ってるかわからないよ。

ふて腐れた私の耳元にキスを落として、ライトは私をきゅうつと抱きしめる。

「明日、色々決着つけるから。そうしたら……」

胸に強く抱きこまれていたから、ライトの顔は見えなかった。でも、苦しそうな声が、かすれて消える。吐息が、ゆっくりとした寝息に変わっていった。

ライトの腕を抜け出して、そっと顔を覗き込む。

苦しそうに寄せられた眉を見ていられなくて、そこにそっとキスを

すると、こわばった寝顔がゆるゆるとほぐれた。

穏やかな寝顔を見下ろしながら、言いようのない切なさに見られる。

いつまで許されるだろう。こんな風に傍にいたいこと。

決着をつけるって、何のことなの？

このままでいらなくなるかもしれないの？

だけど、もし今離れることになったとしても、やっぱり、好きで好きで仕方がない。

どこにいても、どんな姿でも、私の気持ちだけは、あなたの傍にあるから。

そうつと、顔を近づける。

いつもは待っている、ライトの唇。

でも、今日は、私から。

触れるか触れないかの、ほんのりしたキスを。

泣き出しそうなほどにライトを好きな、私の全てを込めて。

そうして、私はライトの腕の中に戻って丸くなった。

久しぶりの、温かくて、幸せで、切ない夜。

閉じた瞳から、ころりと涙の粒がこぼれて、シーツに消えた。

あなたの腕の中（後書き）

団長と遭遇。

変化

ふっと意識が浮上する。

まぶたに感じる、明るい光。目を開けると、カーテンの隙間からこぼれる朝日が、虹彩を直撃する。

私を囲うように回されている暖かな腕。もう少し甘えていたいけど、時計はもうすぐ起きる時間をさしている。

視線をめぐらすと、すぐ近くにある穏やかな寝顔。ひげが少し伸びた顔を見られるのはきつと、私だけの特権。

名残惜しい気持ちを抑えて、ライトの腕の中から抜け出した。

んっ、と伸びをして、くあ、とあくびを一つ。

手触りのいいシーツにちょこんと座って、てしてし、とライトの頬を肉球でつつく。

『ライト、起きて。もう朝だよ』

「ん…」

かすれた色っぽい声を上げながら、ゆっくりとライトが目をあける。まだ眠気にかすんだ瞳が私の顔に焦点を結び、ふわりと甘く笑んだ。

「おはよう、アーシェ」

すっと伸びた手が、私の後頭部を引き寄せる。

自然に目を閉じて触れると、少し強く押し付けられた。

じわりと唇の熱が染みて、ぐらりと頭の芯を揺らす。

少しだけ、唇をこすりあわされて、息を呑む。このまま溶けてしまいたいそう。

そっと唇を離されて、ときどきがおさまらないままライトを見つめる。

濃い茶色の瞳の奥で、じりじりと燃える火がある。それを見た途端、腰の奥で何かが疼いて、ふるりと震えた。

それを察したのか、ライトはまばたき一つでその熱を消し去って、さつきまでの淫靡な甘さが嘘のように、さわやかな笑みを浮かべた。

「こうしておはようのキスをするのも久しぶりな気がするな。昨日はすごくよく眠れたよ。やっぱりアーシェと一緒にじゃないとだめだね」

そう言つて、ライトはベッドから降り立ち、身支度のためにバスルームのドアに消えた。

戻ってきた、私の日常。

16年間続いてきた孤児院のそれじゃなくて、ライトと一緒に朝を迎えることが、今の私の『普通』になつてゐる。

ひげを剃つて、髪を整えて、部屋着のままのライトと二人で食べる朝食。

そこに会話らしい会話は無いけど、優しい沈黙に満たされる。

食べ終わった食器を片付けて、ライトの着替えを見守る。

広い背中、しっかりとついた筋肉、しなやかな背骨、優雅に動く手。『日常』が、こんなに甘く優しいものだなんて、知らなかった。こんなに大事で、かけがえのない物だって、離れていて初めて気づいた。

たった5日間だったけど、私にとっては必要な5日間だったと思う。

紺の詰襟をかつちりと着こなして、ライトは優雅にマントのすそを払い、振り返った。

ソファですつと見つめていた私に歩み寄り、すつと跪く。

指先であごの下をくすぐられて、言いようのない疼きに喉の奥で声を上げると、ライトの瞳の奥、さつき消したはずの火が燃え上がったのが見えた。

気づけば、浮かんでいた笑みが消えている。ただただ真摯に、その瞳に私だけを映して、怖いほどに真剣な表情で見つめられる。

「どこにいても、何があっても。君を愛してるよ、アーシエ。だから今日は、待っていて」

そうして、触れるだけのキスを落とし、ライトはすっと立ち上がった。

「じゃあ、行ってくる」

笑みを浮かべ、いつもの規則正しい足音を響かせて、ライトの姿がドアの向こうに消えた。

なんだろう。予感のような、胸騒ぎのような、もやもやした気持ち。それは、ライトの何かを思い切ったような、決意をしたような顔のせい。

せつかくいつもと同じ生活に戻れたと思ったのに。

どこか晴れない不安で、私はライトが消えたドアをずっと見つめていた。

その日一日、私は昨日とはまた違った意味で、じりじりしながらライトの帰りを待っていた。

お昼にはライトは戻ってこなくて、代わりにエルサーナさんがお昼

ご飯を持ってきた。

「ライトは、今日はどこに出かけてるんですって。せっかく帰ってきたのに、一緒にお昼できなくてごめんなさいね？」

って、申し訳なさそうに言うけど、全然大丈夫です！ お仕事忙しいんだろーし、お昼に戻ってこないこともよくあるし。

…ただ、朝のライトの様子がちょっと引かかってて、どうしても勘ぐってしまう。

どこに行っただろう。何しに行っただろうって。

いやまあ、考えてもしょうがないことはわかってるんだけどさっ。

なんか、ライトって何かあっても言わないから、溜め込んでるんじゃないかって心配で。

というか、単に私に言ってもどうにもならないからってだけのようない気もするけど。

そうして、ライトがお仕事を終えてやっと部屋に帰ってきた。

「ただいま、アーシェ」

って笑って言うその顔は、どこか憑き物が落ちたような顔をしていた。

代わりに、隠し切れない熱をはらんだ瞳で、じっと私を見ている。

こういう経験が少ない私には良くわからないけど…、前に感じた、

『取って食われそう』な視線だ。

部屋のどこにいても何をしてても、ふとした瞬間に顔を向けると、必ずその目で私を見る。

ううう、毛皮がどうにも心もとないんですがっ！ その下の体を見られてるみたいでいたたまれない。

それに、部屋に帰ってきたときのただいまのキスも、いつになく濃厚で、いつ離してくれるんだろうかと心配になっただけ。

昨日の夜から宙に浮いたままの、『期待』と『不安』。

もしかしたら、今夜かもしれない。そう思うと、私も落ち着かない。夕食の間も上の空で、何が出てきたのか、どんな味だったのかも覚えていない。

そわそわする私を、ライトは目を細めていとおしそうに見ている。それから、珍しく応接室からお酒のビンを持ってきてグラスに注ぎ、口元に持っていきかけて、…ため息をついてやめた。

「あー、だめだ。怖がらせたくなかったけど、限界」

はああ、と再度ため息をついて、ライトはいきなり私を抱いて立ち上がった。

「アーシエ、お風呂に入ろうか」

にこりと笑われて、私は首を傾げた。

いつもは、肌を痛めるからとシャンプーは2日にいっぺん。

ライトは、昨日お風呂場で私を洗ってくれた。

それなのに、今日もするの？

いや、まあ別に嫌ではないんだけど。

脱衣所に連れ込まれて、ライトは私を床に下ろした。

…と思った瞬間。

『ちよ、なっ、なんで脱いでるの！？』

いきなり、ライトがシャツを脱ぎ捨てた。引き締まって、しっかり筋肉が乗った上半身があらわになる。

いつもはシャツとズボンの裾をまくるだけなのに、今日に限ってなんだ！？

と思っているうちに、かちゃかちゃとベルトを緩めはじめて、パニ

ツクになる。

逃げ出そうとして猫ドアに突進して、いつも開くドアにガツンとぶち当たって、そこにひっくり返ってしまった。

あああ、開かないー！！

『何？ 何？ なんでえ！？』

「開かないよ。術で閉めちゃったから」

笑い混じりの声が近づく。

振り返っちゃいけない。だって、がさがさこそ音がしてたもの。多分、ライト何にも着てないと思うからっ！

「大丈夫、一緒に入るだけだから」

『ぜ、絶対うそだあゝ！』

文字通りの猫なで声が、胡散臭いことこの上ない！ とっ、とにかく逃げなくちゃ！

私は狭い脱衣所の中を必死で逃げ回る。つかまったら、多分食べられる！ でも、食べるってどうやって？ って、今それどころじゃないってばー！

ライトの方を見られないまま逃げるのは限界がある。ライトがここに待ち構えているのかわからないし、逃げ場所は少ない。何より現役の戦闘専門職相手にいつまでも逃げ切れるわけがない。

床を蹴ってタオルの棚の上に飛び上がろうとしたところで、空中ですくい上げられてしまった。

「捕まえた」

私をぎゅっと抱きしめたライトは、満足そうに笑った。
な、何でそんなに楽しそうなおお！？

そして、毛皮越しに感じるのは、ごわごわした布の感触じゃなくて、滑らかで硬い、筋肉質なぬくもり。かつ、と体が熱くなる。

「今日は逃がさない。一緒に入ろうね」

耳元に落ちるかすれた低い声は、どこか淫らな響きで私の脳に到達する。衝撃に身を震わせている間に、湯気の立つ浴室に連れ込まれてしまう。

逃がさないって言う言葉通り、ライトは私をしっかりと片手で支えたまま、たらいにお湯を満たし、私をゆっくりと沈めた。

うつつ、肌色の面積が広いつ！ 直視できない！ 私は精いっぱいそっぽを向いて、視線をあらぬ方向に逃がす。

胸とかお腹はともかく、色々と隠すそぶりもないのはおかしくないですか！？ 堂々としすぎなのよっ！

それでも、体に滑らかに泡をのせられれば、それどころじゃなくなる。

ライトの手つきは、いつもより優しく、でも容赦がなかった。私ที่震える場所ばかりを、ぬるぬると攻め立てていく。

『や……う……！』

後ろから、ひっくり返されて前の方から、甘い責め苦が続き、私は身悶えながら声を上げるしかない。

絶っっ対に体を洗う以外の意図がある！ そうとしか思えない！ 思えないけれど、もう抵抗できないよう……。

ようやく綺麗に洗い流される頃には、もう息も絶え絶えで、体に力なんか入らなかった。

濡れた体を胸に抱いて、ライトが私ごと浴槽に沈む。

滑らかな肌の感触。今までえっちなことを何度もされてきたけれど、

こうして裸のまま抱かれるなんて今までなかった。
どうしよう。どうしよう。

恥ずかしい。

逃げ出したい。

どうなっちゃうの？

不意に、ライトが私を見下ろした。すぐるような、焦れているような、それでいてとろりと甘い色気をまとった顔で。

じっと見つめられて、息が止まりそう。

ライトがすつと手を上げて、人差し指を出す。

指先が淡く光った。魔力を集めているのかな。何をするつもりなんだろう。

その指を、ライトは私に向かって、横にすつと動かした。

その瞬間。

『や…あ…っ！』

ふわん、と体を魔力が覆う。ライトの指から放たれた魔力が、私を覆い隠す。全身が温かい。私は思わず自分を抱きしめて、小さく体を丸めた。

すぐにその感覚は消えて、私はほつと息をつく。

なんで？ どうして？ 私に何をしたの！？

何の説明もなく術を使うなんて、いくらライトでもひどいよ！

「いきなり何するのよっ！」

…あれ？

私、今、しゃべった？

「…え？」

さっきまで見上げていたライトの瞳は、今、驚くほど近く、私と同じぐらいの高さにある。

「え？」

見回す視界に、黒い色彩はどこにもない。
見えるのは、二人分の肌色だけ。

「な、な、な」

私を膝の上に抱いたライトが、にっこりと笑った。

「なんで人間に戻ってるのおおっ！？」

絶叫が、浴室に満ちた湯気を振るわせた。

変化（後書き）

やっとたどり着きました。

熱情（前書き）

R 15。 15 っ たら 15。

苦手な方はご注意。

熱情

猫の姿でもいい。

戻れなくてもいい。

どんな姿でもかまわない。

ライトの傍に、いられるなら。

そう思ってた。

…それなのに。

それなのにつつ!!

「なんで!? どうして戻ってるの!？」

ああ、そりゃあ嬉しいわよ。呪いをかけた張本人は死んじゃって、誰にも呪いは解けなくなった。もう人間には戻れない、そうあきらめて、泣いた夜もあった。

自由にならない手足で、うまく使えない口で、言葉の通じないもどかしさで、この3ヶ月ずっとストレスがたまってたんだから!

黒いつややかな毛皮ではなく、久しぶりに見る肌色。

ぷにぷにの肉球と、出し入れに慣れてきた爪ではなく、少し荒れた五本指。

軽やかに飛ぶことは出来ないけれど、少しだけ自慢だった細い足。それがやつと返ってきて、嬉しくないわけがない。

それが、浴槽のお湯の中、裸のライトに抱かれた膝の上でなければね！！

「や、や、なんでえ〜っ？」

「ああ、やっぱりかわいい…」

そう言って、羞恥にもかく私をしっかりと抱きしめるライトの笑みは、溶けそうに甘い。

…甘いけど、ついでに艶があふれていて、心臓が爆発しそうだ。

恥ずかしい。逃げ出したい。なのに、頭も、頬も、体も。優しく撫でられていると、体が動かない。

大きな手の暖かさを知ってる。

あごの下をくすぐる指先の繊細さを知ってる。

抱きしめてくれる胸のたくましさを知ってる。

私を包む優しい香りを知ってる。

それが、ぴたりと密着した肌から直接伝わってくる。

服越しじゃないから、より強く感じる。ライトの全部が、もう私に刻み込まれてるって。

目を細めて、上から下まで視線でなぞられて、背中が震える。逃げ

出せない膝の上、両手で必死に体を隠しながら小さくなるしかない。
「ダメ、見ないでしょう！」

「無理。かわいいし。…綺麗」

「ひゃんっ！」

低いささやきを送られ、耳を舐められてびくんっとな体が跳ねる。

どうしよう。どうしよう。

人間って、裸になるとこんなに無防備だったなんて知らなかった。

今までまもっていた毛皮、早くなくなってしまえばいいって思ってたのに。今はこんなにも恋しい。

二本の腕じゃ隠しきれない肌を、容赦なくライトは視界に納めていく。

恥ずかしくて恥ずかしくて、勝手に涙がにじむ。

「離して！ もうやだ！」

「無理だよ。ずっと待ってたのに、逃がせない」

「ふえ…？」

言われた言葉に、涙目でライトを見上げると、困ったように笑っていた。

「だまして、ごめんね？ でも、君が好きだよ」

何を、と問う間もなく、くい、とあごをさらわれる。濃いブラウンの瞳が、近い。

あ、と思った瞬間、唇を塞がれた。

最初はしつとりと重なって、次に唇を舐められた。

「ん！」

びっくりして思わず声を上げると、唇の上でくすりと笑われた。

「かわいい声」

耳を震わす低い声。お願い、お腹が熱くなっちゃうからやめて…！
逃げ出せずに、また唇が重なる。何度も重ねられて、舐められて、
息が苦しくて唇を閉じていられなくなったら、隙間を割って柔らか
い何かが入ってきた。

熱い…。

ぐるりと唇の裏を舐められて、じわつと腰のあたりが痺れる。
舌を入れられて引きかけた体は、たくましい腕が許さない。

深く押し入ったそれは、逃げ惑う私の舌を追い詰めて、絡め取った。
何度も舐められて、吸われて、喉の奥で勝手に声が漏れる。柔らか
く歯を立てられて、ぞくん、と下腹に何かが走った。

「んん…っ、あ…！」

息継ぎの合間に漏れた声は、鼻にかかってひどく甘ったるく響いて、
恥ずかしさに泣きそうになる。

「甘い…。ずっとこうして舌入れたかったよ。いつまでもキスして
たい気分」

くすりと笑いながら親指で唇をなぞられて、そのまま頬を撫でられ
て、濡れた髪ごとうなじを引き寄せられてまたキスが重なって、喘
ぐ声がライトの喉に飲み込まれていく。

そして、ただ抱きしめていただけの手が、ゆっくり動き出した。
背中を何度かなでた手が腰に下りて、わき腹からおなかに回って、
キスに翻弄されてガードが緩んだ腕をはいくぐり、胸に触れた。

「やんっ…！」

泣きそうな声を上げて、ライトの肩にしがみつく。

「ねえ、お願い、待って、お願いだから…！」

「うん？ どうしたの？」

私の動揺なんかわかってるくせに。わざと聞き返してくるそのにやけた顔がむかつく！

「どうしていきなりこういうことになるの！？ 今まで私猫だったじゃない！」

ライトは、ふっと目を細めた。

う。なんかやな予感。その何かたくらんでるみたいな顔！

「いきなりじゃないよ。ちゃんと順番守ったじゃん。前から好きだって言ってたし、キスしたし、触って押し倒したら、あとはこうなるだけでしょ？」

「え、えええ？ い、いやその、確かにそうだけど。って、そういう問題じゃないでしょ！？ 大体、猫相手じゃノーカウントだよ！」

やばい、危うく納得するところだった！ その胡散臭い笑顔に、何度痛い目を見てきたか！

せつ、正論だけでも、言いくるめられちゃだめ！ 風前の灯とは言え、貞操の危機なんだからっ！

「どうして？ だって、猫のときから好きだったよ。アーシェがかわいって知ってた。だから、キスしたし、押し倒したりしたんだけど」

やっぱり…！

「私が人間だって、最初から知ってたの！？」

私の問い詰める言葉に、ライトの瞳に一瞬だけ暗い影がよぎる。でも、それを笑顔の下にさっと隠して、ライトはもつと密着するように私の腰を抱き寄せた。

「そう。でも、猫だろうと人間だろうと、アーシェはアーシェだから」

ら。俺にはどつちでも一緒。キスも触るのも、猫のアーシエにも出来るし。だけど、さすがに猫の体じゃエッチは無理だからさ。出来なくはないと思うけど、さすがにそれじゃただの鬼畜だし」

いやいやいや、こんなところで裸にして迫るとか、すでに充分鬼畜じゃないですかあなた!?

変態くさい言葉を吐きながら、ライトは逃げ腰の私にこつんと額を合わせて、言い聞かせるようにささやいてくる。

「だから、抱かせて。今日は逃がすつもりないから」
「やつ、待つ…! んんゝっ!」

逃げ道は残してくれなかった。キスを重ねられて、抵抗は押し流された。

だって…本当は、こうして触れられるのを、待ってたんだもの。触れられて、求められて、喜んでいる自分がいるんだもの。

疑問や、問い詰めたいことはたくさんある。でも、ライトが足りない気持ちの方が勝った。今はもやもやを棚上げにして、ただ一心にライトの熱い体にしがみついた。

蒸気がこもるお風呂場で、のぼせそうになったのはお湯につかっていたせいかな、それともライトに与えられる熱のせいかな。
私には区別なんかつかなかった。

熱情（後書き）

いただきますw

ライト君、変態発言も程々をお願いしますよ…。

明かされるとき（前書き）

ちよつと長いですが、ここはだらだらさせたくなかったのでアップします。

明かされるとき

息苦しさに、急速に意識が覚醒した。開けた視界は翳っていて、呆れるほど綺麗なライトの顔が、至近距離でくっついていて、

「んんんっ！」

唇を塞がれて息ができない。ばしばしと肩を叩くと、気づいたライトがわずかに離れた。

ふっと笑った美貌の破壊力に、思わずうつとりと見とれる。

「おはよう」

「お、おはよ。…じゃなくて！ なにしてるの！？」

はっと我に返ると、笑みがいつそう深くなった。

上から覆いかぶさったまま、息がかかるほど近くで、艶めいた笑顔が視神経を魘る。大きな両手が頬を包み込み、親指が優しい仕草で肌を撫でる。…めまいがしそうだ。

「お姫様の目覚めは王子様のキスって相場が決まってるから」

ふざけた物言いにかばりと起き上がると、ぐわんとめまいがした。全身筋肉痛になったみたいに体が痛む。喉がいがいがしているのはきつと、たくさん叫んだせい。それより何より、足の間がひりひりするし、お腹の奥もじくじく火照っているみたい。

それもそうだ。だって、昨日は一回じゃ終わらなくて…っ！

わあああつ、お、思い出しちゃダメ！ 恥ずかしくて記憶消しちやいたいー！

「ひ、姫じゃないし王子じゃないし許可してないし！ それより！ どういうことっ！？」

「うん、でもその前に隠したほうがいいんじゃない？俺に押し倒されないうちに」

「うきやあああつ！！」

怒声を叩きつける私に、くすくすと笑いながら問い返してきた言葉で、はっと自分の格好を見て悲鳴を上げる。

そうよ、私、猫から人に戻ったんだった。

服なんかないし、昨夜はライトに少々好き勝手されて、気絶するよ
うに眠りに落ちた。だから当然、裸のまま。

もう体を隠してくれる毛皮もないのに、布団を跳ね除けて起き上が
ったりなんかしたら、何もつけてない体をライトの前にさらす羽目
になるだけだった。

真っ赤になって慌ててカバーをかき寄せる。そんな私を楽しそうに
眺める濃いブラウンの瞳は、どこまでもいとおしそうに私を追いか
けていて、恥ずかしいしいたたまれない。

ライトみたいな、お城勤めのえらい騎士様が、私みたいな孤児で何
の取り柄もない子供を本気で好きだなんて、未だに信じられない。
魔女が私を都合よく転がっていたって言うていたみたいに、ライト
も何かの理由があつて、都合がいいから私をそばに置いたのかもしれない。

それか、使い捨てに出来る孤児の子供を拾ったから、抱いたらポイ
とか？

単に、緑の目の女の子が忘れられなくて、私を代わりにしただけと
か。

考え始めたら、悪いほう悪いほうに考えが行き始めて、きりが無い。
現に、ライトは私をだましたって言うていたんだから。

エルサーナさんに聞いたライトの過去話を差し引いても、わからな

いことばかりだ。

「…ライト、全部ちゃんと話して」

きゅつと唇をかんてうつむいた私に、一瞬苦しそうに眉を寄せ、ライトも起き上がってベッドに座った。

私を引き寄せて足の間に納めると、後ろから腕を回して抱きしめた。裸の胸と背中が重なる。嬉しくて、幸せなはずなのに…。
今はただ、胸が痛い。

「解ってる。ちゃんと話すよ」

耳に落ちる声は抑揚がなくて、ライトの真意は読み取れない。でも、一言一句逃がさないようにと、耳を研ぎ澄ます。

「…最初から、俺はアーシェが呪いをかけられた人間だってわかってた。魔女の呪いは、魔女が死んだ瞬間に解けてたよ。今まで猫になっていたのは、俺が変化させてたから」

お風呂場でドサクサ紛れに暴露した言葉は本当だったんだ。

恐怖か、怒りか、悔しさか、悲しさか、やるせなさか。

どの感情かは解らないけど、そのどれかですうつと背筋が冷える気がする。あるいは、全部かも。

聞くのが怖い。でも。

「な、なんで…?」

「そのまま帰したくなかったから」

赤い首輪がついたままの首筋に顔を埋めて、ライトがため息交じりの低い声で言う。

抱かれている間、熱に変わっていったその声も、今はライトが言っ

た言葉の意味に頭も体も冷えていて、何も感じられない。

あの、人間に戻れないと思ったときの絶望を、慟哭を、ライトは見
ていたはず。だって、その時に私を抱きしめていてくれたのは彼な
んだから。それが、全て嘘だったなんて。

「魔女の隠れ家でアーシェを見たときから、この子は変化の術をか
けられた人間だってわかった。これでも一応魔術師の端くれだから
ね、そのくらいは解る。きつと魔女にだまされるか何かして、使い
魔に仕立てられているんだろうってね。そういう『とらわれびと』
って、時々いるから。あの女を捕まえた時、君はひどく弱っていた
ようだから、ともかく一度保護して、朝になつて落ち着いてから人
間の姿に戻してやろうと思った。もちろん、術を解いたらすぐに家
に帰してあげようと思つてたよ」

いつもと違う、何かをこらえるような低い声を、身じろぎもせず
に聞く。

「それで、自分の部屋に連れて帰つただけで、捕縛の術を振り切
つた魔女が暴れ出したって聞いて、ひとまず君を部屋に置いたまま、
魔女を捕まえる為に戻つたんだ。そうしたら、魔女が毒を飲んで自
殺した」

そうだ、それで、魔女が死んだのに私は猫のままで……。じゃあ、そ
の時に、ライトは私を猫にしたってこと？

「魔女が死ねば、まじないは解ける。あの女は隠遁術は得意だけど、
それ以外の術はそれほどうまくない。死んでまで強制力をもつ術な
んで、かけられるわけがないんだ。あわてて部屋に戻つたら、術が
解けて、君がベッドで眠っていた。人間の姿で」

ため息が首筋にかかる。さつきと色を変えて悩ましげなそれが、今度は熱い。ライトの体温が上がってる？
体に回った腕に、逃がさないと言っても言うかのように力がこもる。

「……一目惚れだったんだ」

「……。……………はあ！？」

素っ頓狂な声を上げて振り返ると、困ったように、タレ気味の目じりをさらに情けなく下げたライトの視線とぶつかった。

「孤児院から、搜索願が出てたんだ。16歳の女の子、アーシェ・グレイが行方不明、特徴は黒髪に緑の目、ってね。君は寝てたから瞳の色はわからなかったけれど、女の家に踏み込んだ時に、君の翡翠みたいな深い緑の目は見てたから、間違いないと思って。でも、君を元の姿に戻して孤児院に帰してしまったら、もう会えなくなってしまうと思ったんだ」

「どうして？ そうとは限らないじゃない」

私の反論に、ライトは緩く首を振る。

「あの時、騎士は部屋にたくさんいた。あの状況下で、その中の一人の顔なんて覚えているとは思えない。それに、俺には立場的に孤児院に尋ねていく口実がない。帰ってしまったら、きっと忘れられてしまう。それがどうしても許せなかった。いてもたってもいられなくて、後先考えずに猫の姿にして、俺が飼うことにした。…俺を、好きにさせるために」

だから、途方にくれる私を腕に抱きながら、あんなに痛ましそうな

顔をしていたんだ。罪悪感にさいなまれながら、それでも私を離せなくて。言葉もなくじっと見つめる私の視線から逃げるように、ライトは目を伏せる。

「君が傍にいると思うだけで、幸せでたまらなかった。いつでもキスできるし、抱きしめられるし、触り放題だし、猫の姿なら君も抵抗しないし、周りもなんとも思わないし」

……ええと。

今重要な話をしてるんですよね？

なのに、話がなにやら妖しげな方に行ってるような気がするのはい気のせいですか？

「キスする時も、撫でる時も、触るときも、抱きしめる時も、ずっと君の本当の姿を思い浮かべてたよ。キスするとき、いつもびっくりしてた君が目を閉じてくれるようになって、受け入れてくれるようになったんだってわかってすごく嬉しかった。撫でたり触ったりすれば気持ちよさそうに甘えた鳴き声を出し、寝るときに腕の中で安心しきって無防備に丸くなるのがめっちゃめっちゃかわいくて。押し倒して胸触ったり顔うずめたりして悶えられた時は、君の人間の姿妄想して思わず勃っちゃったし。もういっそ、猫のままでいいかかと思って暴走しそうになった」

いや、うつとりした顔で言われても。

……てことはアレですか。私が今まで、猫好きなんだなと思ってなかったあれやこれやのじゃれあいには、私が人間だと認識した上、溢れ出すほどの下心でもってなされていたことだと。

今までにライトにされたスキンシップの数々を思い出した途端、ぼんっと全身が赤くなって、絶叫した。

「へっ、へっ、変態っつ！！ えっちつ！！ ライトのバカーっ！！」

「俺、君に対してはどこまでも変態になれる自信があるよ」
「いらないよそんな自信！」

嬉しそうに笑うなっ！

必死に逃げ出そうと暴れる体をしっかりと捕まえて、ライトはくすくすと笑う。

「君限定だからいいんだよ」

そんなことをとろけそうな笑顔できっぱり言い切られてしまえば、真っ赤になったまま何も言えなくなっただ。

「おとといの夜、寝てる俺にキスしたでしょ。俺のことを好きになっってくれたんだって思ったら、嬉しくて」

「ちょ、なによ、寝てなかったのおお！？」

くすくすと笑うライトの瞳は、でも、その奥底で切なさと苦しさが入り混じったように揺れている。

「君が苦しんでるのも、悩んでるのも、ストレス溜まってたのも知ってた。でも、俺は自分の都合を優先して、君をだまして、俺のそばに縛り付けた。それだけは、君が好きだからって許されることじゃない。これで君が俺を嫌いになっても仕方ないって思ってる」

私を射抜く鋭い瞳には、焦れるような熱と執着がちらちらと踊っていて、私の胸を焦がす。

「嫌われても仕方ない。でも、どうしても好きなんだ。アーシェが俺を嫌いになったら、もう一度好きにさせるまでだ。そのためなら、手段は選ばない。だから諦めて」

真剣な顔と声。逃がすまいと力がこもる腕。

ひどいことをされた。だまされた。許せない。…そのはずなのに、この度が過ぎた執着が、めまいがするほど幸せで…。これも、ライトの魔術でどうにかなっているせいなんじゃないの？

「そうそう、たまーに、アーシェが寝てるときに人間の姿に戻してたんだよ？　アーシェって、ほんとに寝つきがいい上に眠りが深いよねえ」

いきなり笑いながら告げられた言葉に、一瞬頭の中が真っ白になった。

「ちょ、ちよつと待ってよ。ベッドの中でってことは…！」

「もちろん、裸でね。無防備に抱きついてきたりして、朝方まで理性と戦ったこともあったなあ」

時々、ライトが起きたばかりなのにずいぶん疲れてるなあ、と思ったことがあったけれど、これが真相かア…！！

「しかも、ちよつとくらい触っても起きないからさ。体中にキスマーク付けたこともあったよ。猫だと毛皮に隠れて見えないから、つけ放題だったなあ」

うつとりと思い出しているライトに、ドン引きしたのは当然だよね！？　仕方がないよね！？

こんな変態だつて知ってたら好きになんかならなかったのに！

…うん、たぶん…？

「うわぁあん！ もうヤダ帰る、おうちに帰るーっ！！」

「ああ、明日から5日間、孤児院に帰ってもいいよ。君は騎士団の専属侍女になることに決まってるから。君が働き口を探してるのは、シスターに聞いて知ってるし。もうすぐ17歳になるんだよね？就職決まっつてよかったね」

「よくなーいっ！ 大体、孤児院出身の子供はお城勤めは出来ない規則があるでしょ！」

「それが大丈夫なんだなあ。君がいた孤児院を運営してるパシフィスト教会は、昔から孤児の保護や教育に熱心で、先代国王から特別な許可証が出ている。君の孤児院の院長の推薦状があれば、王城で働くことが出来るよ。もちろん、普通は厨房の下働きや小間使いくらいだけれど、ま、君の場合は俺がそれなりに権力あるからね。秘書的なことしてもらいたかったし、下手な女を入れたくなかったから、ちょうど良かった。もちろん3食付きで部屋ももらえる。それに、専属だと給金いいよ？ 仕送りするつもりなんでしょ？ あそこの孤児院は子供たちにしっかりお金かけてるから、国費だけじゃいつでもかつかつなのは知ってるし。君の給金の額なら、かなり助かると思うんだけどなあ。あ、ちなみに院長からの推薦状はもらい済みで、院長とシスターには君が騎士団の専属侍女になる話は通ってる。昨日事情を説明しに行ったら、二人ともすごく喜んでくれたよ。許可証に必要な君のサインは、代わりの拇印を君が寝てる間に押しておいたからね」

体が灰になって崩れていく気がした…。

にこにこしながら淀みなくつむがれていく言葉は、私を絡め取るのに十分な内容だった。私の知らないところで、すっかり外堀は埋められていたわけだ。くっそう、無駄に有能なのは知ってるけど、手回し良すぎるのがまたむかつくのよっ！

なんなんだ、この人の執着は。ここまでするほどの価値なんか、私にあるとは思えないのに。

「理屈じゃないんだ。運が悪かったと思って諦めて？」

私の考えを読み取ったかのようににこりと笑って言い放たれて、私は深い深いため息と共に観念した。

「…わかった。しょうがないから、ライトの言うとおりにする。もう、なんだか色々ありすぎて考えるのがめんどくさくなっちゃったし。…ちよつと、許せないことはあるけど、もう過ぎた話だし」そして、ちらりと後ろのライトを見上げた。

「ね、もう嘘はなしね？」

「もちろん。愛してるよ、アーシェ」

満面の笑みで唇にキスを落とされて。手が不埒に動き始める。

「あ、ちよつ、なにをするのぉー!？」

胸にかき寄せたカバーを器用にかいくぐり、ライトの大きな手が体を探る。首筋から剥き出しの肩にかけて、唇が滑った。

「アーシェが潤んだ目で俺のこと見上げるからでしょ？　すげえかわいいんだもん。そんなカッコで彼女がベッドにいて、欲情しない男なんていないって」

舌なめずりでもしそうなライトの顔をよそに、私はつい別の方向に思考を飛ばす。

かのじよ。カノジョ。彼女。

えええ、それって私のこと？　ほんとに？　嘘じゃない？　いいの!？

ライトの一言にぼくっとなっている間に。

…ころんとベッドに押し倒された。

「え？　あ、あれ!？」

「全部話してすつきりしたところで、改めて愛し合おうか、アーシエ？」

のしかかられて、上からえっちい顔で笑われて。

「や、や、やあ~~~~！ おうちに帰る~~~~！」

泣き声が嬌声に変わるの、それから間もなくのことだった。

ベッドの中、疲れ果てて眠る愛しい少女を、いとおしげに見つめる。白い肌に不似合いな、ぼろぼろの赤い首輪に顔をしかめた。

だましていることを悟られない為とはいえ、はじめて見た時からつけたままの、魔女の所有の証のように存在を主張するそれがひどく目障りだ。

パチン、と指を鳴らすと、アーシエの肌に傷一つなく、それはすばりと切れて用を成さなくなる。

それをゴミ箱に投げ捨て、ライトは満足そうに笑って、アーシエの額に口付けを落とした。

明かされるとき（後書き）

わざと隠していたわけではないのですが、知らない方も多いと思いますので、ここで解禁します。

本作品の元ネタで、R18の『黒猫は好き？』をムーンのほうで公開しております。

下記ご注意ください。

- ・『黒猫』は試作品的な意味合いが強い為、人物・背景設定等がかなり変わっています。
- ・後日談が含まれます。
- ・どエロです（笑）。

基本的な流れは変わっていないはずですが…。

35話でのRシーンの補完にはなると思いますので、大人な読者さまのみお楽しみくださいませ。

ライト君ほんとしょくもないな。

アーシエ、考え直した方がいいと思うよ。いやマジで。

途切れた糸

ライトは今日お休みだったらしく、結局夕方まで、私はベッドから出してもらえなかった。

というか、下着もないのに出られないって！

確かに体はつらいけど、いつまでもベッドの上にいるわけにもいかない。お腹は減るし、喉だって渴く。だけど、シートで体をくるんで部屋の中を動き回るだけで、舌なめずりでもしてそんなライトの視線に追いかけて、気が気じゃない。おちおちトイレにも行けやしないわ。

対して、ライトの方は堂々と全裸のままってのはどういうことよ！
？ なんだか私の方が遠慮して、ちよつと小さくなってるのってなんかおかしくない！？

だいたい、臨戦態勢のままのライトと二人きりで部屋に閉じこもってるなんて、身の危険しか感じられないのよ！

今も腕の中に抱き込まれて、あちこち触りまくるのにたまりかねて、「もう、いい加減服着させてよ！ これ以上は体が持ちません！」って申告してやっと、服を用意してもらえる有様で。

誰が用意したかは知らないけど、きつとライトがこんなこと頼めるのはエルサーナさんだけだろうし、多分私が人間だってばれたよね…。

猫の姿でライトの過去をいけしゃあしゃあと聞いてしまった手前、なんか顔を合わせるのが申し訳ないような。

渡されたのは、クリーム色のワンピースに、透かし編みの桃色のカーディガン。どちらも肌触りが良くて、軽い。

ワンピースには、小花模様が織り込まれている布を使っているみた

いで、光の加減で浮き上がって見えるのがすごく綺麗。

仕立ても一目で上等とわかるもので…正直、こんな高そうな服、着たことありません！ もらえせんっ！ 汚しちゃったら困るよ、弁償も出来ないし！！

恐れ多くて辞退したけど、

「じゃあしょうがないね。他に服ないから、やっぱり裸でいてもらうしかないかな」

なんて、笑顔で言い放たれた。

いやいやいや、おかしいでしょ！？ 0か100かの二択しかないんかい！ 適度に質素な服でいいんだってば！

だったら侍女服で充分ですって言ったのに、

「なるほど、そういうプレイもありかあ」

なんて言われたら、それも首振って辞退するしかないよね！？

うわああん、うっとりすんなあっ！ プレイってなによ！ なに想像してんのよーっ！

そうまで言われたらもう、着るしかないでしょ、自分の身の安全のために。

「別に服なんかなくていいのに。裸の方がさわり心地いいし、すぐ抱けるのになあ。ていうかどうせ脱がすからいいけど」

人間に戻ってめでたしめでたしのはずだったのに、どこで間違えたんだろう。

え、間違ってるのは私なの？ 私が選択肢誤ったせいなんですかああ！！

なんだろう、目からしょっぱい水が止まらないの…。

そんなこんなで、やっと落ち着いて夕食にありついてから気づいた。昨日までついてた首輪、なくなってる…。

今頃気づく私も私なんだけど、いいのかな？
あれには確か…。

「ライト、首輪は？」

「そんなものとつくに捨てたよ。あんなもんがいつまでもアーシェの肌に触れてるなんて、考えただけで腹が立つ」

腕を組み、心底腹立たしそうに言うライトの剣幕にちよつと引きつつ、言葉を重ねる。

「でも、あれってライトの魔法がかかってたんじゃなかった？」
そう言った途端、ライトは瞬きをして私を見て、すまなさそうに笑った。

「ああ、追跡の術ね。気づいてたんだ。昨日風呂で変化の術と一緒に解いたよ。だってもういらないでしょ？」

そもそも、私が中庭に閉じ込められて、エルサーナさんに助けてもらった時、ライトは私がお昼に戻ってこないから、ずっと探し回っていたそうだ。

やっぱり、猫の姿じゃ色々と不都合はあるし、何かあった時に助けられないと困るから、私が寝ている時に首輪に術をかけておいたんだって。

「やっぱりそうだったんだ。いつもいつも都合よく現れるから、おかしいとは思ってたのよね」

「だって心配だったし」

もう色々開き直っちゃったのか、ライトは悪びれもせずになににしながら言うただけだ。

「どうして本当のこと言わなかったの？」

「聞かれなかったから」

しれっといわれてむかつときた。

「猫なのにどうやって聞けつつーのよ！」

「うーん、そうだね。残念だったねえ？」

にこにこにこ。

むかつ、に、イラっ！　　が加わった。

「…わざとなんじゃん…!!」

「まあまあ。黙ってたただけだよ。だましてはいないでしょ」

「おんなじでしょーがっ！」

なんで私かなだめられなきゃならないのよっ！

もおおっ！　　そうやって人を食ったようなことばかり言うんだから！　　私が子供だと思って、そうやって振り回して楽しいか！？

…ああ、楽しい…んだろなあ…。

満面の笑みを浮かべる年上の恋人に白旗を振り、私はがつくりと肩を落とした。

ああ、でも。

私、ライトと普通に会話してる。話せてる。

猫だったときと変わりなく意思疎通できてるって、もしかしてすごいことじゃない？

すっかり忘れてたけど、ライトって公爵様の息子なのよね。で、騎士団の副団長さんで、すごく偉い人。

でも、こうして前と同じように会話してるのが、ライトはすごく嬉しいんじゃないかな。

私も、人間に戻っても、ライトが変わらずに接してくれることがすごく嬉しいし。

人間に戻って、ライトに手の平返されたらどうしようって悩んだこともあった。きっとライトも同じように思っていたんじゃないかなあ。

偉くても貴族でも、変態さんは変態さんだし、急に態度変えるのもおかしいから、ライトが許してくれてるうちは、このままでいいやっと思う。

うっとうしいし、むかつくし、腹たつし、しつこいし、エッチだけど、でも。

しょうがないよね、好きになっちゃったんだもん。

はああ、と深いため息をつくとき、ライトがずっと肩に手を回して、ぐっと抱き寄せられた。

淫靡な笑みと共に、肩からずりりとカーディガンを落とされ、むき出しになった肌に唇が滑る。

「え、ちょ、ちょっと!？」

「ね、お風呂入ろうよ。昨日からずっと運動しっぱなしだし、今日も綺麗に洗ってあげるよ」

「…いい加減にしろ! 誰のせいだと思ってんのよ、このド変態! つ!」

パンツ！ と小気味いい音と共に、ライトの頬に赤い大きな花が鮮やかに咲いた。

そして、次の日。

やっぱり裸で、ライトの腕の中、目を覚ました私を、彼は朝にしてはひどく濃厚なキスでベッドに縫い付ける。

「や、もう、ダメ…。今日は仕事、でしょ…」

息も絶え絶えに、あちこちに触れる不埒な手を必死で押しとどめて温かい腕の中から逃げ出すと、ライトはどうしてか、ひどくさびしそうに…。まるで、置き去りにされた子供みたいな顔をするから。

少しだけためらって、私はベッドに戻り、ライトの頭をきゅっと抱きしめる。

「そんな顔しないで。お仕事でしょ？ さあ、早く起きてご飯食べよう」

「うん、ごめん…。少しだけ、このままでいて」

どうしてだろう。こんな風に不安がって、甘えた様子を見せるなんて、今までなかったのに。

私よりもずっと大人で、ずっと強いライトにも、弱さがあるってわかってる。でも、今日のライトはいつもと違う。まるで子供みたいだ。

私が孤児院に帰ることが、そんなに嫌なのかな？

「ね、ライト。ちゃんと帰ってくるから。大丈夫だよ」

「うん、…わかってる」

金茶色の髪が、肌をくすぐる。思わず『んっ』と声を上げると、胸の谷間を強く吸い上げられた。

「あ…ライト…」

「きれいについた」

そう言って顔を上げたライトは、いつもの顔に戻っていて、ほっとする。

見下ろした自分の胸の真ん中に、鮮やかに赤く残った小さな痕。

「いつまでも消えないといいのに」

ぽつりとこぼして、ライトは勢い良く起き上がった。

それから、今まで猫だったときと同じ、いつもどおりの朝、いつもどおりの風景。

二人で並んでご飯を食べて、身支度を整えて、ライトの着換えをソファに座って見つめる。

違うのは、私が人の姿だってことぐらい。

「今日は仕事があるから、俺は送って行けないんだ。ごめんね。代わりに誰かに送らせるよ。無事に送り届けるから、安心して」

ライトの出勤時間より少し早く、私は城を出ることになっていた。寝室から出て、応接室でライトと向き合う。

「女性騎士をつけるよ。院長先生とシスターには、礼儀を欠いて申し訳ないけれど、よろしく言っておいて」

確かに、ライトの様子はもういつもどおりだ。浮かべる柔らかな笑

みも。

だけどそれが、私にはどこか張り付いた仮面のように見える。今まで、私に関することは、非常時以外はすべて自分でしてきたのに、今日はどうしたんだろう。

「これ、通行許可証ね。先に渡しておくよ。次に城に来たとき、これ見せれば中に入れるから。戻ってきたら、最初に団長室に来てね」「うん、わかった。ありがとう」

渡されたのは、紺色の紐が通された、銀のプレート。獅子と百合をかたどったモチーフは、王家の紋章だ。何も持たずにここに来た私にとって、もらったこの服と許可証だけが荷物のすべてだ。

こんこん、とノックの音が響く。

「ああ、来たみたいだね」

ライトが、にこりと笑う。

その笑顔は綺麗だけど、どこか切なさがにじんでる気がした。

ライトがドアを開けると、赤茶色の髪を短く切りそろえて、頬にそばかすが浮かんだ背の高い女の人が立っていた。すかさず、ぴしりと敬礼をする。

「ご命令により、参りました」

「この子を頼む。くれぐれも気をつけて、無事に孤児院に送り届ける」

「はい。お任せください」

ライトは、そっと私の背中を押した。

「さあ、行つて」

「あ、あの、ライト」

後ろ髪を引かれて、見上げたライトの笑みが、いつそう切なさを増して。

なぜだか、泣きたくなる。

「じゃあね、アーシエ。…元気で」

その一言を残し、ドアがぱたりと閉め切られた。

…どうしてだろう。

ライトと私を繋いでいた糸が、ぷつりと切れた気がした。

途切れた系（後書き）

臨戦態勢って、ま、いろんな意味でねw

裸族満喫中のライト君であります。どんだけ自信あるんだよアンタ

…（何に）

しっかし、アーシェちゃん、人間に戻ったらえっらいツツコミキヤラになってますねえ。

爪がないので平手で応戦w

決意（前書き）

アーシェの過去もさうと。∴の割には少々長いですが、就職云々の下りはざっくり設定なので、そんなもんかと思ってください。

決意

女性の騎士様はとても気さくな人で、気を使ってくれているのか、孤児院に帰る間にも、いろんな話をした。

騎士様はなんと貴族のお嬢様なんだそうだ。

女の子らしいことに興味もてず、上のお兄さん達と遊んでいるうちに剣術に目覚め、そのまま勘当同然に家を出て騎士団に入団したんだって。

「あの時は、意固地になって、自分が一番正しい！ って思い込むものだけど、後から考えると、周りが見えていなかったってわかるもののよね。今思い出しても、悲壮感いっぱいなその時の自分が恥ずかしくなるわ」

その言葉は、私の痛いところにさっくりと突き刺さって、なんとも言えない気分になる。

今から帰る場所のことを思うと、余計に。

色々心配を掛けてしまった。それがすごく申し訳ない。

曖昧に笑う私に何かを感じたのか、騎士様は笑って言った。

「だけどね、間違いを自分の中で認めてしまえば、楽になるわよ。

親には素直に頭も下げることが出来たし、同じ事ではもう間違わないから」

それを聞いて、私も深くうなずく。今ならきつと、素直に頭を下げられそうな気がした。

ライトのことも、聞いたら色々話してくれた。

ライトが見た目優しそうに見えて、実はものすごく厳しいとか怖いとか毒舌だとか。

私を見送る時にすごく優しくしたのは、幻覚に見えたとか。

普段は冷たい氷のようだとか、切れ味鋭い細剣に例えられたりしてるとか。

戦闘訓練では、笑顔で容赦なく騎士様たちを叩き伏せているとか。今までも薄々そうなんじゃないかなーって思っていたけれど、やっぱりお仕事の時にはそんな感じなんだ。だって、ジョシュを助けた時も、駆けつけてきた騎士様たちにはそんな感じだったものね。なんだかいつものライトからは全然想像つかないなあ。そんな偉い人が、あーんな変態さんだなんて、きっと騎士団の誰も知らないんだ。

だけどこれって、得した気分…とは言いがたいよねえ？　むしろ知りたくないわ。

騎士様のおかげで、街中も安心して歩くことが出来た。孤児院の前まで送ってもらい、お礼を言って別れる。

そうして、ゆっくりとふりむいた。

紺色の尖塔を、懐かしい気持ちで見上げながら、自然、笑みが浮かぶ。

戻ってきたんだ。ちゃんと、人間の姿で。

思えば、いろんなことがあった。

魔女にさらわれて、猫にされて、魔法を覚えさせられて、ライトに拾われて、お城で生活して。

ライトに好きになってもらって、私もライトが好きになって。

あれからもう3ヶ月が経とうとしている。4日後には誕生日が来て、私は17歳だ。

立ち尽くしていると、孤児院の玄関が開いた。

最初に顔を出したのはウィリアム。茶色のカバンを斜め掛けにして、半身をドアの外に出したところで私と目が合って、両目と口がまん丸になった。それがおかしくて笑うと、玄関にぱつと引っ込んで。次には、両開きのドアをばあんっ！ と全開にして、子供達がなだれのように飛び出してきた。

「アーシェー！」

「アーシェねえちゃん！」

「おかえり！」

「待ってたんだよ！」

口々に叫びながら、大きい子も小さい子も、みんなが私をもみくちゃにする。泣き出す子もいて、私もその子を抱きしめたまま、つられて泣いてしまった。

玄関から、院長先生とシスターがゆっくりと出てくる。

「さあ、大きい子達は学校の時間だ。小さな子達は、本を持って学習室に行きなさい」

朗々とした落ち着いた声で、院長先生が言つと、子供達はぱつと駆け出していく。

「ねえちゃん、また後でね！」

「帰ってくるまでちゃんというよ！」

「またいなくなっちゃだめだよ！」

「やくそくねー！」

と、口々にいいながら。

それを見送って、しーんとした玄関に、私と院長先生、シスターが残される。

おおらかでお父さんみたいな院長先生。優しくお母さんみたいなシスター。

二人が私を探して届けを出してくれなかったら、私が誰かをライトが知ることはなかった。

ライトに、名前も呼んでももらえなかったかもしれない。

こんなに早く、ここに帰ってこれなかったかもしれない。

二人とも、目を潤ませながら私のことを見つめている。

「ただいま帰りました。心配かけてごめんなさい」

「良く帰ってきたね、アーシェ」

「本当に、無事でよかったわ…！」

ぺこりと頭を下げると、二人にぎゅっと抱きしめられて、私はまた泣いてしまった。

「少しお話ししましょうか」

シスターがそう言って、子供達とは別室の、院長先生の部屋に連れて行かれた。子供達は、教会の別のシスターがついててくれる。部屋にある茶器で、久しぶりに3人分のお茶を用意する。院長先生とシスターの前にカップを置いて、私もソファに腰を下ろした。

院長先生が一口お茶を飲み、カップを置いて深く息を吐いた。

「…おととい、騎士団のライトリーク・ウォーロック様がこちらにいらっしやったよ。魔女に捕らえられ、猫の姿に変えられて、使い魔として魔法の練習をさせられていたというが、本当かい？」

静かな問いに、私はこくりとうなずいた。

「はい、本当です。遠耳の術と、姿隠しの術が使えるんですよ、私。なんだか嘘みたい」

自嘲的に笑うと、シスターが黙って肩を抱いてくれた。

魔女の隠れ家でのことは、今でも思い出すと体が震える。

魔力があつたから目をつけられて、さらわれて、首輪をはめられて猫にされて、魔術を強要された。

ご飯も寝る所も満足になく、ほうきや術で痛めつけられ、いつ終わ

るとも知れない地獄のような、つらい日々だった。

でも、今ではそれが、なんだか遠い昔に見た夢のような感覚に変わってきているのはきつと、ライトがそばにいてくれたおかげ。

「そうか、随分つらい思いをしたんだね。魔女を捕縛しに来たウォーロック様に拾われたのは、本当に幸運だった。神に感謝しなければ」

「はい。多分、私を拾ったのはついでしょうけれど、それがなければ、今ごろここにはいなかったかもしれない」

本当に、幸運だった。

あそこにライトが現れなければ。そして、ライトが魔術を使えてなかったら。そもそも、ライトじゃなかったら。

私は生きていなかったかもしれないもの。

院長先生は、手を組み、私をじっと見つめた。ライトは、どこまで話しているんだろう。

「ウォーロック様は、すべてを話していかれた。ご自身がお前に術をかけ、手元に置いたことも。お前が大事で、手放せなかったことも、すべて」

どうして……。隠すことだって出来たはずなのに、今になって、まるで責められる事を望んでいるみたいに、全てを告白するなんて。私はうつむき、きゅつと唇をかんだ。

「アーシエ。ウォーロック様は、あなたをお城で雇いたいと言ってくださったわ。罪滅ぼしの為でもそうでなくても、このお話自体は私達はとても喜ばしいことだと思うのよ。あなたの拇印があったけれど、本当に、あなたもそれを望んでいると思っていいいのね？」

確かめるような、二人の目。

それは、今まで私が二人の話を聞かずに、心配を掛けてきたせい。頭を下げるなら、今しかない。私は意を決して、顔を上げた。

「確かに、私は猫にされていました。私はずっと魔女の呪いのせいだっと思っていただけ、ライトから、自分が変化の術をかけていたんだっていうことも、ちゃんと全部聞きました。だけど、私、猫だっけ言うこと以外に、何も嫌な事なんかなかった。ご飯はおいしかったし、ちゃんとベッドで寝ていたし、お風呂も入れてくれたし、行動も自由だった。それに、猫になって色々、今まで見えてなかったことが見えたような気がするんです」

そう、お城の裏庭で、子猫を助けようと木に登って下りられなくなった時。

人は一人で生きてるんじゃない、一人じゃ生きられないって、初めて気づいた。

「私、今までみんなのお姉さんなんだからしつかりしなきゃって、私が出来てあげなくちゃダメなんだからって思い込んでいました。それしか、私に出来ることはなかったから。そうして頼られることにずがっていたの。ここは、私にとっては温室で、箱庭で、夢の場所。もう出て行かなきゃいけないって事から、ずっと目をそらしてた」

元々、私は物心ついたときから孤児院にいたから、普通に親がいる家庭の生活を知らない。私にとっては、この場所が私の全てだった。ここにいたかった。ずっといたかった。離れることが怖かった。外の世界が怖かった。

だから就職も、うまくいかなかったんだと思う。それが、余計に私を孤児院に縛り付けたんだって、今なら良くわか

る。

高等学院に通っていた時は、経済的な負担をかけたなくて、死に物狂いで勉強して、成績上位者しか受けられない奨学金をもらっていた。

だけど、学院に通う貴族や商人の子供は、自分たちよりも成績が良くて、奨学金をもらって勉強する孤児が気に入らなかったみたい。教科書を捨てられたり、移動教室を連絡してもらえなかったり、「授業料泥棒」なんて陰口を叩かれるなんて、日常茶飯事だった。彼らを見て、無意識に外の世界を恐れていたのかもしれない。孤児院から出たくなかったのは、多分この辺の理由もあると思う。

高等学院を卒業するのは16歳。それから17歳になるまでは、国の援助を受けながら就職活動が出来る。

最初は、シスターや院長先生から、貴族のお屋敷を薦められた。貴族のお屋敷に勤めると、高い給料がもらえる。

国の規則で、基本的に孤児は王城に勤めることは出来ない。パシフイスト教会が例外だなんて知らなかったけれど、多分その時お城では働き口の空きがなかったんだろう。だから、就職先としては貴族のお屋敷が一番いい職場だった。

それに、高等学院でいい成績を収めると、就職でも学院から口ぞえがもらえる。だから、ここでわかりましたといっておけば、就職は決まったも同然だった。

普通のお店や公共機関に勤める場合は、就職が決まって、17歳の誕生日から勤め始めることになる。それまでの空白期間には、国からお金がもらえる仕組みだ。

だけど、貴族のお屋敷に勤めるなら、17歳になる前でも、すぐに

見習いとして住み込まなければいけない。その上、見習いの間はアルバイトをしているとみなされて、国からのお金がもらえない。私がいなくなったら、誰が小さい子の面倒を見るの？ シスターのお手伝いは誰がするの？ それに、成人になるまでは、国からも勤め先からもお金がもらえないことになる。そうなったら、孤児院への援助が出来なくなってしまう。この孤児院はそれほど裕福ではない。だから、孤児院の近くで、すぐにお金がもらえるところでないや。

そう言つて、私は院長先生やシスター、学院の先生たちの説得に、頑なに首を横に振り続けた。

だけど、町の働き口は、商人同士の縁や取引の方が大事らしくて、決まりかけていた職場を、別の商人の子に取られるなんてことが3回続いた。

その時になつて初めて、このままじゃまずい、孤児院を助ける所の話じゃなくなるって思い始めた。

改めて院長先生や学院に貴族のお屋敷を当たってみてもらったけれど、時すでに遅く、使用人の口はすべて埋まってしまう、もう入れる余地はなくなっていた。

周りの大人はみんな、そうなることがわかっていたんだ。だから、私に考え直すように何度も言ってくれていたのに、私は耳を貸さなかった。

そうして、就職が決まらないまま、私は17歳を間近に控えた今まで、働き口を見つけることが出来なかった。

だから余計に、居場所がないような気がしていたんだと思う。

孤児院から離れたくなかった。貴族の屋敷に見習いに入ったら、すぐに出て行かなくちゃならない。それがどうしても嫌だった。だから、町の働き口を探した。17歳になるまで、孤児院で生活したかった。将来のことを考えていたわけじゃない。孤児院を助けるため

なんて、ただの口実だった。

本当は、理由をつけて、孤児院から出て行くのを先延ばしにしたかっただけだったんだ。

孤児院で、慰められていたのは、本当は私のほうだったのに。今にして思えば、なんて周りが見えていなかったんだろう。

私は、全然子供だったんだ。

「猫になつて、見えてきたものがあります。私は、自分の殻に閉じこもっていたの。ここしか知らないから。外は怖いから。前のままだったら、私はここから出られなかったと思います。外が怖くないって、一人じゃないって、ちゃんと見守ってくれる人もいるって気づかせてくれたのは、ライトだから」

ライトには、本当に感謝してる。私の殻を、破ってくれた人だもの。だまされていても、嫌いになんかなれない。それを差し引いても有り余るくらい、いろんな言葉を、気持ちを、温かさくれた人だもの。

「確かに私は猫にされてたけど、嫌だったことは、猫にしたことを黙っていたことなの。許せないのはそこだけなの。私は、お城で働きたい。ライトの傍で働きたいの」

私に真実を告白したときの、ライトの情けなく下がった目を思い出して、くすりと笑った。

「許せないから、ずっとそばにいる。私が傍にいれば、ライトは私を見て、自分がしたことを思い出すでしょ？　それが、ライトにとつての罰になるかなって。大丈夫、私、結構強くなっただですよ？

魔女にされたことを考えたら、あれ以上怖いことなんてないもの」

そう、あれ以上怖いことがあるとすれば、それは。

ライトが、離れていくことだけ。

「私は、ここを離れます。新しい場所で生活していきます。院長先生、シスター。ずっと心配させてごめんなさい。私、今度はちゃんと頑張るから」

深く頭を下げてから、私は、しっかりと院長先生とシスターを見返した。

今度は、ただの目先のわがままじゃないって思いたい。自分の意思で、ここを出て、お城でちゃんと働きたい。それを、認めてもらいたかった。

「そうか。それならもう何も言わないよ。出来るところまでやってみなさい」

「お城勤め、それも、孤児が侍女になるなんて言ったら、つらいことがたくさんあるかもしれないわ。でも、支えてくれる人がいる。つらかったり、泣きたくなったりしたら、ちゃんと誰かに頼りなさい。もちろん、里帰りしてきてもいいのよ。頑張ってね、アーシェ」

「はい！」

晴れやかに笑った二人に励まされて、私は力強くうなずいた。

よかった。やっぱりここに帰ってこれて。

ライトの傍が、私の居場所だけど。でも、生まれてからずっと過ごしてきたここは、私の実家のようなものだから。

今度は、間違えない。今度こそ、頑張ってみせる。

これからが、本当のスタート。

決意（後書き）

裏設定として、原則として就職活動は卒業後から行う、でも卒業時点で17歳の誕生日までに6ヶ月を切っていれば、在学中の就職活動を認める…みたいな感じ。

ま、本筋に絡んでくる部分ではないので、あまり突っ込まない方向でお願いします。

心はどこにあるの

孤児院に帰ってきたその夜は、子供達が帰ってきたお祝いをしてくれた。

ライトが、私と子供達の為にいくらか援助をしてくれたらしく、その日はシスターと大きい女の子達が腕を振るい、今までにないすごいご馳走になった。その中には、私がお城でとても好きだったものもあって、ライトの気遣いがすごく嬉しかった。

その後、男の子達とボードゲームをし、女の子達とお絵かきをし、夜は小さい子達にせがまれてベッドに引きずり込まれ、一緒に眠った。

久々の、にぎやかな夜。

3ヶ月前までは日常だった、たくさんの人々の気配がする夜。ベッドの中、無意識に擦り寄ってくる小さな子供の高い体温と、どこか幼く甘い匂いに包まれて、ライトは眠れているだろうか、ふと心配になった。

次の日は休日だ。久しぶりに、朝からシスターの手伝いをしようとキッチンに入ったら、大きい女の子2人、キャサリンとエレナが、シスターの傍でくると動き回っていた。

「ねえちゃん、おはよう！」

「手伝いなら私達がするから、座ってて！」

と、張り切る2人に追い立てられて、苦笑しながら食堂に戻ると、シスターがにこにこしながら、お茶を入れてくれる。

「あなたの次に大きいのは私たちだからって、あなたがいなくなっ

てすぐ、自分たちで手伝うようになったの。今ではすっかり堂に入ったものよ。ここはいいから、少しのんびりしていらっしゃい」

「ありがとう。でも、なんだか落ち着かなくて」

カップを受け取り、湯気の向こう、キッチンで動く3人を見ていると、のんびりお茶をするのがどうも悪い気がする。

それなら、小さい子達を起こして、身支度をさせなくちゃと寝室に向かうと、そっちは大きい男の子2人、ウィリアムとヘンリーが奮闘していた。

「リタ、リュシー、起きろよ。もう朝だぞ。あ、ねーちゃん、おはよ」

「ジョシュ、下着はこっちだって！ 着替えたら顔を洗って歯磨きだぞ！ なんだよ、アーシエ。こっちはいいから、下でのんびりしてろよ」

口々に言われて、やっぱりここも追い出され、アーシエは食堂に戻る。

手持ち無沙汰なのはいいことなんだろうけれど、なんだか身の置き所がない。でも、本当なら、もっと早くにこういう状況を作ってあげるべきだった。それを、私がずるずると居座って、何かと手を出していたのは、今となってはよくないことだったと今さらながら自覚する。

そうだ、もうお城に住むことになるのだし、世代交代したと思えばいいのよ。みんなが成長した証なんだから、私はどつしりと座って見てればいいんだ。

女の子2人とシスターが、次々に朝食を運んでくる。

男の子2人と小さい子供達も、しっかりと身支度をして食堂に姿を現した。

「うん、みんなすっかり頼れるお兄さんお姉さんの顔だ。私がお城に帰っても、もう大丈夫。」

そのことに、ひどく安堵する自分がいた。

そして、思うのはやっぱり、ライトのこと。

ちゃんと起きているかしら。朝食はきちんと食べたかしら。

これが悪い癖なんだとはわかっていているけれど、あの人は、1人の時はまともにご飯を食べなかったって言うてたから。

にぎやかな食卓で、ふと、ライトを思っただけ寂しさがよぎった。

久しぶりに、外で思いっきり遊んだ。

おままごと、ボール遊び、鬼ごっこ、砂遊び。

危なっかしい場面には、つつい口も手も出したくなるけれど、そこはぐっとこらえる。

すると、すぐに大きい子達が走ってきて、それぞれに見守ったり、教えたり、泣いた子を抱いたりしてくれる。それが行き過ぎて小さい子を怒鳴りつけるような時は、すかさずシスターが割って入り、上手にその場を収めてくれた。

ああ、私もそうだったっけ。特に、ウィリアムとは年も近かったし、言い聞かせようとする私と、反発するウィリアムとの言い争いが取っ組み合いのけんかに発展して、よくシスターに叱られたわ。

ブランコに腰掛けて、くすくすと笑う私の隣に、ウィリアムがやってくる。

「ったく、ちよろちよろしやがって、ガキ共め。ちつとも目が離せねえ」

口ではぼやきつつ、目はちゃんと子供達を追いかけてるくせに。

「なに笑ってんだよ」

横目でじろりとにらまれて、一層おかしくなる。

「だってさあ、今まで私に何か言われるたびに、散々ほっとけとか危なくないとか、わかってるとか言ってたくせに、今じゃあんたが

みんなに同じこと言ってるんだもの。おかしくって」

そう言つてやれば、ばつが悪そうに小さく舌打ちをして、ウィリアムは頭を掻く。

「うるせえな。俺だつてお前とそう変わんねえ年なのに、いつまでもガキ扱いであれやこれや言われてみるよ。むかついたつてしょうがねえだろ？　いつまでも誰にでも、お前はそんな調子だったからな。こつちだつて、結構我慢してやってたんだぜ」

面と向かつてそういわれれば、確かにその通りなので、私も笑うしかなかった。

「それは、今よくわかったから。ちよつと手も口も出しすぎだったよね。ごめん」

「うわ、なんだよ、お前の口から素直にごめんとかありえねえ！　気持ち悪っ！」

「なんですつてえ！？」

人が反省してるつてのに、うそ寒そうに二の腕擦ったりとかして、何の嫌味なのよ！

拳を振り上げると、うひゃひゃと笑いながらウィリアムは逃げていった。

でも、少し前まで、躍起になつてみんなの行動に目を光らせてたのが嘘みたいだ。

そりゃあ、なんか切羽詰まった感じで一々あーでもないこーでもない、あれはだめこれもだめなんて言われ続けていたら、反発されても当然だよな。

私も肩の荷が下りた感じた。勝手に背負つてすごく重たい気がしてたただけけど。

そう言えば、ライトはなんでもかんでもだめだとは言わなかったなあ。

…男に会っちゃダメとは死ぬほど言われてたけど。

こうして年の近い男の子と会うことすら、今ここにいたらぎやーぎやー言われそうだ。

今ごろお仕事の最中なんだろうけど、どうしてるのかなあ…。

その日の夜は、ベッドに入った小さな子達にせがまれて、枕もとで何冊も絵本を読んであげた。

小さな笑い声、なんでなんで？ と無邪気に問う言葉、一緒にお話をそらで読んでいく、舌足らずな声。それらが次々と小さな寝息に変わっていくのを、ほほえましく見守った。

暖かな場所。優しい空間。でも何かが足りないと思うのは。

「ライト、どうしてるかな…」

私の中に深く根付いた。ライトの存在のせい。

ぱたりと本を閉じて、淡く揺れる魔法光のランプを見つめる。

足りないだけじゃない。本当は、不安もずっとくすぶっている。

昨日、あの時、送り出された日。なぜか、ライトの手が離れた気がした。

『じゃあね』なんて、…まるで、別れの言葉みたいじゃない？

いつもと違う、子供のように不安を隠さないライトの様子も気になって、どうしても頭から離れない。

子供達の相手をしてる時にはまだいい。でも、ふとした空き時間に、どうしてもライトのことを考えちゃう。

ライトがお仕事でいなかった時だって、ライトのことばかり考えてぐだぐだになったくらいだ。今は子供達のおかげで気がまぎれてはいるけれど、ライトがどうしているか、気になって仕方がない。

今日で、まだ戻ってきて2日目だ。里帰り期間は長い。あとまだ3日もある。

ため息をつき、私はそつと立ちあがった。

明かりを落とし、足音を立てないように注意しながら、子供部屋を出てそつとドアを閉めると。

「よつ」

壁に背を預けて立つ、ウィリアムがいた。

こうして並んでみると、ちょっと見ない間に、背が伸びたみたいに見える。

黒に近い深緑の肩まで伸びた髪を、後ろで一つにくくっている彼は、私よりふたつ下の15歳。

年頃のせいかな、何かと突っかかってくることも多かったけれど、今日見た限りでは頼れるお兄さんって感じで、ずいぶんと下の子達の面倒見も良かった。

「どうしたの？」

首を傾げて尋ねれば、あー、と照れた様子で頭の後ろを掻く様子がおかしい。

「何笑ってんだよ！」

「いや、なんか、反発してこないあんたって、なんだか新鮮で」

「うるせえな、いいだろ別に！」

「茶化したわけじゃないよ、ごめん」

「べ、別に謝らなくてもいいけどよ」

照れたような困ったような、ちょっと頬を赤くしてぶっきらばうに返してくる声には、どこか温かさが混じっているから。ああ、氣を使わせちゃったな、そう思ったら、謝罪の言葉はするりとあっけな

いほどに流れ出る。

ウィリアムは、意を決したように、私の顔をまっすぐに見つめた。
「いきなりいなくなっただのはびっくりしたけどさ、時期的には元々お前が出て行ってもおかしくなかっただろ。お前がいなくなったら、次にちびたちの面倒見んのは俺らの仕事だからさ、みんなで自然にやり始めたんだよ。ほんと、お前に逆らってもこうした方が良かったんじゃないかって、俺は思ってる。やっぱさ、今まで甘えすぎてたって、わかってるんだよ、俺らも」
「ウィリアム……」

一つ、自分の非を認めただけで、状況はこつも劇的に変わる。本当に、自分のことしか見えてなかった自分が情けない。
ウィリアムとも、もっと早く、こうして話をすればよかった。

「だからさ。ここは心配いらねえから、好きにしたらいいじゃん。遊びにはいつでも来られるんだし、ちびたちはごねるかもしれないけど、俺らみんなで何とかするからさ。なんか、心ここにあらずって感じだし、お前、ほんとに城に戻りたいんじゃないの？」

「やだ……ほんと、大人になって」
「茶化すなよ！」

そうなんだ。私、ライトの所に戻りたいって思ってる。まだ、離れて2日しかたってないのに。
ウィリアムにさえバレバレくらい、ライトのこと考えてるなんて本当に重症だ。

だけど、気持ちがもう王城に飛んでるの。
ライトのことが気になって仕方ないの。

『帰れ』って言われて、今すぐにでも飛んで行きたい自分があるの。

5日間の猶予をもらったけれど、その間帰ってくるなとは一言も言われていない。だったら…ウィリアムの言葉に甘えたい。

「ありがと。ほんとは気になってたんだ。だから、明日帰るね。あさって誕生日だし、お祝いしてくれるって言ってたちびちゃん達のためにもいてあげたかったけど、みんながいれば大丈夫そうだからウィリアム、ありがと」

「べ、別にいいよ」

ちよつと耳を赤くして言うと、ウィリアムはわざと不機嫌な顔を作って男部屋に戻って行った。

あの年頃の男の子って、褒められたりお礼を言われることに慣れてないのかなあ。それとも、ウィリアムが不器用なだけなのかしら。あ最近は何事にもスマートでそのないライトの姿ばかり見ていたからか、ああいう反応がなんだか新鮮に見える。

ともかく、これで心おきなく王城に戻れそうだ。

部屋に戻る私の足取りは、猫でいたときのように軽くなっていた。

心はどこにあるの（後書き）

ライトのことで頭いっぱいなアーシェちゃん。
ウィリアムは将来いい男になると思います。

急変

次の日、私は朝食を終えて、部屋を片付けた。

服や雑貨は最低限だけをかばんに詰めて、後は捨てるか、ほかの子達にあげた。場所柄、使えるものは上から下へとどんどんお下がりしていくものだから、元々の自分の持ち物は多くない。

部屋も綺麗に掃除し、ベッドを整えて、窓も机もいすもぴかぴかに拭いた。

「よし、きれいになった」

かがんでいた腰を伸ばして、私はぐるりと部屋を見回した。

窓枠の傷も、色あせたカーテンも、きしむ床も、固いベッドも。この狭い部屋いっぱい、思い出がたくさん詰まってる。

泣いたこともある。叫んだこともある。八つ当たりをしたことも、物を壊したこともあってある。

楽しかった時も、苦しかった時も、悲しかった時も、つらかった時も、うれしかった時も、ここですべてを過ごしてきた。

温かい、ゆりかごのような。母親の胎内のような。そんな、ただただ優しい場所だったけれど、私にはもう必要ない。

まだまだ、歩き始めの赤ちゃんみたいに頼りないけど、自分で外の世界を見たいから。新しい場所へ行きたいから。

一応お城に行くんだし、と、服はあの時もらったワンピースにした。というか、それ以外にお城に着ていけそうな服がないからだけ。首から通行許可証のプレートを提げ、大小のかばんを一つずつ持てば、準備完了。あつけないくらいに簡単に、ここを出て行く準備は終わってしまう。あれだけ固執したことが嘘のように、手も体も、

旅立ちに逸る。

もうさらわれたりすることはないだろうけど、まだ一人で町を歩くのはちよつと怖い。だから、王城までは、院長先生が送ってくれることになった。

開け放した玄関で、私は荷物を手に振り返る。

懐かしい場所、懐かしい人たち、たくさんの思い出。

勢ぞろいする、私の妹達、弟達。

「急に帰ることになっちゃって、ほんとにごめんね、みんな。だけど、絶対また来るから」

「そうだぞ、お前ら泣くんじゃねーよ。ねーちゃんが行けなくなるだろ！」

もう泣き出した子達に謝りながら、なだめに回る大きい子達の姿に頼もしさを感じる。

「絶対来てね！」

「また遊んでね！」

「絵本読んでね！」

「また、絶対絶対来てね！ 約束ね！」

涙を必死で堪える小さい子達を、順番に一人ずつ抱きしめる。

こうしてあげるのも、もう最後。

「うん、約束するよ。みんなも元気だね。お勉強もお手伝いも、ちゃんとするんだよ！」

「わかってるよー！！」

大きな声で返事する子達に、にこつと笑って見せる。

私も、みんなに負けないようにがんばらなきゃ。

「みんな、今までありがとう。またね！」

17年間を過ごした、私の家。大事な場所であることは、これかも変わらない。

手を振る子供達に大きく手を振りかえして、私はまっすぐ前を向いて歩き出した。

白い石造りのお城の城門は、今日も高く、堂々とそびえたっている。もうすっかり慣れた場所。気後れすることもない。

「院長先生、送ってください、ありがとうございます」

「いいんだよ。つらいことがあったら、遠慮せずいつでも戻ってきてなさい。私達は、お前の家族なのだからね」

「はい。…本当に、長い間お世話になりました。ありがとうございます」

抱擁して、別れを惜しむ。そして、見送ってくれる院長先生に手を振り、詰め所で衛兵さんにプレートを見せ、門をくぐった。

こうして、自分の足でお城に入るのは初めて。目新しいものはないけれど、自分の目線で周りを見ると、なんだか違って見えるのが不思議だ。

その足で、団長室に向かう。

歩きなれた廊下だけど、騎士様たちの視線に晒されながら歩くのは、さすがに勇気が要った。本当なら、私みたいな子供がうろつろする場所じゃないものね。

いつもは誰にも見られずに自由に歩けるのになあ。これは猫のときの方が都合がいいみたいだ。

かと言って、姿隠しの術を使うわけにもいかないし。私は出来るだけ身を縮めながら、廊下を進んでいく。

団長室の前に到着し、金のプレートが止めつけられたドアをこんこん、とノックする。『入れ』という声が聞こえて、私は恐る恐るドアを開けた。

「失礼します、アーシェ・グレイです。ライトリーク・ウォーロックス様に、こちらに来るように言われてきました」

顔を上げた三白眼にねめつけられる。うわぁ、相変わらず怖い！でも、いつかのように、わずかに目元を和らげて机の前まで促された。

入った部屋に、ライトの姿はない。どこか行ってるのかなぁ。

…入ったときから、部屋にどこか違和感を感じる。でもそれがなぜだかわからなくて、私は首を捻りながら団長さんの机の前に立った。

「はじめまして、アーシェ・グレイといいます。お世話になります。よろしく願います」

ぺこりと頭を下げると、団長さんは軽くうなずいて、机の上で手を組んだ。

「ライトから話は聞いているか？」

「はい。騎士団の専属になるとはうかがっています」

「そうか。これが契約書だ。今一度目を通しておけ」

「はい。失礼します」

目の前にすつと滑らされた紙を手取る。

一番下、赤々と存在を主張する私の拇印が憎たらしいっ！

私が寝てる間にちゃっかり奪い取られたそれ。

いやまぁ、この際騙し打ちとか何とか言うつもりはないけど。結局私に有利な条件なわけだし。

私はびつしりと紙に書き込まれた内容に、上から順に目を通していく。

- ・アーシェ・グレイを騎士団専属侍女として雇用する。
- ・契約期間は無期限。
- ・サンクエディア王国王城内にて、騎士団に帰属し、その役務を行

う。

・休日・給与はサンクエディア王国雇用規定に順ずる。
等々。

「あの、質問よろしいですか？」

契約書の内容に、ちよつと引つ掛かりを覚えて、恐る恐る挙手する。
「なんだ」

「雇用規定というのは、どこに？」

口にした途端、ぴくりと団長さんの眉が動いた。

つい逃げ腰になるのはだからしょうがないんだって！ 怖いもんは
怖いんだもん！

でも私、な、なんかまずいこと聞いた？

「・・・すまないが、今日来るとは思っていなかったんでな。まだ
用意できていない。明日中に届けさせよう」

「あ、すみません。やっぱり、明後日来たほうが良かったでしょう
か」

「いや、そうではない、が・・・」

団長さんが言葉を濁して、わずかに視線をそらした。

その先を追いかけて、目に入った光景。少しだけその意味を考えて、
そして。

私は、愕然とした。

この部屋に入った時に感じた違和感の正体がわかったから。

この間、ものすごく散らかっていたライトの机。

…どうして、こんなにきれいになってるの？

はつきり言えば、何もなくなっている。

書類を入れていた箱は空っぽで、他には重たそうな文鎮と空のペン
立てがあるだけだ。

まるで、綺麗に片付けてきた、私の孤児院の部屋みたい。

『じゃあね』

あの日、別れ際の、最後のライトの言葉がよみがえる。

…まさか。

言い知れぬ不安に襲われる。

「あ、あの…。ライトは、…どこですか？」

震える声で尋ねる。

団長さんは、一瞬ぐつと眉を寄せて、ため息をついた。
組んでいた指を解いて、ぎしりと高い背もたれにもたれ、腕を組む。

「あいつから、除隊届けを預かっている。これから小会議場で、陛下より裁定が下されることになっている。お前を、『とらわれびと』にしていた罪によって」

力を失った私の手から、かばんがどさりと床に落ちた。

急変（後書き）

次回もライト君出番ありません。
いちや いちはしばらくお預けになります。
さて、どうなる！？

怒りの焰

まさか。どうして。なぜ。

いつから、こうするつもりだったの！？

あの、『じゃあね』って、こういうことだったの！？

何もない机を前にして、私は呆然と立ち尽くすしかない。

そういえば、あの夜。

ライトは、いつもうるさいくらいに繰り返す、『離さない』『側にいて』って言葉を、一言も言わなかった。

今まで、散々…愛してる、好きだよ、離さない、側にいてって言っただのに。

秘書もやって欲しい、3食部屋付って言ったのは嘘だったの！？あれだけ甘い言葉で私を釣っておいて、肝心なことは何も伝えない。これ以上ひどい仕打ちがある！？

「自分が居なくなるのに、私をどこに置くつもりだったの…？」

「華月宮で、他の侍女や使用人と同じく部屋をもらうことになるな」

呟きに返された団長さんの言葉で、頭をガツンと殴られたような気分になった。

そういうことか…！

ライトは、確かに何も嘘は言っていない。

秘書的なことをするのも、3食部屋つきも、『俺の』とは一言も言わなかった。

ライトの専属ではなく、騎士団の専属になるのは、ライトがいなくても、ここでの仕事を保証されているって事になるのかな。

これは、私に対する償いってことなの？

自分がいなくても、騎士団の専属になって、ここに住むことができれば、私の生活は安泰だ。

私を苦しめた罰として自分は姿を消し、罪滅ぼしのために私には充分な生活を保証する。そういう意味なの？

「どういうことなんですか！？ 私、ライトから何も聞いてません！」

拳を震わせて詰め寄る私に、団長さんは硬い表情を崩さない。

…それが、地顔なのかそうでないのか、私にはわからないけど。

だから詰め寄られて動揺してるのかどうかもわからないけどっ！

「お前を送り出した日、あいつはここに来るなり除隊届けを出し、そのままアクセル殿下と共に陛下に謁見して、お前を『とらわれびと』にしていたことを申告した。殿下が同行したのは、ライトがしたことの証言の為だろう。殿下は、お前と会ったときに、『とらわれびと』だと気づいていたそうだからな。そのまま自宅謹慎となり、今日陛下から裁定が下ることになっている。おまえのとりあえずの身の振り方については、俺と、王妃陛下付きの女官長補佐である、エルサーナ殿に任されている」

手回しが良すぎる。

いつからかはわからないけれど、ライトは私をどうするか、迷っていたに違いない。

『どこにいても、何があっても。君を愛してるよ、アーシエ』

ライトが帰ってきた次の朝。迷いがなくなった顔で言った言葉を思い出す。

もしかしたら、あの時にはもう、決めていたのかもしれない。

「ライトは、どうなるんですか…？」

「さすがのように、団長さんを見る。」

「だけれど、その顔は最初に見たまま、少しも揺らぐことがない。」

「それが余計に、私の不安をかき立てる。」

「『とらわれびと』にすることは、重罪だ。何より、あいつはそれを取り締まる側の騎士団副団長であり、王家の血を引く公爵家の息子。下手に穏便に済ませようとすれば、もみ消したと言われかねん。ライトも、隠す気もないようだしな。お前を普通のペット以上に大切にしていたことは周知の事実だし、お前も良く懐いていたようだが、その辺の事情を考慮したとしても、術を使えないようにした上で不名誉除隊、王都追放は免れんだろう。そうすると、もう二度と城には戻ってこられないだろうな」

「告げられた言葉は、私には十分に重い内容で。」

「何の覚悟も出来ていなかった私には、受け止められない。」

「そんな…！　ライトが居なくなるなんて、嫌です！　私、ライトに飼われて嫌なことなんて一つもなかった！　ただ黙ってただけよ、それだけなのに、どうして追放されなきゃいけないの！　ライトは私を大事にしてくれてた。閉じ込められてたわけでもないし、ご飯もライトと一緒に、人間が食べるものと一緒だったし、寝る時もちゃんとベッドで寝てたし、お風呂も入ってた！　私が人間だって知ってたから、ちゃんと人間に近い扱いだったし、大事にされてるってわかってました！」

「そうだ、みんなにそれをわかってもらえれば、ライトはいなくならずにすむかもしれない！」

「けれど、団長さんは表情を変えずに、私の甘い考えを打ち砕く。」

「例えお前がそう証言したとして、あいつが同意を得ずに変化の術

をかけていたと言質を取られるだけで、ライトの不利にしかない。今日裁定が下れば、あいつは明日にでも王都を出て行くつもりなんだろう」

私が孤児院にいる間に、いなくなるつもりだったってこと？ どうして？ 私と顔を合わせたくないから？

だから、そんなに急いで姿を消そうとしているの？

私に一言もなしに？

「どうして、私が何も知らない間に、全部済ませようとしているの……！？」

ひどい。私は、そんなことをして欲しいわけじゃない。ごまかすみたいじゃなくて、ちゃんと黙っててごめんって言ってほしいのに！

ひどい。ひどい。ひどい。

猫にされていたことよりも、そっちの方が、ずっと痛い。胸が痛くて、涙が出そうだ。

「お前は、ライトの過去に何があったか知っているか」

不意に、団長さんが口を開いた。きゅつと唇をかね、私は顔を上げて団長さんを見返した。

変わらない、硬い表情。でも、少し怖い目元は、どこかいたわるような色を帯びている気がする。

「誘拐されたことがあるとは聞いてますけど……」

「そうか」

小さな声で答えると、団長さんは鋭角なあごを少し引いて、目を伏せた。

「あいつの家はわが国の筆頭貴族でもあって、権力目当てに近づいてくる輩が後を絶たない。あいつの周りでは、常に争いが起こる。おこぼれに預かりたい奴らが擦り寄っては、勝手に争い、あいつを裏切る。それで人が死んだこともあるようだ。だから、あいつは人を信用しない。すぐに、裏にある気持ちを量ろうとする。誘拐されたこともだが、あいつの周りでは、いろんなものが消えて行った。自分がライトリーク・ウォーロックでさえなければ、そんなことも起こらなかったと、あいつはずっと思い込んでいる。そういう背景もあって、あいつは昔から人に相談せずに、勝手に自己完結する癖がある。今回もそれが出たんだろうな。お前がいない間にすべて済ませて、自分は消えようって魂胆だろう」

エルサーナさんから聞いたこととはまた別の、ライトの過去、ライトの傷。これは、人から聞いてもいいことなの？
私が聞いてもいいことなの？

「あいつは初めて大事なものが出来て、戸惑ったんだろう。あいつは、自分の周りで勝手に人が傷つけあうことを恐れている。それが、お前にも及ぶかもしれないと思ったんだろうな。だから、お前が傷つき、離れていくことを恐れた。傷つけるくらいなら、遠ざけたほうがいい。離れていかれるくらいなら、自分から先に離れてしまったほうがいい。そう思ったんだろう」

「だけど、それは私には、ライトのわがままとしか思えない。
残される側の気持ちを考えていない。」

「…本当は、自分を守りたいから、そうしているんじゃないかって。」

「そんなこと、私にしゃべっていいんですか」
エルサーナさんですら、今まで誰にも言えなかったって言ってたのに、ライトが隠してるっぽいこと、そんなぺらぺらしゃべっていい

の？

ところが、団長さんは無表情のまま、ひょいと肩をすくめた。

「ああ。今話したのは、周りの状況やあいつの身内の話から導き出した俺なりの推測に過ぎないからな。俺の推測を誰かに話すのは自由だろう。大体、あいつはお前がこんなに早く戻ってくるとは思っていなかったんだろうし、俺がこうして話すとも思っていないだろうな。それだけあいつの視野が狭くなっているってことなんだろうが、まったく、詰め甘いやつだ」

「えええ、いいんですか！？　ちよつと適當すぎません！？」

思わず突っ込んだら、団長さんがにやりと笑った。…怖！

「かまわんだろう。おそらく、おおよそのところで当たっているはずだしな」

どっから来るんですかその自信は…。人生経験の差なのか？

確かに、言ってることは間違っちゃいないような気がするけど。

ふん、と悪びれもせずに鼻で笑う団長さんに、なんだかがっくりと肩を落としたくなる。

確かに、こういう人でないと、ライトを部下に出来なさそうだなあ。

「要するに、あいつはお前にも俺にも、まだ踏み込んできていないってことだな」

その一言に、めら、と、私の心の奥底に火がついた。

「それって、私を信用してないってこと…？」

「そうだな。それこそ、あいつの想定範囲外ってことだ。最初から、自分がそこまで想われているっていう認識があいつにはないんだろう」

そういうと、団長さんはあきたようにため息をつく。

なによ、あれだけ私の内側まで見透かすみたいに接していた癖して、肝心のところで怖気づいて尻尾巻いて逃げようって魂胆なの！？
めらめらめら、と怒りの炎に油が投下される。

「そもそも、実家から帰ってこなくなるようなことをしていると言う自覚があるんだろう。だから、お前が孤児院に戻って、安心してのんびり羽を伸ばしてくると、信じて疑っていなかったってわけだ」
確かに、それだけのことはしっかりされてますけどね！

ああ見えて不器用なのはわかった。人とかかわりが上手じゃないのもわかった。だけど、勝手に私の気持ち量を量って欲しくない！
まだ何も始まってないし、何もされていない。そんなあるかどうかもわからない未来を心配して、勝手に自己完結するなんて冗談じゃない！

私のこと散々好きにしないと、都合が悪くなったらポイか！ あつたまきた！

一発ぶん殴ってやないと気がすまない！！

「小会議場って、どこにあるんですか！！」

私の雄たけびに応えたのか、団長さんが、ゆらりといすから立ち上がった。

「…俺も部下の不始末とやらで、ちょうど呼ばれていてな。勝手に事を運ぶやつに、一つ灸でも据えてやるかと思っていたところだ。お前も来るか？」

「はい！ 連れてってください！」

「使い勝手のいい手駒に勝手にいなくなられるのは業腹だからな。戻ってきたらやつが後悔するほどき使ってやる」

にやりと笑う悪人面に若干引きつつも、私は団長さんと一緒に部屋

を出る。

ライトを、取り戻す為に。

怒りの焰（後書き）

あーあ、怒らせちゃったw

ライト君、覚悟しなさい。

さあ、アーシェちゃんはライト君を取り戻せるか！？

審判

高位貴族や、お城で高い地位にある人達は、何か罪を犯して捕まったら、王様が直接裁定を下すそうだ。

取り調べる側が買収されたり脅迫されたりして、罪が罪にならないことがあるらしいから、そうなっているんだって。

ライトはウォーロック公爵家の息子で、騎士団副団長という結構な地位にあるから、今回はお城で審判が開かれることになった。

大またで進む団長さんの後を、小走りですついていく私の心は、怒りに燃えていた。

まだ私に黙っていたことがあったんじゃない。暗い過去があるのはわかったけど、私だって伊達に孤児として生きてきてない。温室育ちのお貴族様と違って、私は雑草並みに単純でしぶといのよ。いちいち権力だとか見返りだとかを考える頭もないし、考えるのも面倒だし、たとえ踏まれたって蹴られたって、ライトへの気持ちは枯れたりなんかしないんだから！ 見くびらないでよね！

魔女に捕らえられていたことを考えたら、それ以上に怖いことなんかないって思う。

…ライトが、離れていくこと以外には。

勝手に離れるなんて、私の方が許さないんだから！

団長さんに連れて行かれたのは、中央棟の一角。ノックと共に中にいざなわれた会議場は、中央奥に演台があり、長机がずらっと並んでいる。学院の講義室みたいだ。

その正面の壇上に立っているライトの姿に、息が止まりそうになる。2日ぶりに見るその姿は相変わらずまぶしくて、私の胸を締め付けた。

驚きに見開かれた茶色い目と、何かをいいたそうにパクパクする唇

がおかしかった。

「レイド、ここは厳正なる審判の場だ。部外者の入室は禁じている。その娘は何だ」

朗々とした声がおなかに響く。ライトの左手に座っている、濃紺のベルベットのジャケット、袖口と襟に金モールをあしらったそれを身にまとった、体格のいいかつい顔をしたおじさんだ。

うわあ、ラズウェル様とアクセル様そっくり！ てことは、あれが王様か！

よく見れば、その人の後ろに、二人の王子様も座っていて、私をじっと見ている。

「アーシェ！ な、何でここにいろの！？ てか、レイドあんた、何勝手に連れてきてんだよ！！」

「口を慎め、ライトリーク。審判の場だぞ」

動転したライトの叫び声に、今度は硬質な冷気をまとった声がライトを制した。ライトの右手に居る、茶色い髪をきちんと撫で付け、深緑色のジャケットをまとってモノクルをかけた男の人だ。歳は行ってるけれど、若い時はものすごくもてたんじゃないかってぐらい、今でも面影を残した、すっきりと整った顔立ちのオジサマ。

「おそれながら、陛下。この娘は部外者ではありません。ライトリークに猫にされていた、パシフィスト教会のアーシェ・グレイです。このたびは私の一存で同行いたしました」

団長さんが言ったとたんに、ほほーとか、おおとか言う声と共に四方八方から視線が注がれる。思わず団長さんの後ろに隠れると、ライトがぎりぎりど歯軋りが聞こえてきそうな表情で、冷気をダダ漏れにしている。

なんかね、内心『俺以外の男の後ろに隠れるな』とでも言いたげな

のがひしひしと伝わっては来るんだけどね。

だってしょうがないじゃない、他に隠れるところがないんだから！

元はといえばアンタが原因なんだからねっ！

王様にかつこよく礼を決めた団長さんが、ライトに向き直る。どこか雰囲気半分笑いな気がするの、気のせいだよね…？

「証言者を連れてきてはいけないという決まりはないはずだ。それに、彼女は俺が呼んで連れてきたわけではない。自分から戻ってきて、証言すると言ってくれた。お前の許可もいらん」

団長さんにそっけなく言い返されて、ライトはもどかしそうに口をつぐみ、直立姿勢に戻る。

今日のライトの格好は、まるで平騎士様のようだ。

濃紺の詰襟と、白いマント。金モールやバッジはすべてなくなっている。

誇りも、地位も、名誉も。すべてを捨て去る覚悟をそこに見た気がして、私は唇をかんだ。

ラズウェル様とアクセル様は興味津々で見ているし、王様も面白そうに私を見つめている。

ライトの右側に座っている臙脂色のジャケットをまとったおじさん二人は、胡散臭そうに眺めているし、その隣の、さっきライトを制した人は、モノクルの奥の切れ長の瞳から冷気を出しながら、私をまっすぐに見つめていた。

顔はあんまり似てないけど、なんかこの冷気の出し方がどこからイトに似てるような…。

「いいだろう、同席を許す。座れ。これより、ライトリーク・ウォーロックの審判を行う」

王様が軽くうなずくのを受けて、その深緑色のジャケットのおじ様

が開会を宣言し、私の緊張はいやがうえにも高まった。

何せ、勢いでここまでできてしまったけれど、周りはお城のすごく偉い人たちばかりだ。本当なら、私がこんなところにいるといいわけはない。

だけど、やっぱりいてもたってもいられない。何より、言いたい事言ってやらなきゃ気がすまないのよ！

団長さんに促されて、私は会議場の後ろの方に、団長さんと並んで腰を下ろした。

臙脂色のジャケットの人が、ライトの前にゆっくりと進み出る。

王様に一礼をしたあと、ライトに向かって、手に持っていた紙を広げた。

「これより、審判を行う。参考人は、嘘偽りなく事実を述べよ。

…宣誓を」

「私、ライトリック・ウォーロックは、嘘偽りなく事実を述べることを宣誓する」

「では、問いに答えよ」

「はい」

「ライトリック・ウォーロック。貴殿はアーシェ・グレイを故意にとらわれ人としたことを認めるか」

「はい、認めます」

「自らの魔術を用い、本人の意思に関係なく姿を変えていたと認めるか」

「はい、認めます」

「では、その理由を述べよ」

「魔女の隠れ家で拾った姿がかわいかったので。家に帰したくないと思い、猫の姿に変えました」

「アーシェ・グレイの意思確認は行ったか？」

「いいえ」

「アーシェ・グレイへの説明は行ったか？」

「いいえ。変化させていた間は、何も。人の姿に戻してから、説明しました」

「とらわれびとにしていた間に、どのように扱った？」

「普通の猫と同じに。えさをやり、寝床を与え、世話をしていました」

「猫のように扱ったということで相違ないか」

「はい。アーシェには、食事を皿から直接与え、部屋のクッションの上で寝かせていました」

「ラズウェル殿下とアクセル殿下の証言では、猫に対して執拗な愛着を持っていたようだが、それに相違は？」

「ありません」

「レイド殿、ご意見は」

「行き過ぎのきらいも見られるが、おおむね猫との関係は良好に見えた」

「なるほど。つまりは、人とわかった上で、猫として扱い、被害者に苦痛を与えたということで、間違いないか？」

「ありません」

淡々と、無表情で応えるライトに、むかむかが膨れ上がっていく。だって、確かにご飯はお皿からだったけど、メニューも味つけも人と同じ。寝る時はいつもライトのベッドだったし、ライトの私への接し方は、人間へのそれと同じだった。

本当に、釈明する気がないんだ。自分ひとり、悪者になる気なんだ。ただの自己陶醉にしか見えない。ああもういらいらするっ！

「ふざけないでよっ！」

たまらず叫んで、立ち上がる。みんながぎょつとしたように見てるけど、頭に血が上った私は、そんなのにかまっていられなかった。

「何一人でかつこつけてんのよ。悪者になつてくれなんて、一言も頼んでないわ！」

そう言つて、私は駆け出した。団長さんは止めようとしめない。

「証人者の発言は、まだ……！」

「アーシエ、だめだっ！」

尋問役が私を制止しようとする。

目を丸くして手を差し伸べたライトの腕を振り払い、私は勢いよく振りかぶった。

ぱあんっ！ と、小気味いい音が、小会議場に響き渡った。

「一人でうじうじ悲劇の主人公やってんじゃないわよっ！ ちょっと暗すぎでしょ！ 私の事好きなようにしたくせに、自分のこと好きにさせておいて、勝手に怖気づいたからあたしを捨てるってこと！？ 都合が悪くなったらポイってどーいうことっ！？ そういうの、や、や、やり捨てって言うんでしょ！？ 私、知ってるんだからっ！」

派手に平手を食らった頬を押さえて呆然としているライトを尻目に、きつ、と偉い人たちを振り返る。

「私、騙されてなんかいません！ 同意の上です！ 夜はちゃんと人間に戻つてたし（意識はなかったけど）、えさじゃなくてちゃんとしたご飯を食べてました（しかも今までないくらいのごちそう）！ 私はただ、猫になってアルバイトをしてただけです！ 姿隠しも遠耳も使えます！ だって私、ライトの使い魔だからっ！」

勢いのままに言い切った。

審判（後書き）

はい、一発食らわしてやりましたw
さて、次回ライト君の罪はどうなる？

騎士様の使い魔

「私、ライトの使い魔だからっ！」

勢いのまま言い切って、そして。

はっと我に返って、真っ青になった。

厳正なる審判の最中に、私みたいな身分の低い子供が、発言も許されていけないのに勝手に壇上に上がって、ライトをひっぱたいた上に暴言を吐き、偉い人たちに対して礼儀を欠いた。

しかも、アルバイトで使い魔をしていたなんて、言うに事欠いて大嘘つくにも程がある。こんなとっさの口から出任せを、誰が信じるだろう。

ここに居る人たちは、私よりもずっと大人で、子供の嘘が通用するとは思えない。騙されてくれるとも思えない。

みんなの視線が突き刺さる。

ああ、ライトを引き止める以前に、私が入り禁止になるかも。下手すれば牢屋に入れられて、処刑されちゃうかも…！

言葉もなく、震えながら立ち尽くす私の視界を、紺色の壁がふさいだ。

ぎゅっと抱きしめられて、包まれたライトの匂いに、安堵で涙が出そうになる。

「見るな。これは俺のだ」

地を這うような低い声。すがりついた厚い胸は、どくどくと強く鼓動を刻んでいる。

耳に落ちる吐息が、時折不規則にリズムを変えて、それがライトの

内心の動揺を示しているようで、たまらなくなる。

やっぱり私、余計なことをした？
ここに来ちゃいけないかった？
黙って見ていたほうがよかったの？

「前言を、撤回する」

しばらくの逡巡の後、ライトが静かに口を開いた。

「俺は、アーシェをとらわれびとにはしていない。まだ働き口が決まっていない彼女に頼まれて、少しの間アルバイトをしてもらっただけだ。この子を傍に置きたくて、そうした。お互いの利害は一致していた。∴この子は、俺の使い魔だ」

静まり返った議場。

ライトの体温と、匂い。

私を抱きしめる熱い腕。

何もかも忘れてずっとこうしていられたら、どんなにいいだろう。

「そんな見え透いた嘘が通用すると思うか」

さっきライトを制したのと同じ冷たい声に、私の肩がびくんと跳ねる。それを押さえるように腕に力を込めて、ライトは私を守るように抱きしめる。

「アクセル殿下が、アーシェ・ 그레이がとらわれびとであると証言している」

「変化させていたのは事実だ。アクセルは変化した人間だとはわかってただろうが、それがとらわれびとなのかそうでないのかは、見ただけじゃ判断つかないはずだ」

「黙っていたわけを述べてみる」

「捕らえられていた魔女から助け出したばかりで、まだ行方不明者の扱いだった。だから、彼女は居ないことになっている人間で、変化させるのに都合が良かった。それに、まだ未成年だったから城では働けない。個人的に、内緒でアルバイトを頼んだ」

「何の為にだ」

「そこは、色々情報収集だよ。だいたい、使い魔ってそれが仕事だろ？」

「そんなふざけた理由で、無罪放免になると思っているわけではないだろうな」

「思ってるわけないだろ。覚悟はあるさ」

ライトの眼光を真っ向から受け止めて、おじ様の追求は、次々に痛いところを暴いてゆく。

どうしよう。私、どうしたらいいの！？

変な嘘をついたのは私だ。だけど、本当のことは言えない。言ったらライトがいなくなっちゃう！
だけど。

「くくくつ」

不意に響いた笑い声に、私は顔を上げた。
笑っているのは…王様？

「おい、アレク、そろそろいいだろう。かわいい息子をいじめるのもその辺にしろてやれ」

笑いをこらえながら告げられた言葉に、おじ様は顔をしかめる。

「何をおっしゃいます、陛下。これだけの騒ぎを起こしておいて、何事もなくめでたしめでたしなどありえない」

そうして、ライト以上に冷たい目線で、ライトをにらみつける。

「勝手にひねくれて、孤独を気取って、回りを頼ろうともしないバ

カ息子へのお仕置きは、こんなものではとても足りません」

ていうか、バカ息子って何！？ まさか、この人ってライトのお父さん！？

やばい、お父さんの目の前で、ライトのこと思いっきりひっぱたいちやった…！

「お仕置きって、どういうことだよ！」

「どういふも何も、そう言うことだ」

おじ様の言葉に眉を跳ね上げて怒鳴ったライトだけれど、冷え冷えとした目に射抜かれて、その顔が苦々しげに歪む。

「思いつめてバカやった拳句、勝手に出て行こうとしているお前を止める為にな。おまえのその腕の中にいる娘をはじめ、お前が勝手に拘ねて出て行って喜ばない人間もいる。いい加減、そう言う人たちを悲しませるのはやめろ。それこそ、お前が周りを傷つけているではないか」

容赦のない指摘に、何も言い返せずにライトがうつむいて唇を噛み締める。

「私たちのことはどうでもいい。だが、その娘がどんな気持ちでいたか、なぜお前を叩いたのか、どんな覚悟でお前を引きとめたのか、ここまで来てわからないのか？ お前はその意味をもっとよく考える！」

一喝されて、私はライトの腕の中、びくりと体を固くする。

見上げたライトの顔は、傷ついているようで。だけど、怒ったおじ様の顔も、痛みをこらえているようで。

そんな二人の顔が、どこか良く似ていて、重なって見えた。

そのおじ様の肩を、王様がぽん、と叩く。

「ライトへの仕置きは好きにすればいいが、娘の方が怯えているで

はないか」

「…これはすまない」

さつきまでの冷氣はどこへやら、私をいたわるように、おじ様は私の肩をそつと撫でる。

「息子が無体をしたようで、申し訳なかった。私はアレクサンドル・ウォーロック。サンクエディアの宰相をやっている、ライトの父だ」言われてみれば、目の色がライトと同じ濃い茶色だし、冷氣の出し方も一緒。顔立ちはそんなに似ていない。ライトはお母さん似なのかな。

「あ、あの、すみません、私、勝手なことばかり言つて。ライトのことも、叩いちゃつて。お騒がせして、ごめんなさい」

ライトの腕の中、小さくなつて頭を下げると、思いのほか優しい瞳に見つめられて、少しだけ気持ち軽くなる。

「いや、茶番につき合わせたのはこっちの方だからな。まさかこの場に来てくれるとは思つてもいなかった。打ち合わせもなくこんなことに巻き込んでしまつて、本当にすまなかった。怖かつただろう」

「いえ、はい、大丈夫です」

それほど抑揚のない声だけれど、落ち着いた静かなそれは、ちゃんと温かさに満ちている。

ライトは頑なに自分を守っているから気づかないだけなんじゃないかな。ちゃんと見ていてくれる人がいるつて。ちゃんと助けてくれる人がいるつて。

お父さんは、ライトにそれをわからせたかつたのかな。

「しかし、レイドもやるな。ジョーカーを引っさげて登場とは」

「恐れ入ります」

団長さんにからかうような声をかけて、王様も笑いながら私たちを見る。

これつて、みんなでライトを引き止めるために一芝居打つたつてことなのかなあ？

ライトに灸を据えてやるって言うのは、こう言うことだったんだ。
なんだ、ライト、愛されてるじゃん。

…なんて言ったら、『気持ち悪い！』とか言われそうだけど。

「しかし、面白い娘だな。ライトに向かってやり捨てなどと言いつ娘は初めてだ」

あああつ！ つい口から勢いで言っちゃったけど、私何言ってるの
おお！？ もう、もう、穴があつたら入りたい…っ！
恥ずかしさで真っ赤になった私を隠すように、ライトはぎゅっと私
を腕の中に閉じ込める。

「人聞きの悪い。やり捨てになんかしてないよ。大事に抱いたでし
よ？」

「ちよっ…何言ってるのよばかあああつ！」

立ち直り早っ！

顔を覗き込まれてとんでもないことを言われて、瞬時に顔が熱くな
る。こ、こんなみんなが見てる前で抱いたと言っなああつ！

「それに、もうどこにも行かないから。だから、捨てることにはな
らないよね？」

「うっうっ…！」

いつものとろりとした甘い笑みで見つめられて、私はライトの胸に
真っ赤な顔を隠すしかなかった。

「まったく、時と場をわきまえろ。デリカシーのないやつだ」

「陛下に言われたくないね！」

「ライト、口を慎め！ 不謹慎なものそうだが、仮にも審判の場で

不敬だぞ！」

「まったく、年取ると口うるさくて嫌になる」

ライトが、注意したお父さんにうんざりしたように言い放った瞬間、周囲の空気がすうつと冷えた。

年季の入った冷えっぷりは、ライトなんか比較になんないくらい怖い。

「……ライト、いい加減にしろ。牢にぶち込まれたいか」

静かだけれど、迫力のある低音。なまじ顔が整っているせいか、お父さんの威圧感は半端ない！　まるで喉元に白刃を突きつけられたみたいだ。

苦虫を噛み潰したような顔でちつと舌打ちをしたライトが、ようやく私を解放して壇上に戻る。

「では、審判を再開する」

ライトのお父さんの声で、全員が元の場所に戻っていった。私も、団長さんの隣に戻って、遠慮がちに腰を下ろす。

団長さんはずっと、岩のようにどっしり座ったままだ。戻った私を見て、三白眼の目元をわずかに和らげた。

「よくやった。あれでライトも覚悟を決めただろう」

「あれでよかったんですか？　わ、私、こんなところでこんなことしちゃって……」

頭に血が上っていたとは言え、言ったことも言われたこともやったことも、全部が恥ずかしい。

「陛下も宰相も咎めないのなら、誰も罰せない。安心しろ」

「はい。すみません、騒ぎを大きくしてしまつて」

「大丈夫だ。気にするな」

軽くうなずかれて、少しだけ肩の力を抜く。だけど、まだ気は抜けない。なにせ、審判はまだ終わっていない。

ライトは、どうなっちゃんだろう。王様は、どういう裁定を下す

んだろう。知らず、手が震える。壇上のライトを、ただ見つめるしか出来ない自分がかどかしい。

今度は、臍脂色のジャケットの人ではなく、ライトのお父さんがライトの前に立つ。

「アーシェ・グレイ本人の証言により、ライトリーク・ウォーロックが、アーシェ・グレイをとらわれびとにしていた事実は一切ないと判明した。よって、この件への罰則はなしとする」

会議場に張り詰めた空気が、緩んだ気がした。私も、ほっとして、深く息を吐く。

よかった。なんだかうやむやになった感じだけど、ライトは居なくならないんだ。

気を張ってたのと緊張のせいか、涙が浮かびそうになる。

「ただし」

だけど、ライトのお父さんの一言で、それは一気に引込んだ。

「さっきも言ったな、無罪放免などありえないと」

ライトのお父さんの顔が、厳しさを増してライトを見据える。

「ライト、お前は、今回こんな騒ぎを起こした責任を取る義務がある。アーシェ・グレイにも、少なからず迷惑をかけた。それはわかっているな」

「…はい」

さっき尋問されていた時と違い、今度はしっかりと噛み締めるように、ライトは深くうなずいた。

お父さんに促されて、王様が背中を預けていたいすから軽く身を起こ

こし、机の上でゆったりと指を組んだ。

「ライトリーク。お前には、謹慎10日間、及び向こう半年5割の減俸処分を下す」

ライトは、ぐつと何かをこらえる表情をして、静かに頭を下げた。それを見届けて、ライトのお父さんが宣言する。

「では、これにてライトリーク・ウォーロックの審判を終了とする」

ライトが、うつむいて深く息を吐いた。こうして、審判は閉廷した。

騎士様の使い魔（後書き）

「私、ライトの使い魔だから！」

「この子は、俺の使い魔だ」

これを言わせたくて頑張りました。
実はかわいがられているライト君。
素直になりましょう。

重なる想い

これで丸く収まった……ってことでいいのかな？

ぴんと張り詰めていた糸が切れて、ざわめきの増す会議場の空気に、私は安堵のため息をついた。

ライトが、どこかほっとしたような顔でやってきて、立ち上がった私をぎゅっと抱きしめる。

王様とライトのお父さんと、事務官らしい臙脂色のジャケットのおじさん達が、そろって会議場を出て行く。

王様は、

「こんな手に引つかかるなど、まだまだ子供だな、ライト」
なんて笑いながら。

ライトのお父さんは、

「たまには家に帰ってきなさい。君も、一緒に。歓迎するよ」
という一言を残して。

ライトはそれを、

「くっそ、相変わらず趣味悪い、あの親父共……！」

なんて歯軋りしながら見送ってたけど、何か憑き物が落ちたような顔をしてる。

そしてその後から、ラズウェル様はにやりと人の悪い笑みを、アクセル様は釈然としない表情で、それぞれ歩み寄ってくる。

「なるほど、ずいぶんと跳ねっ返りの猫を拾ったものだ。……ふむ。
傍においてかわいがるのにちょうどいいな」

野性的な顔に魅力的な笑みを刻んだまま、どれ、とあごの下に伸ばされた手を叩き落として、ライトがラズウェル様をにらみつけた。

「勝手に手え出すなよ。これは俺の」

「すこしくらいいいだろう。それにしても、これはかわいらしいな」
「見るな、減る！」

ひいっ！ 猫の時よりもつと舐めまわす様に見られてるーっ！
笑いながらの無遠慮なまなざしに身を縮めると、ライトが私を抱き締めたままラズウェル様に背を向けて、視線から遮断してくれる。
だけど、そんな物ともせずに、ラズウェル様はライトの前に回りこみ、私を追いかけてくる。

「猫の姿も十分に目を楽しませたものだったが、人の姿もなかなかいいな。どうだ、俺の専属にならないか？」

「や、や、むっ、無理ですっ！」

「そうやって毛を逆立てるのがまたそそるな」

笑い方がやらしいんだってば！ 身の危険を感じますーっ！
と、しつこいラズウェル様に痺れを切らしてか、ライトがそこで力ードを切る。

「フェリシア様に言うぞ、若い娘にご執心だつてな。いいのか？」

「ちっ… そう言えば黙ると思いやがって」

しらけたような顔で、ラズウェル様が身を翻す。

けれど、すり抜けざま、ごつごつした指がさりと頬を撫でて行つた。ぞわっ、と、毛穴が開いたような感覚がした。

「ライトに愛想を尽かしたら、俺のところにくるがいい。歓迎するぞ」

「いえいえいえ、いいです行かないですよーっ！」

「ラズ、触るなっ！ お前のところになんかやったらアーシエが妊娠する！」

「むしろお前が妊娠させるなよ？」

「俺はいいの！ 何度でも孕ませるから」

「よくないっ！ ばかーっ！！」

なんて爆弾を投下して、ラズウェル様は、高らかに笑いながら去って行った。

だめだ、この二人、存在自体エロい！　そういう意味では似たもの同士なのかな？　二人そろったらほんとにどうにかなりそうで嫌い。

そしてもう一人、私を気遣わしげに見ているのは、中庭で私を捕まえた、アクセル様だ。

ラズウェル様と似てる、でも違った深い色の目で私を見つめる。

「君は、本当にそれでいいのかい？　ずっと猫のままでいて、苦しくなかったのか？　ほだされているだけなら、遠慮しなくてもいいんだよ」

その言葉に、私は困ったような笑みを返す。

「いえ、別に。ほだされてるとは思いますし、怒ってますけど、ちゃんと話して謝ってくれば私はそれでいいですし。ずっと大事にされてましたし、元々魔女に変えられてたって思い込んでたので、あんまりライトを責める気になれないんですよね！。ていうか、おかげで王城に働き口がもらえてラッキー、ぐらいな感じで」

えへへと笑う私に、アクセル様がずっと表情を変える。

なんだろう、何かを探るような目つきで私を見てる。

「へえ、随分と物分りのいい…。それとも、何か見返りが欲しいのかい？」

「見返り…ですか？」

「アーク、てめえ…！」

色めき立つライトを、団長さんが片手で制する。

見返りって言っても、お城で働き口をもらえたのは、むしろこっちが申し訳なく思うくらいで。他にももらったもの、といえば。

「あ、そうだ！　このお洋服もらいました！　今まで着たことないくらい綺麗でかわいいの！　ね！」

にこお、とライトを見上げると、ああもう、って、険しかった顔が

ほどけていく。

「そういうところ、すごく好きだよ。ねえ、キスしてもいい？」

「えええ、な、なんでっ？ 私、変なこと言った！？」

唐突に変わった甘い空気に、うるたえて声が裏返る。だけど、ライトは一層笑みを深くして。

「かわいいことなら言った」

しれっと、のたまった。

「い、言つてない！」

「いいよ、どっちでも。ね、他の男なんかどうでもいいから、こっち見て」

上から覆いかぶさるように覗き込まれて、指先ですい、とあごをさらわれた。

「やつ……！」

落ちてくる唇に、何もかも奪われそうになった時。

咳払いの音で、はっと我に返る。

「やだやだバカッ！ もうっ！ みんなが見てるってばー！」

「いてて。ごめん、わかった、わかったから」

すっごく不満げなライトの顔を力いっぱい押しのければ、疲れたような顔のアクセル様がため息をついた。

「あー、別にそう言うことを聞きたかったんじゃないんだけど。どうやら、特に裏はないようだねえ。というか：こんな素直な子供には、無理か」

「いいんだよ、お前までそんな気回さなくても。俺が傍においてるぐらいなんだから、そのぐらいわかってるって」

ライトはお気楽な言葉を返すけど、アクセル様のどこか飲み込みきれないような顔は変わらない。

「きついことを言ったと思う。お前の気持ちも少しはわかってるつもりだよ。けど、俺は魔術師として、やっぱり今回のことは納得い

ってない。だから、しばらくは見守らせてもらおうよ」

「ああ。気のすむまでやればいいさ。好きにしろよ」

多少の苦さを混ぜた笑みを浮かべて、アクセル様も出て行った。

ライトと何を話したんだろう。正義感の強い人なのかな。それとも、潔癖な人なのかな。

国中の魔術師を束ねる身としては、やっぱり今回みたいな犯罪まがいのことをうやむやにされるのは嫌なんだろう。

私だって、ちょっとは『これでいいのかな』って思う気持ちもあるし。

だけど、ごめんなさい。それよりも、ライトがこうしてまた私に触れてくれることの方が嬉しいから。

ライトを見上げると、ふつと目を細めて笑い、指の背でくすぐるように頬を撫でてくれる。それだけで、心臓が爆発しそうになる。嬉しくて、泣きたくなるから。

だから、ごめんなさい。

残るは、団長さんだけだ。

ライトは、さっきまでと違って、すでに剣呑な空気をまとって、団長さんをにらみつけている。

「どういうことか、説明してもらおうか」

「どういうも何も、あの流れのとおりだ。お前が陛下に申告して自宅に引っ込んだ後、架空の審判の場を設けて多少脅しつけた後に、説得しようということだな。俺は正直、そんなもんでお前が折れるとは思ってなかったが、まあ、なんというか、切り札というか、哀れなイケニエとでも言うべきか。その娘が乗り込んできてくれたん

でな。思わぬ形で早期に決着がついて、まずは安心しているところだ」

腕の中で、それを向けられていない私でさえ震えが来そうなほどのライトの怒りを、真っ向から受け止めている団長さんは、まるでそよ風でも受けているみたいに平然としてる。

ライトが、まるできんきん吠え掛かる子犬みたいに見えるほど。つ、強い…。

「人が居ない間にあれこれおせっかいしやがって…！ 言いだしっぺは誰だ！ あんたか！？」

「そんな面倒なこと俺がするわけないだろう。根回ししてきたのは宰相殿だ。俺はそれに乗っかっただけで、たいしたことはしていない」

「ていうか、あんたがそんなもんに乗っかるってのが怪しいんだよ！ そういう根回しされるのが大嫌いなくせに、どういう風の吹き回しだ！」

「そんなもの、エルサーナ殿に泣きつかれたからに決まってるだろうが」

悪びれもせずに堂々と言い放った言葉にあっけに取られたライトが、片手で顔を覆ってがくりとうなだれた。

「ああ、そうかい。そーだよな。あんたってそういうやつだよな」

なんでここでエルサーナさんが出てくるんだろう。

と、首を傾げて、はっと思い出した。

そうだ、姿隠しの術を試して、2階の渡り回廊を通った時に、エルサーナさんのいたバルコニーから出てきた人だ！ 大きな体に、深い夜色の髪が、おぼろげな記憶とぴったり一致する。

そうか、エルサーナさんの好きな人は、団長さんだったんだ！

なあんで、結びついた事実に一人ほくそ笑んでいる間にも、二人の口論は続く。

「これだけの人たちに心配されていると、もう自覚しているんだろう。俺も、お前が唐突に居なくなつては困る程度には、気にかけているつもりだしな。でなければ、いくらエルサーナ殿の頼みでも、いちいちしゃしゃり出たりしない」

「どいつもこいつも、余計な氣い使いやがって。あんたもあんただ。何でほつといてくれないんだよ！」

「子供の駄々と一緒だな。危なっかしい所を駄々漏れにしておいて放っておけなど、かまって欲しい子供のサインと同じだろうが。だから回りも放っておかないんだと、いい加減解れ」

団長さんの言葉に、ついうんうんとうなずいてしまう。そうなのよ、孤児院に来たばかりの時に、そういう態度をとる子が多いのよね。ああ、そうか。だから私、ライトのこと放っておけないのかもしれない。

「そういう風に、頑なに自分を守ることには疲れているくせに。もう誰かを信じたくてたまらないくせに。だから、裏表のないその娘にすぎたんだろうが。もういいだろう。素直に認めろ」

「うるさい、俺はっ…！」

反論しようとしたライトの首に両手を伸ばす。するりと絡めて、ぎゅっと抱きついた。

「アーシエ…」

呆然と呟くライトの柔らかい髪を、そっと撫でる。

「大丈夫。私、ずっとそばに居るから。だから、安心していいんだよ」

小さな子をあやすように。母親が手を差し伸べるように。恋人が甘いぬくもりを分け与えるように。

抱きしめて、いっぱい甘やかしてあげるから。

「アーシェ」

すぐるように、かすれた声で呼ばれて、強く抱きしめられた。

震えるその背を、とんとんと落ち着かせるように叩いてあげる。

「10日間は自宅謹慎だ。考える時間は山ほどある。まあ、その娘と一緒にいるなら大丈夫そうだな。その間に、その血が上った頭も冷えるだろう。それから答えを出しても遅くはない。自分がどうしたいか、何を大事にしたいか、じっくり考えて来い。これは宿題にしておく」

そう言つて、私に抱きついたままのライトの肩をぽん、と叩くと、団長さんは背を向けて出て行った。

誰もいなくなつて、静まり返った会議場。

お互いに支えるみたいに抱き合つて、どれくらいそのままにいただろう。

「アーシェ……」

ライトが、そつと体を離す。だけど、二人の距離は、たったの拳一個分。

近い。顔を上げると、ライトの目元が少し赤かった。

「叩いてごめんね。痛かった？」

そつと頬に指を這わせれば、ライトが切なげに眉を寄せて、その手

をつかみとって口元に持つていき、指先に軽く歯を立てる。

ぞくん、と、指先から全身に痺れが伝わる。

「大丈夫。平気だよ」

そのまま、腰を引き寄せられて、また距離がなくなる。

「アーシエ、愛してる。離れないで、側にいて」

「うん、大丈夫、側にいるよ。だって私…、ライトのことが大好きだから！」

ふわりと笑みを浮かべて告げる。

一瞬、泣きそうにくしゃりと顔をゆがめたライトを瞳に焼き付けて目を閉じて。

重なる唇を、待ちわびた。

重なる想い（後書き）

ここ数話糖度不足だったので、少しは甘くなりましたかね？
今回は久々のラブラブが入ります。

この計画の言い出しっぺは王様です。ライトパパは、こんなやり方でライトが折れるとは思ってませんでした。徹底して勝てるやり方を模索するパパは、本来不確定要素は全く計算に入れません。

が、今回は、ライト自身の自首で、証人としてアクセルが同行したこともあり、王様の思惑とは逆に、一度下した裁定は覆らないだろうと思っていました。勝算はほとんどない状態だったわけです。

けれど、もしアーシェが戻ってきたら、証人として連れてくるようにレイドに頼んでいました。それが、ライトの決意を翻すことが出来る唯一の方法だと思い、それに賭けてもいました。

というわけで、今回の審判は本来のスタイルからかけ離れた、全く運任せの茶番劇だったわけですね。

…という裏設定が存在するのですが、話の中に盛り込めませんでした。

やり手の宰相という割りに、行き当たりばったりのずさんなやり方にしか見えないので言い訳w

終わりと始まり（前書き）

R15かな。少々やらしいので、お気をつけ下さい。

終わりと始まり

会議場の後ろ、ドア横の壁に押し付けられて、体全部で押さえつけるように体を押し付けてくるライトに潰されそうになりながら、長いキスが続く。

「はっ、ん…！」

二日ぶりのキスは、熱くて、甘くて、苦しくて。あっという間に溺れてしまう。

ライトの舌が、口の中をぐるりと舐める。
ずきん、と下腹が重くなつて、きゅうつ、と胸の先が痺れる。

「や…人が…」

ぐずぐずに溶かされながら、氣力を振り絞って訴えるのに。
こっつん、とライトが額をあわせてくる。

「いいよ、そんなの…」

言い終わらないうちに、こらえきれないようにまた重ねられた。
くすぐるように舌先を弾かれて、それから絡め取られる。

きゅっと吸われて、腰のあたりがぞくぞくする。

ずっと引いた舌に誘い出されて、追いかけた私のそれに歯を立てられた瞬間、膝が崩れた。

「イヤ…。もう、もうダメ…！」

ここがどこかもわからなくなってしまいそうでこわい。
このまま全部奪われてしまいそうで怖い。

だけど、ライトは許してくれない。
力が入らない手で必死でライトを押しつけようとしても、そんなもの物ともしない。

「だめ。全然足りない。二日、会えなかった分、補充させて」

焦れているとはつきりわかるかすれた声で、ちゅっと軽く唇を落とすと、私の腰を引き上げるように抱いて、ワンピースのすそを少したくし上げた。

「ライトッ！ 何…っ」

突然の暴挙にびっくりしている私の力の入らない足を割って、ライトの足が膝を押し広げるように入り込んできた。

すぐくやらしい格好。無防備なそこに固い足の感触。恥ずかしくて泣きたくなる。

「やつ！ やだ、やめて！」

「だめ。立てないんでしょ？ 支えてるだけだよ」

「だって、これ…っ！ んんっ！」

くす、と笑って、また唇が重なる。

腰をぐつと持ち上げられて、ライトの足に乗せるみたいにされて、少しでも動くと、足の間を擦り付けてしまいそうで動けない。

「ん…んんっ…！」

それなのに、ライトの舌は、私の弱いところばかり舐めて触るから。びくつと体を揺らすと、ライトの足が余計に揺すり上げてくる。

やらしくて、恥ずかしくて、涙が出る。

ぼろ、と、目じりから転がり落ちた透明な雫を、ライトの指先がすくった。

きゅつと眉根を寄せて至近距離で覗き込まれて、それだけで勝手に心臓が跳ねる。

「どうして泣くの？ そんなに嫌だった？」

「違…。見ちゃ、ダメ」

「嫌だ。泣き顔もかわいくて困る。よく見せて」

「う…。意地悪…。！」

くすつと耳元で笑われて、両手で頬を包まれて、ぐいつと上げさせられる。

合わさった瞳の奥に、隠しきれない炎。それは、たくさん熱を注がれたあの時と同じもの。

下腹がかつと熱を持った瞬間、ライトの足にぐつと押し上げられる。

「あ…っ」

思わず上がった甘い声に、耳を覆いたくなる。ライトの顔を見れなくて、そむけようとした顔を引き戻された。

「やっ」

「どうして逃げるの？」

「だって、は…ずかしい…！」

「いいよ、俺だけ見てれば恥ずかしくないでしょ？」

そんなことを言いながら、ライトの足がぐつ、ぐつ、と足の間を揺すってくる。

「やっあ、そんなに動かないで…っ」

「やらしいこと言って…。ここでその気になっちゃったらどうするの？」

目を細めて、甘く淫靡な笑みで私を縛りつけながらの言葉に、私は必死に首を振る。

「だ、ダメ、お願い、人が来ちゃっ…。もうやめて…」

「うん、大丈夫。もう少しだけ」

「あっ……ん……ふ……っ」

そうして、私はライトの気が済むまで、何度もキスを重ねられた。

「ヘタに触ったら、ここでアーシェのこと犯しちゃいそうだから……」
そう言つて、ただ私を抱きしめるだけに終始する両手がかどかしい。
かすれた声は、やっぱり隠し切れない欲を孕んでいて、私をいつそう喘がせた。

ひとまずの激情が収まつて、議場のいすに座つたライトは、有無を言わず私を膝の上に乗せた。

最初はまたがらせようとしたんだよ！？ さすがにそれは断固拒否して、でもどうしても譲らないライトに渋々折れて、横向きに座るといそいそと抱きしめられて、髪に顔を埋められる。

熱い吐息が首筋にじわつと染みて、勝手に背中が震えた。

「どうして、ここにいるの？」

落とされた、小さな眩き。

ほんとに、わからない？

どうしてすぐに戻ってきたのか。

……まだ、信じられない？

「五日間は、長かったの。ライトの傍に居られないのが、さびしかったの。だから、ライトの傍に早く帰りたいかったの。それに、明日は私の誕生日だし……一緒に、いてほしかったの」

抱きしめる腕にぐつと力がこもつて、息が苦しい。

「孤児院のほうは、いなくて良かったの？」

「うん、大きい子達が、しっかりしてくれてたから。お城に帰りたいんだろうつて言ってくれたの。院長先生もシスターも、思うとおりにしなさいって。……私は、ライトのそばがいい」

きっぱり言い切れば、ライトの手が震えた。

「…ごめん」

そういったライトの顔を見ようとしたけど、肩に頭をぐつと押し付けられて、叶わなかった。

「少しだけ、聞いてくれる？」

「…うん」

そうして、ライトは子供の頃からの話をぼつぼつと話してくれた。自分の家のこと、自分の家の権力を目当てに近づいてくる人が後をたたなかったこと。

それで傷ついた人がいること、自分も傷ついたこと。

そして、人を信じられなくなったこと。

たくさんなくしたものの、なくした人のこと。

何かをなくすことを、いつも恐れていること。

それに、私を巻き込みたくなかったこと。

途中、迷っているのか、何度も言葉を詰まらせながら。

「アーシェが大事で、大事すぎて。俺の側にいたら、俺自身が原因になって、アーシェをなくしてしまうかもしれない。誰かに傷つけられるかもしれないし、アーシェのほうに怖がって、いなくなってしまうかもしれない。それがどうしても嫌で。側にいたい、離したくない。…でも、それ以上に君を守りたかった」

そこで、ライトは、ひとつ深くため息をつく。

「俺は君を『とらわれびと』にした罪を負っている。姿を消す口実には、ちようどいいと思ったんだ。これでアーシェを守れるって」

長い沈黙の後、ぽつりと言った。

「だけどそれって、ただの自己満足だった」

うん、わかってる。だって、離れないでって言ったことも、私を守ろうとしたことも、どちらも本当のライトの気持ちだよ。

「大丈夫だよ。私はそんなに簡単にいなくなったりしないもの。それに、傷ついても、私は折れたりしないよ。私結構しぶといし、魔女の家であつたこと以上に怖いことなんてないって思うもの。私、今はライトの側にいらなくなるのが、一番怖い」

私を後ろから抱いてる腕に、そつと手を重ねる。

「もしまた今度みたいなことがあつても、団長さんも、ライトのお父さんも、王様もみんな助けてくれるよ。それに、私のことはこれからはライトが守ってくれるでしょ？ だから、きつと大丈夫」

今すぐこの言葉が届くと思わない。

ライトが私を信じ切れなかった気持ちもわかった。

でも、時間がかかってても、いつか私のことも、私の気持ちも、信じてくれるって思うから。

だから、それまでずつと側にいて、何度でも『大丈夫だよ』って言うよ。

「…色々、騙しててごめん。勝手に抱いてごめん。だまって置いていこうとしてごめん。…信じられなくて、ごめん」

今まで、ずつと欲しかった言葉。

何の虚勢もまとっていない、ごまかしじゃない本当の言葉。

「本当はまだ、迷ってるよ。これでいいのかって、どこまで信じていいのかって。だけど、もう逃げちゃいけないと思うから」

振り返ったライトの顔は、どこか困ったような顔をしてて、まだ迷いがあるのはなんとなくわかった。でも、ちゃんと変わってくれて、信じるって言ってくれた。

私は単純だから、それだけでもうれしいもんね！

えへへと笑って、そっと伸び上がる。目を閉じると、ライトの唇が迎えてくれた。

そっと重ねて、静かな長いキス。

でも、背中に回っていた手が、そろそろと動き出す。

さっきは触らないって言ってたはずの手が、私の胸に触れて、私はびっくりして飛び上がった。

「あ、だめ！ さっき触ったらしちゃうって言ったじゃない！」

いきなり夜モードに切り替わったライトの、私の胸を揉む手を押しとどめながら、私は膝から降りようともがく。

時と場所を考えようよ！ 今は昼間で、ほかの人たちはお仕事をしてる時間で、ここは誰が来るかもわからない小会議場で、ドアには鍵がかかってなくて！

ここに、こんなところですねなんて絶対嫌ー！！

ぴた、と、ライトの手が止まる。

あら、珍しい。考え直してくれたのかな？

「そうだね、ここじゃ落ち着いて出来ないな。自宅謹慎だから俺の部屋は使えないし、アーシェは明後日まで自由なんだよね？ …じやあ、俺の家に来てもらおうか」

にっこりと微笑まれた。

膝から下ろされて、立ち上がったライトの手にがっしりと手首を捕まえられた。

「明後日まで、ベッドから出さないからそのつもりでいてね？ 荷物はどこ？ 団長室？ ならそのまま置いていいよ、多分レイドが俺の部屋に運ばせると思うし。どうせ服は要らないから、気にしないで」

にこにこしつつどこか腹黒いオーラを放ちながら言い放たれた言葉の内容に、頭が真っ白になった。

ベッドから出さない、服は要らないってことはつまり、そう言うことで。

ちよちよちよ、ちよつと待って、私に選択肢はー！？

「女を自分の家に入れるのはじめてだ。明日はアーシェの十七歳の誕生日だし、全力で祝ってあげる。良かったね？」

「よっ、よくなーい！ イヤアアア、誰か助けてーっ！！」

晴れ晴れとした笑顔で、ライトは私を連れて小会議場を後にする。ずるずると引きずられていく私の声が、王城にむなしくこだました。

終わりと始まり（後書き）

次回ラストです。

エピソード

濃紺の侍女服の袖口には、繊細な白いレースがあしらわれている。飾り襟のレースも、清楚な白。

そして、黒い髪をまとめた頭の上には、ヘッドドレス。

真新しいそれらに身を包み、私は今日も団長室でせつせと書類の整理にいそしんでいる。

いろいろあつたけれど、あのあとめでたくライトの専属侍女に納まった私は、毎日をライトの部屋で生活しつつ、団長室でお部屋の整理や掃除、二人のお使いや予定の確認をして過ごす毎日を送っている。

審判の日からもう一ヶ月が過ぎた。

あのあと、城外にあるライトの屋敷に引っ張り込まれた私は、3日間文字通りベッドから出してもらえず、シーツを体に巻きつけたまま過ごすことを余儀なくされて、4日目にはへとへとで、下半身に満足に力が入らないまま登城する羽目になった。

しかも、いつのまにかライトの専属になる手続きが取られていて、ライトの部屋に住むことになっていた。もう気力体力を根こそぎ奪われていた私に、異議を申し立てる力なんか残っているはずもなく、なし崩しにライトの専属になるしかなかったんだけれど。最初はそのつもりでいたわけだし、まあいつか、で済ませてしまった。だって考えるのも面倒だったし。

ライトが謹慎中だったおかげで、一週間の侍女教育は、何の邪魔も入らずに受けることが出来たのは幸いだった。

さびしかったけれど、今度は離れていても大丈夫ってわかっていたから、何とか耐えられた。

まあ…謹慎が明けて久しぶりに会ったら、やっぱり夜大変なことに

なっただけ。もう、体がいくつあっても足りないよ…。

そうして、王宮侍女の基本教育を受けた後、私はライトの専属侍女としての生活をスタートさせた。

通常、個人の専属侍女といえば、お茶を入れたり、出先にお供をしたり、話し相手になったりするのが主な仕事みたい。

ライトの専属侍女になった私は、お茶だしはするけれど、ほとんどライトのお仕事のお手伝いが大半を占めていて、他の専属侍女とはちょっと毛色が違う。

ついでに団長さんのお仕事も一手に引き受けているから、なんだか団長室付きの侍女みたいになっている。

朝出勤するライトと一緒に団長室に行き、書類の整理とお掃除、二人にお茶を入れて、面会やスケジュールを管理し、書類を届けたりお買い物に行ったり、やることはたくさんある。部屋付きの従卒のアレンさんも居ただけだけど、騎士様としてのお仕事と兼任だったので、全然手が回っていなかったんだって。丸い顔と体に、糸のような目をして、いつもにこにこ人の子さそうな彼には、初めて挨拶をした日にすごく喜ばれちゃった。

毎日二人の用事で走り回って、とっても忙しい日々。でも、やりがいがあつてすごく楽しいけどね！

専属侍女になつてまず最初のお仕事は、団長室のお掃除だった。

部屋は要る物、要らない物が混在していて、とにかく物であふれていたから、まずはばんばん捨てまくった。家具や箱、積みあがっていた服や道具も随分処分して、床面積がとっても広くなった。

脱ぎ散らかした服や書類に埋もれていたソファセットも、全部綺麗に片付けて、ほこりを叩いてすっかりブラシをかけて、3回も日に当てた。そうして、ようやく本来の姿を取り戻し、来客の際にはお客様を立たせたままにすることなく、大活躍している。

部屋のお掃除は大分めどがついて、今はカオス状態になっている棚の整理に着手している。

書類は必要に応じて廃棄、保管、部屋に常備と3種類に分別。廃棄と保管に分けた箱を部屋の中に積んでおくと、いつの間にかアレンさんがしかるべき場所に置いてきてくれる。

で、今は書類を冊子に閉じる作業をここ一週間延々と続けているのだけれど、まだ全体の3分の一も終わっていない。量が多すぎるよ。どれだけ溜め込んでるのよ…。

中には10年前とかの書類まで出てきてびっくりしたわ。そんなどうしようもない書類が出て来るたびにため息をつく、団長さんとライト二人とも心なしか小さくなって見えるのがおかしかった。

私一人で判断がつかない書類は、団長さんとライトに保管か廃棄かを判断してもらっている。

今もその書類一束をライトの書類入れに置いて通り過ぎようとしたら、不意に手首を捕まえられた。

「きゃ…！」

引き寄せられ、膝の上に強引に座らされて、後ろから抱きすくめられる。

「ちょ、ちょっと！誰が来るかもわかんないのに何してんのよ！

お仕事の邪魔！」

「ちよつとくらいいいじゃない」

「よくな…って、やああっ！どこさわってんのよーっ！」

…そう。このお仕事の最大の障害は、ライトがすぐに触ってくること…！

抱き寄せられて触られたりなんか日常茶飯事、下手すると団長さんの前でキスされたりするんだから。

しかも今、団長さんは不在で、部屋に二人つきり。こんな風に二人つきりの時なんか、エスカレーターするからもつと最悪！！

後ろから回った両手が、私の胸をふわりと掴んだ。

「や…離してっ」

「やだ。だつてかわいいし」

くすつと笑われて耳を舐められて、必死に身をよじるけれど、逃げられない。

この間だつていたずらされてるのを団長さんに見られたばかりなのに！

被害受けてる私のほうが恥ずかしくて、やってるライトが堂々としてるのってなんかおかしくない！？

「やーっ！ もう、はーなーしーてー！」

本気の声を上げたその時、がちりとドアが開いて、団長さんが戻ってきた。

威厳のある靴音が一瞬止まる。見られたけど、恥ずかしいけどでも…っ！ 今頼れるのはあなたしかないんですー！

「レイド様っ！ 助けてー！」

「ちよつとアーシエ、何俺以外の男に助け求めてんの！？」

その瞬間、レイド様の手から放たれた何かが、ライトの額を直撃した。

「あいたっ！」

両手で私の胸を掴んでいたせいで受け止められなかったそれが、跳ね返ってライトの机にこもりと転がる。…これって、飴の包み？

拘束がゆるんだ隙に、私はライトの膝から逃げ出して、レイド様の大きな背中中に隠れた。

「アーシエ！ そんなにくつつくな！」

額をさすりながら怒鳴るライトに、私は勢いよく舌を出してやった。「嫌！ ライトの傍に居るとまた変なことするもの！ お仕事になりません！ レイド様、こいつ何とかしてください！ほんとに迷

惑してるんですっ！」

「よしよし、それは困った話だな。ならばこれから行軍訓練に行かせるから、安心しろ」

無表情だけど、その目元は優しい。強面だけど、すごくいい人！お父さんかお兄さんみたいだ。

何しろ、無軌道なライトをコントロールできる唯一の人だし、私がライトの言動で困っていると、こうして必ず助けてくれるし、時には懲罰的に騎士団のお仕事を回してくれたりする。味方が居るって心強いわ。

「あんた何勝手に決めてんだよ！」

ばんつと机を叩いて立ち上がったライトを、団長さんはこともなげに眺めやる。

「やかましい。少し血の気抜いて来い。アーシェの邪魔だ」

「とか何とか言つて、あんたがアーシェと二人きりになりたいんじやねえの!？」

「ふむ、それもいいな」

にやりと唇の端を上げて、団長さんが挑発する。

えっと、やり込めていただけるのはとってもありがたいんですが、できれば程々をお願いします。後が大変だから…主に夜とか…。

「げええ、あんたも小動物系好きなの!？　アーシェはやらないよ！」

「冗談だ。小動物系は嫌いじゃないが、俺が欲しいのは金茶色の小型犬のほうだしな」

団長さんが意味ありげに言った途端、ライトがしたり顔で笑んだ。

「あ、そゆこと。ようやく重い腰を上げる気になったんだ？」

「いつまでも足踏みしてても進展しないからな。ま、お前達を見て思うところがあったってわけだ。そうすると、アーシェも身内になるかもしれない。かわいがっておいで損はない」

ごくわずかに唇に笑みを刷き、団長さんは私を見下ろす。

なんで私と団長さんが身内になるのかな？

「そう言うなら、協力は惜しまないよ」

「当たり前だ。お前らのごたごたに巻き込まれて、今までどれだけ便宜を図ってやったと思ってる？」

「それはそれ、これはこれ！」

ふふんと得意げな笑みを浮かべたライトに負けず劣らず、団長さんも人の悪い笑みを浮かべる。

「現金なやつだ。まあいい。アレを落とした暁には、晴れて俺はお前の兄になるわけだ。まあよろしくな？」

「うわ、それがあつたか！ 忘れてた…最悪…！」

頭を抱えて机に突っ伏し、悶絶するライトに、珍しくくくつと声を出して笑う団長さんを困惑しながら見上げると、その表情のまま優しく頭を撫でられた。

「気にするな。そのうちわかる」

「はあ…」

釈然としないままあいまいにうなずいたけれど、団長さんはわけを話してくれる気はなさそうだ。

私の頭から手を離して、ぴしりと居住まいを正す。

「今から10分後、第六から第十小隊までの行軍訓練を担当しろ。」

訓練棟前に集合だ。行け」

「了解しましたあ」

すんごくやる気なく返事をして出て行くライトを尻目に、レイド様がゆつたりと執務机に腰を下ろした。

「アーシエ、お茶をくれ」

「はいっ！」

新しい日常にはまだ慣れないけれど、ここは孤児院に負けなくらい温かくて優しい場所だから。

何より、ライトがそばにいてくれる。だからここが、私の居場所。

ライトと二人、お互いに閉じこもっていた殻を破って、初めて外に出られたから。

これから、ここで生きていきたいと思うから。

「レイド様、どうぞ。熱いから気をつけてくださいね！」

さあ、拗ねて帰ってくるだろうライトを、どうやって迎えよう？

薰り高いお茶と、小さな焼き菓子と、そして。

精いっぱい笑顔と、『おかえり』って言葉で。

騎士様の使い魔は、騎士様の大切な侍女になりました。

エピローグ（後書き）

本編無事に完結いたしました。

ここまでお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

初めての投稿作品でこんなに評価をいただけるとは思っていなくて驚きと感謝でいっぱいです。

些細な妄想から始まったこのお話、当初は10話程度で終わるかなーなんて思っていたら、いつのまにか40話を越えるほど長く続くことになり、自分でもびっくりしています。

最初から最後まで、とても楽しんで書けた作品でした。

今後はレイドとエルサーナの番外編、ラズウエルとフェリシアの結婚、ライトとアーシエのその後、その他番外編（R18込みでw）などを予定しております。もうしばらくお付き合いいただければうれしいです。

ここまで書いてこれたのも、読んでいただいた皆さんのおかげです。これまでにたくさんの応援、メッセージを頂いた方、そして見ていただいたすべての方に感謝します。本当にありがとうございました。

美女達の茶会（前書き）

では、番外編スタートです。

まずは、「お茶会初体験！」での女性3人視点でのお話です。

美女達の茶会

エルサーナが入れた、薔薇の香りのするお茶は絶品だ。

お湯の温度と蒸らし時間を、その日の気温や湿度にあわせて一番香りが立つように調整する。

そうして入れたお茶はえぐみがなく、実に薰り高くさわやかで、王妃のお茶会ではエルサーナが常にお茶の担当に指名されている。それは、今日のような身内のお茶会でも、例外はない。

薔薇の模様の華奢なカップを上品に口元に運びながら、シエルミラはベンチに並んで座っているライトリークとエルサーナを見やる。エルサーナの膝の上には、真つ黒でつややかな毛並みの美しい猫が姿勢よく座っていて、ライトリークの指先から与えられる焼き菓子を、おいしそうにほおばっていた。

じっとしていれば、それこそ置物と見間違いそうなほど、毛並みはよく手入れされ、すらりとした見目麗しい猫。

それを見下ろすライトリークの視線はどこまでも甘く、まるで恋でもしているのかと思うほどに熱っぽい。

「不思議ねえ。あのライトが、あんなに猫をかわいがるなんて、想像もつかなかったわ」

「そうよね！ 私も驚いたわ」

嘆息して呟けば、リリアナも勢い込んで同意する。

「あら、随分と世話が手馴れていらっしやるように見えるんですけど、ライトリーク様は動物がお好きなのではないんですの？」

「ぜーんぜん！ 今まで動物なんか飼ったことないわ」

小首を傾げてフェリシアが疑問を口にすれば、リリアナがあっさりと否定する。

小さい頃から付き合いのあるシエルミラとリリアナにしてみれば、今日の前で起こっている状況すら理解しがたい。

「昔から生き物にはあまり興味のない子だったもの」

「そうそう。昔犬に噛まれてからは、犬は特に嫌いだって言ってたし」

「動物に触れたといえば、馬の世話くらいかしらねえ」

「私が子供のころなんか、中庭で遊んでいてかえるを投げつけられたこともあったのよ！ 動物をかわいがるライトなんて、見たこともないわ」

「まあ……。それなのにあんなにかわいがっているなんて、あの猫ちゃんは何か特別な子なのでしょうか？」

フェリシアのもっともな疑問に、シェルミラもリリアナも首を傾げる。

「さあ。どうなのかしらねえ」

「なにか心境の変化でもあったのかしら」

シェルミラは、小さな羽飾りのついた扇を広げて優雅に口元を隠し、ライトの様子をうかがった。

黒猫が草や蝶に戯れるのを、愛しくて仕方がないというような目線でずっと追いかけている。

猫が足元に寄ればすぐに手を伸ばして膝に抱き上げ、あごをくすぐったり耳をいじってキスを落としたり、嫌がっても離さずに胸に抱きこみ、口にキスを落としたりしている。

それを目撃した娘達が、きゃーっと黄色い声を上げて、目を輝かせながら注視しているのに、思わず苦笑した。

ライトリークの視線も、手も、指も、唇も。すべてその一匹の猫に向けられていて、恋人にしているのだと錯覚してしまいそうなのだ。

「あの噂、本当かしら」

「あら、なんですの？」

歳若い娘二人の会話に、シェルミラは耳を傾ける。

「ライトが、女の人に飽きて猫に走ったって噂！ 侍女の間では、今その噂でもちきりよ！」

「でも、あのライトリーク様の様子を見る限り、あながちはずれとも言えないようですわねえ」

「本気なのかしら。あのかわいがりようは異常じゃない？」

「どうでしょう。世の中には色々な性癖の方が居ますから」

「シア姉さま、そっちに行っちゃう！？」

「あら、物のたとえですわ」

ほほほと上品に笑うフェリシアは、先ほどの下世話な一言など微塵も感じさせない清楚な笑みを浮かべて見せる。

「だけれど、今のライトはそう悪くはないわねえ」

シエルミラがおっとりと言えば、娘二人が顔をむける。

ふわりと薔薇の香りのする扇をぱちりと閉じて、シエルミラはライトを見やった。

「あの子は何に対しても執着も興味もなく、どこか退廃的で無関心だったもの。すべてをあきらめて、世の中を斜めに見ているような雰囲気があつて、人も物も生き物も、すべて拒絶しているようだったわ。ともすれば、自分のことすら大切にしていないように見えて、心配だったのよ」

シエルミラがふわりと笑みを浮かべると、リリアナとフェリシアも、ライトリークに視線を向ける。

かまいすぎたのか、背中の中を逆立てる猫に、ライトリークが屈託なく笑う。

『ごめんごめん』と謝りながら、またちゃんとキスをして、ぴゅつと跳び上がった猫にしてしとパンチを食らいながら、幸せそうな笑顔を崩さない。

「いきさつはどうあれ、あの猫ちゃんのおかげで、ライトは変わったのね。出来たら、このままライトをこちら側に繋ぎとめておいて

欲しいものだわ」

憂いを浮かべる王妃とは反対に、若い二人は実に楽天的だ。

「でも、猫に夢中で結婚できなかつたら困るわ」

「あら、猫ちゃんと結婚すればよろしいのじゃなくて？」

「え、シア姉さまそういう問題！？」

「ライトリーク様はそれでも構わないように見えますけれど」

「まあねえ。あの人、想像の斜め上に行く人だから」

「合法的に猫ちゃんをパートナーにするためなら、手段を選ばなそうですわよね」

「…なんかありえそうだからやめましょう、姉さま」

「あらあら、冗談よ。ふふふ」

「相変わらず本気が冗談かわかりにくいわ…」

娘達の会話をBGMに、シエルミラはライトリークを慈愛のまなざしで見やる。

願わくば、少しでも長く、この穏やかな時間が続きますように。

少しの祈りを込めて、シエルミラは薔薇茶をゆったりと口元に運んだ。

美女達の茶会（後書き）

案外愛されキャラのライト君でした。

この身の内に秘めた嵐（前書き）

レイド×エルです。

『魔法を使ってみよう！・後』にて、アーシェが通りかかった時の2階回廊のバルコニーでの一コマ。
二人に一体何があったのでしょうか？

この身の内に秘めた嵐

中央棟で受け取った王妃宛の書簡を入れたケースを小脇に抱え、エルサーナは足早に華月宮へと向かっていった。

王妃宛の書簡のやり取りは、侍女長補佐のエルサーナと、他にベテランの二人の侍女しか許されていない。もちろん、機密上の理由もあるが、エルサーナが侍女になるずっと以前に、入って間もない侍女が王妃の書簡を外部に流出させた不祥事があったため、現在は信頼の置ける侍女しか、王妃の書簡に触れることが出来ない。

エルサーナはまだ王妃付きになって5年だが、やはり身内ということとで許可されている部分も大きい。何より、この5年の仕事ぶりで、侍女長補佐に昇格したエルサーナを悪く言うものは誰も居なかった。

華月宮へと戻るルートは、西棟を通るか、北宮を通るかのどちらかだ。けれど、エルサーナは決して西棟を通らない。

西棟は騎士団の本拠地だ。あの人に会ってしまうかもしれないころは、まだ勇気がなくて通れないでいる。

会ってしまったら……ずっとくすぶり続けているこの気持ちを、押さえきれない自信がないから。

居住区画である北宮の一階回廊は、大きなテラス窓がずらりと並び、中庭に面している。そこでは、今日もお茶会が開かれ、華やかな装いの貴族の令嬢達がさざめく様子がよく見えた。

無邪気な様子で楽しむ少女達を見ると、自然、頼が緩む。

彼女達を見ていると、何も知らなかった頃の自分を思い出すような気がするから。

ふと思い立ち、エルサーナは華月宮への一階の渡り回廊ではなく、2階の渡り回廊へと上がった。2階の回廊の中央には、中庭に面したバルコニーがある。

明るい日差しを通す大きなテラス窓を押し開けて、エルサーナはバルコニーへ出た。そよ風が後れ毛をそつと揺らす。まぶしい日差しに目を細めて、エルサーナは大理石のベンチに腰を下ろした。

ここは、エルサーナのお気に入り場所だった。…5年前までは。

他の者が起き出す前の早朝、仕事が終わった後の夕焼け、そして、静かに月が照らす夜更け。ここで、あの人と時間を過ごすのが好きだった。

華やかなドレスに、色とりどりの宝石。ふんわりしたりボンに、華奢な靴。レースの手袋に、花やレースで飾られた帽子。見下ろす中庭でくると動く少女達がまぶしかった。

あの頃のまま、無邪気に夢を見ていられたら、どんなに幸せだっただろう。

袖口からそつと引き出した銀の輪を、エルサーナの白い指はいとおしそくに撫でる。

あの人からもらった、唯一のもの。思い切れずに、捨てられずに、想いと一緒に、人知れずここに隠したままもう5年も過ぎた。

「私も大概うじうじしているわよね…」

自嘲的に呟いて、エルサーナは少女達を見下ろす。私にも、あんなふうにかわいらしい時期があったわね…と、ほほえましく思いながら眺める背後でかたりと音がして、振り返ったエルサーナははっと息を呑んだ。

「珍しいな、こんなところにいるのは」

そう言つてテラス窓を開けて出てきたのは、誰あろう、騎士団長レイド・グランツその人だった。

思いも寄らない男の出現に、エルサーナはどうしていいかわからな

い。

今一番会いたくて、会いたくなかった人。その人が目の前にいる、それだけで、エルサーナの体いっぱい愛しさがあふれる。

「あ…ご、ごきげんよう」

それでも必死に平静を保とうとして、ぎこちなく挨拶をして、エルサーナはうつむく。

どうしてここにいるのだろう。どうして、あの日のように、二人でこんなところにいるのだろう。

過ぎ去った時間は、もう戻らないのに。

レイドは、あの頃のまま、ちっとも変わっていないように見える。

自分を見つめる、鋭いけれど、よくよく見れば穏やかな瞳は、動揺すらしていないようだ。

それなのに、自分ばかり、いつまでも未練たらしくうじうじと立ち止まったままで、情けなくなる。

「西棟のバルコニーから見えた。邪魔をしたのならすまない」

「そんなんっ…、邪魔だなんて！」

反射的に答えれば、レイドは薄い笑みをひらめかせた。

「そうか。なら、少しだけ付き合ってもいいか？」

「え、ええ…」

待つてましたと言わんばかりに、余りにも堂々とした男の態度に、嵌められた気がするのには気のせいではなさそうだ。こうなると、エルサーナはどうしていいかわからない。

この5年、彼と関係を終わらせてから、このように話す事など、数えるほどもなかった。この想いが消えるまではと、必死で近づかないようにしていたのに。

遠くから姿を見ては切なさに胸が締め付けられ、目が合うだけでどきどきして逃げ出した。そんな子供じみたことをずっと繰り返して、だけれど、今、ちつとも色あせない思いに困惑して。

その元凶が目の前にいて、普段どおりになど振舞えるはずもない。

「ああ、にぎやかそうだな」

「そ…うですわね」

立ったまま手すりに手をつき、レイドが少女達を見下ろす。

ほかの侍女達には、怖いといわれていた彼だけれど、女性を決して粗略に扱ったりはしない。むしろ、紳士的で、いつでも礼儀正しかった。

…今は、きつちりと一線を引いて接してくれているのが、逆にあの頃と違って遠くなってしまうたようで、やりきれない。

自分から、望んだことなのに。

あの頃、二人の距離はもつと近かった。時折、絡むようにつながれるごつごつした指先に、幸せな気持ちになったのを覚えている。

今、レイドはエルサーナと、人二人分の距離を開けている。それが自分を気遣ったものなのか、それともレイドの自分に対する心の距離なのかを計りかねて、悲しくなる。

「エルサーナ殿のドレス姿も、美しかったな。ここしばらくは見ていないが」

突然の言葉に、ひゅつと息を吸い込んで、まじまじとレイドの横顔を見る。中庭に注がれたままの三白眼は、穏やかなままで、一層の混乱をエルサーナに与えるだけだ。

どうして急にここに現れたの？ どうして急にそんなことを言い出すの？ どうして…どうして？

不意に、レイドが視線を転じて、エルサーナの手元に注ぐ。そして、わずかな笑みを唇の端に乗せた。

「着けていてくれたのか。光荣だ」

はっと気づいて、あわてて手の中に銀の輪を隠した。

忘れもしない、エルサーナから別れを告げた日のこと。

『言いたいことはよくわかった。ただ、これだけは受け取ってくれ。安物だが、他に行き場がない』

そう言つて、レイドから渡されたブレスレット。銀の輪に、小さなルビーとダイヤがあしらわれた、決して高価なものではないそれを、密かに身に着けて、この5年間はずしたこともない。

自分の想いを見透かされたような気がして、みるみる羞恥で頬が朱に染まっていくのがわかる。

反面、あわてて隠すようなことをして、レイドが気を悪くしなかっただろうかと心配になって、そつとうかがえば、穏やかなまなざしで見つめられていて、思わずさつと視線をそらしてしまった。

（やだ、こんな態度、とるつもりじゃないのに…）

どうしていいかわからないままうつむいていると、かつん、と靴音がして、レイドが背を向けたところだった。やはり、気を悪くさせてしまったかと、いい知れぬ恐ろしさに背中が冷たくなった。けれど、顔だけこちらに向けたレイドの唇は、確かに笑んでいて。

「まだ、あの頃のままなんだな」

そう、呟いた。

「…え？」

「いや、こつちの話だ。久々に話が出来てよかった。俺はもう行くが、エルサーナ殿も程々で戻れ。体を冷やさないうちにな」

そうしてエルサーナを気遣う言葉を残し、レイドは規則正しい靴音と共に去っていく。

後に残されたエルサーナは、それこそ胸の中で吹き荒れる、嵐のよ

うな想いを押さえ込むのに精一杯で。だめだとわかっているのに、想いをとめられない。

ふっとため息をついて、銀の輪を見下ろした。レイドへの思いの証のように光るそれを、そつと指先で撫でながら。

と、その時、テラス窓の前に突然黒猫が姿を現した。なぜか急に現れたような気がして驚いたが、その無邪気な姿に、ふっと唇を緩める。

「こんにちわ。アーシエ、でよかったわよね？　こんなところまでお散歩？」

にゃあん、という応えに、笑みを深くする。

ライトリークが最近飼い始めたこの黒猫は、まるで人の言葉がわかるようだ。

理知的な深い緑の瞳で見つめられると、ただの猫とは思えない気がする。…だから、聞いて欲しいと思ったのかもしれない。

階下でさざめく少女達。彼女達のように、何も知らないままですいたら、幸せだったかもしれない。

でも、何も知らないままだったら、レイドには会えなかった。

「人の心って、ままならないものよね…」

ぽつりと呟く。視線を返し、首を傾げる黒猫に笑って見せる。

「恋って、何かしらね」

甘くて、幸せで、嬉しくて、くすぐったくて、熱い。

だけれど、同じくらい、苦くて、つらくて、苦しくて、切なくて、暗闇にいる気分にもなる。

たった一人の人に、こうまでかき乱されるなんて、恋以外に経験がない。

「ごめんなさいね。こんなこと話しても、困っちゃうわよね」
自嘲するように笑い、エルサーナは黒猫の前にしゃがみこんだ。
見上げる瞳が、なぜか気遣うような視線に見えて、少し嬉しかった。
「なんだか、ライトがあなたを傍に置く気持ちができるような気がするわ。どうしてか、あなたには何でも話してしまいたくなる。あなたか、こうして黙ってそばにいてくれるからかしらね」
そう言っただけで猫を撫でようと伸ばした手に、黒猫がびくりと体を硬くするのかわかって、エルサーナはその手を空中で止めた。

初めてアーシェと会ったあと、ライトから聞かされた。この子は、魔女につかまって虐待を受けていたのだと。だから、女性の手を怖がるのだと。

『会った時には、なるべく怖がらせないようにしてやって。アーシェも、嫌で怖がってるわけじゃないから』

ライトリークの猫を気遣う気持ちは、今まで誰にも、何にも見せたことがないもので、エルサーナも驚いた。

だけれど、この小さな猫の自分を気遣うような目も、おびえを宿した瞳で、それでも逡巡するように自分と手を交互に見る姿も、どこか人間臭さがあって、どうにも放っておけない気分させられる。

困ったようにうつむいてしまった黒猫に、今度はその手を、手のひらを上に返して、怖がらせないように気をつけながらそつと差し出した。

「怖がらせてごめんなさい。私からは手を出さないわ。大丈夫」
そうして、猫が動くまでじっと待つ。ややあって、アーシェはこわごわとエルサーナの手を頭をすり、とすり寄せた。
そうすることで緊張が解けたのか、がちがちだった小さな体が、しなやかに擦り寄ってきた。

警戒を解いてされるがままのアーシェは、かわいくて思わず抱きし

めたくなる。でも、怖がらせないように、急ぎ過ぎないように、ゆつくりと撫でながら、胸に溜めてきた想いを聞かせるともなく呟く。「だめだってわかっていても、どうしてもときどきしてしまうの。」

無意識に、あの人の姿を探してしまうの。会えば切なくなるし、目が合えば恥ずかしくて、話しかけられると嬉しいの。こんな歳なのに、…恋してる気持ちが消えないの。おかしいわよね」

本当に、あきれるほどに、未だレイドに想いを残している自分がかしかった。レイドと距離を置いた後、時間がたてばきっと忘れられるなんて、都合よく言い聞かせていた自分を指差して笑ってやりたい。

胸に秘めていた分、発散できずにより強く、より重くなっているような気さえする。

まるで、執着だ。

「あんまり仲良くしてると、ライトに怒られてしまうわね。聞いてくれてありがとう。またお話ししようね」

想いを吹っ切るように、エルサーナは立ち上がった。素直に従う猫に感心しながら、テラス窓を開けて、アーシエを中に入れてやる。ちよこんと座って見送る風情のアーシエに軽く手を振って、エルサーナは華月宮へ戻る為に歩き出す。

「この気持ちは、本当に消えるのかしら？ 今だってこんなに、あなたへの気持ちであふれているのに…」

小さく呟き、エルサーナは切なさに眉を寄せ、きゅっと唇をかんだ。

この身の中に秘めた嵐（後書き）

というわけで、しつとり大人の雰囲気の二人。

彼らの過去に何があったのかは、今後明らかになっていく。

…予定w

小さな目撃者（猫？）（前書き）

久々の猫アーシエ。

レイド×エルもあるよ！

小さな目撃者（猫？）

久々の猫バージョンは、やっぱり気楽でいい。

姿隠しの術を使えば、だれも私を気に留めない。

専属侍女はいつでもどこでも誰からも注目されるから、場内にいるとなかなか気が休まらないのよねえ。ま、こうして歩いていると、いろんな話が聞けて楽しいし。

「あのアーシエって子、降ってわいたみたいに専属侍女になっちゃって、ホントむかつくわよね！」

「ライトリーク様もなんでか知らないけど、猫かわいがりしてるらしいじゃない。仕事中にあの子抱えて部屋に戻るところ、私見たことあるもの！」

「えええ？ それって、仕事中にやってるってこと！？」

「ちよつと、やるとか言わないでよ、はしたないわね！」

「ていうか、ライトリーク様ってそういうキャラだったの！？」

「うそお、シヨkkerー！」

…そ、そうね、楽しくない話も、たまにはあるわよ、ね。うん。

つーか、仕事中にしょっちゅう抜けるからこうやってネタにされるんじゃない！ ライトのばかりっ！

まあ、ライトの専属になってやつかまれてるのは知ってるから、いまさら言われてもどうってことないけどね。

学院にいた時も、こんな程度の悪口はしょっちゅうだったし。

むしろ、こうして猫バージョンで歩いてるときには、だれが何を言ったかはつきりわかるから、相手を知ってる分まだ余裕がある。

…魔女は私にこういうことをさせたかったんだって理解できて、ちよつと複雑な気分だけど。

さて、今日の私は週に2回の定期休暇です。

でも、ライトとは今回休みが合わなくて、一人ぼっちの休日。一人で一日部屋にいるのは退屈だし、かといって下手にうるつけば、周りがうるさいし。ということで、心置きなく遊ぶために、ライトに変化の術をかけてもらった。

朝私に術をかけてくれたライトは、猫になった私の首に、追跡の術がかかった赤い鈴の付いたチョーカーを巻いて、ひょいと私を抱き上げた。

「いい、ほかの男に誘われても、絶対ついていっちゃだめだよ？」

「もう、わかってるわよっ！　どういう目に合うか、骨身にしてみて知ってるし！」

ぷうつと頬を膨らませてそう言ったとたん、ライトの目がすつと細くなる。

え、あれ！？　私今スイッチ入るようなこと言ったっけ！？

「本当にわかってる？　わかってるならいいけど。言いつけを破ったら、こういうことになるからね？」

言うなり、ソファに組み敷かれた。

耳を噛まれ、びくつとはねた後ろ足を大きな手が撫でる。毛を逆立てるように撫で上げられて、体のあちこちにまき散らされた火種がじりじりとくすぶって、泣きそうになる。

「や、やだあつ！　猫の時にしないでえ……！」

お腹の真ん中に鼻先を埋められて、震えながら鳴き声を上げると、ライトが顔を上げて、とろりとした淫靡な笑みを浮かべた。

「しないよ。帰ってきてから、ちゃんとする。いい？　約束、守ってね？」

怯えてふるふる震えながらこくこくとうなずく私に満足そうに笑って、ちゃんと唇にキスを一つ落とし、

「じゃあ行ってくる」

って、ライトは颯爽とマントを翻して出勤していった。

思い出したら、背中がざわりと総毛だった。

朝の出来事が、戒めのように、くぎを刺しているかのように、私の肌を撫でていく。

いやでも約束を思い出す。朝のあれがライトの狙いなんだとしたら、効果は絶大だった。

特に西棟の廊下を歩いている今は、私はアンテナをできるだけ広範囲に広げて、足音や声を注意深く拾う。

もちろん、変態王子二人に会わないためだ！あの二人には、私の姿隠しが通用しない。見つかったら、つかまっていじられてライトのお仕置き一直線コースだ。それだけは絶対に回避しなくちゃ！なぜそこまでのリスクを冒してまで西棟に来たかというところ。

ぶっちゃけ退屈でさびしくて、ライトの顔を見たくなくなったからだ。大概甘えてると思うんだけど、見るくらいいいじゃん！と開き直ってここまで来てみた。

幸い、王子様二人の気配はない。そのうえ、団長室のドアが細く開いている。ラッキー！

ライト、いるかな？

お仕事の邪魔をしないように、そうつと覗き込む。

ライト、いない。ていうか、あれ？誰もいない？

と思って、視線を巡らせたのと。

「やつ…ダメ…！」

という悩ましい声が耳に入るのは、同時だった。当然のごとく、視界に飛び込んできたそれに、私はカチーン！と固まる。

それは、ドア横の壁に、団長のデカイ体に押さえつけられるように、壁際まで追い込まれたエルサーナさんだった。

「わ、私は、ただ王妃様からのお使い物をお持ちただけで…っ」

「ああ。だが、あのピンク色の包みの方は、エルの差し入れだろう。昔もよく差し入れてくれたな。あれが好きだと、覚えていてくれたのだろう？」

「し、知りません…っ！」

うわ、うわ、うわ！ 腰に来るレイド様の低音の美声が、より破壊力を増している。エルサーナさん、うろたえてそむけた顔が恥ずかしそうで、すごく真っ赤になってる。

どうしよう、目が離せない…っ！

レイド様が強くエルサーナさんの腰を引き寄せた。もう片手で、頬を押し包むようにして、そむけた顔を強引に元に戻した。

鼻先がふれそうなほどの至近距離で視線を合わせて、親指が優しく頬を撫でる。

「だ、誰が来たら…！」

「大丈夫だ。向こうが入るより、俺の方が先に気付く。集中してろ」

「でもっ、もう戻らないと…！」

泣きそうに眉を下げた顔で言いながらも、エルサーナさんの手は、すぐるようにレイド様の制服の袖を握っている。

なんだか、離したくなさそうに見えるのは気のせい、…なのかな？

と、レイド様がふつと微笑んだ。

「エル。ここを許してはくれないのか…？」

「…っ」

レイド様の太い親指が、エルサーナさんの唇を、じれったいほどゆつくりとなぞった途端、エルサーナさんの膝がかくんと抜けた。

それを腰に回していた手でぐっと引き上げて、レイド様は淡い薔薇色の小さな唇に、自身のそれを寸止めさせた。

吐息がふれる距離。うつん、体温を感じる距離、かもしれない。

そして、まるで焦らすように、確かめるように、そこから動かないエルサーナさんは、声もなく浅い吐息を繰り返しながら震えている。

ううう、嘘嘘嘘っ！？

ど、ど、ど、どうしよう！？

人のラブシーンなんて見ちゃいけないってわかってるけど。

でも、きれいで、色っぽくて、エッチくさくて、素敵で、目が離せない。

だけど、食い入るように見つめていると、ひょいっと誰かの手にすくい上げられて、反射的に全身の毛がぶわっと逆立った。

『っっ！　っっっ！』

「はい、騒がない、爪たてない。それじゃ覗きだよ、アーシェ」

声を上げないよう、私の口を押さえたまま苦笑するのは、やっぱりライトだった。

ああ、変態王子じゃなくてよかった！　でも！！

『ライト、ライトっ！　ななな、アレ、なんっ！？　どっ、どっ、どうして！？』

「わかったわかった。とりあえず落ち着いて、部屋に帰ろう」

そういつて、ライトはあわあわする私を抱いたまま、西棟の廊下を戻り始めた。

遠ざかる耳には、エルサーナさんの悩ましげで、ひそかな喘ぎ声が、途切れ途切れに聞こえはじめていた。

「紆余曲折を経て、最近めでたくまとまったらしいよ。ほら、あいっらっってお互いストイックだからさあ、別れてから誰とも付き合っていないんだよね。その反動みたいなものでしょ」

なんて、廊下を歩きながら、ライトは何でもない事のように言っけどさっ。エルサーナさんからは、少し前にレイド様への気持ちを感じ

いてたから、どうなったかは気になってはいたんだけど。

それにしたって、知ってる人のラブシーンって、なんかものすごく恥ずかしい！

『ていうか、ばれてないよね？』

「ばれてるよ。レイドのことだから、絶対気づいてるって。見せつけたかったんだろ、今まで散々煽ってやったし、意趣返しのもりなんじゃないの？ まーさすがの俺も居心地はよくなかったね」

なんて苦笑しつつも、ライトはそれほど動揺してるようには見えなかった。

『って、煽ったのはアンタだけでしょお！？　なんでそんなにダメージ少ないの！？　うわぁあん！　明日からどんな顔して会えばいいのーっ！？』

「普通にしていればいいじゃん」

『ムリッ！！　私にそんな真似できると思う！？』

途端、ライトはわざとらしくいかめしい顔を作って、えへんと咳払いをしてみせる。

「何事にも動じず、平常心。専属侍女としての試練と思いなさい」

『んなわけあるかーっ！！』

みぎやーっ！　と怒りの声を上げたけれど、同時にたどり着いた部屋のドアを開けたライトに、ばいっと中に放り込まれてしまう。

『なにすんのよっ！』

シャーッ、と威嚇した私の目の前で、ライトは部屋のドアに鍵をかけて、振り返った。

形のいい唇が、にいつ、ときれいに吊り上がって…なんて禍々しい笑顔でしょう！

「ったく、あいつに煽られるなんて癪なんだけどな。久々の猫姿にものすごい萌えちゃった俺の負け、かな」

そう言いながら、ライトが指先に魔力を集める。

えっ、ちよつと待って、まさか…っ！

「朝、帰ってきてからちゃんとするって約束してたしね？」

『やだ、ライト、私服着てな…っ！ やぁぁっ！』

じわり、と熱い感覚が全身を覆う。見る見るうちに消えていく毛皮、伸びていく手足。一糸まとわぬ姿で、私は肉食獣の眼前に投げ出されてしまった。

「キヤーーっ！」

「指咥えて見るくらいなら、やったほうがずっといいしね」

「やるって字が違ってますーっっ！！」

「よくわかったね。そういう察しのいいところ、好きだよ、アーシエ」
にこ、とライトが笑う。全裸じゃ抵抗も逃げることもできない。伸びてくる手を叩き落とすので精いっぱいだけど、それだってライトが本気になればかないっこないってわかってる。

…それに、それに。

ライトの笑みが、不意に甘く優しいそれに代わる。戯れのような手のひらも止めて、すいっとなしのべた手で私を誘う。

「ほら、アーシエ。…おいで」

それは、どんなに恥ずかしくても、どんなに強がっても、私を溶かす魔法の言葉。

手を伸ばして重ねて、引き寄せられて抱きしめて。ふわりと抱き上げられれば、もうあなたの腕にとらわれて、逃げだすこともできない。しない。

「愛してる、アーシエ」

「ずるい。そう言えば私が黙ると思ってっ」

ぷいっとなつぽを向いた私の頬に、くすくす笑って唇を落とす。

「じゃあ、お詫びにご奉仕させてイタダキマス。体の隅々まで…こ
こも、あそこも、あんなところもぜんぶ、ね？」

「いいいいいいです結構です遠慮しますーっ！ー！」

「まあまあ。もうこうなったらどうせどうにもならないし。あきら
めて？」

「にこやかに言うなーっ！ やだああっ！」

私の絶叫が部屋にこだまする。ぱたりと閉ざされた寝室のドアから、
鳴き声混じりの嬌声が聞こえるまで、もうすぐ。

小さな目撃者（猫？）（後書き）

さて、レイド×エルはいかがでしたか？

この二人の組み合わせはものすごい好きです。

久々の猫アーシェもお楽しみいただければ嬉しいです^^

騎士様の専属侍女・1（前書き）

ライト出てきませんw

代わりに兄登場。

アーシェの過去がらみのお話です。

騎士様の専属侍女・1

「いい天気」

私は、書類を胸に抱えて、軽やかに廊下を歩いていった。

すでに日差しは夏。澄んだ青い空は、どこまでも高い。紺の長袖の侍女服が、見た目にも重たく感じられる。暑くても、腕をまくるのははしたなくて出来ないけど、もうすぐ水色のストライプで半袖の涼しげな夏服に変わるから、それまでの我慢。

私が手に持っているのは、備品購入の申請書だ。これを財務部に持って行つて、必要なものを購入する。

騎士団だと、訓練用の模擬刀や道着、胸当てなどが消耗品として扱われ、2ヶ月に1回ほどは、補充のために申請することになっている。

他には、書類に使う紙やペン、インクなどの備品や、給与に関する申請も、すべて財務部宛になる。

それ以外にも、町で行われるイベントやパレードの警備に関する書類は総務部、怪我をした時の申請は厚生部など。

それらの提出書類を各部に届けるのも、専属侍女としての私のお仕事だった。

中央棟の廊下にずらりと並び、大きくて重厚な木作りのドアの一つをノックして、中に入り、一礼する。それからゆつくりとドアを閉めて、私は視線をめぐらした。

中で仕事をしているのは、黒のそろいのジャケットを身に着けた人たち。男の人と女の人の割合は、2：1くらい。財務部は結構女性の多い職場だ。細かい計算とか、女の人の方が向いているのかもしれない。

正面から少し視線を右にずらすと、中央の大きな机の隣に並び、そ

れより少し小さい（でも、ほかの人のよりは立派な）机に座った、銀の細いフレームの眼鏡をかけた男の人と目が合う。私がつこりと笑って会釈すると、無表情のその人にちよいちよいと手招かれた。並ぶ机の間を、他の人の邪魔にならないようにすり抜けながらどり着いて、私は軽く頭を下げる。

「お疲れ様です、ロベルクロード様」

「ああ、よくきた。よこしなさい」

「はい」

繊細に整った美貌に、理知的な眼鏡がよく似合うこの方は、ロベルクロード・ウォーロック様。

ライトのお兄さんで、財務部次官と言って、財務大臣の次の位を持っている、とっても偉い人なんだそうだ。

32歳で、二人のお子様がいらっしゃるこの人は、審判の時に会った、お父さんの宰相様とよく似ている。

めったに笑わない人みたいだし、書類に関しては手厳しいけれど、どこが悪いかをちゃんと教えてくれるから、いい人なのよね。

本当は、こういう提出書類はちゃんと受付窓口があるんだけど、なぜかロベルクロード様は、在室している時には必ず私を呼んで、自分で書類を受け取るんだよね。次官クラスの人がやる仕事じゃないと思うんだけど、なんでだろう？

「ふむ、今日は問題ないようだ。では、受理しよう」

「はい、ありがとうございます。よろしく願います」

ぺこりと頭を下げると、ロベルクロード様は、眼鏡を指でちよいと押し上げる。

「まったく、このように女性を歩かせなくとも、自分で出せばいいだろうに、あいつも気遣いの出来ないヤツだ」

ぼやくような言葉にくすりと笑えば、ロベルクロード様の眉がピクリと上がる。

「なにがおかしい？」

「だって。ライトの方は、ロベルクロード様のこと、『あいついけ

好かないヤツだから、話しかけられても無視しろ』って言うんです。お互い意識してるなんて、仲がいいですよね？」

そう言ったら、ロベルクロード様の顔があらさまにゆがんだ。

「…今の話のどこをどうしたら、『仲がいい』になるんだ？」

「嫌いだったり無関心だったりしたら、そもそも話題に出したりなんかしないですもん。違いました？」

「…全く、君にはかなわないな」

若干疲れたように言うロベルクロード様にくすくすと笑って、私は礼をする。

「では、ありがとうございました。失礼致します」

「ああ、また来なさい」

『また遊びに来なさい』みたいなその気安さに笑って、私は財務部を後にした。

なんだかんだ言って、本当は兄弟仲よさそうだね。私にとっては、院長先生とシスターが父であり母であり、孤児院の子供達みんなが兄弟みたいなもの。だけれど、ああいう血のつながりがどうにもうらやましくなる時もある。

ライトは文句を言いつつ、何からも逃げずに将来のウォーロック家を背負って立つロベルクロード様を認めている反面、逃げた自分にコンプレックスを持っているみたいな話をしてた。

ロベルクロード様の方でも、こうして何かにつけ、ライトの動向を探るみたいにして私に話しかけてくるし、それもどうも嫌ってとかでは全然ないから、やっぱりお互い意識してるんだよね。

ロベルクロード様のゆがんだ顔を思い浮かべて、小さく笑いながら来た道を西棟に向かっていた、その時。

「おい、お前！」

誰かとすれ違いざま、剣呑な声を投げられると同時に、腕を強く掴まれて引かれた。

「った！」

遠慮会釈ない力に、肩が抜けそうになり、痛みに思わず声を上げ

る。

「やっぱり！ お前、アーシェ・グレイだろ！ 何でこんなところにいるんだよ！」

とげのある言葉に驚いて、相手の顔を見上げて、思わずぎくりとこわばった。

ギルバート・バレンシュタイン。

高等学院の同級生で、茶色っぽい赤毛に、黒い瞳の整った容姿で、身長はライトよりも頭一つ分くらいは低いかもしれない。国内にくつもの店舗を抱える、バレンシュタイン商会の御曹司様。

しかも、私の就職をことごとく潰してくださったのが、誰あろう彼の仕業だった。

学院を卒業して、魔女につかまって、お城で過ごして、こうして生活するようになって、もう会うこともないと思って、すっかり忘れていたのに。

「なんでって、ここに就職したからよ！ あんたこそ、何でこんなところにいるのよ！？」

私をにらみつけるギルバートの燃えるような目に怯む。でも、私は何も悪いことなんかしてない。どうしてここまで目の敵にされなきゃいけないのかわからない、

ギルバートは、私の反論に、にやりと嫌な笑みを浮かべた。

「親父と一緒に、新店舗の申請に来たんだよ。また店を増やすんだ。孤児院に行つて聞いても、誰もお前がどこにいるのか一言もしゃべらなかった。半年も雲隠れしやがって、こんなところにいたとはな」学院にいたときに女子に人気だった整った顔は、だけど蛇のような雰囲気で、どうも私は好きになれない。

なにせ、高等学院で、私を気に入らないと言って嫌がらせをしていた筆頭が、こいつなんだから！

何が気に入らないのか知らないけれど、いちいち孤児だつてことをあげつらつては私に突っかかってきて、教科書を隠されたり捨てられたり汚されたり、空き教室に閉じ込められたり、教室の移動や自習を教えてもらえなかったり、視界に入ればちくちく嫌味を言ってくるので、本当に苦手だった。

孤児院では、私の就職が彼によつて潰されたことは知っている。だから、みんな言わないでいてくれたんだろう。

その、彼の顔が不快げにゆがむ。掴まれた腕は、ぎりぎりと絞られるように痛かった。

「孤児は王城には上がれないはずだろ。なんでこんなところにいるんだよ。どんな手を使った!？」

「パシフィスト教会には王城からの許可があつて、就職できることになつてるのよ! それは調べればすぐわかるでしょ! 大体、私に使える手なんかないつて、あんたの方がよく知つてるじゃない!」ライトの一存つて所は省いておく。こいつのことだから、妙な勘繰りをしかねない。ま、嘘は言つてないし。

だけど、廊下を行き交う人が足を止め始めた。そりやそうだ、中央棟の廊下なんていったら、お城づとめの人だけじゃなく、公的な申請を必要とする民間人も訪れる、一番人が多い場所。うつつ、こんなところで騒ぎになんかしたくないのに!

「なんでうちの店に来なかつたんだ!? 就職ダメになつた後、散々雇つてやるつて言つただろうが!」

なおも私の腕をきつくつかんで言い募る彼に、私は声を張り上げた。「私の就職ゼーんぶ横取りしておいて、信用できるわけないじゃない!」

「い!」どんなに困つても、あんたのところだけは絶対にイヤ!」そう。何でか知らないけれど、こいつ、就職を潰した癖して、私を雇いたいとか言つたのよ!

就職してまで嫌がらせを続けたいのかしら？　そうまでして嫌われる理由が、私にはさっぱりわからない。

嫌いなら、放っておいてくれればいいのに。私だって、卒業してまであんたの顔を見続けるなんて、ごめんだわ！

「お前：！　城に上がったからっていい気になるなよ！？　あの孤児院に物を売らないなんて、簡単なんだぜ！？」

その一言に、私は蒼白になった。

昔から、こいつは卑怯な奴だった。学院にいたときから、なにかと孤児院の小さい子達に嫌がらせをするぞとか、孤児院の悪い噂を流すぞとか、私の大事な場所を切り札に、私を黙らせるのがこいつの手だった。

バレンシュタイン商会は、国の流通の大きな部分を占めている。就職活動で勉強したけど、サンクエディア王国でも第2位取引額を誇るお店なのだ。前にライトと一緒に行った門前の高級雑貨店も、バレンシュタイン商会のお店だし。

そんなお店が、孤児院を潰すなんて、たやすいことのように思えて、つい口ごもってしまうと、ギルバートは満足げに嫌な笑いを浮かべる。

「どうする？　お前がここをやめてうちの店に来るなら、考えてやってもいいぜ？」

周りに人が集まってきたのと、怒りと焦りと悔しさで、うまく頭が回らない。

私の動揺に、かさにかかって畳み掛けてくるギルバートを、ぶん殴ってやりたい思いでにらんだ時。

「何の騒ぎだ」

落ち着いた声が、ざわめきをぴたりと鎮めた。足を止めた人たちの間を縫って現れた長身は、さっきまで目の前にいた、ロベルクロード様だった。

騎士様の専属侍女・1（後書き）

ウォーロック家次期当主の兄です。父似。

エルとライトは母似です。

ギルバート君はアーシェちゃんとどう絡んでくるでしょうか？
ライトとアーシェのいちやいちは次回で。

騎士様の専属侍女・2

きつと、騒ぎを聞きつけて来てくれたんだろう。

その場にいるだけで他を圧する怜悯な存在感は、宰相様とおんなじで。だけれど、どこかライトにも似たその雰囲気、私を安堵させる。

「な、なんだ…よ」

気おされたギルバートも、さっきまでの威勢はどこへやら、言い返す言葉も尻すぼみになる。

ロベルクロード様は私の肩を守るように抱き、腕にきつく食い込んでいたギルバートの手を叩き落した。

「女性の扱いがなっていないな。無粋な男だ。…何者だ？」

聞かれて、私は痛む腕をさすりながらロベルクロード様を見上げる。

「あの、学院の時の同級生です。ギルバート・バレンシュタインとって…」

「ああ、バレンシュタイン商会の。そういえばさっき父親が顔を出していたな」

最後まで言うことなく、ロベルクロード様は淡々とうなづく。

名前を聞いても別段顔色を変えることもなく、興味なさげな言葉が気に入らないのか、ギルバートはすごい形相でロベルクロード様をにらみつけた。

…知らないとは言え、王国筆頭貴族の次期当主様相手に、度胸あるなあ。本当の事知ったら卒倒するんじゃないの？

「で、この娘に何用だ？ この娘は、騎士団所属の専属侍女だ。うかつに手を出していい相手ではない。大体にして、君は父親についてきたと言うのに、その仕事を見もせずに城内をうろつきまわって女性に無体を働くとは、随分といいご身分のようだな。いい年をし

て、恥を知れ」

厳しく言いながら、ロベルクロード様は、集まった人たちを眼光だけで散らした。

うつ：間近で見ると迫力ありすぎです。親子兄弟そろって視線の冷たさが半端ない。遺伝か！？ それともウォーロック家の特殊能力なの？

静けさを取り戻した通路で、ギルバートはぎりぎりど歯軋りが聞こえてきそうな表情で私達をにらんでいる。

「父親の元に戻りなさい。彼の仕事の邪魔をしなくてはならぬ。不問にするのは今回限りだ。アーシェも」

「は、はい！」

不意に矛先がこちらに向き、私は反射的に背筋を伸ばした。

「君も、専属侍女には特権が与えられていただろう。こういうときには衛兵や従者に命令できる権限がある。このような騒ぎになる前に、速やかに排除する義務が生じるのだよ。就業規定は読んでいるのか？」

言われて、そう言えばうつすらそんな記述があったことを思い出す。

「す、すみません、今思い出しました…。私に縁があるように思えなかったので、読み流していました…」

まさかこんなトラブルになるなんて、思っても見なかったから、あまり気に留めていなかった。これは言い訳しようのない、私の失敗だ。申し訳なさに、泣きたくなる。

「まだ慣れていないのは仕方がないが、ライトによく聞いておきなさい。君自身や、ひいては、騎士団の面子の為に」

「はい、すみません…」

しゅんとうなだれた私の肩の、大きな手のひらはそのまま、温かいぬくもりを伝えてくれる。それが、次からは気をつけなさいと言ってくれているようで、涙はこぼさずに済んだ。

「では、団長室まで送ろう。君はまだ何か用事があるのか？」

「い、いえ…」

さすがに、ロベルクロード様は身分が高い方と見たのか、ギルバートも噛み付くことが出来なかったみたいだ。

「そうか。ではアーシェ、行こう」

軽く背中を押されて歩き出す。

そこに、じりじりとしたギルバートの視線を感じながら。

「あ、あの、すみません、お騒がせして」

小さく呟いて頭を下げる。専属侍女としての自覚が足りなかったってことだよな。財務部次官様が出張ってくるような場面じゃなかったのに、余計な手間をかけさせてしまった。

「今後気をつければそれでいい。…お前も二度目はないぞ」

「はいっ！ 肝に銘じますっ！」

厳しさを増した言葉に、思わずかちんと背筋を伸ばして返事してしまいました。うーん、さすが公爵家次期当主、有無を言わせぬ迫力。

とは言え、ロベルクロード様はすぐに雰囲気のを和らげる。

「お前は高等学院でも優秀だったそうだな」

「ええ、まあ。そうでないと奨学金がいただけなかったのだ」

えへへと笑うと、大きな手がぼんぼんと頭の上で跳ねた。

「欲しいと思っただけでももらえるものでもない。並の努力ではなかっただろう。お前は思いやりもあり、度量も大きい。たいしたものだな」

思わぬ高評価に、かあつと顔が赤くなる。思わず首も手もぶんぶんと全力で横に振っていた。

「そんなっ！ 私なんか全然っ。もう、いつも自分のことで精一杯で、恥ずかしいです…」

「まだ成人になったばかりなのだろう。今はまだ生きるすべを覚えている段階だ。焦らなくていい。ライトやエルサーナもいるし、私

も助言くらいならできる。何かあったら訪ねてくるといい」

「はいっ！　ありがとうございます、ロベルクロード様！」

わあ、すごく頼りがいのある言葉をもらっちゃった！

嬉しくてぺこりと頭を下げたけど、ロベルクロード様は難しい顔で口元を押さえて、私をまじまじと見下ろした。

な、なんでしょう？

「…ちようどいい。ロベルクロードなど、呼びにくいだろう。ロベルと呼びなさい」

…え、ええと、一体なにがちようどいいんでしょう？

「私はライトの兄なのだから、もう少し打ち解けてくれてもいいだろう？」

「は、はあ…？　そ、ソウデスカ…？」

満足そうに、鷹揚にうなずくロベルクロード様は、一体どうしちやっただろう？

まあ、呼べって言うなら呼びますけど。確かに、『ロベルクロード』なんて舌噛みそうだし。

「じゃあ…ロベル様」

「…『兄様』のほうがいいのだが」

「はい？」

「いや、なんでもない。こっちの話だ」

「はあ…」

なんだかなあ。今日のロベル様、ちよつと変じゃない？

心なしか、いつもより緩んでいるような気がする顔を見上げて、私は首をかしげた。

団長室にたどり着いて、ノックしてドアを開ける。ライトもレイド様も、一緒に現れたロベル様に、一様に目を見開いた

「なんであんたがアーシェと一緒にここに来るんだよっ！」

早速ライトが突進してきて私を奪い返し、ロベル様に噛み付いた。

「厄介ごとに巻き込まれたようなんでな、保護したまでだ。な？」

「はい」

長身をかがめて、私の顔をのぞきこむように確認するロベル様から私を隠すように、ライトが背を向ける。ちょっと、お兄さん相手でも失礼でしょ！

「厄介ごとって、どうしたの？」

今度はライトにのぞきこまれて、私はどう言ったものか…と迷う。あまり大事にはしたくないんだけど、でも。

私に注がれる、3対の視線。

下手な隠し立ては、とてもじゃないが通用しない面子だった。

あきらめて、私はため息をついて口を開いた。

「学院の時の同級生に絡まれたの。私、就職活動してた時に、3回商店の面接を受けてるんだけど、それを3回とも、自分の子分をねじ込んで横取りしたのがその同級生なのよ。その人には、その後にバレンシュタイン商会に来て散々脅されてたんだけど、さすがにそんなことされてまで行く気になれなかったから、断ったのよね。まあ、そのあと、色々あって…、すっかり忘れてたんだけど」

ま、色々のあたりは言わずもがなだけど。

「そしたら、今日偶然会っちゃって…」

「また、何か脅されでもしたのか」

言いよどんだ時に、ロベル様の絶妙の合いの手。促すように、ごまかしは許さないと言うかのように。これでごまかそうとする度胸、私にはありません！

「…うちに来ないなら、孤児院に物売らないぞって」

観念して、私はため息と共に呟いた。

私を抱くライトの手に、一瞬ぎゅっと力が入った。

「それはまた…随分と子供じみたことを言うものだな」

嘆息しながらレイド様が言えば、ロベル様もうなずく。

「嫌がらせが高じてのことか、それとも他に目的でもあるのか。いずれにしろ、現在のバレンシュタインの商会長はそう悪くはない人物だが、子供のしつけには失敗したようだな」

学院にいたときには、私一人が我慢すればよかった。だけど、今は成人して、父親の手伝いをしているくらいだ。きっと、孤児院に物を売らないように手を回すくらい、出来るのかもしれない。

どうしたものか…と、難しい顔になった二人に、私はさらに不安をかき立てられる。

けれど、ライトは不意に半笑いで鼻を鳴らした。

「何言っただよ、難しく考えすぎなんだよ、あんたたちは。これだから恋愛ごとに疎い大人はだめなんだ。事はもっと単純だよ、ばかばかしくなるほど、ね」

口を挟んだライトの笑みは、どこか確信めいている。

どうしてこんなに自信満々なんだろ。私達が知らない何をライトは知っているんだろ？

不安で見上げる私を、優しい笑みで見下ろしながら、大きな手が安心させるように髪を漉いた。

騎士様の専属侍女・2（後書き）

ロベルめ、「ロベル兄様」とか呼ばせようとしやがって！w

アーシエは頑張り屋のいい子なので、ロベルのお気に入りです。

将来義妹になるんだし…とかすでに先走ってるご様子。

身分差は気にならないのか？　そこはおいおい補完したいです。

あー、そっぴや前回いちゃいちゃするって言っていました、かなり糖度不足でした…；；

次回必ず！

さて、黒猫に番外編をアップしてます。大人な皆様は一つよろしく。

騎士様の専属侍女・3（前書き）

いちゃいちゃしますw

騎士様の専属侍女・3

…どうでもいいけど、離して下さいませんか？ 団長室に戻って
からずっと抱きしめられたままで動けないんですけど。

そしてそのお二人もなんか言ってくださいよ、離してやれとか。
何も見えてないみたいな態度されると軽くへこむんですけど！

ライトは私を安心させるように、髪に一つ口づけを落とす。

「そいつは別に本気で孤児院への商売をやめようなんて思っていない。
単に脅しとして孤児院の名前を出したただだろ。それが、アーシェ
にとつて一番のダメージだと知ってるからさ。学院の同級生で、長
いこと嫌がらせをしてきたんなら、それくらい知ってて当然だ」
無表情なレイド様に対し、ロベル様のほうは、繊細な美貌を曇らせ
る。

「それなら、なおさら危険だろう。うちで手を回して…」

「だから、そんな大げさな話じゃないって」

ライトは笑って一度私を解放すると、そのまま手を引いて自分のい
すに座った。

当然のように、私を膝の上に抱き上げて。

「ちよっ、何するのよ！ 下ろしてっ」

「だめ。今話の途中」

につこりと言い放たれる。いや、そういう問題じゃないでしょ！？
み、みんな見てるのにー！

じたばたもがいても、しっかりとお腹に回っている腕はびくともし
なかった。くそう、荒事なんか縁がないみたいな王子顔の癖して、
力はあるんだからっ！

だけど、私がここで騒いだら話の邪魔になるし…。もうっ！

うつうつ、ロベル様の視線が痛いんですけど…！

ため息をつきながら、眼鏡を指先で押し上げるのを見ていられずに、うつむいて小さくなるしかない。

ライトはそんなこと全く気にした様子もなく、おかしそうに私の顔を覗き込む。

「いじめはいじめだけだな。あれだよ、好きな子をいじめて気を引こうってだけの話。本当に嫌なら、自分のところに呼んだりしないだろ。傍に置いときたかったから、わざわざ他の就職先潰して、バレンシュタイン商会に来るしかなくなるように手を回したのさ。ところが、そんな男心を、アーシエは理解できないわけだ。だから、そいつのやったことは単なる逆効果で、アーシエの心は離れていったってとこだろ」

ライトの言葉に、部屋に沈黙が下りる。わたしも、ぽかんとしてライトを見上げるだけだ。それから、ようやく言葉の意味が頭に到達して、飛び上がりそうになった。

「ないないない、それはないよ！　だって、あれだけののしられて、嫌がらせされて、仲間はずれにされて、学院から出て行けとまで言われて私を好きとかありえないから！」

弾かれたように全力で否定したのに、ライトは私を意味ありげに見下ろす。

「アーシエにしてみればそうだよな。そうやって全然なびかないから、余計にあきらめきれないもんなんだよ。そのうち、アーシエは姿を消してしまった。調べても、どこに行ったのかもわからない。聞きに行っても教えてもらえない。そんな時に再会したもんだから、頭に血が上って反射的に暴言吐いちゃったんだと思うなあ」

「…なるほど。それはまた…随分とあさつてな方向に暴走したものだな」

「なんというか、成人してまでとる態度でないことは確かだな」

付け加えたライトの言葉に、あきれたように言うレイド様と、ため息をつくロベル様は、なんだかものすごく納得してるふうだ。

「え？ え？ だって、えええ？ どうしてそうなるの？ だって、好きな仲良くなりたいうって思うものじゃないの？」

そう、私がライトにそうだったみたいに。

ライトの膝の上、厚い胸板に両手をついてすがるように見上げると、途端に艶を増したライトの笑みを向けられて、ときどきする。ちゅつと額に唇を落として、ライトはわたしをきゅうつと抱きしめた。

「意地悪をして気を引きたい男心って物があるんだよ。俺もどつちかと言えばそっただけだね？ だからこうしてアーシェの嫌がることばかりしてしまう。ごめんね？」

「や、別にっ！ 恥ずかしいけど、やじゃないし！ 人前じゃなきゃ！」

って、今まさに人前で膝の上に抱かれたまま言うセリフじゃないじゃん！

私は恥ずかしくて、レイド様もロベル様も見えていられない。真っ赤になったまま、ライトの胸に顔を埋めて、せめて視覚だけでも遮断する。

もうやだ…。私ばかりドキドキさせられて、ライトは平気な顔して。

だけど、なだめるように頭や背中を撫でる大きな手のひらが心地よくて、もうどうなってもいいっていう気になっちゃうのが困る。

「そういうことだからさ。ただの色恋沙汰だ。兄さんが手を回すまでもない。これは俺の問題だから、俺が引導を渡すよ。アーシエにももう嫌な思いさせたくないしね」

私の髪を撫でながら、ライトが耳元にちゅつと唇を落としてくる。もうっ、どうしてこう甘やかすのがうまいのよ……。

本当に、私、ライトから離れたらだめになる。…ライトはわざと、そうしているのかもしれないけど。

「…まあ、ほどほどにな。あまりアーシエをいじめるんじゃないぞ」
「わかってるって」

さすが兄、ちくりと常識的な釘を刺すのも忘れない。

ライトにがつちり捕まえられているから、失礼だけれど、膝の上からロベル様の背中を見送る。

「ロベル様、送っていただいてありがとうございました!」

私の声に、ロベル様は一度足を止めた。そして、伶俐な美貌の唇の端に笑みをひらめかせて出て行った。

うーん、本当にスマートで紳士的な態度! 落ち着いた雰囲気も素敵。

なあんてうっとりしていたら。

「さて、アーシエ」

「何?」

呼びかけられて振り向けば、後ろに黒いものをまとったライトが、につこりと笑った。あ、あれ?

「『ロベル』だなんて、いつからそんな気安い呼び方をするように

なつたのかな？」

さーっと、血の気が引いてく音が聞こえたような気がした。

「や、だつてさっき、ロベル…クロード様が、ロベルって呼べって！ ライトのお兄さんだからもつと仲良くしようって！ だつて、私も『ロベルクロード様』って呼びにくいし！ だから…っ！」

にこにこ笑みを浮かべながらも、ライトがしどろもどろの私の言い訳を拒否してるのは明確で。

「俺以外の男と仲良くするなって言ってるでしょ？ どうしてわからないかなあ？」

「なんでえ！？ ロベル…クロード様はライトのお兄さんでしょう！？ それに結婚してるじゃない！」

「そんなのたいした問題じゃない。俺が嫌なのが大问题」

「ちっさー！！」

つい反射的に突っ込んで、はっと口をつぐんだが、もう遅い。

「やだっ！ ちょっとお！」

黒いものにさらに冷たい雰囲気までまとわせて、いきなりライトは私を肩に担ぎ上げた。そのまま、悠々と部屋を横切つて、ドアを開ける。

「全く、こんなに言ってるのに守れない子には、お仕置きしないとね」

楽しそうに言うなああっ！ またこのパターンなのおお！？

「うわぁん、レイド様ーっ！ 助けてっ！」

「…早めに戻れよ」

あきらめたのか、それとも興味がないのか、レイド様はこっちを見もしてくれなかった。

担がれたまま、みんなに見られながら廊下を進むのはものすごく恥ずかしい。しかも、腰からお尻をするすると撫でるのをやめてほしいっ！

「もうはなしてっ！ えっちい！」

「本当に、どうしてこっち方面の学習能力がないかなあ。それとも、お仕置きされたいの？」

声のトーンを落とした途端、ぱんっ、と軽くお尻を叩かれる。

「きゃあっ！」

悲鳴を上げると、ライトはくすくすと笑って、叩いたところをなだめるように撫でまわす。

「今日はどんなお仕置きがいいかな？ 希望があったら言ってね。やめる以外のことなら、何でも聞いてあげるから」

「じゃあ帰るーっ！」

「どこに？ ああ、部屋に？ それは急がないとね」

「実家に！ 孤児院にっ！ 帰るっ！」

力を込めて、一言ずつ言った言葉なんて、ライトは鼻で笑って却下する。

「うん、お仕置きが終わったら、帰ってもいいよ。…帰れたら、の話だけどね」

「わああんっ！」

高らかなライトの笑い声と、悲痛な私の悲鳴が、その日西棟に響き渡った。

騎士様の専属侍女・3（後書き）

アーシェちゃん、なにされちゃったんでしょうねえ。
猫でも人でも、変わらずお仕置き好きなライト君でした。

騎士様の専属侍女・4

「アーシエ、次の予定は」

「10時半から、総務部次官様と、来週行われる中央広場での楽団祭りの警備計画について打ち合わせが入ってます。その後、11時半から法務部のラーゲイジ様と面会の予定があります。ラーゲイジ様はこちらにいらっしゃるそうですが、なにか準備するものはありますか？」

「特にない。お茶だけ用意してくればいい」

「はい、わかりました。では、祭りの警備計画書の直しです。総務部に出してきますので、押印お願いします」

「ああ、頼む」

「はい。ありがとうございます。では、総務部に行ってきます」

レイド様から書類を受け取り、私はぺこりと頭を下げて、団長室を後にした。

外は今にも泣き出しそうな曇り空。少し涼しくて、長袖の侍女服がちょうどいいくらい。

今日は朝からレイド様と二人きりだ。ライトは、楽団祭りの警備の現場打ち合わせで町に出ている。

彼がいない団長室は、平穏そのものだ。良くも悪くも嵐のようなライトは、いつでも私の中に波風を立てるから。

だから、たまにはこういう穏やかな時も欲しいんだ。

…すぐに物足りなくなるなんて、わかってるけど。

そうして、一步一步、歩を進めることに、りん、と首元で涼やかな音を立てて存在を主張する『それ』に、私はどうしても気恥ずかしくて、ちよっとうつむきながら歩いていった。

それは3日前、ギルバートと望まぬ再会をした日のこと。

ロベル様と仲良くするのが気に入らないライトに、課業中なのに部屋に連れ去られて、散々弄ばれた後の話。

結局、あの後『ロベル様』と呼ぶのは許してもらえた。

私が『ロベル：クロード様』って取ってつけたように言うのもおかしかったみたいだし、エルサーナさんや下の妹さん達も『ロベル兄さん』と呼ぶのだそうで、みんなが呼ぶ愛称だからいいんじゃないの？ だって。

結局、私を遊ぶ口実が欲しかっただけじゃん！ 最低！

疲れきつてぐったりとベッドに沈む私の首に、ライトは赤いベルベットのチョーカーを巻きつけた。

「…なに、これ」

それに、動かすのも億劫な指先で触れると、複雑な意匠が彫り込まれた小さな鈴が、りん、と軽やかな音を立てる。

「お守り、かな。アーシェは肌が白いから、赤がよく似合うね」

言いながら、長い髪を払って、ライトは首の後ろでチョーカーの止め具を止める。

長いごつごつした指が肌に直接触れるたびに、ぞくりとした感覚が生まれるのを、奥歯を噛んでこらえた。

「はい、できた。かわいいね、首輪みたいで」

「首輪って…」

呆れ交じりにつぶやく私に低く笑って、ライトの手がまだむき出しのままの私の背中をゆっくりと撫で下ろした。

「…ん」

思わず、目を閉じて声をかみ殺すと、ライトの瞳が熱を孕んで甘く溶けた。

「あの魔女の首輪がついてたときに、あの女の所有の証みたいに見えて、めちゃくちゃむかついたんだ。こうして見ると、なんだか俺の物って気がして、気分いい」

「こんな、の、なくても…私、ライトの物なのに…」

独占欲をにじませた低い声が心地よくて、胸がきゅうつと苦しくなる。かすれた声で言い返せば、ライトがまた艶めいた笑みを浮かべた。

「うん、わかってる。ま、気分の問題。ああ、裸にチョーカーだけって、めちゃくちゃエロいな。すげえ燃える…」

「や…あ」

かすれた声を落としたライトの唇が、うなじの止め具のあたりから背中をゆつくりと滑って行って。

甘い声を上げてのけぞった私の背中に、彼はまたのしかかるように重なった。

「って、あああ、そうじゃなくて！」

思い出して真っ赤になりながら、ぶんぶんと頭を振って想像したものを追い払おうとする私を、通り過ぎる人が怪訝そうに見ていく。もおおっ、ライトのせいで、鈴が鳴るたびに思い出しちゃうじゃない！

赤面しつつ、早足に総務部に書類を提出して、私は幾分ゆっくりした足取りで廊下を戻る。

チョーカーは、ギルバート対策、なんだそうだ。

もしかして、また追跡の魔法とかかけてあるのかも知れない。

もう一度ライトに翻弄され、さすがに指先一つ動かせない私を、ベツドの中で腕に閉じ込めたまま、彼は私の髪を弄ぶ。

「城の中で騒ぎを起こしてまずいのは向こうの方だからね。専属侍女って結構地位高いし、城の中じゃ、専属相手にもめるのはご法度とまで言われてるから、普通はあんな騒ぎが起るはずがないんだけどね。お互い何も知らずに騒ぎになったんだろうから、帰ってからアーシェがどういう立場なのか、父親辺りに聞いてるだろ。そうになると、次からは不用意に人前でアーシェを捕まえるようなことはしないと思うよ。…ま、だからこそ、のお守りなんだけどね」

意味がわからなくてライトを見上げると、困ったように笑う。

「人前で手が出せないとすると、物陰で強引に事を運ぼうとするかもしれないからさ。そのための保険みたいなもの。…だけど、こうまで無邪気なもの困り物だな」

「事を運ぶって、なんで？」

「いまいちぴんと来ない私が悪いのかな。だって、未だにギルバートが私を好きだなんて思えないんだもん。私にとっての彼の記憶は、苦いものばかりだから。」

「けど、ライトは笑って、

「まあまあ、いいから、つけてて。かわいいし、似合うよ」

そう言って、優しく髪をなでてくれた。それだけで、思い出した苦

い気持ちは、吹っ飛んだ。

確かに、かわいいデザインで、気に入ってる。アクセサリーなんて生まれて初めてもらったし。何より、ライトからのプレゼントって事実が、本当に嬉しくて。

指先で、丸い鈴を探る。

りん、とかわいらしい音に、頬が緩んだその時。

「見つけた」

ぼそり、とくぐもった声に、反射的に振り向いて、そして。ざわり、と全身に鳥肌が立ったのがわかった。

進行方向からは柱の陰になる所に立っていた彼は、粘つく笑みを貼り付けて、にいつと笑う。

「まったく、面倒だよなあ、専属侍女なんてさ。うかつに手も出せやしねえ。オヤジに余計なことするなって怒られちゃったよ」

腕を組んで柱に寄りかかって見せる。芝居がかったその仕草が、私は昔から苦手だった。

「専属侍女なんて、めったになれるもんじゃねえんだろ？　ここにいる限り、お前は俺よりも身分も権力も上って、なんか納得いかなえよなあ」

忌々しそうに吐き捨てて、彼…ギルバートは、私を妙に熱のこもった視線で睨み付ける。

そんなの知るか！　なんで納得いかないのかもわからないし理解し

ようとも思わないし、どうせ聞いたところで、こいつの思考回路なんて理解できないんだから、聞くだけ無駄。

私が睨みつける視線を、ギルバートはへらへら笑いながら、鼻先で弾き返す。ああ、ムカツクったら！

「全く、親なしの孤児様が、随分出世したよな。やつぱさあ、お前が何かしたとしか思えないんだよな。…もつとも」

ギルバートが、あざけるように笑った。

「お前、顔と体くらいしかないもんな。あの男にでも気に入られたのか？」

「どの男かは知らないけど、へんな言いがかりはやめて！ ちゃんとパシフィスト教会の推薦状を持って、就職を許可されてるんだから！ 正規の手続きを踏んでるし、後ろ暗いことなんかないわよ！」

言い返した言葉さえも、ギルバートは鼻で笑う。どうしてここまで言われなきゃならないのよ！ 私が何をしたっていうの！？ そんなに嫌いなら、放っておいてくれればいいのに！

にいつと勝ち誇った笑みを浮かべるギルバートの顔が心底憎たらしい。

「なるほど。で、それを信じる人間は、どれくらいいる？ 城のなかつてのは、厳然たる貴族社会だろう？ どちらにしろ、お前は異端だ。騒ぎを起こして、本当にまずいのは、俺か？ お前か？ どっちだと思っ？」

悔しくて悔しくて、私はきつく唇をかんた。

そうなのだ。ライトは専属侍女最強みたいなことを言うけれど、実情は決してそうではない。

ギルバートの言葉を認めたくはないけれど、確かに、私は貴族出の侍女さんたちに快く思われていないから。

ぼつと出の、どこの馬の骨ともしれない平民が、今まで誰も座れなかった、『ライトリーク・ウォーロック』の専属侍女の座に座ったんだから、当然のことだと思う。

廊下で行き会った時に、わざとぶつかられたり、足を踏まれたり、嫌味を言われたりすることだって珍しくない。

ここでまた騒ぎになんかになったら、きつと話を大きくして騒ぎ立てるだろう。今度こそ、騎士団やライトに迷惑がかかってしまう。

だけれど、本当に、こいつは…！ 私の弱いところばかりを探し出す。そして、それを武器にすることをいとわない。

それが、どれだけ卑怯で、ずるくて、私を傷つけるのかわかりながら。

「理解してもらえて何よりだ。どこか邪魔の入らないところで、決着をつけようか」

ゆらりとギルバートが近づく。反射的に後ずさった私の手を、ぐつと強くつかんで、彼はにやりと笑った。

「さあ、…行こうか？」

騎士様の専属侍女・4（後書き）

男にはわからない女の世界があるんですね。めんどくさ。

地位と権力はあっても、使い方がわからないアーシェちゃん。

しかし、ギル……。そんなことしても、ますます嫌われるだけだよ？
かわいそうな子。

騎士様の専属侍女・5

「痛い、離して！」

「うるさい！ 離したら逃げるだろ！」

「当たり前じゃない！ 人呼ぶわよ！？」

「呼ぶな！」

「だからっ…引つ張らないでってば！」

ぎゃあぎゃあ言い争いをしながら、あちこち引つ張りまわされた挙句に、たどり着いたのは城の裏庭だった。

全くもう、不案内なくせに、勢いだけで歩き出しちゃって。あつちきよろきよろ、こつちうろしろしながら落ち着く場所を探しているらしいとわかったら、ばかばかしくなって、ついつい衛兵も従者も呼ばずに来てしまった。

うーん、だけど、さすがに人がいないのはまずい…かも？

人気のない壁際に放り出すように手を離される。痛む手首をさすりながらきつとギルバートをにらむと、一瞬息を呑むような表情をした彼は、けれど、再び憎々しげに私をにらみ返してくる。

「あいつ、お前のなんなんだ」

「だからさつきから誰のことよ、あいつって」

「この間、邪魔した奴だよ！」

「ああ、ロベル様のこと？ 私の…雇い主のお兄さんだけど」

苛立たしげなギルバートの言葉に、思わず『好きな人の』と口走ってしまいそうになって、あわてて言い換える。そんなことを言ったら、また何を言われるかわかったもんじゃない。それでも、ギルバ

ートは胡散臭げに私を見る。

「それにしても随分親しげだったじゃねーか。肩なんか抱かれてたし」

「あれは事情があるの！ 大体、ロベル様は結婚してるし、そういうんじゃないわよ。下世話な想像しないで！」

きっぱりと言い返せば、ギルバートの顔が赤くなる。憎々しげにゆがむ顔は、学院で女の子にキヤーキヤー言われていた面影もない。

「大体、私のことが嫌いなら、放っておいてくれればいいじゃない！ それを、わざわざこんなところまで押し付けてきて、どういうつもりなの！？」

と、長い間抱えていた疑問をぶつけると、ギルバートが、一瞬口ごもった。

学院にいたときから、ギルバートはいつも私を眼の敵にしていた。

無視したり、仲間はずれにしたりなんてかわいいものから始まって、靴や教科書を隠されたり、悪口を言われたり。それに彼の取り巻きが追隨して、いたずらはだんだんエスカレートした。

そのうち、私が奨学金をもらっていると知ってから、

「授業料まで恵んでもらわなきゃ勉強も出来ないのかよ」

なんて言いがかりをつけられるようになった。すると、今度はブライドの問題か、今まで当たらず触らずだった貴族の子供までもが同調するようになった。

奨学金は、学年上位5人までしかもらえない。家庭教師までつけているのに、私にかなわないことが悔しかったのかもしれない。

そうして、クラス全体を煽って、私を孤立させたのはこいつだ。

ライトは、ギルバートが私を好きだとか変な事言ってたけれど、不本意ながら長い間こいつと机を並べてきた私にはわかってる。こいつは絶対私を嫌ってるはずなんだから！

「べつ、別に追いかけてきたわけじゃないぞ！　なんでこんなところに紛れ込んでるのかを確かめたかっただけだ！」

素直にお城に勤めてるのが気に入らないって言えばいいのに。言い訳なんかしなくたって、あんたの言いたいことぐらいわかってる。

「だから前にも言ったじゃない、パシフィスト教会の推薦状持てれば、お城にも勤められるって。調べればすぐわかるって言ったのに、調べもしないで言いがかりつけるのはやめてよね！」

「専属侍女は貴族になるもんだろ！　そこにお前がいるってのが怪しいんだよ！」

「貴族じゃなり手がなかったの！　どうしても女手が欲しいって言われて、ちょうど私がいただけ！　王軍にだって専属侍女なんかいないわよ。騎士団も王軍も、仕事を手伝わされるから貴族のお嬢様たちはやりたがらないもの。たまたま騎士団から専属侍女にならないかって声かけられただけで、誰にも根回しなんかしてないし、できるような相手もないわよ！　大体ね、あんたが言うとおり、ここには貴族のきれいなお嬢様がたくさんいるわけ。それこそ、孤児院出の子供を相手にするような人なんか、いるわけないでしょ！　？」

うん、嘘は言っていない。ライトに計られたって所はだまるところ。公爵家が絡むとなると、またうるさそうだしなあ、こいつ。

ああもう、まだ仕事があるのに、ほんとついてない。

ため息をつきながらじろりとらむと、なぜか一瞬、彼が引いたように見えた。

「前から聞きたかったんだけど」

「な、なんだよ」

「なんで私の就職を邪魔したわけ。私が気に入らないなら、邪魔して無職にした時点で目標達成でしょ？　それなのに、なんでバレン

シユタイン商会に入れようとするの？ 正直胡散臭くて行く気にならないから断ったけど、何か理由でもあるの？」

と問いかけた途端、ギルバートの視線が泳いだ。

「べつ、別に理由なんてない！ お前を俺の下でこき使ってやりたかったただけだ！」

そこまで焦りながら言い訳するほどのことかなあ？ ていうか、卒業してまでいじめたいとか、どれだけ私が嫌いなのもって話じゃない？ 私だったら、目の前から消えてくれたほうがすっきりするんだけどな。それともなにか、ストレス発散の為の道具にでもしたいの？

「あのねえ…。あんた、そんなに私が嫌いなくせに、どうしてほっといてくれないのよ？ こっちはもうあんたとは縁を切りたいの。せつかく平穏な生活を手に入れたんだから、お願いだから邪魔しないでよ…」

本当に、心底しみじみとため息交じりに告げた途端、ギルバートの顔が一瞬で怒りの形相に変わった。

「うるさい、うるさい！ 孤児の癖に！ 孤児なら孤児らしく、施しを受けりゃいいだろ！？ 黙ってうちの店に来ないからこんなことになったんだろうが！ こっちがわざわざ就職させてやるって下手に出てやってるのに、いい気になりやがって！」

…だけど、その一言が私に火をつけた。

何よ、孤児孤児って！ 両親そろってることがそんなに偉いのか！

それはあんたの手柄なのか！！

「ええ、そうよ、孤児よ。それがどうしたの？ 私が親を殺したわけじゃないし、親が悪いことをして殺されたわけでもないわ。私が赤ちゃんのうちに事故で二人とも死んじゃったただけなのに、それは悪いことなの？ 孤児の何がいけないのよ！ 私は両親の顔も知らないけど、二人に恥じないように生きてきたつもりだし、二人の分

まで生きるって決めてるの。それをあんたにどうこう言われる筋合いなんかないし、あんたには関係ないわよ！ ほっというて！！」

怒りに任せて言い放った途端、ギルバートの顔がくしゃりとゆがんだ。

…まるで、泣き出す寸前の子供のように。

一瞬それに気をとられてギルバートの手に気づくのが遅れた。ぐつと両肩を掴まれて、強く食い込む指先が鈍い痛みを伝える。

「った…！」

「どうしていつもいつもお前はそうなんだよ！ どうして俺を見ないんだ！ 昔からずっと…お前は誰も見ていないような顔をして、俺のことも眼中になかったんだろ！？」

「意味わかんない…っ、なんのことよ！」

ギルバートがうつむいた。表情は見えないけれど、肩に置かれた手が、万力のように食い込んでくる。

「痛い…っ。離して…！」

「どうして…なんでだ…！ お前は孤児で、弱くて、俺には何もかなわなくて、それなのに絶対に俺の言うなりにならない。なんでなんだよ…！」

ぼそぼそと平坦な声が、逆に怖気を走らせる。

がばりと上がった顔は、どこかが焼ききれたような印象で。

「お前が頼めば、お前が俺に跪いてすがってくれば、俺は何でも言うことを聞いてやったのに！」

「った！」

どん、と勢いよく石壁に押し付けられて、一瞬息が詰まる。覆いかぶさるように体を寄せられて、竦んだ。

「本当は孤児院なんかどうでもいいんだ。アーシェ、お前さえ手に入れられるなら。俺のところに来いよ、悪いようにはしない」

どこか必死な色を浮かべる瞳を、でも、私は受け入れることは出来ない。

「嫌よ。私は物じゃない。奴隷じゃない。言うことを聞かせられるなんて、冗談じゃないわ！ 私は私の意志でここにいます。あんたの言いなりになんかならないから！」

「そうかよ……！ だったら力づくで連れてただけだ！ 来い！」
「やだ、離してよっ！」

ぎりぎりと締め上げるくらいに掴まれた手首が痛い。足を踏ん張って、引きずられるのを懸命に堪える。

すると、不意に引つ張る力を緩められて、思わず後ろに倒れそうになった。すかさずぐいっと引き寄せられて、今度は肩が抜けそうに痛む。それを全く気にもせずに、ギルバートはまた私を石壁に押し付けた。

「じゃあいいさ。その代わりに、キスさせる。そしたら今日は引いてやる」

「嫌よ！」

にやりと笑われて、全身が一気に栗立った。

覆いかぶさるように体を押し付けられて、私はか細い悲鳴を上げた。心の中、ただ一人を思い浮かべながら。

騎士様の専属侍女・5（後書き）

ギル、自爆w

ま、お約束ですね。

次回も王道展開が待っています。ご都合主義万歳。

騎士様の専属侍女・6（前書き）

お待たせいたしました。やっと修羅場を潜り抜けました。
またのんびり更新しますのでよろしく^^

騎士様の専属侍女・6

こんな、こんなの、やっぱり好きな相手への態度じゃない！

相手への思いやりなんかかけらもない、一方的で乱暴な好意を押し付けられても、私には絶対に受け入れられない。

顔を寄せられて、反射的に両手で押し返した。抱きすくめられて、必死に暴れた。

捕まえようとする腕に爪を立て、追い込もうとする足にかかとを落とし、視線をあわせたくなくて首を振る。

ごつごつした石壁に押し付けられた背中が痛む。でも、誰が言いなりになんかなるもんか！

「いや… あっ！」

思わず上げた声に、いらだったように、『チッ』という舌打ちが聞こえて、泣きたくなる。

何でここまでされなければいけないの？ 本当に、これがあんたの

『好き』って言う気持ちなの？

嫌だ。嫌だ。絶対いや！！ こんなことされて好きになんかなれない！！

「いい加減諦めろよ！」

「痛っ！」

痺れを切らしたのか、力任せに顔を押さえられて、キスされるかと思ったその時。

「うわっ！」

ドカッという衝撃音、悲鳴と共に拘束がなくなって、私はそのままへたり込んでしまう。

私の前に、無限の壁のように立ちはだかる背中。

そして、私をすくい上げるように抱き上げた腕は、やっぱり。

「ライト！」

叫んで、私は両手でライトの首にしがみついた。

「怖い思いさせた。ごめん」

走ってきたのか、息を切らしながら、ライトが私を強く抱きしめる。やっぱり、やっぱり来てくれた！

さっきまでの恐怖と、安堵と愛しさで、涙腺が決壊する。

しがみつく手が震えてる。怖かった。魔女に捕らえられた時には、これ以上怖いことなんかないって思ってた。だけど。

あの時のように、命の危険に感じる恐怖とは別物だった。ライト以外の男の人に無遠慮に触れられることが、こんなに怖いことだったなんて、知らなかった。

それに引き換え、今私を包む手も体も、安心したりどきどきさせたりはするけれど、私を傷つけたりしないってわかってる。

同じ男の人の手なのに、どうしてだろう？

「大丈夫、もう触らせない」

その言葉には、絶対の安心感がある。私はライトの肩に顔を埋めたまま、小さくこくりとうなずいた。

「いつて…。何するんだよ！ くそ、なんだよお前、誰だ！」

「騎士団の副団長様だよ。何するも何も、それはこっちのセリフだ。人のものに手を出しておいて、よく言う」

くっ、と酷薄そうな笑みを浮かべ、ライトが咳き込みながらわき腹を押さえるギルバートを見下ろした。

「ったく、成人してるつてのに、中身はてんでガキのまんまだな。駄々こねて欲しい欲しい騒いで無理矢理手に入れようとしたって、自分のものになるわけないだろうが。相手はオモチャじゃない、人間だ。思い通りにならないからってかんしゃく起こすなよ。おかげ

でアーシェが泣いただろ。どうしてくれる？」

「なんだと！？ そいつが悪いんだ！ 言うことを聞かないから！
アーシェ、こっちに来いよ、そいつから離れる！ それは俺のだ

！！」

いきり立ったギルバートが詰め寄る。怯えてしがみつく私を、ギルバートから遠ざけるようにしながら肩先で彼を止めて、ライトは鮮やかに笑う。

触れたら切れそうな、伶俐な刃をまとして。

それに怯みながらも、ギルバートはなおも私に手を伸ばす。

迫る手が、魔女の家に捕らえられていた時の記憶とフラッシュバックする。

女の人じゃないのに、私を捕まえようとするその手が怖い。

ざわっ、と全身に鳥肌が立って、私は目の前のぬくもりにすぎる。

「…やだっ」

子供のようによろめくすがみつく私に満足そうに笑って、ライトは安心させるように頭を撫でて、耳元にキスをくれる。

この人は、私に危害を加えない。守ってくれる。大丈夫。

きつと、すり込みたいなものだろう。でも、優しい手とキスに、私の心は否応なく震える。

その親密さを目の前で見せつけられたギルバートは、みるみる怒りの形相に変わっていく。

「やめろっ！ そいつに触るな！ その女を渡さないと、どうなるかわかってるんだろうな！？」

「お前のものでもないくせによく言うよ。どうなるかなんて知るか。

城への物流でも止めるってか？ やれるもんならやればいい」

今まで私や、周りの人には効いていたはずの言葉に、笑みを浮かべるライトはちつとも動じない。自分の武器を恐れない相手に、ギルバートが怯む。

「こっ、孤児院がどうなってもいいんだな！」

悪あがきのように放たれたそのセリフに、腕の中の私がびくりと震えたのをどう取ったのか、ライトの雰囲気が一気に冷えたものになった。

「どうにもならない。お前は孤児院に手出しなんか出来ない」

「何！？」

「父親の下で、平の店員と一緒に経理の修行中の癖に。物流に干渉なんかできないんだろ？ アーシェが何も知らないからって、吹いたもんだな」

半笑いの一言に、私はがばりと顔を上げた。ライトは私と視線を合わせて、安心させるように優しく笑って頬を撫でてくれる。

反面、ギルバートは、傍から見てわかるほどに顔色を失っていた。

どういうことなの？ ギルバートには孤児院に手を出す力はないの？
じゃあ…今まで、私が必死に我慢してきたのは…する必要なんかなかったってこと？

うろたえたように忙しく視線をさまよわせるギルバートを、私はと呆然と見るしかなかった。

騎士様の専属侍女・6（後書き）

ライトに歯が立たないギル君でした。
今回ちょっと短いです。ごめんなさい。

騎士様の専属侍女・7

「し、知って…！」

「そんなの、ちょっと調べりやわかるだろ。バレンシユタイン商会は、父親の店であってお前のものじゃない。お前はただの修行中の商会長の息子であって、何の力も持っていない。親の名前と店の看板使って女掠め取るうだなんて、随分とせこい男だよなあ」

「お、俺は…俺はっ！」

ライトに撃破されるギルバートから、続く言葉は出てこない。

じゃあ本当に、今までの脅しは、単にはったりだったって事？

孤児院がどうにかなっちゃうなんてありえないってこと？

全部全部、ギルバートの嘘って事？

未だ信じきれない私を、ギルバートの狼狽振りが裏付けてくれる。

「大体、アーシェの性格知ってる癖に、攻め方全然間違ってるんだよ。この子は逆境に燃えるタイプだ。虐げられたら全力で踏ん張るに決まってるだろ。いじめられて屈して膝付くような子じゃない。そんなことしたって反発するだけで、お前の物になんかならないって、なんでわかんないかなあ？ 自分ごまかして好きな女に嫌われて、全然気持ちも伝わってないのに、それ以上この子に手を出すつもりなら、こっちはそれ相応の報復をさせてもらうぞ」

「お、お、お前のものでもないくせに！ その女は騎士団の専属なんだろう！？」

ライトの余裕っぷりに、ギルバートが最後の悪あがきを試みると、ライトはこれ見よがしに笑って私を引き寄せて、頬にキスを落とすた。

「ああ、確かにこの子は騎士団所属の専属だ。正確には、俺の専属侍女だけだな。手放すなんてありえない。アーシェは誰にも譲らな

い。俺のものにお前がどうこう口出しするな」

「そ、それならお前が！ アーシエを縛ってるんじゃないか！ 無理矢理専属にしておいて、離れられなくしてるんだろ！？」

無茶苦茶な言いがかりだ。まるで駄々をこねる子供のように、ギルバートがわめく。

その瞬間、ライトの顔が艶めいた笑みに変わった。

…触れたら切れそうな、怜悯な刃をまとして。

「お前と一緒にするな。お前の方こそ、就職でアーシエを釣って、自分の手の届くところに囲い込もうとしてただろう。縛ってるのは認めるよ。だけど、俺もアーシエに縛られてる。今だって、見りゃわかるだろ、俺が捕まえてるのか、アーシエがしがみついているのかの違いくらい。お前のように一方的じゃない。残念だったな」

すぐるようにライトにしがみついている私と、その私をその腕に抱いて揺ぎ無く立つライトを見て、ギルバートはわなわなと唇を震わせる。

「なんでだよ…。どうして俺のものにならないんだ…！」

だけど、本当に聞き分けのない子供のように、尚も理解も納得もしてない一言に、私もカツと頭に血が上った。

「どうしてって、あんた本気でわかってないの？」

ライトに守られている安心感が、孤児院は心配ないとわかったからか。今までずっと我慢してギルバートに言えなかったことが、抑えきれずにこぼれ出る。

「今まで、あんたが散々私にしてきたことは、私にとっては単なる嫌がらせよ。学院にいたときから、私がどれだけ傷ついてきたと思うの？ 孤児院がどうなってもいいのかって、小さい子達はどうなってもいいのかって、あんたはいつもそうやって私を脅してきたわ。」

そうやって弱者を盾に取って脅迫するなんて最低よ！ 教科書や、大事な物も壊された。それを悲しんで、我慢してる私を、あんたは笑ったわ！ それを何年もされてきて、今さらどうやってあんたのものになれって言うの？ その上、どうしてこんなことまでされなきゃいけないの！？ もう嫌。顔も見たくない。大っ嫌い！ もう帰って！」

激情のままに口からこぼれた言葉は、我ながらひどいと思う。だけど、私はこいつを許す気にはなれない。そこまで心が広くない。学院での思い出は、必死に勉強したこと。それ以外は楽しかったことなんか思い出せないくらい、私はずっと耐えてきたんだから。こいつの嘘に長年踊らされてきたんだと思えば思うほど、悔しくて情けなくて、涙が出てくる。

「あ、アーシェ……」

私からありったけの悪意をぶつけられたギルバートは、ライトに抱かれたままぼろぼろ泣く私に、放心したように手を伸ばす。

けれど、その指先が届く寸前、それはライトに阻まれた。

「アーシェは俺のだ。気安く触れるな」

雷光のように鋭い言葉に、びくりと慄いた手が、力なくゆっくりと落ちて行った。

「なあ、もういいだろ？ 諦めて、この辺で引いとけ。お前はやり方を間違えた。それも、何年も。もう取り返しがつかない。これ以上アーシェに嫌われたくなければ、手を引け」

諭すようなライトの声に、ギルバートは、うなだれたまま拳を震わせる。

「嫌だ…そんなのは嫌だ…！」

駄々をこねる子供のように、少しでも最後の時を伸ばすかように、

ギルバートは小さく呟き続けている。

だけれど、私の心は動かない。未来のことなんか知らない。今、私はギルバートという存在を完全に拒絶していた。

「今回のことを、少しでも悔やんでいるのなら、今後二度と繰り返すな。同じことを繰り返せば、それこそ二度とアーシエに顔向けできなくなる。もう二度と顔を見れない覚悟でいろ。その上で、アーシエにも、自分にも恥じるようなことをするな。そうすれば、この先いつか、またこの子の顔を見られる日が来るかもしれない」

そんな日なんか、来なくたっていい。二度と目の前でこの顔を見たくない！

拒否の意味も込めて、しがみついたライトの方にぎゅっと爪を立てると、ライトがなだめるようにとんとんと背中を叩く。

「今のお前が、アーシエに謝ることができるとは思えない。だが、何年かかってもいい、本当は好きだった女にこれほどまでに嫌われるような己の所業を省みる。そして、いつかアーシエに謝れ。俺はそれを見届ける。忘れるな」

それはきつと、私にも言えること。

今は何もかも受け入れられない。だけれど、許す許さないは別にしても、いつかギルバートに謝罪はさせてやれって、きつとライトはそう言ってる。

私だって、ライトの言葉に今は素直にうなずけない。だから私も、何年かかっても、ギルバートとのことに折り合いをつけるべきなんだろう。

「今後も城に来るか来ないかは好きにしろ。ただし、もし父親と登城したとして、仕事以外のことで城内をうろつくな。アーシエを探

し回るのもダメだ。廊下で行き会っても、接触を禁止する。期限は、アーシェが解禁するまでだ。騎士団副団長、ライトリーク・ウォーロックの名において、専属侍女アーシェ・グレイの命令としてこれを実行する。今後、お前が登城したときには監視が付けられる。アーシェに接触を試みようとするれば、従者及び衛兵によって城外に退去させられることになる。これは明日から城内全域に適用とするから覚えておけ」

そう言い捨てて、ライトは私を抱いたままギルバートに背を向け、歩き去った。

ライトの肩越し、振り返った視線の先に、がくりと草の上に膝をついて崩れ落ちるギルバートの姿が見えた。

薄暗い廊下の片隅、目立たない階段下に連れ込まれて、ライトの腕から降ろされて抱きしめられた。

「遅くなって悪かった」

「うっん、きてくれてありがとう。だけど、お仕事は良かったの？」

「まあ、こうなることを予想して、段取りはつけてたから心配ないよ」

そういつて、ライトは赤いチョーカーを指でなぞる。

思わず息を飲むと、小さな鈴がりん、と鳴った。

「そうなの？　そういえば、このチョーカー、やっぱり魔術をかけてあるの？」

「追跡の術をかけてあるよ。だから、速攻で戻ってきた」

「ごめん、私、迷惑ばかりかけて。いつもライトに甘えてばかりいる。もつとちゃんと一人でできるようになりたいのに」

あんまりにも情けなくて、私はライトと目を合わせられずに、唇をかんでうつむく。

「いいんだよ。それに、むしろ俺にとってはその方がいいし」

「え？」

ど、どういうこと？ 私ができない方がいいって言うの？

混乱してライトの顔を見ると、どこか悲しげに笑ってこつんと額をあわせてくる。

「俺はさ、アーシエをダメにしたいんだ。俺がいなきゃ何も出来ない女の子にしてみたい。いつでも俺の傍で、俺のためだけに存在する女の子になってほしい。俺から離れられなくなればいいって思ってる。それって、根本はあいつと同じで、アーシエの意思を蹂躪する想いだ。君はそんなこと望んでないし、俺もそんなのはダメだってわかってる。だから歯止めをかけてるけど、でも、どうしても行き過ぎてしまうみたいだ。だからアーシエ、俺にダメにされなくなかったら、頑張って」

「どうしてそんなこと言うの？ 私、何もダメになんかになってないよ？ どうしたの、何かあった？」

ライトが突然こんなことを言い出すなんて、おかしい。いつものライトじゃないみたいだ。

どこか危うさをのぞかせるその悲しげな笑顔は、前に見せてくれた、弱さを吐き出すときの顔と一緒に、たまらなくなる。

「うん、多分、あのガキに当てられたんだと思うんだけどね。束縛したがってるのは一緒だからさ。俺もあのガキと大差ない」

「ちがうよ！ 私はライトのものだけど、ライトも私のものの。一方的じゃない、あいつと一緒になんかじゃない！ 私は、ライトの傍にいたい。ライト以外要らないの！」

厚い胸にすがりついて必死に言い募った。

私の気持ちもわかってほしくて、普段はなかなか言えない本心をぶちまける。

「っやバ…。起ちそう」

不意に不穏な一言と共に腰を引き寄せられた。くい、とあごを掴んで軽く上げさせられて、わずかに細くなった瞳に明確な情欲の火を見る。それにおののく間もなく、唇が重なった。

「んう…！」

遠慮なく舌を絡められて、喉の奥で悲鳴がくぐもった。

わざと腰を押し付けられて、はつきりとわかるその堅さにさすがにうろたえる。焦らすように揺らされて、必死に唇を引き剥がした。

「やつ…！こ、こんな時に何やってるの！？だめっ、もう仕事戻んなきゃ！」

「そんな今にも襲いたくなりそうな顔で返したくないな」

とろりと溶けそうな瞳で、淫靡な笑みを佩いたままのライトに覗き込まれて、うなじを逆撫でられたようにぞくんと戦慄が走る。

へっ、下手するところで食われるっ！

「だめだめ！顔なんて戻るまでに直るわよっ！私お仕事あるもん、もう帰る！」

「しょうがないなあ。じゃあ俺も戻るよ」

「しょうがないのはどっちだーっ！」

ぎゃあぎゃあと言い合いながら去って行く私達を見る人影があったことなど、気づきもせず。

「今後も城に来るか来ないかは好きにしろ。ただし、もし父親と登城したとして、仕事以外のことと城内をうろつくな。アーシエを探

し回るのもダメだ。廊下で行き会っても、接触を禁止する。期限は、アーシェが解禁するまでだ。騎士団副団長、ライトリーク・ウォーロックの名において、専属侍女アーシェ・グレイの命令としてこれを実行する。今後、お前が登場したときには監視が付けられる。アーシェに接触を試みようとするれば、従者及び衛兵によって城外に退去させられることになる。これは明日から城内全域に適用とするから覚えておけ」

最後通牒を突きつけられて、ギルバートは力なく芝生の上に崩れた。どうして。なぜ。俺ではだめだった！？

その理由を認めることなど出来ない。アーシェにはつきりと言われたはず。

けれど、まだ諦め切れなかった。顔を上げれば、裏口に消える、騎士団副団長だという男の背中。反射的にそれを追って、入口をくぐる。

どこからか聞こえてくる低い声を頼りに覗き込んだ階段下では、ライトリークに抱きすくめられているアーシェがいた。

「うん、多分、あのガキに当てられたんだと思うんだけどね。束縛したがってるのは一緒だからさ。俺もあのガキと大差ない」

「ちがうよ！ 私はライトのものだけど、ライトも私のものなの。一方的じゃない。あいつと一緒になんかじゃない！ 私は、ライトの傍にいたい。ライト以外要らないの！」

言いきられた言葉にショックを受けるまもなく。

ぼそりと何かを呟いた男が、アーシェに重なった。

広い背とマントに隠れて見えないが、あいつはアーシェに不埒なことをしているのだろう。それに煮えくり返りそうになって…アーシェの甘い声が鼓膜を焼いた。

「んう…！ あ…んっ」

明らかに応えているその声。

なぜ、どうして俺じゃない。その男なんかと。アーシェ、アーシェ、アーシェ！！

そのあとの二人の話など、耳に入らなかった。

絡めるように繋がれた手、怒って見せながらも騎士からはずさない視線、何より、アーシェと出会ってから一度も見たことのない、花開くような笑顔。

もう二度と、手に入らない。

階段下から戻っていく二人。アーシェは気付かなかったようだが、男がちらりとこちらに目を向けた。

けれど、何を言うでもなく、するでもなく、路傍の石でも見るように無関心にふいつと反らされるそれに、今度こそ叩きのめされた。彼らには、自分のことなど眼中にないのだと。

そう、ライトリークだけでなく、アーシェもまた。

その目に、一切自分を映してはいない。

絶望に、ギルバートは今度こそ崩れ落ち、廊下に響く嗚咽は、しばらくの間続いていた。

騎士様の専属侍女・7（後書き）

ギル君、完膚なきまでにやられてしまいましたね。
そして、やっぱり軽く病んでるライト君であります。
…どうしてもこいつも困った子たちだな…。

騎士様の専属侍女・8

「もうっ、離してっば！」

すぐに戻るつもりだった私の手を捕まえて、のんびりと廊下を歩くライトと、なんだかんだ言っ流された私。

その手はライトの一回り大きなそれからめ捕られるように繋がれて、二人の間でゆらゆらと揺れている。

「まあまあ。いいじゃん、ちょっとぐらいゆっくりしたって」

「だからっ！ お茶出しを頼まれてるんだってば！ もう次官様が来てるかもしれないのに！」

にこにこ手放して機嫌のいい笑みを浮かべて言うライトの指は、どちらかといえばゆるく繋がれている。

私はといえば、ぷりぷりと怒って見せながらも、なんだかんだ言ってさっきまでのごたごたが尾を引いていて、その手のぬくもりを手放しがたかったのは間違いない。

…無理してライトを振り払ってでもすぐに戻るべきだったと、私はすぐに後悔することになった。

なぜなら、西棟の廊下まで戻ったところで、団長室のドアが空いたのが見えたから。そして、総務部次官様が出てくるのを確認して…血の気が引いた。

「ヤバイ、お茶入れるはずだったのに…っ！」

そこでようやくライトの手を振り切って、すれ違う次官様に礼もそこそこに、団長室に飛び込んだ。

「レイド様、すみません…っ！ 私っ」

途端に投げかけられた眼光に息を呑み、私の唇は凍り付いてその先の言葉をつむぐことが出来なかった。

鋭い三白眼がひたりと私を見据えている。

「俺は、お茶を、と頼んでいたはずだな。連絡もなく、なぜ遅れた？」

「それは、その…トラブルで」

「トラブルの内容は」

「ええと、あの…先日と同じで、バレンシュタイン商会の息子と…ちよつと」

歯切れが悪い私の回答を、レイド様は目を細めただけで黙らせる。当たり前だ、職務放棄した自覚はある。反論の言葉なんか、私は持ち合わせているわけがない。

「そのために専属侍女としての権限があるのだろつ。ライトに説明されなかったか？」

「したよ、ちゃんと。あの日の夜にね」

ライトがにこりと笑んでうなずく。

そうだ、あの時はなし崩しに部屋に持ち帰られて散々な目にあっただけだ、その後夕食を食べてから、専属侍女の就業規約や、侍女教育の時に使った王宮侍女教範をおさらいしてた私に、専属侍女の権限や、してもいい事、出来ることも、ちゃんと話してくれてた。頭には入ってる。でも…私、本当にわかってた？

ライトが、青ざめていく私の頭を撫でて、ふつと目を細めた。

それはどこか満ち足りたような、でもほの暗い翳りを伴って、ぞくりと寒気を感じさせる。

「アーシェが今まで育ってきた環境と城（こ）はあんまりにも違いすぎる。それに、この子は平民で、人に命令することに慣れていない。説明してもピンと来てないような顔してたから、頭には入っても多分理解はできないだろうなって思ってたよ。だから、一通り説明しただけでやめた」

しれつと言つライトにわずかに眉を険しくしただけで、レイド様は私に視線を向ける。

私はいえ、そんなふうに思われていたことと、実際そうだったことをここで始めて自覚して、目の前が真っ暗になった気がした。私、最初から失格だったってことなの？　ライトには、最初から当てにされてなかったの？　侍女としての信頼は、されてなかったってこと？

…そうなんだろう、とは、頭の片隅で理解できたけれど、ショックが大きすぎて頭が回らない。

「アーシェ、わからない、出来ないでは話にならん。専属侍女は権限を持つているが、それに伴って義務も発生する。すなわち、今回のように、業務に支障をきたす障害の排除くらい、一人で出来ないようでは専属侍女は務まらんということだ。お前はどうか。城に勤める専属侍女として、プライドを持って仕事をしているか？　仕事の邪魔をするものを、全力で排除しようとしたか？　それは、専属侍女としての能力だ。ひいては、お前を専属にしているライトの評価にもつながる。それをお前は理解しているのか？」

私は、レイド様の言葉に何も言えず、唇をかねてうつむいた。私、全然わかっていなかった。

お城に勤めて、ライトの専属になって、みんなにかわいがられて仕事をするだけで満足してた。

ライトが甘やかしてくれることにそのまま甘えて、本当に必要なものは何も身につけていない。

さっきも。ライトがギルバートに命じたこと。

『今後も城に来るか来ないかは好きにしろ。ただし、もし父親と登

城したとして、仕事以外のことと城内をうろつくな。アーシェを探し回るのもダメだ。廊下で行き会っても、接触を禁止する。期限は、アーシェが解禁するまでだ。騎士団副団長、ライトリーク・ウォーロックの名において、専属侍女アーシェ・グレイの命令としてこれを実行する。今後、お前が登城したときには監視が付けられる。アーシェに接触を試みようとするれば、従者及び衛兵によって城外に退去させられることになる。これは明日から城内全域に適用とするから覚えておけ』

これって、本当は私が言うべきこと…専属侍女として言わなきゃいけないことだったんじゃない？

そして、一度引き受けたことは、たとえお茶出しと言う些細なことでも、完璧に遂行するのが侍女のお仕事。

私は…専属侍女として以前に、宮廷侍女としての意識を持っていなかった。侍女失格だ…。

私はレイド様に深く深く頭を下げる。

「すみません…っ。全然わかっていませんでした。『専属侍女』そのものを、理解していませんでした。すみませんでした！ 今後は気をつけます！」

バカだ…バカだ、私。本当に、ギルバートなんかにかまっている場合じゃなかったのに。この間、ロベル様だつてきちんと私に注意してくださってたのに。自分でちゃんとしなきゃいけなかったのに。全部台無しにした。

悔しい。情けない。孤児院のみんなや院長先生、シスターとも、頑張るって約束したのに、これじゃ何の意味もない。

レイド様の深いため息が、耳に痛かった。

…けれど、それは私に向けられたものではなく。

「ライト。お前、アーシェにどう話した？ 危機感なく話しただろう？ むしろ、余り印象に残らないように、表面だけなぞった話で終わっていないか？ アーシェは聡い子だ。きちんと話をすれば、理解できなくはないはずだ。どうなんだ？」

顔を上げれば、矛先を向けられたライトがなんだか曖昧な笑みを浮かべる。

「…まあ、そう取れなくもないような話し方はしたかな」

しれっと答えるライトに、レイド様の眉間のしわのため息がいつそう深くなる。

「それでアーシェがトラブルに巻き込まれて、対処する術も義務も理解できずにいるんだろう。おまえは自分の面子はどうでもいいと思っているだろうが、アーシェ自身の存在意義すら疑われることになりかねんぞ」

「うん、知ってる。それじゃダメなんだって事も理解してる。でもさ、俺がアーシェを専属にしたのって、今となっては城の中においておきたかったからってのが9割占めてるから。騎士団の仕事はツイでだから、正直侍女としての仕事なんか、どうでもいいんだよね」
自分の机に寄りかかってけだるげに腕を組み、なぜか妖艶な流し目をくねながら、ライトは到底認められない言葉で、私を撃ち抜いた。

そういうことか。

ライトの大元の本音はそこにある。

「城の関係者でなければ、城の中で寝泊りできない。俺はいつでもアーシェをそばにおいておきたい。一日中でも部屋にいて、俺の望むとき、望むことを望むままにしたい。欲しい。…っていうことを半ば本気で考えるくらいダメ人間だからさ。だから今回も、トラブルが起こっても俺が助けるからいいやって思ってたよ」

今はレイド様の前だから、わざとこうしてへらへら笑いながら戯れるように口にするけど。

私をだめにしたい、ライトがいなきゃ何も出来ない女の子にしたい。そして、すぐそばに一生閉じ込めて、自分だけを見るお人形にしたい。

そう言いながらも、相反して、一人で立とうとする私を認めてくれているし、その後押しだつてちゃんとしてくれている。

てことは、ライトの中ではきっと、本音と理性が戦っているはず。ずっと私を甘やかしてばかりで、それに慣れちゃだめだと自分に言い聞かせてはいたけれど、私は本当のところを理解していなかったから、自分にかけるブレーキも甘かった。

おかげでまんまと溺れかけたじゃないかっ！ 私のバカ！

私がすっかりしなきゃ、ライトと共倒れになるしかない。ライトのそういうところは今すぐどうできるものじゃないってわかってる。だったら、せめて私は私でひとりで立てるようにならなきゃ。ライトの目をまっすぐ見返すと、ライトは張り付いたような笑みを消して、私を見る。

そこにどこか、不安の色を見て取って、ちょっと苦笑いしてしまった。なんだかまるで捨てられそうな子犬みたいに見えるんだもの。

「いいよ。そういうふうと思うのも、そうするのも、ライトの自由だからやめてとは言わない。でも、私はそれに負けたくない。せっかくここにお勤めできて、専属侍女になれたんだから、私は精一杯頑張りたい。だから、私はライトとも戦うよ。それは多分、立派な専属侍女になる為には、必要なことだと思うから。でも、だからってライトのこと嫌いになったりなんかしないからね！」

そう言い切れば、ライトの顔に、一瞬泣きそうな表情がよぎる。

それを瞬時に消し去って甘い笑みに差し替えたライトが、そのまま私を引き寄せて、ぎゅっと抱きしめた。

「アーシエ、ありがとう。愛してる」

「れ、レイド様が見てるからあ…っ」

「ほつとけよ、見せときゃいいんだよ。いい刺激になるだろ」

「は？　なんで？」

首を傾げる私に、ライトは意味ありげに笑うだけだ。レイド様を見ても、…いつもと顔は変わりなく怖いですけど？

とりあえず、『邪魔っ』とライトを引っぺがして、レイド様の机の前に姿勢を正して立つと、レイド様は手を組んでゆったりいすに座りなおした。

「アーシエ、よくわかったと思うが、こいつはこの通りで当てにならない。自分がしっかりするしかない。今回のことで、骨身に染みて理解しただろうがな。専属侍女の役割と義務については、エルサーナのほうが詳しい。このバカよりもずっと頼りになる。エルの空き時間に講義してもらえるように後で頼んでおくから、もう一度勉強しなおせ。いいな」

「はいっ！　本当に、すみませんでした！」

レイド様に頭を下げながら、少し理解できた気がする。

ライトが、専属侍女は強いって言ってた意味が。

今まで、私は孤児だし、平民だし、廊下をすれ違うほかの宮廷侍女に因縁つけられたり嫌がらせされても、騒ぎにしちやまずいと思つてやり過ごしてきたけれど、それがそもそも間違っていたって事だ。専属侍女は、そういう人たちよりも偉いんだ。舐められちゃダメ。貴族とか平民なんか関係ない。そういう人たちをねじ伏せないところではやっていけない。

『専属侍女』という存在は、時には専属となった雇い主の名代とも言える権限と義務を持っているのだから、専属侍女の『強さ』とは、『強くあらねばならない』ということなんだ。

それは、ライトという存在も含めて。

私は、もっといろんなものと戦わなきゃいけない。別世界に立ち向

かわなきやいけなかつたんだ。

もつとちゃんと勉強して、もつと立派な侍女にならなきや。

ライトの誘惑も、ギルバートみたいな外部の干渉も、すべて一人で振り払えるように。

エルサーナさんみたいな素敵な侍女になるには、すごく道が長そうだけど…。目標は高いほうがやりがいがあるってもんよね！

「では、きちんと理解できたものと思うことにする。さて、アーシエ。お茶をくれるか？」

「あ、俺も！」

「お前は後だ。アーシエに迷惑をかけたのはお前にも責任の一旦はある。こいつを精査して承認しておけ。それまでお預けだ」

しごく当然のように要求するライトをじろりとねめつけて、レイド様はその執務机にばさりと紙の束を放った。

「はア！？　つざけんなよ！　上司横暴！」

「…文句があるのか？」

レイド様に面と向かって暴言を吐くライトもライトだけど、レイド様、それとは比較にならないくらい怖いっ！

こ、声は静かだけれども！　ライトの冷氣とは違う、一刀両断されそうな威圧感をまともに食らって、ライトが珍しく黙り込む。

「…理解が早くて何よりだ」

「くっそー！！」

視線を元に戻し、静かに書類をめくり始めたレイド様に、ライトが子供のように地団太を踏む。

さすがに今回は後ろめたいところがあるから、仕方ないよね。

「お待たせしました、レイド様。お茶です」

「ああ、すまん」

レイド様の前にお茶を置くと、ふわりと立ち上る湯気に、わずかに

目元を和らげる。

「アーシエ、焦ることはない。エルも、侍女長補佐になるまでには随分と努力した。いきなりうまく出来る人間はいない。ゆっくり、自分のペースでやっていけばいい。ましてやお前には、余計な障害もついていることだしな」

「はい。ありがとうございます！」

すごい勢いで書類を捌いているライトをちらりと見やって、レイド様がお茶をすすする。

「アーシエ、終わった！ 俺にもお茶！」

「はい！」

ゆっくり、ゆっくり、一歩ずつ。

専属侍女の道は、まだまだ始まったばかり。

騎士様の専属侍女・8（後書き）

ちよつとほろ苦い結果に終わりましたが、アーシェちゃんは頑張ってくれてでしょう。

アーシェちゃん気づいていませんが、団長さんいつの間にか「エルサーナ」「エル」呼ばわりに変わってます。

それに気づいてニラニラするライト君だったりw

さて、次回ギルの結末で専属侍女は終了です。

もう一つの結末・前（前書き）

ギルサイドのお話。

もう一つの結末・前

昔は、体が弱く小柄で、いつもからかわれたりいじめられてばかりだった。

意地悪をされてもやり返せず、悪口を言われても涙を堪えてうつむくだけで、言い返す事も出来なかった。悔しかったけれど、怖くて何も出来なかった。そんな意気地のない自分が嫌いだった。

ある日、広場でまた初等学院の同級生に言いがかりを付けられていた日のこと。その相手が遊んでいたボールがギルバートの方に転がってきて、それを蹴った蹴らないの些細な言いがかりだったように思う。

いつものように、体の大きい相手になじられて、萎縮して何も言えずにいたり、そこにたまたま相手の父親が通りかかった。その顔には見覚えがあった。よく店に来ては、父と話してぺこぺこ頭を下げている雑貨屋の店主だった。彼は自分の顔を見えるみるうちに真っ青な顔になって、

「す、すみません、ぼっちゃん！ なにぶんにも子供のしたこと、お父上には内緒にしてください！ このバカにはもう金輪際こんなことはさせませんので！」

そう言って、逃げるように去って行った。その日以来、いじめられなくなった理由は、わからなかった。その代わり、周りに誰か近づいて来ることもなくなった。今度は、ギルバートは、独りぼっちなってしまった。

友達が欲しかった。仲間が欲しかった。みんなが遊んでいるのを、離れたところでぼつんと一人で見てるのは寂しかった。誰でもいい、話し相手が欲しかった。そばにいて欲しかった。

初等学院も後半になるころ、母の口うるささがどんどん増して行っ

た。

『お父様のようになりなさい』

それが口癖で、わずらわしかった。けれど、少しでも口答えしようものなら、ヒステリックにわめき散らすような女だったから、やはり何も言い返せずに、言いたいことも飲み込むしかなかった。

けれども父は、そんな自分に、母と反対のことを言う。

『自分の道は自分で切り開きなさい。私の後を歩きたいと思えば歩けばいい。だが、自分の道を行きたいのなら、思うとおりに生きればいい。私のようにならずともいいのだ』

だけれど、母親により、もはや父の後を追うしか許されないと思い込んでいた彼は、その言葉に恐怖した。

父親に、いらないと言われたような気がした。

母には追えと命令されているのに、どうでもいい、勝手にしろと言われたような気がした。すでに母によって敷かれた道から踏み外すことなど、恐ろしくて出来なかった。

中等部が上がった。その頃から、ギルバートは、自分の家の名前がとてつもない力を持っているのだと理解した。

学院に通ってくるのは、ある程度裕福な家の子供が多い。つまりは、バレンシュタイン商会と、なんらかの取引がある家ばかりだった。

少しでも反抗的な態度を見せる相手に、家の名前をちらつかせれば、相手は悔しそくに黙り込む。

そうして言うことを聞かせているうちに、だんだんと自分の周りに人が増え始めた。

彼らの姿が、子供のころに雑貨屋の店主が卑屈に頭を下げる光景と重なる。

こいつらだけでなく、あんな大人でさえ、俺に頭を下げたんだ。

そう思えば、自分が強くなったのだと錯覚した。
小さな頃から弱い自分が嫌いだった。母に押さえつけられて逆らえない自分も嫌いだった。

その反動なのか、そうして周りを従えることがひどく快感だった。

アーシェに出会ったのは、そんな時だ。

黒髪の美少女。優しく、思いやりがあり、誰にでも笑って手を差し伸べるような、そんな少女だった。一瞬で囚われたと言ってもいい欲しかった。手に入れたかった。ずっとそばにおいておきたかった。小さい頃に、ぽつんと一人仲間はずれにされていたことを思い出す。その時に、アーシェがいてくれれば、きっと寂しくなかった。そう思い込んでしまったら、自分のそばにいなければ気がすまなくなっ

た。
『お前の家がどうなってもいいのか』と脅せば、大抵は卑屈に笑って自分の取り巻きになったのに、アーシェは唇をかねで黙り込みながらも、自分をにらみつける目はまっすぐに強く、屈しなかった。誰にでも差し伸べられていたその手は、自分には向けられなくなっ

た。
なぜ従わないのかと苛立ち、躍起になっていじめたり、からかったり、嫌がらせをした。それでも、アーシェは一向にギルバートに歩み寄る様子を見せなかった。

明るいアーシェの周りにいた友人達も、ギルバートがにらみをきかせればすぐにいなくなった。そうして、一人になったアーシェは、炎のような目で自分だけを見つめるのだ。それがたまらなかった。

ほしい。欲しい。欲しい！！

身を焦がすような、強烈な欲求は初めてだった。

けれど、ギルバートは、その手段として、『バレンシュタイン商会

の名を振りかざしてねじ伏せる』と言う方法しか、わからなかったのだ。

そんなある日。

野外学習に出た先で、雨に降られた。生徒達が各々持参した、色とりどりの雨具が咲き乱れる中、アーシエの身を包んでいたのは、穴だらけの黒いぼろぼろの雨具。明らかに使い古したそれは、大人の男物のようで、サイズの合っていないそれはひどく不恰好だった。穴だらけのそれは雨をさえぎることなど到底出来ずに、アーシエをずぶぬれにする。さすがに恥ずかしいのだろう、唇をかんてうつむき、黙々と歩くアーシエは、誰とも一言もしゃべらなかった。

それでもずぶぬれで震えながらも懸命に歩くその姿がどこかあわれで、ハンカチぐらいは貸してやろうと、珍しく思い立った。取り巻きを先に行かせ、列の後ろの方でなるべく目立たないように歩くアーシエに、歩調をゆるめてゆっくりちかづいていった。

「いい格好だな」

肩を並べてぼそりと呟けば、びくんと肩が上がる。けれど、アーシエはいつものようには顔を上げなかった。にらみつけられないことに気をよくして、ごそごそとポケットの中を探り当てたハンカチを握り締めた。

けれど、どう声をかけていいかわからない。

考えるのが面倒になり、唇から飛び出したのは、いつもアーシエに投げているのと同じ言葉だった。

「そんなぼろいカップじゃ、雨なんかしのげやしない。そら、こいつをやるよ。同じクラスにお前みたいなみすばらしい濡れ鼠がいるなんて、他のクラスに知れたら恥だからな。ああ、そいつは返さなくてもいい。俺は汚れたら新しいのを買えるからな。そのカップと違ってな」

笑いながら差し出した手が、ハンカチごと叩き落された。

親切心を拒絶されて呆然とするギルバートに、下から見上げてくる瞳は、激怒していた。まるで高温の白い炎をまとったように。

「まさかこれが親切だと思ってるんじゃないでしょうね？ 嫌がらせなら最低だけど、本気でこれが親切と思ってるなら、もっと最低よ！」

低い声で恫喝されて、訳がわからなかった。手ひどく裏切られたような気分だった。

けれど、自分だけをにらみつける瞳を独り占めできたことに、なぜかぞくぞくした。恐れなのか、満足感なのか、なんだかよくわからなかった。

その後、集合場所で先生にタオルを借りたアーシエが、頭からかぶったその影で肩を震わせるのを見て、なぜか胸が震えるような高揚感を覚えた。どうしても手に入れたと思った。泣かせたい、泣き顔を見たいと思った。誰にも見せたくなかった。自分だけの前で泣けばいいと思った。

そうすれば、優しくしてやれるのに。

アーシエを手に入れた。けれど、ギルバートはその方法がわからなかった。だから、アーシエが屈するまで責めることしかできない。これまで、取り巻きを増やすためにしていたように。

『孤児院がどうなってもいいのか』と言うだけでは飽き足らず、同じ孤児院の年少の子供たちまで引き合いに出しては、アーシエを脅した。それでも、悔しそうに唇を自分で自分をにらみつける態度は相変わらずで、その目にぞくぞくしたり、いつまでもなびく様子のないアーシエに苛立ったりもした。

取り巻きが、

「そんなにあいつが嫌いなら、痛めつけるなり犯っちゃうなりしたらどうだ」

と言い始めたのには驚き、厳しく禁じた。

「そんなことをしていいのは俺だけだ」と。他人が触るだなんて、冗談ではなかった。

そうして、やがて卒業が間近になり、進路を決める季節になった。成績優秀で奨学金をもらっていたアーシエは、貴族の家に推薦をもらっていくものだと思っていた。そうなってしまうたら、手が出せなくなる。

ところが、アーシエはその道を選ばなかった。なぜか、王都の商店に就職するつもりだった。そうなれば、ギルバートにとっては好都合だ。家の名前が存分に振るえる。アーシエを手に入れることが出来る。

ギルバートは、そうすることに罪悪感などなかった。何の疑問も抱かなかった。

卒業し、アーシエが本格的に職を探し始めてから、母に頼み、彼女が面接のために訪れた店に取り巻きをねじ込ませた。

そうしておいて、「うちの店に来い」「来なければどうなるかわかっているだろうな」「お前を就職させないなんて、簡単だぞ」「いい加減諦めろ」と何度も忠告してやったのに、やはりアーシエは従わなかった。

そして、ある日、焦がれたその姿が忽然と消えた。

ちょうどその頃、母は店の金を使い込んでいたことがばれ、離縁はしないまでも、王都から離れた別宅に追いやられた。

他人の就職を妨害したこともばれ、父にこれまでにない剣幕で叱責された。その上で、商会の経理部で監視付で修行させられることになった。

ため息をつく父に、

「お前には自由にさせていたつもりだったが、好き勝手に他人に迷惑をかけるとは、一言も言っていない」

と、突き放されたように言われ、背を向けられた。

悔しかったが、父が怖くて何も言い返せなかった。

もう、弱い自分はいなくなっただけだ。だけれど、まだこうして、恐れ、何も言えない自分は残っていた。そのことに絶望した。

自分の自由なんかなかった。父には興味を持ってももらえなかったし、家に帰れば母が口うるさい。

『そんな成績ではお父様のようになれないわ』 『あなたは立派な跡継ぎにならないといけないのよ』 『この家のために、あなたはもっと頑張らなければいけないのよ』

こうしてはいけない、ああしてはいけない、こうしなければいけない、こうならなければいけない。

そうやってギルバートを縛っていた母がいなくなり、父からも手を離されてしまった。あんなにいた取り巻きも、卒業した途端すうつと潮が引くように消えて行った。

また、一人になった。誰もいなかった。一人ぼっちだった。孤独で寂しくて、苦しくて、でも、どうしていいかわからなかった。誰も何も教えてくれなかった。手を引いてくれる人はいなかった。

だから、アーシエにすがりたかった。傍にいて欲しかった。慰めてほしかった。

今のギルバートには、それだけが救いに思えたのだ。

だから、必死に行方を探した。孤児院も何度も訪れたが、誰も教えてくれなかった。

それなのに、アーシエはいつの間にか城にいて、もう他の男のものになっていた。

悔しくて、むかついて、悲しくて、諦め切れなくて、苦しくて、つらくて、腹が立って、そして…寂しかった。

のろのろと商会本店に戻ってきたギルバートに、廊下で行き会った父親がわずかに眉を寄せた。

「何かあったのか。どうしたんだ、その顔は。届けは出してきたのか？」

そう言われて初めて、ギルバートはどれだけ自失していたのかを知る。届けは出してきたはずだ。おぼろげに記憶はある。けれど、受領書をもらってきていない。どこかに落としたのだろうか。それとももらい忘れか。その辺の記憶はすでにあいまいだ。

声も無くうなだれるギルバートにため息をつき、父はくるりときびすを返した。

「来なさい。話がある」

もう一つの結末・前（後書き）

長くなったので分けました。

後編はそれほどお待ちせしない予定です。

もう一つの結末・後

重厚な執務機の周りには、雑多なものがあふれかえっている。

開発中の新商品だとか、商品化をもくろんで買い込んだものだとか、色々なところから売り込まれたものだとか。

それらを、父は暇さえあれば検分しているようだ。

父はこれらを『宝の山』と呼ぶ。ギルバートにはそうは思えないのだが。ただのがらくたではないか。

だが、そんな視線に気づいたのか、父が手近な道具を手に取った。

「お前の目は正しくもあり、そして間違ってもいる。確かに、これらはすべて、ガラクタだ。ここにこのままある限りはな。だが、人々をひきつける魅力がある。欲しい、使ってみたいと思わせる何かがある。今のままでは無駄や原価、使い勝手の悪さで使い物にならないが、使いやすく、大量生産して流通に乗せられるレベルに改良できた時には、この一つのガラクタが、何千何万と言う金に変わる。そのためには、ありとあらゆる努力を怠ってはいけない。色々な角度から見られる視点、柔軟な発想力、現実的なバランス感覚が必要だ」

暗に、お前はまだまだ足りないと言われたような気がした。だが、どうすればいいのか、その方法を、ギルバートは知らないまままだ。

今まで、母に手を引かれ、母に言われるまま、母が作った道を歩いてきた。その母を家から追い出したのは父なのに、父は何も教えてくれない。父は、自分が嫌いなのだろうか？

「また、城の専属侍女様がらみのことか」

不意にずばりと切り込まれて、ギルバートは唇をかんた。父の前で

は、萎縮してどうしても言葉が出ない。これでは、小さな子供のころと一緒にではないか。

悔しさに、握った拳が震える。

それを肯定と受け取ったか、父はふむ、とうなずいて、重厚な革張りの椅子にゆったりと腰かける。

「お前の同級生だったそうだな。パシフィスト教会孤児院で育った、アーシエ・グレイと言う娘。専属となっているのは、ライトリーク・ウォーロック様。王国筆頭貴族、ウォーロック家の次男だ。逆立ちしたって、到底お前が太刀打ちできる相手ではない」

「な……」

弾かれたように顔を上げる。ハンマーで頭を殴られたような気がした。

そういえば、あの男がそう言っていた気がする。アーシエに言われた言葉で頭がいっぱいで聞き流していたけれど、その家名は、王国に暮らすものなら誰でも知っている大貴族の名だ。

いくら王国全土に影響を及ぼす商店だろうと、所詮商人は商人。王国筆頭貴族にまで手を出すことは出来ない。

また一つ、アーシエが自分から遠ざかる。

「それに、その娘は正式な手続きを経て専属侍女になっている。確かに、パシフィスト教会にいたとはいえ、孤児が専属侍女になることが異例中の異例なのは間違いないが、それはお前が口出しできることではない」

父の表情が、厳しさを増した。

「おまえはその娘に、今回だけでなく随分と長い間理不尽な嫌がらせをしていたそうだな。それが、今になって跳ね返ってきただけだ。今日お前に何があったかは知らないが、自分が招いた結果だと言うことを、肝に銘じるがいい」

「今まで、あんたが散々私にしてきたことは、私にとっては単なる嫌がらせよ。学院にいたときから、私がどれだけ傷ついてきたと思うの？ 孤児院がどうなってもいいのかって、小さい子達がどうなってもいいのかって、あんたはいつもそうやって私を脅してきたわ。教科書や、大事な物も壊された。それを悲しんで、我慢してる私を、あんたは笑ったわ！ それを何年もされてきて、今さらどうやってあんたを好きになれって言うの？ もう嫌。顔も見たくない。大っ嫌い！ もう帰って！」

アーシエに投げつけられた言葉が痛い。胸の真ん中を深々と刺し貫かれて、今でもどくどくと血を流し続けている。そうだ。本当に好きだったんだ。そばにいて欲しかった。もっとたくさん話をしたかった。笑って欲しかった。

ただそれだけだった。嫌われないわけではなかったはずだ。それがどうして、こうなってしまったんだろう。何が間違っていたんだろう？

「どうしてこうなったと思っているうちは、また同じ事を繰り返すことになる。手ひどいしっぺ返しを食らったのであれば、それだけお前に落ち度があったと言うことだ。それを認められないうちは、お前はまだ何もわかっていないと言うことだ」

父の言葉は、まるで心の中を見透かされたようだ。

「相手にしたことを思い出せ。相手に言ったことを思い出せ。相手にとった態度を思い出せ。そして、自分が同じ事をされたと想像してみなさい。それでも尚、何の痛みも感じないと言うならば、お前は人間として大切なものが抜け落ちている」

父の言葉を聴きながら、思い出す。

アーシエに嫌がらせをしたこと。

心無い言葉を浴びせたこと。

嘲笑したこと。

友人を奪い、一人にしたこと。

それらすべて、ギルバートが過去に嫌で嫌でたまらなかったことだった。

同じことを、自分はアーシエにしたのか？

「商売に大事なのは人とのつながりだ。一方的に力でねじ伏せては、信頼関係は生まれない。信用も得られない。だから、軽々しくバレンシュタイン商会の名を振りかざしてはいけないのだ。学院と言う狭い世界から外に出たお前には、何が残っている？ 友人は得られたか？ 大切な人は見つかったか？ 何があっても離れていかない『バレンシュタイン商会の息子』ではない、ただのギルバートでもいいといってくれる人はいるか？」

ああ、そうだ。だから自分には、何も残っていないのだ。だから、助けてくれる人もいないのだ。

だから、アーシエも自分のものにならなかったのだ。

不意に、父が沈痛な面持ちに変わった。尊大にいすに預けていた体を起こし、指を組んで机の上に置く。

「だが、それは…。お前をほったらかした私も悪い。教えるべき時に教えず、言うべき時に言わなかった。すまなかったな」

殊勝ともいえるその言葉に、怒りが一気に膨れ上がった。

「今さら…！」

反射的に出た声が震える。

父に反論するのは、これが初めてだ。だけれど、喉の奥で何年も溜めてきた想いが、止めようもなく一気に噴出する。

「今さらなんだよ、今まで俺のことなんか見向きもしなかったくせ

に！ あの女に何か言われても知らん顔で、教えて欲しくても自分の道を行けとかなんとか突き放したくせに！ あの女はあんたのようになれって言ったんだ、何年も何年も！ それ以外のことは一切許されなかった！ 何かあったら、店の名前とあんたの名前を言えればいいって言われてた！ だから俺はそうしたんだ、それが悪いのかよ！？ どうせあんたは俺のことが嫌いなんだろ？ だから見向きもしなかったんだろ！？ 母さんまで追い出しておいて、親父面して説教なんて聞きたくねえよ！！」

息を荒げて言い切った途端に、恐ろしいほどの罪悪感と恐怖に襲われる。なんだかんだ言ったところで、父の存在は絶対であり、畏怖の対象だった。子供のように怒鳴り散らして、どんな叱責を受けるかわからない。

だが、父は青ざめたギルバートの顔を見て、悲しそうにため息をついた。

「そうだな、その通りだ。忙しさにかまけて、お前と話をする時間を取らなかった。そうなるふうに思っていることも知らなかったし、理解しようとしなかった。アリザがあんなことになってしまっただけ、私は己の過ちに気づかなかった。アリザともお前とも、もつと話していれば、ここまでこじれる前に何とかしてやれたかもしれん。それは私が全面的に悪い。すまない」

なんで。どうして。そんなふうになつてしまったものすべて飲み込まれてしまえば、反論も出来ないではないか。

アーシエのことも、母のことも、父のことも、自分のこともすべてごちゃ混ぜになってしまい、もはや、ギルバートは自分が何を言いたかったのかわからなくなっていた。

父がゆっくりと口を開く。

「だが、決してお前を嫌っていた訳ではない。アリザのことも、追

い出したのとは違う。王都は、あれにとっては誘惑が多い。あれは心を病みかけている。だから、落ち着いた場所で、足りない時間を埋めていくつもりでいるだけだ。何年かかってもな」

「じゃあ、どうして何も言ってくれないんだ。どうして何も教えてくれないんだ！ わかんねえよ、俺はどうすればよかったんだよ！！」

まるで子供が駄々をこねているようだ。その自覚はあった。でも、止められない。

父はそんな自分を、何か痛いものを見るようなまなざしで見つめる。それが、たまらなく惨めだった。

：自分がギルバートをそうしてしまった罪悪感に、胸を痛めているせいなどと、知る由もなく。

「私はお前に何も教えない。おじい様も、私には何も教えてくれなかったよ。おじい様は、人間関係は、誰かに教わるものではない、とよく口にしておられた。だから私も、おじい様の背を見て学んだつもりだったのだが、いつの間にかそれをすっかり忘れていたようだ。情けない話だがな。だから、お前に見せてやれるものなど、本当はないのかもしれない。それでも、道しるべくらいにはなるだろう。お前が失った信頼も、人間関係も、ゼロからのスタートではない。マイナスから、0に回復させ、1から作り直さなくてはならない。時間がかかるし、容易な道のみではない。だが、必要なことだ。お前はまだ若い。過ちを取り戻すだけの時間はまだまだある。焦らず、何年かかっても取り戻さなければならない。そのための助力を、私は惜しみはしない。それを忘れるな」

力強いその言葉は、闇の中、進路を失った小船に投げかけられた、灯台の光のようだった。

今まで冷たい人だと思っていた。嫌われていると信じていた。だが

ら、最初から父と話をすることを避けていた。

だけれど、温かさすら感じる父の言葉。『すまない』と頭を下げた父の態度。そこには、今まで自分が抱いてきた父のイメージはかけらも無く、十分に自分を心配してくれているのだとわかる。

しかし、長年かけて育った自尊心、猜疑心、虚栄心、反発心、その他諸々が、ギルバートに簡単には過ちを認めさせなかった。

ふてくされたように視線を斜めに逃がしている息子を見て表情を和らげた父が、いすから立ち上がり、あふれたものたちをゆっくりと手にとって眺め始める。

「まあ、今すぐ和解しようとは言わない。長年溜めてきたものもある。だから、私と取引をしないか？」

「…取引？」

ちらりと視線を戻したギルバートに、父はどこか芝居がかったようにうなずいた。

「ああ。商品の開発、商流の開拓、大口顧客との契約。このいずれかを成功させたら、お前の望みをかなえよう。さっき言ったとおり、私はお前には何も教えない。お前は、今まで誰かにしてもらうことを待っているばかりで、自分で何一つ何かを成し遂げたことはない。今のお前には、成功させるのは相当難しいだろう。だから、どうしたらいいか悩んだときには、私を見なさい。私の言葉、仕草、行動、すべてを残らず盗みなさい。そして、どんな時にどう動けばいいか、何を言えばいいか、より良くする為にどうすればいいかを、自分で必死に考えなさい。何かを思いついたとき、行き詰った時、悩んだ時、必ず誰かに話しなさい。そうすれば、おのずとどうすればいいかがわかってくるだろう。期間は3年、それまでに何か一つでも成し遂げていたら、その時はお前の望むようにするがいい。すべてを教えるというのなら、そうしよう。店を継ぎたいなら、それもいい。ほかに何かやりたいことが見つかるかもしれん。店を継がないと言う選択肢も、もちろん認める。どうだ？」

その言葉は、ひどく魅力的に聞こえる。だけれど、うなずく勇氣がない。

学院を出て、結局自分にはこの店しか居場所がなかった。外の世界に一人ぼっちで放り出されて、生きていけるとは思えない。自分はまだ、一人では何もできない子供なのだ。

ふがいなさに唇をかねで拳を震わせると、父が口を開いた。

「今すぐ決めるとはいわん。今日はこの辺にしておこう。答えはまた後で聞く。ゆっくり考えるといい。受領書は後で誰か別のものに取に行かせるから心配するな。散々大騒ぎした後では、城には行きづらিদらうからな。ただし、今回限りだ。今後、自分の失態は自分で尻拭いをする。こと。いいな」

いつもどおり、重々しいな穏やかな声でそういった父に、しかめっ面でそっぽを向いて。

しばしの逡巡の後、ギルバートは渋々ながらも小さくうなずいたのだった。

もう一つの結末・後（後書き）

はい、以上で今回のお話は終了です。

ギルの方はすつきりしない終わり方ですが、何年も頑なに信じてきたことをひっくり返されて、今さら優しくされても「ハア!？」つてなるのは当然なので、こんなもんかと思います。そんなすぐ素直になっただらおかしいでしょ？

それを見越して、「取引」と称してギルの軌道修正をまくるむギル父は、ずるい大人です。からめ手で行くか。それが、正攻法を選択できないだけの不器用なオヤジかどっちかでしょう。

んでもって、数年後にギルは「あの頃の自分はバカだった」と黒歴史に悶絶することになると思うのですよw

ちなみに、意地になった3年後に、機械加工品の新規仕入れルートを立ち上げ、同時に新商品の開発に成功したギルは、自分の意思で商会を継ぐことを決めます。その後、過去のアーシェとの恋愛で負った痛手で、何年も彼女が出来なかった彼ですが、機械加工品の工房連合を立ち上げる時に一緒に尽力した女性と大恋愛の末に結婚する予定です。

今度はストーカーとかなしで、かつこ悪く全力投球でなりふり構わず捕まえに行くはず。

…書きませんよ（笑）。妄想のみ。

最初3〜4回とか言っておきながら、話数が倍以上に膨らんでしまった不思議w

途切れた系 その後・前（前書き）

さて、エル×レイド編開始です。

まずはアーシエが人間に戻り、孤児院に帰ってライトが謹慎になってからのお話です。

途切れた糸 その後・前

「エル、ちょっといいかしら」

夜、私室に戻ろうとしたシエルミラが足を止めて振り向いた。

いつもどおり、他の侍女達と一緒に礼をとって、ドアが閉まるまでを見送るはずのエルサーナは、怪訝な顔で姿勢を正す。

「はい、なんでしょうか」

「お話があるの。こちらへ来て頂戴。みんなは下がっていいわ」

いつになく曇った表情に、何か不備があっただろうかとわずかに眉根を寄せて、エルサーナはシエルミラに続いて私室に入った。

調度品が高級品なのは当然だが、ごてごてと豪奢にせずに、すべて落ち着いた色合いでまとめられている。

壁紙は、生成りの白一色。一見味気なく見えるが、同色の糸で絡まる蔦模様が織り込まれていて、光の角度によって柄が浮き上がって見える。シエルミラの遊び心が垣間見えるようなチョイス。

全体にシンプルにまとめられたインテリアだが、光沢のある飴色のチェストの上に飾られているプレートや、薔薇が生けられた1輪差し、ソファセットに用意されている茶器、深いモスグリーンのソファの上に置かれているクッション、天井の魔法光のランプのランプシェードなど、アクセントとして薔薇の模様の品物が置かれているあたりが、薔薇が好きなシエルミラらしかった。

それらが部屋に程よい華やかさを加えていて、上品ながらも居心地の良い空間になっている。

ドアを閉めてシエルミラに向き直ったとたん、深いため息をつかれて、これはいいよもって、自分が何かやらかしたのだと思ったエルサーナは、深く頭を下げる。

「申し訳ございません、シエルミラ様。何か間違いがあったのでし

たら、深くお詫び致します。恥ずかしながら、私には思い当たることとがございませんが、おっしゃっていただければすぐに手配をして……」

「ああ、違うのよ、エル。ここは私の私室で、今はあなたと私だけ。何より、今は侍女のエルではなく、私の姪のエルを呼んだのよ。堅苦しいのはなしにして頂戴」

砕けた口調でそう言つて、シエルミラはまたため息をついてソファにどさりと体を投げた。

そのいつにない乱暴な仕草に驚いてみると、

「あなたもおかけなさい」

と促されて、エルサーナが遠慮がちに王妃の隣に腰を下ろすと、シエルミラは疲れたように眉間を揉み解した。

「まったく、ライトは何を考えてるのかしらねえ」

なるほど、身内の話なら、姪としてのエルサーナを呼んだという言葉も納得できる。

華月宮に閉じこもっていると、ほかの棟の動向はあまり入ってこない。ライトリークは先日まで、ずいぶんと落ち着いた様子だったはずだが、何かあったのだろうか。

「ライトが……どうかしましたか？」

「前に花園に連れてきた猫が居るでしょう？ あの子、本当はライトが変化^{へんげ}させていた人間だったらしいわ」

「変化……って」

ざっと血の気が引く。

人に勝手に術をかけ、姿を変えるのは犯罪だ。魔術師の間では禁忌として、固く禁じられているはず。

「それは……ライトが、誰かをとらわれびとにしていたということですか？」

知らず、声が震える。シエルミラも、眉間に深くしわを刻み、こめ

かみを押さえた。

「アークの話だと、そうらしいわね。少し前に処刑されたハーウェル侯爵がいたじゃない？ ライトは、あれに加担していた魔女に変化させられていた猫を保護したらしいわ。だけど、魔女の呪いはとつくに解けていて、代わりにライトがその子に黙ってそのまま変化させていたって言う話よ。今朝、その子らしい少女を送らせた後、アークのところに行つて、一緒に陛下にお話されたそうよ。潔く罰を受けるとそれだけ言つて、後は一切だんまりだったようだし、自宅謹慎を命じられたら、さつさと城下に下がってしまったの。本当にもう、何を考えてるのか……」

ライトリークは過去のことと、その胸の内には暗いものを抱えている。

身内はそれをよく知っていて、どこか危うい彼をいつでも心配しているけれど、当のライトは心配することすら頑なに拒んでいて、遠巻きに見ていることしか出来なかった。

エルサーナは、誰よりも近くでそのライトリークを見ていたからこそ、いろいろと口に出出来ない思いもあったし、自分の中で抱えているものもあった。

けれど最近、猫を飼い始めたあたりから、そういう暗い所が薄らいで、いい方向に変わってきてくれていると、安心していたのに。

「まったく、元からひねくれたところのある子だけれど、どこまで心配させれば気が済むのかしら」

困ったようにため息をつくシェルミラの姿に、エルサーナは居てもたっても居られなくなった。

「わかりました。私、明日ライトのところに行つて、話をしてみます」

「大丈夫なの？ あの子が一筋縄で行くとは思えないわ」

「ええ、でも……私なら、少しはあの子の気持ちがわかると思うので」

エルサーナは、心配そうな王妃にうなずいてみせる。

自分達は姉弟だ。それに、エルサーナには、ライトリークの気持ち
が他の兄弟よりも理解できると思える理由もある。自分が行けば、
少しは耳を傾けてくれるかもしれないという期待もあった。

「そう。なら、戻ったらライトの様子を聞かせて頂戴ね。私もでき
るだけのことはするわ」

「はい。ご心配をおかけしてすみません」

「いいのよ。かわいい甥を心配するのは当然のことでしょう?」

「ありがとうございます、おば様」

温かい言葉に、思わず昔のように呼びかければ、ぱっとシエルミラ
の顔が明るくなった。

「まああ、そんな風に呼ばれるのは何年ぶりかしら!? んもう、
みんな大人になったら他人行儀になってしまつて、本当にさびしく
思っていたのよ? 時々は、そうやって昔に戻つてね、エル?」

珍しくはしゃいだ様子のシエルミラに苦笑しながら、エルサーナは
うなずいた。

「ええ、はい、おば様がそうおっしゃるなら。でも、本当に誰も居
ない時、時々、ですよ?」

「わかつているわよ! じゃあ、明日、ライトによろしくね? 私
も心配していたつて、必ず伝えて頂戴ね?」

「はい、必ず」

そうして王妃の部屋を辞し、エルサーナは軽いため息をつく。

甘い瞳で、愛しくて仕方がないというように黒猫を見つめる弟の姿。
それに、無防備に甘える黒猫の姿。

彼らは、とても合っているように見えたのに。

お互いがお互いを支えにしているように見えたのに。

彼らが離れてしまったら、きっとライトリークは元に戻ってしまう。だけど、黒猫にされていたという女の子の方は…どうなんだろう？猫の時にはとてもライトに懐いているように見えたけれど、もしかして、本当のことを知ってライトを恨んでいるかもしれない。ライトを助ける為には、その子にライトを説得してもらわなくてはいけなくなるかもしれない。それを拒否されるのは困る。

まずは明日、弟に会ってから。そう決めて、エルサーナは自室に戻って行った。

次の日、エルサーナは落ち着いた若草色の外出着を身にまとい、馬車でライトの自宅に向かった。

高級住宅地の一角、それほど大きくはないが、古びた重厚な屋敷が、ライトの持ち家になる。ウォーロック家が所有する物件の一つで、ライトリークは広い庭と落ち着いたたたずまいが気に入っているのだそうだ。

開け放してある真鍮の門をくぐり、エルサーナは馬車を降りる。入口で呼び鈴を鳴らすと、初老の執事がドアを開け、慇懃に礼をした。

「お待ちいたしておりました、お嬢様。どうぞ、お入りください」
「ありがとう。失礼するわね」

広い玄関ホールから、応接室に通される。執事が開けたドアの向こうには、もうライトが待っていた。白いシャツに、ベージュのズボン。くつろいだ姿でゆったりとソファに座る姿は、落ち着いているというよりも、開き直っているように見えて仕方がない。

「やあ、姉さん。来ると思ってたよ」

「ライト！ あなた、どういっつもりなの！？」

いつもどおりの食えない笑顔に押さえきれず、大きな声を上げながら、ライトリークの向かいに腰を下ろした。

ライトがこだわり、自分で買い求めた自慢のソファの柔らかな座面が、ふわりと体を受け止める。いつもならばその座り心地に感嘆のため息を漏らす所だが、今はそんなものどうでも良かった。

「どういっても何も、俺はただ決められているとおりの罰を受けるだけだ。それが悪いのか？」

薄い笑みを浮かべながら、悪びれる様子のないライトに、エルサーナが言い募る。

「悪いも何も、なぜ一言も相談してくれないの！？ みんな心配してるのよ！ おば様も、何かあれば力になるっておっしゃってくれるわ。何か方法を考えましょう？」

「それがダメだって言ってるのに……」

ため息をつき、ライトは不機嫌に顔をそむけて腕を組んだ。

「誰の力も要らない。誰にも関係ない。俺は女の子をずっと猫にして手元に置いておいた。それは俺の罪であって、俺が背負うべきものだろう？ どうにかして欲しいなんて、誰にも頼んでいない」

突き放したその言い方に、エルサーナはぐっと拳を握り締める。

「だけど、あなたたちは、すごく分かり合っているように見えただわ。お互い信頼しあっているように見えた。あの子を手放してはダメよ！ また元に戻ってしまうわ！」

「今までが夢みたいなものだったんだよ。分かり合っていたんじゃない。俺とアーシエは、お互いに依存しあってただけなんだ。そんなの不自然だろう？ 元が現実なんだよ」

「その子は、それでいいって言ってるの？　あなたが罰を受けるつもりだって知っているの！？　ちゃんと確かめなくちゃ…！」

暗く光る瞳に見据えられ、エルサーナは続く言葉を口に出来なかった。

「それこそ、彼女には関係ないことだ。彼女に無断で、俺は彼女を変化させた。それが、唯一絶対の事実であり、罪だ。彼女がどう思うかなんて、その罪の前には関係がないことだろう？」

どうしてライトはこんな風に心を閉ざしてしまっているのか。

家族である自分達の手まで、拒むのだろうか。

私なら、わかってあげられるのに。同じ気持ちを、持っているのに。やはりその少女でなければ無理なのか。居場所と素性なら、調べればすぐにわかるだろう。事情を話して、どうにかしてライトを思いとどまらせてもらうしかない。

「俺を何とかする為にアーシェに説得を頼むのは筋違いだよ、姉さん」

エルサーナの胸の内を読んだように、不意に鋭くなった眼光に射抜かれて、息を呑む。

「そもそも、嫌な思いをしていたのも、苦しんでいたのも、我慢していたのもアーシェだ。俺がいなくなつて、清々するかもしれない。猫になっていた時のことは、忘れたいと思っっているかもしれない。それを、俺以外の奴らが俺のために担ぎ出そうとしたら、それですでに傷つくのは誰なんだ？」

「それは…」

はっと胸を突かれたような表情で、エルサーナが黙り込む。

「それじゃ、今までと何も変わらない。俺はただでさえアーシェを傷つけた。これ以上俺にかかわらせたくないんだ」

ライトが何もかもを捨てる決心をした、根本的な問題。

自分は、いるだけで誰かを傷つける。

抑えきれない暗い執着は、すでにいいようにアーシェを翻弄し、消えない傷を残している。

そして、その執着はすでに、自分では制御不能なところまで来てしまっている。

自分という存在を、アーシェから引き離さなければ。

ライトはすでに、そこまで思い詰めている。

「あの子には自由で居て欲しい。俺みたいなのに縛られていたら、だめになるかもしれない。俺や、あの子の意思にかかわらず。そんなの、エルが一番よく知ってるだろう？」

今、ここでそれを武器に使うのか。

他人には見せない暗い笑みを浮かべるライトに何も言えず、エルサーナは唇をかみ締めるしかない。

「だから、手放さなきゃいけないんだ。アーシェは、絶対かわらせるな」

表情を消して、淡々と続けるライトには、あきらめのような、達観のようない。なんとも言えない、怖いほどに凜いだ空気しかなくて、エルサーナは絶望に飲み込まれていく気がする。

「俺が謝らなければいけない立場であって、アーシェにはなんの罪もない。俺はもう誰も傷つけない。責任を取って姿を消すことしか出来ない。俺は罰を受けたいんだ。ここから消えてしまいたい。だから、俺を説得させようなんて絶対するな」

だけれど、あまりに身勝手な言葉に、エルサーナは怒りを抑えきれ

なくなった。拳を握り、立ち上がる。

「そんなあなたの思い込みよ！ 男ってどうしてそう自分勝手なの！？ それで女が本当に喜ぶとでも思ってるの！？ きちんと謝りもしないで、罰だけ受けて勝手に姿を消すなんて、ただ逃げているだけじゃないの！ ふざけないで！」

いつも物腰柔らかで、声を荒げるところなどほとんど見たことがない姉の突然の激怒に、ライトリークは目を丸くして見つめるしかない。

「私だって、エルサーナ・ウォーロックでさえなければって思ったことなんか何回もあるわ。あなただって知ってるでしょう！？ 私、逃げてることはわかってる。自分だけだと思わないで！ 周りの心配や善意まで否定するのは最低よ！」

そう言い捨てて、エルサーナは応接室を飛び出した。

残されたライトリークは、深いため息をついた。その顔に笑顔はない。

「その通りだ。俺は逃げてる。わかってる……」

だけれど、こうする以外に方法がわからない。

ソファに力なくもたれて、天井をあおぐ。その顔に、迷いと苦悩を浮かべて。

「いいんだ、みんな俺になんかかまうな。俺はひとりになったほうがいいんだから……」

呟きは、誰に聞こえることもなく、宙に霧散した。

表情を変えることなく見送る執事の目から、逃げるように馬車に乗り込んだ。

屋敷を離れる馬車の中、エルサーナは苦しさと悔しさに拳を握る。

あれじゃあただの八つ当たりだ。子供のように、思い通りにならない感情を持て余して大騒ぎしただけで、何の解決にもならない。一体何をしにここにきたのだろう。

ライトリークの気持ちがわかるだなんて思い上がって、上から説教をする気ででもいたのだろうか？

そのうえ、少女が負った心の傷を、考慮する意識すらなかった自分の傲慢さが情けなかった。

自分の問題すら、けりをつけてもないのに。説得なんてそんな資格、端から自分にはなかったのだ。

だけれど、ライトリークは大事な弟だ。アーシェと一緒に居た時の姿が、本当の彼の姿なのだと、エルサーナは確信している。

ならば、やはり何とかしてライトリークを繋ぎ止めたい。

ライトとその子が一緒にいることが、やはりエルサーナには正しいことと思えてならないのだ。

じゃあ、どうすればいい？

父も兄も、厳しい人だ。罪を犯したライトリークを、きっと許さないだろう。逆にエルサーナのほうが、余計な口出しをするなど釘を刺されることになりかねない。

そうなると、頼れるのはエルサーナにはもう一人しか残っていないかった。

その人を思い浮かべて、胸をさす甘い痛みに耐えるように、エルサーナは憂いに沈む茶色の瞳をそっと伏せた。

途切れた系 その後・前（後書き）

あ…レイド出てこなかったorz

途切れた系 その後・後（前書き）

思うところがありまして、本編とはレイドのスタンスが若干変わっています。

今回はあまり気にせず読んでいただけると嬉しいです、

途切れた糸 その後・後

西棟の廊下を足早に進みながら、目的のドアにたどり着く。行きかう騎士たちが、自分をちらちらと伺う視線がいたたまれない。それだけでなく、こんな時でもなければ、あまり近づきたくない場所だった。

胸の奥に残った想いが、疼くから。

だけれど、今のエルサーナには他に選択肢などない。

目の前にあるのは、騎士団団長室の重厚な扉だ。鉈で打たれた『団長室』の金のプレートが目にも痛い。

このドアをノックするには、とても勇気が要る。偶然出会う以外にこうして、しかも自分から会いに行くなんて事は、この五年間、一度もなかったことだったから。でも、そうしなければ、ライトはこのまま姿を消してしまう。せめて、ライトが望んでいる結末だけは阻止したかった。

数度の深呼吸の後、控えめなノックに『どうぞ』と返る低い声に震える心を押さえつけて、エルサーナはドアを開けて中に滑り込んだ。そうして現れた自分に、わずかに目を見開いたその人の姿に、エルサーナはそつと目を反らす。

レイド・グランツ。現騎士団団長。

見上げるほどの長身、がっしりした筋肉質の体つき、ざつと後ろに流された夜色の髪、恐ろしげな三白眼、けれど渋く整った精悍な顔立ち。

今も忘れられない、エルサーナの想い人。

一時期心を通わせた記憶は、今尚色あせずに心の奥に存在する。

姿を見れば目で追ってしまい、目が合えば心が高鳴り、声を聞けば体が震える。

走り寄ってしまいたい気持ちを懸命に抑えて、エルサーナはドアを閉めた。

レイドが椅子を立ち、執務机をぐるりと回ってやってくる。

相変わらず、書類や脱ぎっぱなしの服などがその辺に投げられていて、乱雑な部屋だ。こんなところは、5年前と変わらない。

ただ、ライトがいたはずの机だけが綺麗さっぱり何もなくなっていて、部屋の中でそこだけが妙に浮いている。

「随分と珍しい。どうした、エルサーナ殿」

「お忙しいところ申し訳ありません。お願いがあつて、ライトのことで」

「なんなりと」

顔立ちは獰猛な鷹のようなのに、声は優しい。けれど、その優しい声は、はっきりした距離を保って、エルサーナに話しかける。

それが、どうしようもなく痛かった。

そうすることを望んだのは、そうさせたのは自分なのに。

「ライトのお話、あなたは知っていらつしゃるんでしょう？」

「ああ、部下の不始末だからな」

うつむきながらの問いかけに、レイドは表情を変えずに淡々と答える。

『部下の不始末』

その言葉に、エルサーナは奥歯を噛み締める。

確かにその通りだ。自分たち身内には大事でも、詳しい背景を知らない、レイドのような他人にとって、ライトの行動はただの不始末でしかない。

「ライトが罪を犯したことはわかっています。けれど、あの、何とか助けたくて」

「立場的に、魔術を操るものとして、騎士団副団長を拝命しているものとして、ライトが禁を犯したことは許されるべきではない」

きっぱりと言い切られて、思わずうつむく。

エルサーナも、それは十分わかつているつもりだった。けれど、レイドの言葉と自分の心情、正しいのは一目瞭然だ。

藁にもすぐる気持ちでここにきたけれど、自分の愚かさと身内びいきをはつきりと自覚しただけだ。

ライトも、望んでいない。来るべきではなかったのかもしれない。きつと、レイドだって不愉快だろう。こんなことで押しかけてもられて、さぞ迷惑な思いをしているに違いない。

一体どうして、自分が何とかできるなんて思っただろう。思い上がりもいいところだ。

いたたまれなさに涙がにじむ。

「だが、あれはなんと言うか、自傷行為みたいなものだな」

エルサーナが弾かれたように顔を上げると、レイドの顔には、わずかに呆れたような色が見て取れた。

それを、一縷の望みを持つてすぎるように見上げる。

「勝手に自分を追い込んで、勝手に拗ねて、勝手に思いつめて、いじめて何もかも放り投げようとしている子供だ。悲劇の主人公にならなかつたつもりなんだろう。なにか知らんが、自分一人がいなくなればとか、悲壮な決意でもしているんじゃないのか？ まったく、未だにガキっぽいところが抜けきらなくて困る」

と、レイドにかかれば、ライトをまるで子ども扱いだ。

レイドは今36歳。ライトとは8歳の差がある。しかも、平民出の

たたき上げで、12年前にあつた隣国からの侵略戦争のただなかにいた男だ。くぐつた修羅場の数など、ライトは到底かなわない。その辺の余裕や人生経験が、あの癖のあるライトを部下として使える所以なのだろう。

その揺るぎない存在感に、エルサーナもすべてを預けきつた。そのことは、まだ忘れていない。

「レイド様も、相談は受けておられないのですか？」

「あいつがそんなかわいいタマでないのは、あなたも知つての通りだろう。いつものように、出勤と同時に爆弾落としてさっさと帰りやがつた……と、失礼した」

ぞんざいな口調になりかかるのを、途中でやめるところは、今も昔も変わっていない。自分に対して、精一杯気を使ってくれているのがわかる。

どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。

その優しさが痛くて、泣きたくなる。

「あの、こんなことをお願いするのは筋違いだとわかっているんです。でも、どうかお願いします。ライトのこと、なんとかありませんか？」

すぐるように見上げる視線に、一瞬レイドの眉が険しくなるが、本当に一瞬で消し去り、鷹揚に腕を組む。

それに気づかず、エルサーナは尚も言い募る。

「罰を受けなければならぬことは、理解しました。けれど、ライト一人がいなくなつて丸く収まるとはどうしても思えないんです。その、猫にされていた子とも、何の決着もつけていないようでした……もしかしてそれが、あの子を救う鍵になるかもしれない。ライトは絶対にダメだと言つんです。その子をこれ以上かわらせたく

ないって。だけど、私は何とかしてあげたいんです」

必死なエルサーナに対し、レイドの表情は変わらない。

それが、余計にエルサーナに焦りを生む。

「あいつは、助けなど望んでいないようだが」

「それは確かにそうですけど…。でも、あのまま一人になっても、ライトの状況が好転すると思えない。きっと、もう二度と他人を寄せ付けずに、生きていても死人しにひとのようになるだけのような気がするんです。あの子にはもう、私たちの言葉は届かない。あの子は、消えたがっているの」

そうだ。自分たちの言葉など届かないほど、ライトはあの猫（だった少女）がすべてなのだ。

身内の心配など、捨ててしまえるほどに。

「言いたいことはわかった。何の相談もなしに勝手に居なくなれるとこちらも迷惑だし、出来るだけのことはするつもりだが、あいつは頑固だからな。あれを覆すのは、容易ではない」

「だけど、みんな心配しているんです！ それなのに、誰にも何の相談もなく、罰を受けて、城からいなくなるうとしているなんて、どうして…！」

「だが、その選択自体は間違いではない。なにより取り締まる側の俺たちがそれを許したら、ほかに示しがつかん。被害者感情もある。それはわかっているだろう？」

レイドの正論に反論できずに、エルサーナは唇をかんだ。

幼子に噛んで含めるような口調に、悔しくて、涙がにじむ。

こうなる前に、何とかできたのではないか？
誰かに相談してくれれば、みんなで解決策を考えることもできたかもしれない。

けれど、ライトはその選択肢を選ばなかった。

家族であるはずの自分達すら、ライトは頼ろうとしない。

私達は、そんなに嫌われているのだろうか？

ただ心配することが、そんなに迷惑なんだろうか？

どうして、どうして、どうして。

ライトによく似た美貌が、苦悩にゆがむ。エルサーナの内心を察してか、レイドがそつとエルサーナの肩に右手を置く。

「あいつは人付き合いだけは壊滅的に不器用だからな。別に誰かを嫌ってとか、拒絶してこうなったわけではない」

「だって、じゃあどうして私達に一言の相談もなく…っ」

「相談しづらいことであることは確かだ。あいつも、迷って迷ってこの選択肢しか選べなかったのかもしれない」

「それでも！ 私たちまで無視することはないじゃない！」

声を荒げて、また自己嫌悪。まるで子供の駄々だ。

わかっている。ライトリークにも同じように八つ当たりして、後悔したばかりだ。でも止められない。

「エルサーナ殿」

なだめるような声に、かつと頭に血が上った。

「他人行儀にしないでっ！」

叫んで、肩に置かれていたレイドの手を振り払った後、はっと顔を上げる。

そして、次の瞬間血の気が引いた。

私、今、何を言ったの…！？

自分だって、ライトと同じだ。この人を傷つけたくなくて、守りたくて、自分も傷つきたくなくて、勝手に身を引いたのに。

それなのに、未練たらたらで、レイドが優しいのをいいことに、都合のいいときだけ甘えるなんて。

最低だ。

急に自分のしていることが恥ずかしくてたまらなくなった。

エルサーナが身を翻して、逃げ出そうとした体を、後ろからすばやく伸びた腕に抱きしめられる。

それ以上、そこから一步も動けなくなる。

「エル…」

耳元に、吐息と共に落とされた声に、体が震えた。

そんな風に呼ばれるのは、いつ以来だろう？

こらえきれなくなった涙が、ほろりとあふれる。

「そんな目で見られたら、理性が持たん」

かすれた声に交じったため息が、エルサーナの肌を焼いて、体の芯がうずいた。

「まったく、かわいい格好で久々に俺のところに来たと思ったら、随分と色気のない話を持ってきたものだ」

耳に直接流し込まれる低い声は、頭の芯を溶かす。

だって…だって、そんな理由でもなきゃ、ここに来ることなんてできないのに。

「しかも、お前の望むとおりになんぞ距離をとってやっているのに、それも気に入らない、か。…どうすればお前は満足なんだ？」

だけれどその言葉には、どこかからかいの色が混じっていて、レイドが怒っているわけではないことが知れる。

背中に感じる大きくて硬い男の体は、今も昔もエルサーナに安心感を与えるのだ。

エルサーナを抱きしめる太い腕に、きゅうつと力が入った。

「大丈夫だ。何とかなる。だからそんなに泣くな」

あやすように耳に落とされる低い声に、小さくうなずく。

レイドに何とかなると言われれば、なぜかどうにでもなるような気がするから、不思議だ。

と、その時。耳に落とされる柔らかい感触は、…唇！？

「やつ…」

反射的に身をよじると、思いのほかあっさりと開放される。

あとずさって、団長室のドアに阻まれると、一歩で間を詰めたレイドが、片手をドアについてエルサーナとの距離を縮めた。

鋭い目に見つめられて、穴が開きそうな気がする。キスされた耳が熱い。体が震える。レイドと見詰め合ったまま、一歩も動けない。

「ライトのことは、黙って見ていればいい。だから、余計なことはせず、いい子にしている、エル。…今日のところはこれくらいにしておく。ライトの件が片付いたら、次はお前の番だ。覚悟しておけよ？」

「な、何をですか…？」

わかっていて、聞いたのかもしれない。

わずかな笑みを佩いたレイドの顔が、ぐっと近づいた。

「本気でわからないのか、わからない振りをしてるのか？ 全く、

お前は俺を振り回すのがうまいな」

そう言って、あまりの近さにぎゅっと目を閉じたエルサーナの頬に、またわずかに唇が触れた。

それから体を離し、レイドは背後のドアを開け放つ。

…大きな体の圧迫感がなくなったのが、どうしようもなくさびしか

った。

「さあ、もう行け。今ここで俺がお前を逃がせなくなる前にな」
レイドが、怖いくらいに真剣な顔でエルサーナを見下ろしている。
見上げた瞳は、たった一夜、思いを重ねた時と同じ熱を孕んでいて、
どうしようもなく切なくて、けれどどこか怖いような、期待している
ような不思議な気持ちになって。

エルサーナは、耐え切れず、何も言えないまま逃げるようにその場
を後にした。

華月宮へ戻る途中、ドレスの袖の下に隠した金属の輪に服の上から
触れる。肌に触れるそれがひやりと冷たいのは、体温が上がっている
せいなのだろうか。

どくつ、どくつ、と鼓動を打つ心臓は、一打ちごとに膨れ上がって
いくようだ。

顔が熱い。体も熱い。久しぶりに抱きしめられた体は、男の腕を覚えていて、
それだけで腰が崩れてへたり込んでしまいそうになる。

ライトのことが片付いたら、私はどうなってしまっただろう？

ずっと消せずに居たレイドへの思いは、こんなにも簡単に再燃する。
身を焼き尽くすほどの熱に翻弄されながら、エルサーナが思うのは
ただ一人。

「私の方が、いつでも振り回されているのに…。レイド様は、ずる
い」

甘苦しい想いでその名を呟けば、胸が苦しい。

もし次に抱きしめられたら。

もうレイドから離れられなくなってしまふ。

そうしたら、自分もレイドも守れなくなってしまふ。

「私、どうしたらいいの……？」

その疑問に答えるものは、誰も居ない。

惑乱

ライトの謹慎も明け、黒猫にされていた少女・アーシェを正式に紹介してもらい、エルサーナも日常に戻りつつあったある日。

「エルサーナ様、騎士団のグランツ様がお見えになつております」
いつもどおりほかの侍女たちとともに、王妃の部屋の掃除、ベッドメイクや花、茶器の準備、洗濯物の入れ替え、衣裳部屋の整理をやっているときに、その先触れはきた。

両陛下は本日、国立劇場に足を運び、観劇のため不在だ。

外出する王妃には侍女長がつき従い、補佐であるエルサーナは、留守を預かる責任者として城に残っていた。
それが、良かったのか悪かったのか。

レイドの名を聞くだけで、どくん、と心臓が跳ねる。

5年前、付き合っていたときには、こうして来てくれるレイドを心待ちにしていたものだった。

こんな風にたずねてきてくれるのは、レイドとの付き合いをやめてから、初めてのことだ。

知らず、緊張で手が震える。

「お急ぎ…なのかしら？」

出来れば会いたくない、と思いつつ、知らせに来た若い侍女に聞けば、いえ、と首を横に振る。

「お忙しそうなら遠慮することでしたが」

「エルサーナ様、ここはもう終わりですし、そろそろお茶の時間にしましょうと、さっきおっしゃっていたではないですか」

「そうですよ。ここは大丈夫ですから、行かれたほうがよろしいと思います」

気を使ってくれているのか、一緒に部屋を整えていた侍女二人が口

々に言い添える。侍従や下級役人の訪れは少なくないが、騎士団長が自ら足を運ぶともなれば、専属の中でも高い地位を持つエルサーナでなければ対応出来ない。気持ちはありがたいが、どこか気恥ずかしくて、困惑してしまう。

確かにあらかたしななければいけないことは終ってしまっている。だけど。

会ってしまったえば、焦がれる気持ちが加速してしまう。だから、会いたくないのに。

「どうなさいますか？」

答えを待つ侍女と、興味津々の侍女と。視線を居心地悪く感じながら、エルサーナはため息をついた。

「わかりました、お伺いします。少しだけお待ちいただいて。お茶の用意は私がするから、かまわなくていいわ」

「かしこまりました」

そついつて、引き下がる侍女を見送る。

…どうしよう。簡単に会うことを了承してしまうなんて、どうかしてしまったのかしら。

いままで、あんなに拒んで、あんなに避けてきたというのに。そつと胸を押さえながら、小さくため息をつく。

少し前ならきつと、断れたはず。だけれど、あの手の熱さを、抱きすくめた腕の強さを、思い出させられてしまったら。

（でも、そうよ。お仕事のお話かもしれない。私に会いに来たわけではないのかもしれない。だったら、断る理由もないわ。勝手なこつちの都合で断るのは、かえって失礼に当たるわよね）

自分にそう言い聞かせて、エルサーナは振り返る。

「では、行ってきます。後をお願いね」

『はい』

同時に帰ってくる返事にうなずき、エルサーナは王妃の私室を出た。
…内心の葛藤が、レイドに会ったためのただの言い訳であることなんて、十分わかっていつつ。

茶器を載せた銀のカートを押して、エルサーナは応接室の前に立った。

白い扉は、彫りこまれている模様も曲線的で、女性が多くいる華月宮の雰囲気をよくあらわしている優美なデザイン。それが今は、まるで堅牢な城壁のように感じられる。

『ライトの件が片付いたら、次はお前の番だ』

その言葉を思い出すと、回れ右して帰ってしまいたい。

でも、自分の右手は、早くノックをしろと自分自身を急ぎ立てる。ここに来るまで、心はブレーキをかけているのに、体は本能でレイドに会いたがっているのか、足が逸って困った。

ためらいは残っていたが、もうすでに扉の前に来てしまっている。これ以上待たせることはできない。

観念し、深呼吸をしてノックをした。

「失礼いたします」

ドアを開け、カートを押して入る。立ち上がったレイドの堂々とした立ち姿に、一瞬目を奪われた。

「仕事中にすまない。忙しかったらよかったんだが」

「ちょうど休憩に入るところでしたので…」

低く、心地いい声が耳に流れ込み、ときどきして応えた声は、羽虫の羽音のように小さい。

嫌だ。動揺する年でもないのに。

震える手を押さえて、エルサーナは茶器に慣れた手順で茶葉を入れていく。

その手の震えが、レイドに伝わりませんようにと、祈りながら。

「華月宮の窓の外に植えた木の隙間から、男性がのぞくという苦情が去年から数件あつてな。技術局に依頼して、中からは様子がわかるが、外からは見えにくい造りの仕切りを試作してもらった。それを先月から、作法室の窓の外に設置してもらったんだが、効果のほどを知りたくてな」

ソファに腰掛けながら、レイドが言う。

ティーカップを二つ、テーブルの上に置き、レイドがカップを手に取りの確認して、エルサーナも向かいに腰掛けた。

「そうですね、確かに外からの視線を感じずにすんでいます。けれど、今度は少々暗いという意見を何度か耳にしましたわ」

「なるほど、改良の余地ありか。では後ほど技術局のほうに報告しておこう」

「お手間を取らせて申し訳ありません」

「気にするな。もしかしたら、そのうち技術局の者と作法室に邪魔することになるかもしれん。そのときには連絡を入れる」

「かしこまりました」

それきり、他人行儀な会話は途切れ、静かな沈黙が下りる。

以前、こうしてレイドが尋ねて来たときも、ここで静かにお茶を飲んだ。

カップが小さく見えるほど大きな手。洗練されたしぐさ。堂々と落ち着いた態度。あの頃も、こうしてレイドに見とれては、あふれ出しそうな気持ちをもてあましていたっけ。

それを思い出すと、すぐにときどきと心臓が跳ねるから困る。

「あ、の、レイド様？」

「ん？」

ゆつくりとカップを傾けるレイドに、遠慮がちに問いかける。

「ご用件は、これだけ…ですか？」

「ああ、ただの口実だからな」

しれっと言い放たれて、顔が熱くなる。ずっと視線を上げて見つめ

られると、体の芯がうずく。

思わずうつむいて、レイドの視線から逃げると、小さく笑う気配がした。

「こ、口実って」

「お前に会いたかったただけだ、エル」

少しだけ低くなった声。家族・血縁以外ではレイドにしか呼ばせたことがなかった、愛称。

耳から入ったそれが、歓喜を伴ってじわりと体にしみこむ。

「そのほうが、お前には都合がいいのだろう？」

そうして、ちゃんと逃げ道を残してくれる、そのやさしさが。

どうしようもなく、愛しい。

唇を噛み、膝の上でぎゅっと手を握り締める。そうしないと、レイドにすがり付いてしまいそうだった。

（だめよ）

これ以上傷つきたくない。余計なことにレイドを巻き込みたくない。だから、離れたはずではなかったか。

なのに、今はそのための我慢よりも、すべてを預けてしまいたい切なさ勝る。

気持ち落ち着けようと深呼吸をしているうちに、かちりとわずかな音を立てて、レイドのカップが受け皿に戻された。顔を上げれば、目が合ったレイドがわずかに唇を上げる。

「久しぶりだったが、やはりあなたの入れたお茶はうまいな」

「あ、ありがとうございます」

すぐに、またもとの他人行儀な口調に戻ってしまい、胸がちくりと痛む。

「ごちそうになった。そろそろ戻る」

「はい」

すっと立ち上がり、ドアに向かうレイドの後を送ろうとエルサーナ

が続く。と、不意にレイドが振り返った。

「…っ」

ぶつかりそうになるほどの、その思わぬ近さに息を呑むと、レイドの手が上がり、ごつごつした指の背が、すつと頬を擦った。

高いところから覗き込むレイドの目元が、気遣うように細められる。

「元気そうでよかった。お前に泣かれると、弱い」

それは、構えていたはずのエルサーナの心の、ほんのわずかに生じた隙間から、たやすく奥まで入り込む。

きゅうつつ、と音を立てて、心臓が絞られる感覚。

頬が熱い。手が震える。言葉が出ない。唯一自由になる視線で、レイドを見上げる。それが、男にどんな衝撃をもたらすか、自覚しないまま。

小さく苦笑したレイドが、そつと顔を寄せた。耳に吐息が触れて、びくんと肩が跳ねる。

「そんな顔をするな。さらいたくなるだろう」

言うと同時に、少し乾いた唇が、耳朶にゆっくりと押し付けられる。ぞくぞくつ、と、背骨を強烈な疼きが駆け上がり、思わず喉の奥で息を詰めると、すつとレイドが離れて行った。

「また、来る」

その言葉を残し、マントを翻して、規則正しい靴音を響かせながら応接室のドアから消えた。

それを呆然と見送って、どれほど時がたっただろう。

おぼつかない足取りで、エルサーナはソファに戻り、どさりと腰を落とした。

そして、両手で顔を覆う。

頬が熱い。きつと、真っ赤になっている。レイドの唇が触れた耳は、じんじんして、まるでそこにもうひとつ心臓があるみたいだ。

「…やだ、どおして…？」

ここにいたい。外は怖い。出たくない。それなのに、レイドはなぜ自分を外へ引っ張り出そうとしているのか。

もう、5年も前に終わっているはずなのに、今更自分をどうしようというのだろう。

でも、体は正直に、レイドへの思慕を訴える。もっとと焦れて、頑なな心の扉を叩く。

だけれどその閉ざされた心の内もまた、5年の間秘め続けた思いが勢いを増して膨らんでいくばかりだ。

内と外に吹き荒れる嵐は、弱まる気配さえない。

どうしたらいいのかわからないまま、エルサーナはなかなかひかない頬の熱を冷まし続けるしかなかった。

惑乱（後書き）

だ、団長オオオ！！

専属侍女二人・前

ライトのごたごたから1ヶ月ほど過ぎたある日。

エルサーナの私室で、『王室侍女規範』とにらめっこするアーシェと、それを穏やかな瞳で見守るエルサーナの姿があった。

騎士団からの書簡を持ってきたアーシェに、専属侍女の役割について教えてほしいと請われ、喜んで私室に招き入れたのは、つい数分前のことだ。

「変なお願いをしてすみません。ほかに聞ける人、知らなくて…」

「ああ、ぜんぜんかまわないのよ、気にしないで」

恐縮する少女は、明るく、素直でまっすぐな、とてもかわいい女の子だった。平民だからか、気取ったところも構えたところもなく、親しみやすい。

猫のときにも接していたおかげか、どこか反応に面影がある気がして、打ち解けるのにそう時間はかからなかった。

ライトの元に居た黒猫。エルサーナ自身もそれなりにかかわったそれが、実はライトの手によって姿を変えられていたこの子だったとは。

自分が知らぬ間に罪を犯した。それを告白して城から下がり、自宅に閉じこもっていたライトに憤慨して、ひどく落胆して、混乱して心配のあまり押しかけて、けれどすべてを捨てたように投げやりなライトをひどくなじった。

責任は取る、姿を消すというライトにまた腹が立って、子供のようにかんしゃくを起こして逃げ出して、団長室に乗り込んでレイドに泣きついて駄々をこねた。

最終的に、ライトを繋ぎとめたのは、そんな自分の浅はかな行動で

はなくて、この少女だった。

そして、この少女のことを知るにつけ、ライトが傷付けたくないといった意味がわかるような気がする。きっと、自分たちがなくしてしまった純粹さを、この子は変わらず持っているからだ。

アーシエは、あの時、自らの意思で王城に来てくれた。そして、後ろむきなライトを叱り飛ばし、審判をひっくり返してライトを救ってくれたのだと聞いた。

ライトがしたことを、アーシエに対して申し訳ないと思う気持ちはある。けれど、ライトを選んでくれたアーシエに、深く感謝をしている。

ライトは、審判の前と変わらず、いやそれ以上に穏やかになって、日々をこの少女と共に過ごしている。

「それより、急ぎの書簡じゃなかったのに、わざわざ持ってきてもらって、ごめんなさいね。ライトに、空いた時間でかまわないって言ってあったのだけれど」

「いえっ、全然大丈夫です！それに、レイド様がすぐに行けっっておっしゃってくださいだったので」

「…そう…」

その小さな呟きに複雑な想いが込められていることなど知る由もなく、アーシエは侍女規範に再び視線を落とす。

王妃からレイド宛の書簡を、ライトを經由して届けてもらったのは今日の午前中だ。急ぎのものではなかった為、返事はいつでもいいと言ってあったのに、午後一にはアーシエが件の書簡に団長印を押印したものを携えて、エルサーナの下にやってきた。

それも、レイドの指示だと言う。

今までは、騎士団への用事は、弟のライトを經由して依頼し、自分

では決して西棟に近づかなかった。

向こうもそれを承知してか、特別扱いするようなことはなかったのに、ライトの一件でレイドと接触してからは、こうしてエルサーナからの依頼を最優先としてくれることが多くなったように思う。けれど、それだけではない。

あの日以来、レイドが会いに来るようになった。

それも、差し入れに対する礼だとか、奥の警備についてだとか、普通は侍女や侍従に持たせる書簡を、自ら届けに來たりだとか、それに、エルサーナの顔が見たいだとか、それこそ些細な理由で。

華月宮は、王族と城勤めの女性が住まう宮だ。他の棟と違って、出入りは城勤めの人間でもフリーパスとはいかない。そのため、出入り確認がいない応接間がいくつか設けられていて、レイドとはいってもそこで会う。

言葉を交わすときにはきちんと距離を取っているのに、別れ際、必ずレイドはエルサーナに触れる。

その、大きくてごつごつした指先で、頬や、髪、耳、唇、指……

その、鷹のような目元をわずかに和らげて。

そっと、壊れ物を扱うように優しく撫でて、去っていく。

昨日は、指先であごを捉えられ、熱のこもった視線に見下ろされながら、親指で唇を撫でられた。思い出すたびに、唇の上にそのときの感触を思い出して、落ち着かなくなるから困る。

どんなに気をつけていても、意識の範囲外から伸びる指は、エルサーナの警戒をからかうように触れてくるから。

そして、触れた跡は、まるでじりじりと焼けるように熱くなるからそのまま、真っ赤になっていすにへたり込んで、動悸と顔の熱を冷まさなければ戻れないことが常だった。

今思えば、ライトの事は、レイドしか頼れる人がいなかったわけではない。

その気になれば、王への直訴だって可能だった。それをしなかったのは、ただ…自分がレイドに助けてもらいたかっただけ。

何とかしてくれると、いまだに信じて甘えているだけ。だけど、そのときのことは、一ヶ月たった今でも忘れられない。

自分を苦しいほどに抱きしめた太い腕、厚い壁のように大きな体、鋭いのによさしく、けれど射抜くように見つめる瞳と、ごっごつした手、肌に触れた暖かい唇。

胸の奥の熾き火は、待ち望んでいた燃料を得て、轟々と燃え上がっている。レイドに焦がれる気持ちはすでにあふれかえっていて…止められない。

抑えようと思っても、どうにもならない。

華月宮を出れば、いつでもレイドを探してしまう。

会えば顔が熱くなって、心臓が暴れる。

恥ずかしくて、まともに目もあわせられない。

触れれば、そのまま崩れ落ちそうになる。

前にレイドと付き合っていたときよりもひどいような気がするのは、押さえつけていた反動だろうか？

「エルサーナ様、聞いてもいいですか？」

「あ、ええ、何かしら？」

不意にアーシェに声をかけられて、はっと我に返る。

「あの、エルサーナ様？ 大丈夫ですか？ 顔、真つ赤ですけど」

「…やだ、少し暑いみたい。ごめんなさいね、なんでもないのよ」
気遣うように尋ねるアーシェにあわてて取り繕い、エルサーナは思わず頬を押さえた。動揺している姿は、あまり見られたくはない。

専属侍女になって日が浅いアーシェは、王室の作法を勉強している最中だ。もともとが平民の彼女は、まだ貴族の侍女たちになじめていない。専属の役割を相談できるのは、身近では自分くらいしかないのだろう。

それに関しては、いつでも相談に乗ると、ライトを通じて伝えてある。

遠慮してわからないままできて大きな失敗をするよりは、早く聞いて一人前になりたい。そのアーシェの貪欲な姿勢には、好感が持てる。

何より、エルサーナ自身がそうだったから。

そのときのことを思い出すと、今でも胸の奥が痛むけれど。

いくつか質問を聞きながら、出来るだけ噛み砕いて教えてやり、アーシェは侍女規範をぱたりと閉じる。

「はああ、なんか、こういうのってどうとも取れるような言葉で書いてあるから、解釈が難しいです」

「ほんとうにそうね。私も、何を言わんとするところなのかを理解するのに、結構時間がかかったわ。こういう規約的なものって、わざと難しい言い回しをしたり、曖昧にしたりするものよね。きつちり決めてしまうと、きりがないし」

「ほんと、そうですね。あ、お茶くらい私がしますから!」

「いいのよ、せっかくのお客様ですもの。座ってて」

「でも…」

「いいからいいから、ね?」

恐縮するアーシェを強引に座らせて、エルサーナは慣れた手つきで、華奢なカップにお茶を注いだ。

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

ふうふうと湯気の立つカップを冷ますアーシェを見ながら、エルサーナもいすに腰を下ろした。

「おいしいです！」

「ありがとうございます」

につこりと微笑んで、エルサーナも一口お茶を含み、カップを受け皿に戻した。

「困ったことや相談したいことがあったら、なんでも言ってみてね？」

私でわかることなら、いつでも教えてあげるわ」

「はい、ありがとうございます！」

素直でまっすぐな女の子。

だから、ライトはそばに置くのかもしれない。

だからだろうか。ふと、ライトの領域にあっさり収まった少女に、聞いて欲しいと思ったのは。

あのときの黒猫に、聞いてほしいと思ったのは。

「ねえ、アーシエ。少しだけ、聞いてくれる？」

「はい、なんですか？」

「昔の話。私と、…レイド様のこと」

少しだけ言いよんどで付け加えると、アーシエは一瞬の間の後、その大きな翡翠のような瞳を、こぼれんばかりに見開いた。

「え、…ええっ！？ そんな、いいんですか、私なんかそんな話なんかして！？」

「だって、前にも私の話を聞いてくれたでしょう？ 私も、ずっと誰かに話したかったことがあるの。ダメかしら？」

「そ、それって私が猫だったからですよね！？ あの時はよかったけど、私、しゃべっちゃうかもしれないよ！？」

わたわたと困ったように手を横に振るアーシエに、エルサーナは笑う。

この子は素直で正直で明るくて、そしてとてもやさしい。

「しゃべっちゃうような人は、『黙っているから聞かせてくれ』って言うのよ。あなたは逆ね。だから、絶対話さない。これは私の勘」

エルサーナはすでに数年、王妃付きの侍女をやっている。女性ばかりの場所に特有の駆け引きは見飽きているくらいだ。まだまだ女官長には及ばないが、人を見る目はそれなりにあるつもりだ。

「そ、そんな……。買い被りですよ……」

困ったように見返すアーシェに、エルサーナはダメ押しとばかりに首を傾げて見せた。

「あなたがいいのよ。もちろん、迷惑でなければけど」

「そんなっ、迷惑だなんて！ ええと、はい、私でよければいくらでも！」

頬を上気させて意気込むアーシェに、エルサーナは美しく笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5014q/>

騎士様の使い魔

2011年10月7日23時41分発行